

鉦田遺跡

—淡路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成2年3月

兵庫県教育委員会

鉦田遺跡

—淡路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

例 言

1. 本報告書は兵庫県三原郡西淡町志知鉦字高所に所在する鉦田遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は本州四国連絡橋公団による一般国道28号線改良工事(通称淡路縦貫道建設工事)に伴って昭和57年から平成2年にかけて実施したものである。
3. 現地調査は松下 勝、小川良太、井守徳男、吉識雅仁、別府洋二、岸本一宏が担当し、昭和57年～昭和59年にかけて株式会社橋詰建設・西淡建設の協力を得て実施した。
4. 整理調査は吉識と岸本が主となって、昭和61年～平成元年度に実施した。
5. 調査に掛かる経費は全て本州四国連絡橋公団が負担した。
6. 遺構の実測は原田和幸の補助を得て調査員が実施し、遺物の実測は前田陽子、吉本佳恵、長浜幸子、本岡雅子、井川桂子、山口卓也が実施した。
7. 遺構・遺物の浄書は前田が主となって、長浜・本岡・吉本がこれを補助した。
8. 遺構写真は調査員が撮影し、遺物写真は森 昭氏に依頼した。
9. 本書に使用した標高の数値は、本州四国連絡橋公団が設置した工事用のB、Mを利用した海拔高である。方位は座標北である。
10. 本書に掲載した第1図は国土地理院発行の1/25000の地図を利用したものであり、図版第1は国土地理院撮影の航空写真を利用したものである。
11. 本書の編集は前田の協力を得て、吉識が行った。
12. 原稿の執筆分担は以下の通りである。

吉識雅仁 第1～3章、第5章第1節、第5章第2節1・2A・2C
岸本一宏 第4章、第5章第2節2B・2D
13. 出土した遺物類はすべて兵庫県教育委員会が保管・管理している。
14. 本書の作成にあたっては渡毛康弘氏、浦上雅史氏、岡本 稔氏をはじめとして、淡路考古学研究会の方々、さらに本州四国連絡橋公団等の関係機関の多大なる協力を得ました。記して感謝の意を表します。

本文目次

第1章 はじめに

| | |
|--------------|---|
| 第1節 調査に到る経過 | 1 |
| 第2節 調査の経過と体制 | 2 |

第2章 遺跡の環境

| | |
|-----------|---|
| 第1節 歴史的環境 | 5 |
|-----------|---|

第3章 北地区の調査

| | |
|----------------|-----|
| 第1節 調査区の概要 | 17 |
| 第2節 遺構 | 29 |
| 1 弥生時代の遺構 | 29 |
| 2 古墳時代～奈良時代の遺構 | 35 |
| 3 平安時代～鎌倉時代の遺構 | 40 |
| 第3節 遺物 | 45 |
| 1 概要 | 45 |
| 2 土器 | 45 |
| 3 陶硯 | 100 |
| 4 金属製品 | 101 |
| 第4節 小結 | 103 |

第4章 南地区の調査

| | |
|----------------|-----|
| 第1節 調査区の概要 | 105 |
| 第2節 遺構 | 113 |
| 1 弥生時代の遺構 | 113 |
| 2 古墳時代～奈良時代の遺構 | 116 |
| 3 平安時代～鎌倉時代の遺構 | 120 |
| 第3節 遺物 | 126 |
| 1 弥生時代の遺物 | 126 |
| 2 古墳時代～奈良時代の遺物 | 129 |
| 3 平安時代～鎌倉時代の遺物 | 136 |
| 第4節 小結 | 165 |

第5章 まとめ

| | |
|--------|-----|
| 第1節 遺構 | 167 |
| 第2節 遺物 | 171 |

挿図目次

| | | |
|------|-----------------------|-------|
| 第1図 | 試掘横断面図 | 2 |
| 第2図 | 位置と周辺の遺跡 | 7 |
| 第3図 | 調査区位置と周辺の地形 | 18 |
| 第4図 | 調査区全体図 | 19・20 |
| 第5図 | 北地区全体図 | 21・22 |
| 第6図 | 上層図 (Dライン) | 25・26 |
| 第7図 | 土層図 (11・19ライン) | 27・28 |
| 第8図 | 竪穴住居址NSH-1 | 30 |
| 第9図 | 竪穴住居址NSH-1 遺物出土状態 | 31・32 |
| 第10図 | 土壌NSK-1 | 33 |
| 第11図 | 建物址NSB-1 | 34 |
| 第12図 | 建物址NSB-5 | 35 |
| 第13図 | 溝NSD-1・2 十層断面図 | 37 |
| 第14図 | 溝NSD-11 土層断面図 | 40 |
| 第15図 | 建物址NSB-2・3 | 41 |
| 第16図 | 建物址NSB-4 | 42 |
| 第17図 | 土壌NSK-3 | 43 |
| 第18図 | 竪穴住居址NSH-1 出土土器 | 50 |
| 第19図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (1) | 52 |
| 第20図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (2) | 53 |
| 第21図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (3) | 54 |
| 第22図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (4) | 55 |
| 第23図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (5) | 56 |
| 第24図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (6) | 57 |
| 第25図 | 竪穴住居址NSH-1 上層出土土器 (7) | 58 |
| 第26図 | 溝NSD-1 南半出土土器 | 60 |
| 第27図 | 溝NSD-1 北半出土土器 | 61 |
| 第28図 | 溝NSD-2 出土土器 | 63 |
| 第29図 | 溝NSD-3・7 出土土器 | 64 |
| 第30図 | 包含層出土土器 | 65 |
| 第31図 | 土器群1の土器 | 66 |
| 第32図 | 土器群2の土器 | 67 |
| 第33図 | 溝NSD-1 北半出土土器 (1) | 75 |
| 第34図 | 溝NSD-1 北半出土土器 (2) | 76 |
| 第35図 | 溝NSD-1 北半出土土器 (3) | 77 |
| 第36図 | 溝NSD-1 北半出土土器 (4) | 78 |

| | | |
|------|--------------------------|---------|
| 第37回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (5)..... | 79 |
| 第38回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (6)..... | 80 |
| 第39回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (7)..... | 81 |
| 第40回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (8)..... | 82 |
| 第41回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (9)..... | 83 |
| 第42回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (10)..... | 84 |
| 第43回 | 溝NSD-1 北半出土土器 (11)..... | 85 |
| 第44回 | 溝NSD-1 北半出土製埴土器・土製品..... | 87 |
| 第45回 | 溝NSD-1 南半出土土器 (1)..... | 88 |
| 第46回 | 溝NSD-1 南半出土土器 (2)..... | 89 |
| 第47回 | 溝NSD-2 出土土器..... | 90 |
| 第48回 | 溝NSD-8 出土土器..... | 91 |
| 第49回 | 溝NSD-11 出土土器..... | 92 |
| 第50回 | 包含層出土土器 (1)..... | 93 |
| 第51回 | 包含層出土土器 (2)..... | 94 |
| 第52回 | 建物址NSB-2・3 出土土器..... | 95 |
| 第53回 | 土壌NSK-3 出土土器..... | 95 |
| 第54回 | 溝NSD-4・5・15・16 出土土器..... | 96 |
| 第55回 | 包含層出土土器..... | 98 |
| 第56回 | 近世墓出土土器..... | 99 |
| 第57回 | 溝NSD-1 出土陶硯..... | 100 |
| 第58回 | 青銅鏡..... | 101 |
| 第59回 | 金属製品..... | 102 |
| 第60回 | 南地区下層遺構全体図..... | 106 |
| 第61回 | 南地区上層遺構全体図..... | 107-108 |
| 第62回 | 南地区西壁・3ライン土層断面図..... | 109-110 |
| 第63回 | 南地区東壁土層断面図..... | 111-112 |
| 第64回 | 竪穴住居址SSH-1..... | 113 |
| 第65回 | 竪穴住居址SSH-2..... | 114 |
| 第66回 | 竪穴住居址SSH-3..... | 114 |
| 第67回 | 土壌SSK-3・4..... | 115 |
| 第68回 | 建物址SSB-1..... | 116 |
| 第69回 | 溝SSD-1..... | 117-118 |
| 第70回 | 土壌墓SSK-120..... | 120 |
| 第71回 | 甕棺墓SSK-104..... | 121 |
| 第72回 | 溝SSD-3..... | 123-124 |
| 第73回 | 櫛列SSA-1..... | 125 |

| | | |
|-------|-------------------|-----|
| 第74図 | SSH-2 出土紡錘車 | 126 |
| 第75図 | 堅穴住居址SSH-1・3 出土土器 | 126 |
| 第76図 | 土壌SSK-3・4 出土土器 | 127 |
| 第77図 | 南地区包含層出土土器(1) | 128 |
| 第78図 | 南地区包含層出土土器(2) | 129 |
| 第79図 | 溝SSD-1 出土土器(1) | 131 |
| 第80図 | 溝SSD-1 出土土器(2) | 132 |
| 第81図 | 溝SSD-1 出土土器(3) | 133 |
| 第82図 | 南地区包含層出土土器(3) | 134 |
| 第83図 | 南地区包含層出土土器(4) | 135 |
| 第84図 | 土壌墓SSK-120 出土土器 | 136 |
| 第85図 | 甕棺墓SSK-104 出土土器 | 136 |
| 第86図 | 土壌SSK-2 出土土器 | 137 |
| 第87図 | 溝SSD-2・5 出土土器 | 138 |
| 第88図 | 溝SSD-3 出土土器(1) | 139 |
| 第89図 | 溝SSD-3 出土土器(2) | 140 |
| 第90図 | 溝SSD-3 出土土器(3) | 141 |
| 第91図 | 溝SSD-3 出土土器(4) | 142 |
| 第92図 | 溝SSD-3 出土土器(5) | 143 |
| 第93図 | 溝SSD-3 出土土器(6) | 145 |
| 第94図 | 溝SSD-3 出土土器(7) | 146 |
| 第95図 | 溝SSD-3 出土土器(8) | 147 |
| 第96図 | 溝SSD-3 出土土器(9) | 149 |
| 第97図 | 溝SSD-3 出土土器(10) | 150 |
| 第98図 | 溝SSD-3 出土土器(11) | 151 |
| 第99図 | 溝SSD-3 出土土器(12) | 152 |
| 第100図 | 溝SSD-3 出土土器(13) | 154 |
| 第101図 | 溝SSD-3 出土土器(14) | 155 |
| 第102図 | 南地区ビット出土土器(1) | 157 |
| 第103図 | 南地区ビット出土土器(2) | 158 |
| 第104図 | 南地区包含層出土土器(5) | 160 |
| 第105図 | 南地区包含層出土土器(6) | 161 |
| 第106図 | 南地区包含層出土土器(7) | 163 |
| 第107図 | 遺跡の変遷図 | 169 |
| 第108図 | 弥生時代～古墳時代前期の土器 | 173 |
| 第109図 | 古墳時代の土器 | 177 |
| 第110図 | 飛鳥時代～平安時代前半の土器 | 178 |

図版目次

- 図版第1 遺跡航空写真
- 図版第2 北地区 上) 調査区全景(北より)
下) 調査区西半全景(北より)
- 図版第3 北地区 上) 竪穴住居址NSH-1土層
中) 竪穴住居址NSH-1埋土中土器群
下) 竪穴住居址NSH-1土器群細部
- 図版第4 北地区 上) 竪穴住居址NSH-1
下) 土壌NSK-1
- 図版第5 北地区 上) 建物址NSB-1
下) 建物址NSB-5
- 図版第6 北地区 上) 溝NSD-1北半
下) 溝NSD-1内製塩土器出土状態
- 図版第7 北地区 上) 溝NSD-1肩部鏡出土状態
下) 溝NSD-1肩部鏡出土状態細部
- 図版第8 北地区 上) 建物址NSB-2・3
下) 建物址NSB-4
- 図版第9 北地区 上) 溝NSD-1上面柱穴群
下) 土壌NSK-3
- 図版第10 南地区 上) 調査区全景
下) 調査区北東隅下層遺構
- 図版第11 南地区 上左) 竪穴住居址SSH-1
上右) 竪穴住居址SSH-2
下) 竪穴住居址SSH-3
- 図版第12 南地区 上) 土壌SSK-3・4
下) 建物址SSB-1
- 図版第13 南地区 上) 溝SSD-1
中) 溝SSD-1断面
下) 溝SSD-1断面
- 図版第14 南地区 上) 調査区南半上層遺構
下) 調査区北半上層遺構
- 図版第15 南地区 上) 土壌SSK-5
下左) 土壌SSK-6
下右) 土壌SSK-6断面

- 図版第16 南地区 上) 溝SSD-3 上器出土状態
 中) 溝SSD-3 貝出土状態
 下) 溝SSD-3 土層断面
- 図版第17 北地区 竪穴住居址NSH-1 出土遺物 (1)
- 図版第18 北地区 竪穴住居址NSH-1 出土遺物 (2)
- 図版第19 北地区 竪穴住居址NSH-1 出土遺物 (3)
- 図版第20 北地区 竪穴住居址NSH-1 出土遺物 (4)
- 図版第21 北地区 竪穴住居址NSH-1 出土遺物 (5)
- 図版第22 北地区 溝NSD-1 北半出土遺物 (須恵器)
- 図版第23 北地区 溝NSD-1 北半出土遺物 (須恵器)
- 図版第24 北地区 溝NSD-1 北半出土遺物 (土師器)
- 図版第25 北地区 溝NSD-1 北半出土遺物 (土師器・緑釉陶器・土製品)
- 図版第26 北地区 上) 溝NSD-1 北半出土遺物 (土師器)
 下) 溝NSD-1 北半出土遺物 (甕)
- 図版第27 北地区 溝NSD-1 北半出土遺物 (製塩土器)
- 図版第28 北地区 溝NSD-1 南半出土遺物
- 図版第29 北地区 溝NSD-2・3・7・8 出土遺物
- 図版第30 北地区 溝NSD-2 肩部上器群の遺物
- 図版第31 北地区 溝NSD-11、土壇NSK-3、建物址NSB-2 出土遺物
- 図版第32 南地区 竪穴住居址SSH-1、土壇SSK-4、溝SSD-1 出土遺物
- 図版第33 南地区 溝SSD-1、包含層出土遺物
- 図版第34 南地区 溝SSD-3 出土遺物 (瓦器)
- 図版第35 南地区 溝SSD-3 出土遺物 (土師器類)
- 図版第36 南地区 溝SSD-3 出土遺物 (土師器皿・小皿)
- 図版第37 南地区 上) 溝SSD-3 出土遺物 (磁器口縁)
 下) 溝SSD-3 出土遺物 (磁器底部)
- 図版第38 南地区 溝SSD-3、土壇SSK-104・120、柱穴内出土遺物
- 図版第39 金器製品 (鏡、鉄斧・鉄鏃・用途不明品)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

本州と四国を結ぶ本州四国連絡橋計画の内、最も東側のルートである神戸・鳴門ルートは、神戸市垂水区から明石海峡を明石海峡大橋で渡り、淡路島を縦貫して、鳴門海峡に至り、鳴門海峡を大鳴門橋で渡り、四国側の徳島県鳴門市に至るルートである。淡路島内は一般国道28号線を改良し、淡路縦貫道と通称される自動車専用道を建設して、両橋間のスムーズな交通の流れを確保するとともに、途中7ヶ所のインターチェンジを設け、島内産業の活性化に貢献しようとする計画である。

こうした計画にもとづき、昭和47年本州四国連絡橋公団（以下本四公団と略称）から兵庫県教育委員会（以下県教育委員会と略称）に事業の概要説明があり、あわせて幅200mの道路計画予定地について、埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。これを受けた県教育委員会は計画予定地を3地区に分け、分布調査を淡路考古学研究会（当時代表 岡本稔氏）に依頼し、昭和47・48年の2ヶ年にわたって実施した。この分布調査では26ヶ所の散布地が発見されたが、特に三原平野に集中するような状態であった。

この報告を受けた県教育委員会は、昭和49年兵庫県庁の窓口である淡路縦貫道対策室も交えて、本四公団の立会いのド、26ヶ所の散布地について現地確認を行い、本四公団と散布地の取扱いをめぐって協議に入った。その場で県教育委員会は本四公団に対して、散布地の現状保存を求め、道路詳細計画からこれらの散布地を除外するように求めた。またやむを得ず、道路計画にかかる散布地については、今後事前の調査を行う事で合意した。

昭和48年のオイルショックで明石海峡大橋の建設計画は凍結となり、淡路縦貫道も北半部は工事計画が凍結となった。しかし南半部の津名郡以南は工事計画続行となり、用地買収の終了した三原インターチェンジ計画地内の2ヶ所の散布地（志知川沖田南遺跡）について、昭和53年に確認調査の依頼が、県教育委員会にあった。それを受けた県教育委員会は昭和53年に2ヶ所の散布地について確認調査を実施した。そして翌昭和54年から昭和57年までの4ヶ年にかけて全面にわたる調査を実施した。

この志知川沖田南遺跡の調査が終了した昭和57年、三原インターチェンジより西側に位置する4ヶ所の散布地（谷町筋・鈿田・新川西・寺田）について調査の依頼があった。依頼を受けた県教育委員会は用地問題が終了した昭和57年9月より確認調査を実施した。その結果、谷町筋・鈿田の両散布地は、遺跡地であることが確実となった。そこで本四公団と協議したが、工事計画を変更することは困難であったため、昭和58年4月から全面にわたる調査を行った。

第2節 調査の経過と体制

1. 発掘調査

昭和57年度の調査

淡路縦貫道予定地内の分布調査の結果、新川沿いに、下流側から寺田・新川西・鉦田・谷町筋の4ヶ所の遺物散布地が確認された。本年度はこれら散布地の確認調査を実施することになり、昭和57年9月6日、最も下流側の寺田散布地から開始した。そして順次上流側に調査を進め、本遺跡については、同年10月8日から11月4日まで調査を実施した。

鉦田遺跡としての確認調査範囲は約380m、平均巾約80mの広範囲に及んでいる。そのため、調査にあたっては、2m四方のグリッドを粗く、約40m間隔で設定し、そこでの遺構の有無、遺物の出土状態、土層の堆積状況等を確認し、必要に応じてトレンチ等を設定する方法を採った。その結果、2m四方のグリッド31ヶ所、幅1mのトレンチ5本・総延長約130mとなった。ただ現表土下に砂礫層が現れ、そこからの出水が酷く、十分な調査を行い得ない地域もあった。

a) グリッド1～6・9・11

この地域は調査地区では最も下流側の沖積地に当たる地域で、須恵器・土師器の小片を包含する暗灰色シルトが確認されたが、遺構の存在は認められなかった。そのため、志知川沖田南遺跡で以下は無遺物層とされる黒灰色粘土まで掘り下げ、調査を終了した。

b) グリッド7・8・21～23

この地区は、現地地形でも1～6・9・11地区より一段高く、土層の堆積状態も比較的安定し、奈良時代以降の須恵器・土師器の出土量が多く、包含層である暗灰色シルトも確認された。また遺構はグリッド21で柱穴状のものが確認され、南側のグリッド10では遺構が確認された。グリッド21付近が遺構分布範囲の北限あたりになるものと思われる。

c) グリッド10・12～16・32

この地区は西方から張り出して来る台地の末端に当たる地区で、今回の調査ではもっとも多くの遺構が検出された地区である。ただ現表土下に砂



第1図 試掘配置図

礫層があって十分な調査が行い得ないグリッドもあった。全体に耕土下・客土下に黒褐色シルト、黒灰色シルトの包含層が認められ、弥生土器・須恵器・土師器が出土している。遺構としては溝3本と柱穴が確認され、グリッド32で検出した溝内からは弥生土器、グリッド16北のトレンチで検出した溝内からは6世紀後半～7世紀代の須恵器が出土している。

d) グリッド17～20・24・25

遺構が検出された台地末端に当たる地区と、新川に挟まれた地区で、川沿いのグリッド18付近が最も高くなっている。しかしグリッド18では耕土下に厚い砂礫層が堆積し、調査は不可能であった。その他のグリッドでも耕土下に砂礫層が堆積し、そこからの出水が激しく、グリッドの壁が溶けて流れ落ちる様な状態であった。そのため十分な調査を行い得なかったが、グリッド17では平安時代末～鎌倉時代の土師器を伴う柱穴が検出された。

e) グリッド26～28・31

もっとも南に位置する地区で、台地の南側、東西に入り込んだ谷の口に当たる地区である。遺構は検出されず、隣接する谷町筋遺跡等から考えて、遺跡が広がる可能性は低いと考えられる。

f) まとめ

以上がこれらの確認調査の結果から、台地の末端にあたるグリッド10・12～16・32の地区と、グリッド19・21の地区については全面にわたる調査が必要と判断される。しかしグリッド19付近は遺構の範囲が特定できていないため、再度の範囲確認が必要と判断される。

昭和58年度の調査

前年度の調査で遺構が検出され、全面調査が必要と判断された約5,800㎡について、調査を行った。ただ調査区を横断する町道下は水道本管が敷設され、調査時も生活用道路として利用されていたため、調査は行い得ず、調査区を町道によって二分し、町道南側を「南地区」、北側を「北地区」と呼称して調査にあたった。

調査は4月11日から開始したが、包含層の認められた区域では包含層上面まで、包含層の認められない地区では遺構面まで機械力による掘削を行うこととし、4月13日まず調査面積の狭小な南地区から機械力による掘削を開始、そして5月からは北地区の調査を開始した。ところが両地区とも調査が進むに従い、遺構が調査区外に広がるのが確実となってきた。そこで当初の調査区からトレンチを調査区外に伸ばし、再度、遺跡範囲の確認を行うこととし、6月15日から、北地区の北・東側についてトレンチ調査を開始した。次いで南地区の南・東側にもトレンチ調査を実施した。その結果両地区とも柱穴・溝等の遺構が確認された。そこでこれらの地区も全面調査を行うことになり、その結果、調査面積は当初予定から約3,450㎡増え、約9,250㎡となった。両地区ではそれぞれ住居址・溝等の遺構が検出され、特に北地区の住居址と南地区の溝3からは多量の土器が出土した。そのため調査は手間取ったが、9月17日終了した。

調査の体制

昭和57年度

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当 主 査 松下 勝 主 任 井守 徳男
技術職員 吉識 雅仁 別府 洋二 現場事務員 嶋本 文子
整理作業員 浅井多英美 作業員 株式会社西淡建設

昭和58年度

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当 主 任 小川 良太 技術職員 吉識 雅仁 岸本 一宏
事務員 浅井多英美 整理作業員 山岡 仁美 木下ひふみ
補助員 原田 和幸 山崎 敏明 作業員 株式会社橋詰建設

2. 整理調査

整理調査は調査が終了した昭和59年度から開始し、昭和59年度は出土したコンテナ（60×40 cm）約300箱の内、北地区住居址から出土した80箱の遺物について接合・復元までの作業を行い、昭和61年度は残る220箱の遺物について同様の作業を行った。そして昭和62年～平成元年度は全体の300箱について実測以後の作業を実施した。各年度の整理作業は表の通りであるが、ネーミングは記号化して行うことにし、遺跡名を「T T」とし、同じ土層、同じ日付でも取り上げた袋毎に番号を付して行った。したがって土器個々には「T T-1」といった記号を付している。実測作業は補助員が行い、出来上がった図を原稿執筆者が点検し、完成させた。

整理作業担当者

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当 主 任 吉識雅仁 加古千恵子（保存処理担当） 技術職員 岸本一宏
補助員 山根実生子 社領育代 前田陽子 伴 悦子 吉本佳恵 長浜幸子
本岡雅子 柘植美登里 井川佳子 井上京子 浅井多英美 山岡仁美
木下ひふみ

| 年度 | 水洗 | ネーミング | 接合・復元 | 実測・拓本 | 写真 | 浄書 | レイアウト | 出版 |
|-------|----|-------|-------|-------|----|----|-------|----|
| 昭和59年 | | | | | | | | |
| 昭和61年 | | | | | | | | |
| 昭和62年 | | | | | | | | |
| 昭和63年 | | | | | | | | |
| 平成元年 | | | | | | | | |

尚、昭和59年度から昭和63年度の調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課で、平成元年度からの調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

第2章 遺跡の環境

第1節 歴史的環境（第2図）

淡路島内で考古学的な手法によった発掘調査が実施されるようになったのは、昭和35・36年に行われた西淡町沖ノ島古墳群の調査からであり、その後洲本市下加茂岡遺跡・武山遺跡、西淡町古津路遺跡等の調査が行われた。昭和50年代に入ると圃場整備に伴う確認調査が全島で始まり、昭和53年からは淡路縦貫道建設に伴って大規模な発掘調査が実施されるようになったが、県下の他地域に比較すると発掘件数は少ない。

したがって、調査によって実態が明らかにされた遺跡は少ない。しかし淡路考古学研究会をはじめとする地元研究者の熱心な踏査によって、三原平野でもかなりの遺跡が知られている。

1. 旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は最近まで知られておらず、ようやく昭和61年に、三原町長原遺跡で採集された遺物の中にナイフ形石器が含まれていることが判明し、淡路島内にも旧石器時代の遺跡が明らかになってきている。

縄文時代の遺跡も数少なく、緑町柿坪遺跡・安住寺遺跡・南畑遺跡・三原町次郎池遺跡・長原遺跡・高萩遺跡、西淡町谷町筋遺跡等が知られているにすぎない。この内、柿坪遺跡・長原遺跡では有石矢頭器が採集されており、縄文時代草創期と考えられている。安住寺遺跡は押形文土器が圃場整備に伴う確認調査で出土し、長原遺跡では前期に属する土器とともに多量の石器が採集されている。次郎池遺跡は三原平野南端の山間地に位置し、溜池の岸で石鏃・スクレパー・勾玉等が採集されている。谷町筋遺跡は淡路縦貫道建設に伴って調査された遺跡で、本遺跡とは極めて近接し、本来同一の遺跡ないし遺跡群として捉えられる遺跡である。後期の緑帯文系の土器が出土し、畿内系の土器とともに九州の鐘崎式の土器が認められている⁽¹²⁾。

これら縄文時代の遺跡は平野を囲む丘陵地帯に立地するものと、三角州⁽¹³⁾に臨んだ台地・段丘上に位置するものが見られる。

2. 弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数は増加するが、遺跡の実体が解明されたものは少ない。まず、前期の古・中段階には西淡町北所遺跡・志知川沖田南遺跡等が営まれており、北所遺跡では木の葉文状の文様を持つ土器が採集されている⁽¹⁴⁾。志知川沖田南遺跡では大型の甕を使用した壺棺が検出されている⁽¹⁵⁾。使用されていた甕は口縁部を欠くが、肩部と頸部の間は段をなしており、前期

の古段階に属すると思われる。前期新段階の遺跡としては西淡町谷町筋遺跡・雨流遺跡等が知られ、雨流遺跡では水路が検出され、出土遺物の中には紀伊地方の影響が認められている⁽⁴⁾。

これら前期の遺跡は播磨灘に面した海岸砂堆上、三角洲Ⅰに面した台地上、三角洲Ⅰ内の自然堤防上に立地しており、住居址等は検出されていないが、集落立地はこうした地形の上に求められるものと思われる。また水稻耕作の生産基盤は三角洲Ⅰに求められ、三原平野での弥生時代はまず三角洲Ⅰを基盤に開始されたものと思われる。

中期の遺跡立地も基本的には前期と変わらず、三角洲Ⅰを生産基盤とし、その内部の自然堤防上、縁辺の台地、段丘縁を居住域とする活動が続いたようであるが、雨流遺跡・志知川沖田南遺跡・谷町筋遺跡等が、こうした地域に知られている。

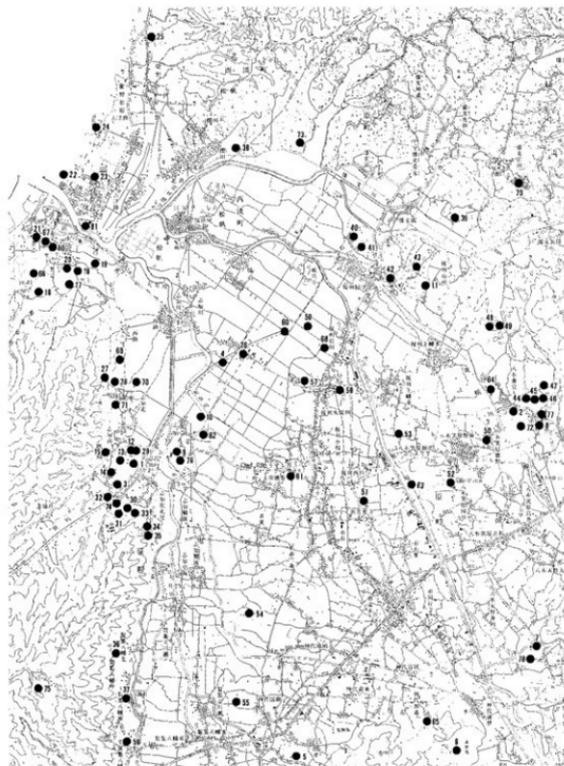
谷町筋遺跡出土遺物の中には、畿内第Ⅱ様式に属する壺に簾状文の使用が見られ、畿内地方の影響が見られるとともに、甕に櫛指文が施される等、瀬戸内地方の関わりも見られる。Ⅲ様式の壺には口縁内凸帯を持ったものが見られ、この時期にも東部瀬戸内地方の影響を受けていたようである。

後期の遺跡としては志知川沖田南遺跡・谷町筋遺跡等の存在が知られ、谷町筋遺跡では包含層から後期前半以降の土器が出土している。それらの土器には畿内的な様相も認められるが、四国・瀬戸内地方の影響が強く見られる。志知川沖田南遺跡では後期末から古墳時代初頭の土器が出土し、水田が検出されている。ただこの遺跡から出土した遺物は非常に特徴的で、壺等には底部が丸底に近いものが見られるのに対し、甕の底部は全て平底で、体部も後期の土器に近い形態を持つ。土器の中には四国系の所謂「矢野式土器」⁽⁵⁾に属するものが見られたり、甕の口縁部に刻み目を持ち、紀伊地方の影響を受けたものも見られる。

このように弥生時代の居住・生産領域は基本的には三角洲Ⅰにあり、居住空間も三角洲Ⅰ内に自然堤防、三角洲Ⅰを踞む台地・段丘の縁辺に求められる。ただ実体は不明であるが、大日川上流の段丘Ⅱの縁辺、あるいは三原川を奥深く遡った段丘Ⅰ・Ⅱは丘陵裾部に、戎添遺跡・浦壁池遺跡・鐘原遺跡・大土居中遺跡等が出現している。これらの遺跡は大日川・三原川の形成した谷底低地を生産基盤とした集落であるものと思われ、弥生時代を通じ、居住領域・生産領域は河川沿いに拡大していくものと思われる。また段丘Ⅰ・Ⅱは生産領域には成り得ないものの、狩り・採集の場としては利用されていたものと思われる。

また弥生時代中期後半から後期にかけて、瀬戸内周辺から畿内には高地性集落が出現しているが、三原平野の西端を縁取る南辺寺山山頂付近では弥生土器が採集されており、そうした高地性集落となる可能性がある。

この他、淡路の弥生時代を特徴づけるものに青銅器がある。中でも銅鐸は最大数を採れば、現在13遺跡から20口が出土している⁽⁶⁾。三原平野では8口を出土した西淡町中の御堂遺跡の他、出土地点が比較的明らかな緑町俊文銅鐸出土地(笹尾遺跡)等がある。銅鐸の他、西淡町古津



第2図 位圖と周辺の遺跡

遺跡地名表

| 遺跡名 | 時期 | 遺跡名 | 時期 |
|--------------|-------------|------------|-------|
| 1 伊田遺跡 | 縄文晩・弥生前期～鎌倉 | 42 山所古墳 | 古墳後 |
| 2 南畑遺跡 | 縄文前期 | 43 入田山1号墳 | 古墳後 |
| 3 谷町筋遺跡 | 縄文後・弥生～室町 | 44 入田山2号墳 | 古墳後 |
| 4 志知川神田南遺跡 | 弥生前～古墳前 | 45 入田山3号墳 | 古墳後 |
| 5 編原遺跡 | 弥生後 | 46 上八木古墳 | 古墳後 |
| 6 御壁池遺跡 | 弥生? | 47 長田山1号墳 | 古墳後 |
| 7 夜添遺跡 | 弥生? | 48 長田山2号墳 | 古墳後 |
| 8 大十居中遺跡 | 弥生? | 49 徳理塚村古墳 | 古墳後 |
| 9 志知松本遺跡 | 弥生・古墳 | 50 淡路面折窪遺跡 | 奈良～平安 |
| 10 伊勢の森遺跡 | 弥生 | 51 淡路園分寺址 | 奈良 |
| 11 里見山下遺跡 | 弥生? | 52 淡路園分尼寺址 | 奈良 |
| 12 志知野高所遺跡 | 弥生・平安 | 53 山惣羅寺 | 奈良 |
| 13 しずかい遺跡 | 弥生・奈良 | 54 国術羅寺 | 奈良 |
| 14 城の元遺跡 | 弥生・奈良 | 55 藤原寺 | 奈良 |
| 15 飯山寺遺跡 | 弥生・奈良 | 56 大槻列遺跡 | 奈良 |
| 16 やまご遺跡 | 弥生～平安 | 57 宮の内遺跡 | 奈良 |
| 17 美園遺跡 | 弥生 | 58 松田下遺跡 | 奈良 |
| 18 井手の内遺跡 | 弥生?・平安 | 59 大槻列下遺跡 | 奈良 |
| 19 岡所西遺跡 | 弥生?・奈良 | 60 畑田遺跡 | 奈良 |
| 20 瀬野遺跡 | 弥生?・平安 | 61 高巻橋川遺跡 | 奈良 |
| 21 淡明神前遺跡 | 弥生?・平安 | 62 園分遺跡 | 奈良 |
| 22 西原地方松原遺跡 | 弥生?・奈良 | 63 入田福翁前遺跡 | 奈良 |
| 23 西原(古津路)遺跡 | 弥生 | 64 汁谷黒土 | 奈良 |
| 24 松原千重遺跡 | 弥生・奈良 | 65 黒田遺跡 | 平安 |
| 25 北所遺跡 | 弥生 | 66 殿の下遺跡 | 平安 |
| 26 南流遺跡 | 古墳 | 67 碓毛遺跡 | 平安 |
| 27 庚申1号墳 | 古墳 | 68 西路庚申遺跡 | 平安 |
| 28 庚申2号墳 | 古墳 | 69 門の上遺跡 | 平安 |
| 29 瀬谷古墳 | 古墳後 | 70 南平遺跡 | 平安 |
| 30 瀬谷山1号墳 | 古墳後 | 71 戒壇寺跡 | 平安 |
| 31 瀬谷山2号墳 | 古墳後 | 72 赤金遺跡 | 平安 |
| 32 佐礼尾古墳 | 古墳後 | 73 佐礼尾應社 | 平安 |
| 33 佐礼尾1号墳 | 古墳後 | 74 南辺寺址 | 弥生・平安 |
| 34 佐礼尾2号墳 | 古墳後 | 75 志知城址 | 室町 |
| 35 賀兼西山北古墳 | 古墳後 | 76 兼宜船址 | 鎌倉～室町 |
| 36 賀兼西山南古墳 | 古墳後 | 77 佐保谷應社 | 奈良 |
| 37 櫻田山古墳 | 古墳後 | 78 加地船址 | 室町 |
| 38 倭文委文古墳 | 古墳後 | 79 赤城址 | 室町 |
| 39 掃守岡山1号墳 | 古墳後 | 80 叶堂城址 | 室町～江戸 |
| 40 掃守岡山2号墳 | 古墳後 | 81 ハバ古墳 | 古墳後 |
| 41 里見山古墳 | 古墳後 | | |

路遺跡では中細形銅剣が10数本出土しており、西淡町西原地方松原遺跡等の砂堆上に位置する遺跡では銅鏃8本が採集されている。このように三原平野では遺跡数の割には多くの青銅器の出土が知られている。銅鐸、銅剣・銅鏃は祭祀に関連する遺物であるが、その祭祀に対する関わり方が異なるため、自ずとその出土地も異なり、銅鐸に関係する遺跡は丘陵地帯やその裾部に位置し、銅剣・銅鏃等の銅利器に関する遺跡は海岸砂堆上に位置している。

3. 古墳時代

古墳時代に入っても居住・生産領域は弥生時代後期段階と大きな変化は見られないが、ただ古墳築造という墓制の変化に伴って、平野を囲む丘陵地帯にも活動領域は広がっている。

古墳は三原平野全体でも現在26基が知られているに過ぎない。またいずれも保存状態が悪く、墳形・内部主体とも不明なものが多い。墳形の判明しているものは全て円墳で、内部主体は陶棺を持つ1基を除いて、横穴石室か小型の堅穴石室である。時期的にも確実に前・中期に遡るものは知られておらず、後期古墳に限られている。

これら後期の古墳26基は位置的な関係から、①西淡町志知北から志知佐礼尾に至る大日川中流域左岸の台地や丘陵地帯に位置するグループ、②南淡町賀集付近の大日川中流域から上流域に位置するグループ、③三原町榎列付近の成相川と三原川の合流点付近の丘陵地帯に位置するグループ、④成相川上流の三原町八木付近の段丘Ⅱや丘陵地帯に位置するグループ、⑤倭文川中流域から上流域に位置するグループにまとめられる。

①群は横穴石室を内部主体にする庚申1・2号墳から佐礼尾2号古墳までの9基の古墳で構成されるが、最近の調査で墳丘が完全に削平されたハバ古墳が発見されており、他にも開壘時に削平されて消滅、あるいは墳丘が失われた古墳があったものと思われる。このグループの内、佐礼尾古墳は小型の堅穴石室を内部主体とする古墳であるが、六鈴鏡・鉄器等が発見されている。またハバ古墳は残っていた石室の床面から銅鏡・金銅製馬具・鉄器等が調査時に出土している。銅鏡を副装品に持つ等、他のグループに比べると、三原平野では比較的有力な勢力であったものと思われる。②群は西山北・西山南・野田山・小山・八幡古墳の5基で構成されるが、その内、賀集西山北古墳は長さ約8mの横穴石室を内部主体とし、淡路では最大の横穴石室を内部主体とする古墳である。他の西山南古墳も横穴石室を内部主体とする古墳である。③群は掃守岡山寺1・2号墳と里見山古墳・山所古墳の4基で構成されるが、内部主体等は不明である。④群は入田山1～3号墳と野原塚村古墳の4基と長田山1・2号墳をまとめたが、長田山1・2号墳はやや離れて存在している。野原塚村古墳は淡路では唯一陶棺を内部主体とする古墳である。⑤群は倭文委文古墳・榛田山古墳で構成され、倭文川流域に分布する。これら①～⑤群の内、大日川流域の群と、三原・倭文川流域の群では内部主体に違いが見られるようで、大日川流域の古墳は横穴石室、小型堅穴石室を内部主体とするが、三原・倭文川流域の群は小

型の堅穴石室か箱式石棺を内部主体とするものが多いようである。

古墳は本来埋葬場所であり、被葬者の支配する領域に埋葬されたとすれば、5群の古墳群に葬られた支配者層は①が大日川下流から中流域、②が大日川中流域から上流域、③が三原川下流域、④が成相川上流域、⑤が倭文川流域を支配下に置いていたことが考えられ、当然居住域もその中に考えられる。この支配領域は後の律令期に三原平野に置かれた6郷の内、複列郷を除く、5郷の比定地とほぼ一致し、「郷」としてまとめられた行政単位は、古墳時代後期のこうした支配領域を踏襲したものであることを窺わせる。またこの他、水系は異なるが、南淡町阿万にも丸田古墳等4基の古墳が知られており、こども律令期には「阿万郷」が置かれた地域で、古墳時代後期の支配領域が踏襲されている。

また①～③・⑤群が支配下に置いたと類推される地域は、地形分類上では、谷底平野内の後背湿地、三角州Ⅰに当たる地域で、弥生時代以降常に主たる生産領域とされてきた地域である。しかし④のグループが支配下としたと類推される地域は段丘Ⅰにあたる地域で、地形的には他の4グループに比べると劣悪な土地条件である。弥生時代以降の土木技術の進歩の中で、新たに開発されたものか、あるいは成相川中流から上流域の河川沿いの谷底平野を支配域としたことが考えられる。

この時期の集落址としては、谷町筋遺跡で前期の方形住居址が、雨流遺跡では方形住居址で構成された中期の集落が発見されている。谷町筋遺跡は三角州Ⅰに面した台地の縁に位置し、その生産基盤は眼前に広がる三角州Ⅰにあったものと思われ、①の古墳群の支配する地域であったものと思われる。雨流遺跡は三角州Ⅰと三角州Ⅰ内の自然堤防上に位置する遺跡で、『日本書紀』仲哀天皇二年二月の条に見える「淡路の屯倉」の比定地に近く、遺跡内から島根県玉造地方の石材を使用した子持ち勾玉が出土している。子持ち勾玉が大和王権と関係する祭祀遺物と考えられることから、「淡路の屯倉」と雨流遺跡との関係が注目される。このように両遺跡は三角州Ⅰ内の自然堤防上や、三角州Ⅰに臨んだ台地上に位置しており、この時期の居住領域は弥生時代に引き続き、海岸砂堆、自然堤防、三角州Ⅰに面した台地・段丘上にあつたものと考えられる。

志知川沖田南遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の水田址が発見され、水田の大畦畔は基本的には条里型地割りとはほぼ同じ方位をとっている。また雨流遺跡でも古墳時代中期から後期にかけての水田が検出され、これらの遺跡が立地する三角州Ⅰは弥生時代に引き続き生産基盤となっている。志知川沖田南遺跡では上層の水田域が、下層より下流域に向かって拡大しており、古墳時代前期以降、三角州Ⅰの地理的な変化に伴って、生産基盤となる水田面積の拡大が図られたものと考えられる。

また段丘Ⅰの奥まった丘陵裾部では、三原町汁谷窯址⁽¹²⁾が田辺編年のTK209段階から須恵器生産を開始している。須恵器生産に必要な新材・粘土を得るために、段丘Ⅰを奥に入った丘陵裾

部に窯が築かれたものと考えられ、段丘Ⅰ・Ⅱではそうした材料を得る適地ではなかったものと思われる。なお、汁谷窯址は今のところ淡路では最も古い窯址とされている。

このように古墳時代は古墳築造、須恵器生産を通じ、活動領域は三原平野を囲む丘陵地帯や段丘Ⅰを奥深く入った所にまで拡大しているが、居住領域・水田耕作域等の基本的な活動領域は弥生時代後期段階と大きくは変化していない。

4. 奈良～平安時代

律令期に入ると、淡路島は「淡路」一国とされ、三原平野は「三原郡」に編入される。国府は三原郡に置かれたとされているが、現在その位置は確定されていない。ただ三原町と南淡町に4ヶ所の推定地が掲げられており、その内、三原町市市・十・所・三条にまたがる推定地が比較的有力と言われている。この国府推定地の東、三原川の対岸の三原町八木国分には淡路国分寺が存在し、国分寺の北方には国分尼寺が比定されている。国分寺はこれまでの調査で、寺域の北・東限、金堂・塔址が確認されている⁽¹⁴⁾。三原郡の郡衙は南淡町賀集付近に推定されているが確定はされていない。この他寺院址として三原町山惣磨寺、国衙磨寺が知られているが、礎石等は確認されておらず、官衙的な遺跡の可能性も残されている。これら寺院・官衙址は後に述べる㊸・㊹の糸里型地割りに面した段丘Ⅰ・Ⅱ上に位置しており、占地にあたっては生産基盤に多大な影響を及ぼさないことが考慮されたものと思われる。

集落遺跡としては西淡町谷町筋遺跡・雨流遺跡が挙げられる。谷町筋遺跡は7世紀後半から9世紀前半にかけての遺跡で、井戸が検出され、墨書土器・漆付着土器等が出土している。また製塩土器が多量に出土しているが、地理的に塩の生産遺跡とは考え難く、塩の貢進等に携わった遺跡の可能性が考えられる。雨流遺跡は8世紀後半から9世紀前半にかけての遺跡で、井戸・建物址等が検出されている。この遺跡でも製塩土器が出土している。

三原平野周辺での製塩は弥生時代後期の西淡町伊弉遺跡から始まるが、律令期以降、淡路の調品目に塩があり、平城京からも三原郡阿万郷戸主が調として塩を貢納した木簡が出土している⁽¹⁵⁾。したがって奈良時代以降も三原平野周辺の地域で、製塩が行われていたことは確実に考えられる。しかし現在、製塩方法の変化か地理的条件の変化によるためか、この時期の製塩遺跡は知られていない。ただ内陸部の谷町筋遺跡や雨流遺跡で、厚手砲弾型の製塩土器が出土しており、淡路も瀬戸内・紀伊等と同様に製塩方法が変化していったことが考えられる。

須恵器生産は平野南部の丘陵裾に、三原南部窯址群が知られ、三原町汁谷窯址に引き続き、佐保谷窯址・戸川池窯址・奥の池窯址は8世紀後半に操業している。これらの窯址は段丘Ⅰを奥に入った丘陵裾に位置しており、須恵器生産に使用する薪材を丘陵地に頼ったためと思われる。

視点を変えて歴史地理学的に見れば、律令期、三原郡には「神籬・榎列・倭文・幡多・養宜・

阿万・賀集」の7郷が置かれる。7郷は現在残されている地名等から三原平野に比定され、本遺跡の所在地は神稲郷に比定されている。比定地内には本遺跡の他に谷町筋遺跡が確認されており、住居等の遺構は台地上に当たる地区で検出され、三角洲I上に当たる地区ではこの時期の遺構は認められていない。

また7郷を古墳時代の政治集団との関係で見れば、「神稲郷」は①群の、「倭文郷」は⑤群の、「幡多郷」は③群の、「養宜郷」は④群の、「賀集郷」は②群の、支配領域とはほぼ重なることから、阿万郷・榎列郷を除く5郷の設置にあたっては、在地の領主層の支配する領域を基礎として行われたことが類推される。「榎列郷」の比定地、三原町榎列付近は「淡路の屯倉」の比定地に当たり、朝廷の支配に置かれたことが考えられ、「屯倉」が行政区画としての「郷」の基礎となったことも考えられる。これらの郷には当然居住域、生産域、山地、原野等が含まれていたものと思われ、当時の生産域を示す条里型地割り及び直線道路には、③はほぼ真北のもの、⑥N3°W方位のもの、⑦N30°E方位のもの、④N16°Wの方位を持つものが見られる。③は南淡町賀集付近から三原町志知難波にかけての谷底平野内の後背湿地とその東側の段丘I・II上に残る。この地域は「賀集郷」の比定地にあたり、古代末以降賀集荘・東神代保が成立した地域である。⑤は三原町市・八木国分等の段丘I・II、三原町榎列小榎列付近の扇状地の範囲に広がり、所謂条里型地割りとする遺存状況が悪い。またこの地は国府推定地と国分寺・国分尼寺の比定地であり、これらの官衙・寺院等に伴う条坊制の地割りの可能性がある。⑦の条里型地割りは三原町志知佐礼尾付近から緑町倭文付近にかけての、広範囲に及び、地形的には三角洲Iにあたる地域に広がる。「神稲」・「榎列」・「幡多」・「倭文」の4郷の比定地に広がり、弥生時代以降、生産基盤として常に利用され続け、三原平野では水田耕作に最も適した土地である。志知川沖田南遺跡で検出された古墳時代前期の水田畦畔とこの条里型地割りはほぼ同じ方位であり、三原平野で最も早く施行された条里型地割りである可能性が高い。④は三原町八木養宜付近の段丘I・IIの地域に残り、「養宜郷」の比定地に当たる。わずかに南北方向の直線地割りが遺存するだけで、条里型地割りと呼び難い面もある。現在見られる地形にはほぼ平行して遺存しており、施行にあたっては地形にかなり制約され、この方位をとったものと考えられる。

これらの条里型地割り及び直線道路の内、確実な条里型地割りは③・⑦であり、それらは谷底低地の後背湿地・三角洲Iに広がる。そうしたことから律令期にあっても主たる生産基盤は弥生時代以降変化なく、後背湿地・三角洲Iであったものと思われる。

しかし鎌倉時代初めの「太田文」(「鎌倉遺文」)には「上田保」・「東神代保」等が見え、これらの「保」は古代末には成立していた可能性が高い。両保は段丘II上に比定されており、平安時代末には段丘II上は在地官人・在地領主等によって、開発可能な所、おそらく埋没河道(谷部)等から、開墾が進められていたものと思われる。そうした開墾の契機として、国府・寺院等が段丘II上に置かれたことが考えられる。

また平安時代末には国司の申請によって、淡路国に対し荘園の整理が命ぜられている（「寛喜元年四月七日太政官符案」『平安遺文』）ことから、それ以前に荘園が成立していたようであるが、三原平野では古代に成立したことが確実な荘園ははっきりしない。その申請では「淡路は土地が狭小な上、瘦せているのに、新立の荘園が乱立し、公民は荘園に入り荘民となって調庸の勤めを果たさず、国衙領は土地があっても人がいない。」といった淡路国の窮状を訴えている。おそらく荘園による積極的な開墾が行われる一方で、農民の逃散によって国衙領は荒廃し、そこに荘園が新たに成立するといった状態であったと思われる。

5. 鎌倉時代以降

鎌倉時代、淡路は佐々木経高を初めとする佐々木氏が守護となるが、承久の乱後、長沼氏が守護と国司を兼ね、淡路を支配する。

貞応二年に作られた「太田文」の記載では、三原平野は荘園・郷・保・村が成立している。三原平野内に位置したと考えられる国衙領は「西神代郷」・「東神代保」・「上田保」・「笑原保」・「掃守保」・「長田村」があり、この内、律令期の「郷」から存続すると考えられるのは、律令期「神福郷」であったと考えられる「西神代郷」だけとなる。「西神代郷」は三原町志知から西淡町湊までの三原平野北西部の山裾に比定されており、地形的には三角州Ⅰ・Ⅱ、台地、丘陵、山地等が含まれている。ただ「西神代郷」も実体は荘園化されたものであったらしく、「太田文」ではわざわざ、「志知荘」といったものは存在しないと注記されていることからすれば、実質的には荘園に変化していたものと考えられる。「志知」には太田文では末尾に花押している在庁官人と思われる「右馬允藤原朝臣」の広大な屋敷があったと記載され、この人物が西神代郷の「志知」を荘園化していたものと思われる。地名から言えば本遺跡はこの志知の内にあり、時期的にも12～13世紀の遺物が出土しており、関連が注目される。

「保・村」は基本的には「郷」に組み込まれなかった地域に、すなわち「郷」の外側に国領として誕生するが、三原平野では「東神代保」・「上田保」・「笑原保」・「掃守保」・「長田村」が成立している。「東神代保」は、現在の地名から三原町神代付近に比定され、賀集荘の東側にあたる。地形的には段丘Ⅱ上に当たる地域である。「上田保」は三原町市付近に比定されており、律令期の「覆列郷」から国府推定地に当たり、地形的には三角州Ⅰ・扇状地・段丘Ⅱに当たる地域である。「笑原保」は保内には「八木村・八太」が含まれていることから、上田保の東側で、律令期「養宣・輔多郷」が置かれた三原川から東側に成立したものと思われる。地形的には三角州Ⅰ・扇状地・段丘Ⅱにまたがる地域に当たる。「掃守保」は三原町覆列掃守付近に成立したものと思われるが、同名の「掃守荘」も成立しており、位置の比定は困難である。「長田村」は緑町倭文長田付近に比定され、律令期の「倭文郷」に含まれていた地域に成立したものであろう。「村」は本来「保」の下に置かれたものであるが、この「長田村」は「保」程度に発達していた

ものと思われる。

以上のように、「搦守保・長田村」を除く、「東神代保・上田保・笑原保」は三角州Ⅰ・扇状地・段丘Ⅱ上に成立しており、段丘Ⅱ上の開墾が、律令期を通じて行われたものと思われる。しかし「太田文」に記載された田畑の面積を見ると、「東神代保・上田保・笑原保」は水田に対し、畑の面積も多く、土地条件から見れば、水田耕作は三角州Ⅰ・扇状地で行われ、段丘Ⅱ上は畑として利用されていた可能性が高い。また三角州Ⅰ・扇状地は律令期の郷の生産基盤であった所であり、三原平野における「保」は郷を取り込んで成立した可能性が高い。

三原平野に位置したと思われる荘園は、「賀集荘・搦守荘・慶野荘・国分寺荘」で、この内、「賀集荘」は律令期「賀集郷」であった南淡町賀集付近に比定されており、地形的には谷底平野と段丘Ⅱ上に当たる。「搦守荘」は律令期の「轄多郷」に成立したものと思われるが、「搦守保」との関係があり、位置を比定することは困難である。「慶野荘」は浦一所が含まれることから、海岸沿いに成立したものと思われ、西淡町慶野付近の海岸砂堆から三角州Ⅱ付近に比定される。「国分寺荘」は現在の地名から見れば、三原町八木笑原国分付近と考えられるが、地形的には段丘Ⅰ上に当たることからその地域とは考え難く、三原川中流域の河川沿いに成立した可能性が高い。

このように郷・荘・保・村は比定されるが、それぞれの比定地は三角州Ⅰ・Ⅱ、扇状地、段丘Ⅱ上であり、「上田保・東神代保・笑原保」で見たとおり、段丘Ⅱ上は畑として利用され、三角州Ⅰ・Ⅱ、扇状地は主に水田耕作地帯として利用されていたようである。居住域は当然その周辺に求められるが、本遺跡や谷町筋遺跡では、三角州Ⅰ上にも住居が検出されていることから、三角州Ⅰの変化に伴って、三角州Ⅰ上にも集落が進出していったものと思われる。

室町時代、南北朝の内乱期を過ぎてからは細川氏が守護となるが、戦国時代には阿波の三好氏が淡路を攻め、淡路をその支配下に治めている。また安宅氏・野口氏等の、淡路の国人の台頭が目立つようになる。

そうした国人等が築いた城・館址が三原平野と平野を取り囲む丘陵に残されている。代表的なものに、三原町養宜館址・上田土居・志知城、西淡町湊城・叶堂城、緑町船越館址等がある。養宜館址は守護、細川氏の館址と伝えられ、東西約120m・南北約250mの規模で、現在も北・東側に土塁が残り、東限には濠跡が残る。地形的には平野東端の段丘Ⅰの縁辺部に当たる。志知城は本遺跡の東方約750mの大日川沿いの三角州Ⅰに位置し、大日川を利用した縄張りをしていいる。淡路国人の一人野口氏の居館址といわれ、豊臣氏による淡路攻めで開城し、加藤嘉明が配されている。現在は東を除く3方に濠が残り、その中央に東西・南北とも約72mの規模の不整形な方形の本丸台地が残されている。「味地草」・「淡路草」には志知城を中心に館址が残されていたことが記されている。叶堂城はこの志知城の石垣を移して築城されたと言う伝説が残る。叶堂城は志知城に代わる水軍基地として豊臣氏によって築城が開始されたが、築城途中関ヶ

原の戦いが起こり、西軍が敗れたため、この城も廃城されたといわれている。現在は三原川の改修のため壊されたが、それに伴って実施された調査では穴太積みの石垣・堀等が確認されている。地形的には海岸砂堆に突き出した丘陵上にあたる。

この時期の集落遺跡としては豪農の屋敷とそれに付随した農民層の集落と捉えられる谷町筋遺跡が確認されているだけで、他に集落遺跡は確認されていない。

そこで文献上に残る集落から、当時の居住域を考えてみたい。まず文明二年の「賀集山護国□□番張事」に「野田村・高蔵村・法花寺村・牛田村・鍛冶屋村・中村・忌部村・立川瀬村」等が見え、これらの集落は現在の地名から南浜町賀集の諸集落と考えられる。当然、この時期の集落からは移動している可能性があるが、ここに記載された集落は段丘Ⅱ上に立地している。また永正十三年の「神宮御師道者株沽券」には「あなみ・宮内・中村・ししか・石井・新在家・八幡之坊中・徳長・うわら・十一ヶ所・坊中・せんくわうじ在所・野□在所・あなきやうじ在所一円」とあり、現在の地名から「あなみ・中村・石井」は三原町大榎列・小榎列に、「徳長・うわら」は三原町徳長に、「十一ヶ所」は三原町市十一所に、「せんくわうじ在所」は三原町善光寺、「あなきやうじ在所」は三原町円行寺に比定される。地形面で見ると、三原町大榎列・小榎列は扇状地に、三原町徳長・市十一所は段丘Ⅱの縁辺に、三原町善光寺は段丘Ⅱの中央に、三原町円行寺は段丘Ⅰに位置する集落である。ただ「せんくわうじ・あなきやうじ」は「在所」とされており、寺を中心として家が建ってはいたが、「村」としての形態を持つまでには発達していなかったものと思われる。天正十四年の「淡路国御蔵入目録」にはほぼ平野内全体の集落が記述されているにもかかわらず、段丘Ⅰ上の集落と段丘Ⅱの中央に位置する集落は見当たらない。

このように室町時代の集落は海岸砂堆、三角州Ⅰ、段丘Ⅱ上に展開し、段丘Ⅰに当たる地域にはまだ展開していない。また段丘Ⅱ上でも河川から離れた中央部では、集落としての展開は認められない。

江戸時代に入って淡路は阿波蜂須賀藩の所領となり、蜂須賀藩は寛永四年に検地を行っている。その検地帳で、初めて「円行寺・国府市・小井・善光寺・産所・新村・藪田」等、現在段丘Ⅱ上に位置する集落がほぼ出現し、また段丘Ⅰ上の集落も河川沿いに位置するものは出現している。おそらく、室町時代後半から江戸時代初めにかけての時期に段丘Ⅱ上はほぼ開墾しつくされ、段丘Ⅰが開墾の対称となっていたものと思われる。そして「在所」として呼ばれていた所も、集落としての形態を持つまでに成長したようである。ただ段丘Ⅰ上で河川から離れた集落はまだ出現していない。

そうした段丘Ⅰの中央や平野北側の丘陵上に位置する集落が出現してくるのは寛永以後の開拓後のことで、こうした新村は検地を受けて、村高が決められ、庄屋が置かれる。段丘Ⅰ中央部の「喜来村・黒道村・富田村・青木村・立石村・長原村・新田南村・新田中村・新田北村・

生子村)、丘陵上の「宝明寺村」等が本村から分離・独立し、村に庄屋が置かれたのは17世紀後半であり、この時期に村落としての形態が整えられた。この時期に初めて現在見られるような三原平野の景観が出来上がった。

6. まとめ

最後に、今回は三原平野における集落立地の変遷を地形環境から概観した。その結果、三原平野では、旧石器時代から人々が住み着き集落を形成し初め、縄文時代には丘陵地帯や三角洲を臨む台地上に集落を営み始める。弥生時代には海岸砂堆や三角州Ⅰ内の自然堤防、三角州Ⅰに面した台地や段丘Ⅱの縁辺に集落を営み、一部は河川を遡った段丘Ⅰ縁辺にも進出している。古墳時代から律令期の集落も大きくは弥生時代における範囲と変化はないが、段丘Ⅱの中央には国府が置かれる。古代末から鎌倉時代には国府の機能の衰退とともに、段丘Ⅱは畑として開墾されて行くが、集落立地は前代と大きくは変化していない。ただ段丘Ⅱが開墾されたため、寺院は段丘Ⅰに立地するようになる。集落立地が大きく変化するのには室町時代を通じてであり、江戸時代の初めには段丘Ⅱ上にはほぼ全域に集落が立地するようになる。そして江戸時代前半の17世紀後半には、段丘Ⅰ上の集落もほぼ出現する。

こうした集落立地の変遷は背景に、生産基盤との係わりを常に持っていることは言うまでもなく、生産領域も居住領域の拡大とともに変化、拡大していったものと考えられる。

- (1) 浦上雅史「安住寺遺跡」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員会 1982年
- (2) 吉識雅仁、西口圭介、川崎 保『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会 1990年
- (3) 高橋 学「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発—地形環境分析による—」『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会 1987年
以下の地形環境はすべてこの文献を参考にした。
- (4) 岡本 稔「淡路の弥生時代の考察—洲本川流域を中心として」『淡路考古学研究会誌』第2号 淡路考古学研究会 1974年
- (5) 松下 勝他「淡路・志知川沖田南遺跡」兵庫県教育委員会 1987年
- (6) 長谷川真「兩流遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988年
- (7) 岩崎直也「四国系土器群の輩出」『大阪文化誌』17 1984年
- (8) 種定淳介『兵庫の銅鐻』兵庫県立歴史博物館 1987年
- (9) 高井悌三郎・三木文雄「三原郡緑町倭文字庄田笹尾出土銅鐻」『桜ヶ丘銅鐻銅戈』兵庫県教育委員会 1969年
- (10) 高井悌三郎・三木文雄「三原郡西浜町筒飯野字古津路出土銅劍」『桜ヶ丘銅鐻銅戈』兵庫県教育委員会 1969年
- (11) 直良信夫「淡路松帆と同福良の遺跡—金石併用時代文化研究資料—」『考古学雑誌』第20巻第1号 考古学会 1930年
- (12) 直木孝次郎「律令制の社会」『兵庫県史』第1巻 兵庫県史編纂委員会 1974年
- (13) 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 淡路考古学研究会 1980年
- (14) 高井悌三郎・森 郁夫他「淡路国分寺—発掘調査概報」三原町教育委員会 1985年
- (15) 『平城京木簡Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1974年

第 3 章 北 地 区 の 調 査

第 1 節 調査区の概要 (第 4～7 図 図版 2)

遺跡を横断する町道の北側に当たる地区で、地形的には西方から張り出す台地状の地形の末端から沖積地に当たる地区である。調査前は大部分が水田であったが、一部水路、農道があった他、A・B-14・15区付近は墓地として利用されていた。また江戸時代の絵図には住宅が記載されており、調査においても版築状の盛土が確認されていることから、一部は宅地として利用されていた時期もあるようである。

調査前の水田面の標高は、北東隅が最も低く約3.1m、北西隅が最も高く約4.6mで、比高差は約1.5mであったが、調査区を南端中央から西端中央に弧状に走る農道・水路を挟んで、約50～90cmの段が付き、水路の西側は台地上に、東側が沖積地に当たるものと推測された。

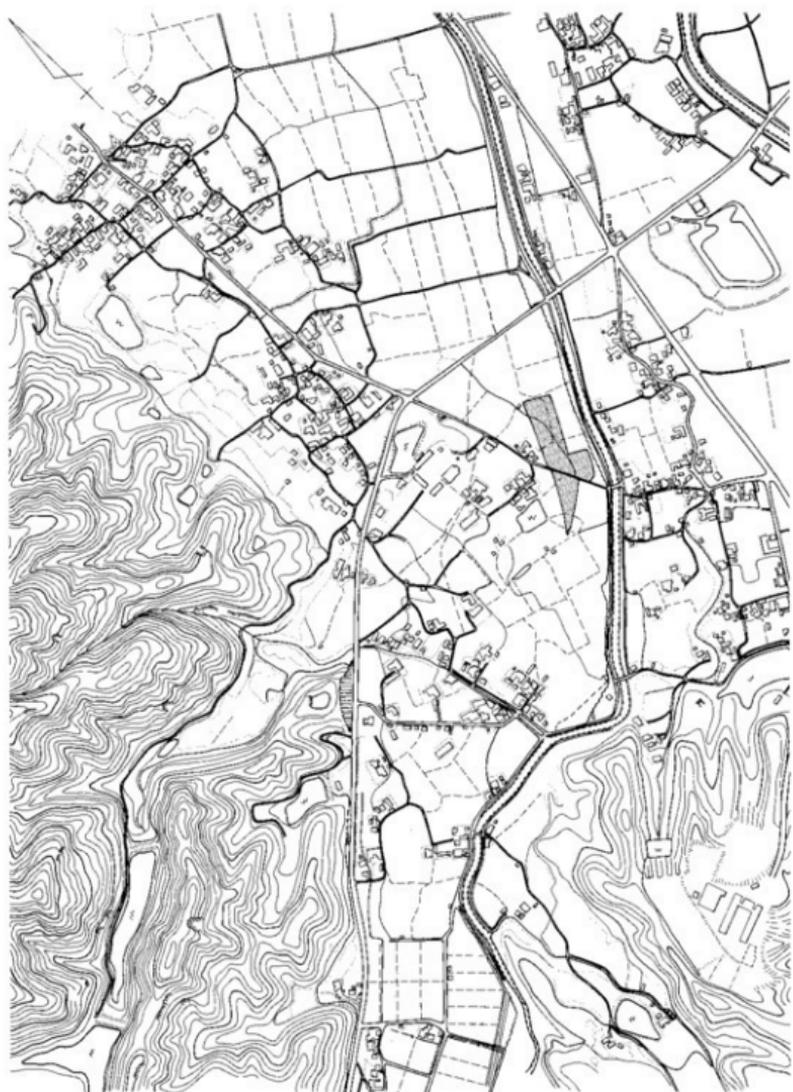
調査の結果、弥生時代後期から鎌倉時代に至る遺構と近世以降の墓塚が検出されたが、当初の予想通り、現水路の西側は台地上に当たり、東側は沖積地に当たることが確認された。こうした地形の違いから、調査区南端中央から西端中央にかけて検出された溝群の西側と東側では遺構の検出面、土層の堆積状況、検出される遺構の時期に明確な違いが認められた。

まず遺構検出面、土層の堆積状況であるが、調査区中央の溝群の西側地区は、台地末端に当たる地区であり、基本的な土層の堆積状況は耕土・床土・黄褐色シルトである。部分的に床土内や黄褐色シルト上面に灰褐色細砂から砂礫が認められている。

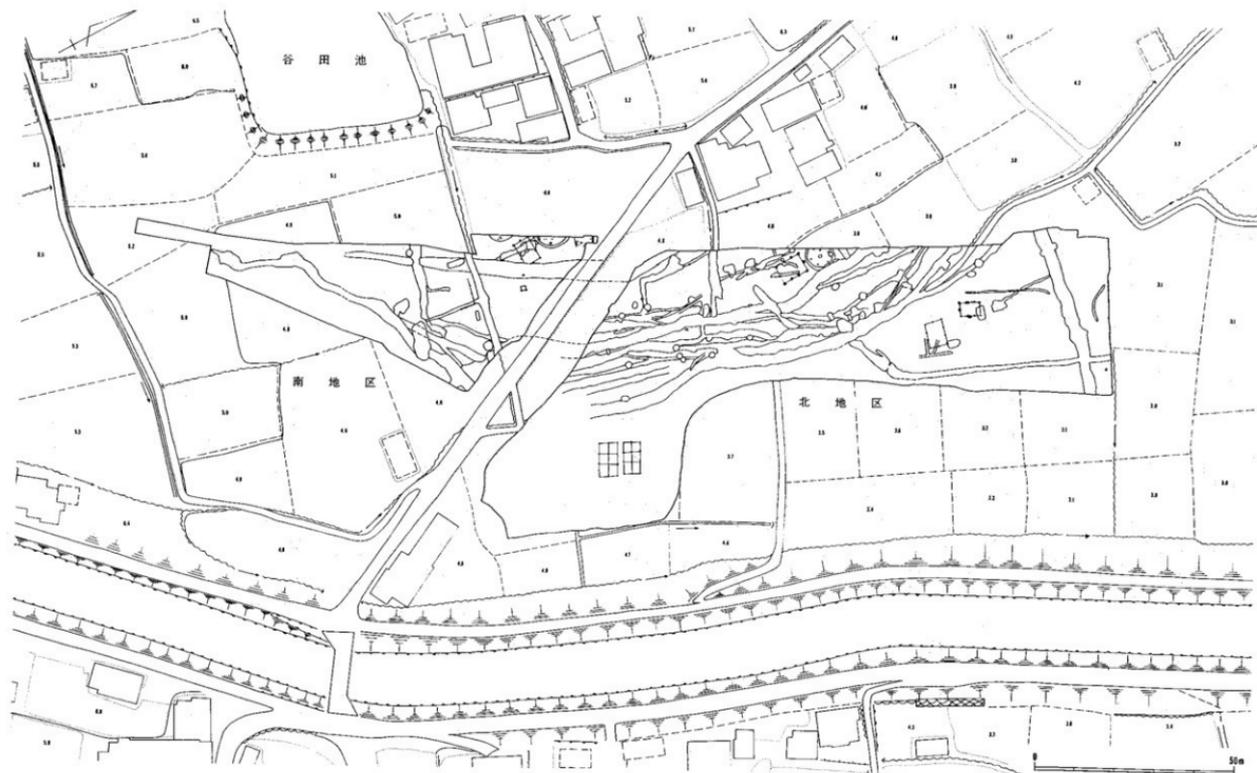
遺構の検出面は黄褐色シルト上面であり、弥生時代～鎌倉時代に至る遺構が検出されている。ただ一部調査区西側の民家の間を抜けて調査区に伸びて来ていた農道の南側付近では、床土直下から、弥生時代～奈良時代までの土器を含む黒褐色シルトが認められ(11ライン第18層)、この黒褐色シルト上面から平安時代～鎌倉時代の柱穴が検出されている。したがって本来遺構面は、弥生時代～奈良時代までの遺構面である黄褐色シルト上面と、平安時代～鎌倉時代の遺構面である黒褐色シルト上面の2面であったと考えられる。

黄褐色シルト上面は調査区南西隅付近から溝NSD-1に向けてゆるやかな傾斜で下がり、溝NSD-1付近では比較的急な傾斜で下がっている。調査区南西隅で標高約3.8mで溝NSD-1付近では標高約3.2～3.3m、比高差約0.6mを測るが、水田化の際等に削平を受けていることが考えられ、本来はもう少し比高差があったものと思われる。

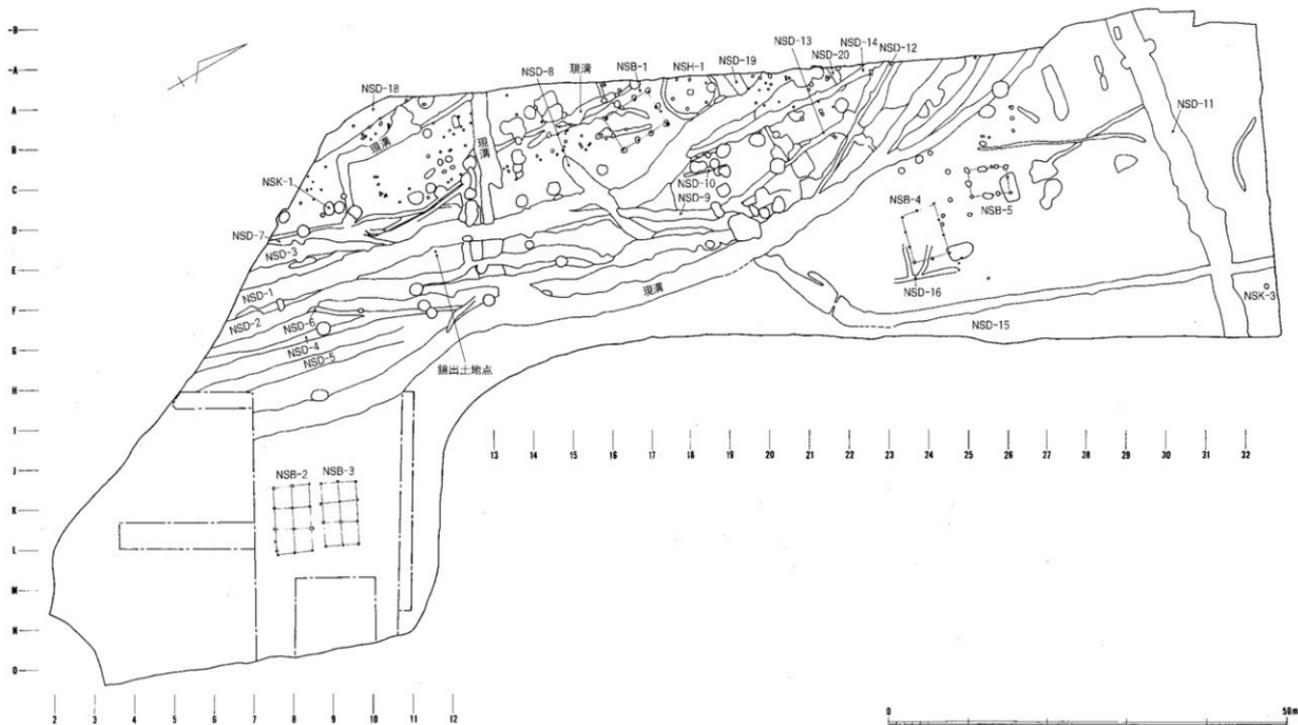
溝群の東側地区では、基本的な土層堆積状況は耕土・床土・暗灰褐色シルト(第20層)・灰褐色シルト・黒褐色シルト質粘土(第25層)・黒褐色シルト(第26層)・黄褐色シルトで、遺構の検出面は床土直下の暗灰褐色シルト上面と、灰褐色シルト上面の2面である。ただ灰褐色シル



第3図 調査区位置と周辺の地形



第4图 调查区全体图



第5图 北地区全体图

ト層の堆積は調査区の北半に限られ、南半では認められなかった。まち黒褐色シルト質粘土上面や黄褐色シルト上面でも溝状の落ちが確認されたが、遺物の出土は無く、遺構と断定はできなかった。

溝西側地区の遺構検出面である黄褐色シルト層は徐々に下がり、11ラインの東端での標高は約1.7mで、溝群付近との比高差約1.5mを測る。黄褐色シルト上面からは、遺構は検出されなかったが、上層の黒褐色シルト・黒褐色シルト質粘土内に少量の弥生土器片が含まれていたことから、弥生時代の生活面に当たることが想定できる。

さらに第25層の黒褐色シルト質粘土上面は、上層の暗灰褐色シルト（第20層）上面が平安時代～鎌倉時代の遺構面であること、さらに遺跡全体の時期的な特徴から見れば、古墳時代～奈良時代の生活面と考えられ、北半の灰褐色シルトに対応する面になるものと思われる。確認調査では灰褐色シルト下から黒褐色シルトが確認されている。

今回の調査で、検出された遺構は弥生時代～奈良時代、平安時代～鎌倉時代のもので、その他に詳細な調査は実施しなかったが、江戸時代以降の墓地遺構がある。

弥生時代の遺構検出面は基本的には黄褐色シルト上面で、遺構としては竪穴住居址1棟、土壌2基、溝5本が検出されている。いずれの遺構も調査区中央の溝群の西側、台地の末端に当たる地区で検出されており、溝群の東側、沖積地に当たる地区では検出されていない。

古墳時代～奈良時代の遺構検出面は台地末端にあたる溝群の西側では、基本的には弥生時代と同一の黄褐色シルト上面であったが、溝群の東側は平安時代以降の遺構が検出される暗灰褐色シルト下の灰褐色シルト上面であった。検出された遺構には掘立柱建物址2棟、溝6本があり、調査区中央の巾の広い溝NSD-1・2はこの時期に形成されている。建物址等の遺構は台地の末端に当たる地区のみならず、溝群の東側にも広がり、台地下の沖積地も居住空間として利用されている。また溝群には台地と沖積地の境を流れるものと、溝NSD-11のように沖積地を貫くものが見られる。

平安時代～鎌倉時代には調査区中央の溝群も埋没し、検出される遺構の密度は希薄ではあるが、ほぼ調査区全体から検出され、遺跡がこの段階に最も広がったことを物語っている。遺構の検出面はほぼ床土直下であり、検出された遺構には掘立柱建物址3棟、土壌1基、溝5本の他、建物址として復元出来なかった柱穴類がある。

以上が北地区の概略であるが、出土した遺物量が多いものの、遺構は少なく、本地区は遺跡の中心地域から外れた、遺跡の縁辺に当たるものと思われる。遺構の検出状況等から見て、本遺跡の中心となる地域は今回の調査区の西側にあるものと推測される。

北地区土層名表

Dライン

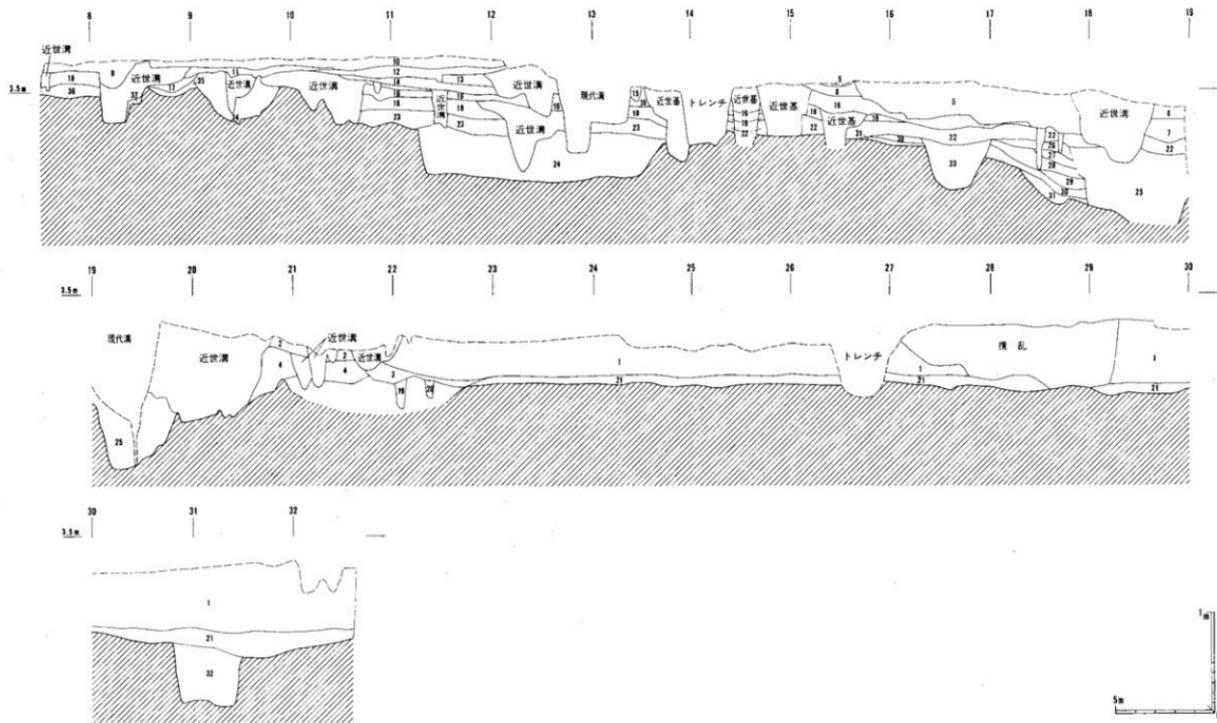
| | | | |
|----|----------------------|----|-----------------------|
| 1 | 黄灰色シルト (客土) | 20 | 灰褐色粗砂 |
| 2 | 盛土層 (旧道) | 21 | 暗灰色シルト |
| 3 | 黄褐色シルト (旧道) | 22 | 暗灰褐色シルト (中世遺物包含層) |
| 4 | 暗灰色シルト | 23 | 灰褐色シルト (奈良~平安時代遺物包含層) |
| 5 | 灰色砂礫 | 24 | N S D - 1 埋土 |
| 6 | 灰褐色シルト (客土?) | 25 | N S D - 2 埋土 |
| 7 | 灰褐色砂礫 | 26 | 濃灰褐色シルト (礫・粗砂含) |
| 8 | 灰褐色砂質シルト | 27 | 黒灰色シルト |
| 9 | 灰褐色シルト (粗砂・2 cm大の礫含) | 28 | 濃灰褐色シルト |
| 10 | 灰褐色シルト (粗砂・2 cm大の礫含) | 29 | 黒灰褐色シルト |
| 11 | 灰褐色砂礫 (薄い灰褐色シルトと互層) | 30 | 黒褐色シルト |
| 12 | 灰褐色シルト (粗砂含) | 31 | 黒灰褐色シルト |
| 13 | 灰茶褐色シルト (中砂含) | 32 | N S D - 11 埋土 |
| 14 | 黄褐色粘質シルト | 33 | N S D - 8 埋土 |
| 15 | 灰褐色シルト (3 cm大までの礫含) | 34 | 黒褐色シルト (弥生時代遺物包含層) |
| 16 | 灰褐色砂礫 (下層に薄いシルト層) | 35 | 濃灰褐色シルト (礫・粗砂含) |
| 17 | 黒褐色シルト (3 cm大の礫含) | 36 | 黒褐色シルト (古墳時代遺物包含層) |
| 18 | 灰褐色シルト | 37 | 暗灰色シルト |
| 19 | 灰褐色粗砂 | | |

11ライン

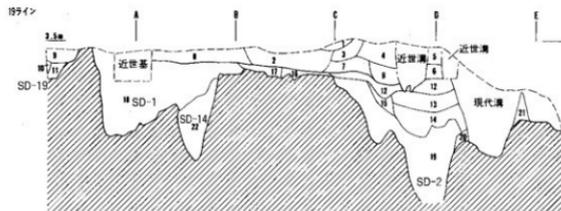
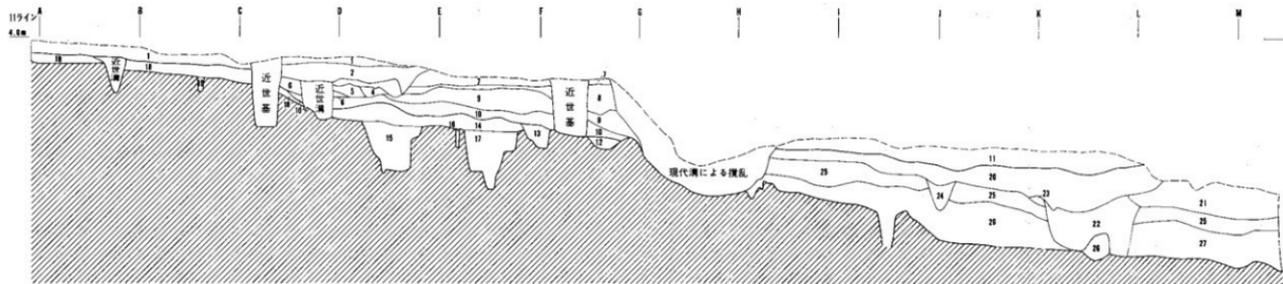
| | | | |
|----|-----------------------|----|--------------------|
| 1 | 灰褐色シルト (粗砂・2 cm大の礫含) | 15 | N S D - 1 埋土 |
| 2 | 灰褐色砂礫 (薄い黄褐色粘質シルトと互層) | 16 | 灰色細砂 |
| 3 | 灰茶褐色シルト (中砂含) | 17 | N S D - 2 埋土 |
| 4 | 灰褐色砂質シルト (3 cm大の礫含) | 18 | 黒褐色シルト |
| 5 | 灰褐色砂礫 | 19 | 暗灰褐色粘土 |
| 6 | 灰褐色シルト (3 cm大までの礫含) | 20 | 暗灰褐色シルト |
| 7 | 明灰褐色シルト | 21 | 褐色細砂 |
| 8 | 暗灰褐色シルト (多量の礫含) | 22 | 黒灰色シルト (黄褐色シルト混) |
| 9 | 黒褐色シルト | 23 | 黒灰褐色細砂 |
| 10 | 灰褐色シルト | 24 | 黒褐色シルト |
| 11 | 明灰褐色シルト | 25 | 黒色シルト質粘土 |
| 12 | N S D - 5 埋土 | 26 | 黒褐色シルト (弥生時代遺物包含層) |
| 13 | N S D - 4 埋土 | 27 | 黄白褐色シルト質粘土 |
| 14 | 灰褐色シルト (奈良~平安時代遺物包含層) | | |

19ライン

| | | | |
|----|------------------|----|------------------------|
| 1 | 灰褐色砂礫 | 12 | 暗灰褐色シルト (中世遺物包含層) |
| 2 | 灰褐色砂礫 | 13 | 明灰褐色シルト (奈良~平安時代遺物包含層) |
| 3 | 灰褐色砂質シルト | 14 | 暗灰褐色シルト |
| 4 | 灰褐色砂質シルト (下層に砂層) | 15 | 灰褐色シルト |
| 5 | 灰褐色砂質シルト | 16 | 灰褐色シルト |
| 6 | 灰褐色砂礫 | 17 | 灰褐色シルト |
| 7 | 暗黄褐色砂層 | 18 | N S D - 1 埋土 |
| 8 | 暗灰褐色砂質シルト | 19 | N S D - 2 埋土 |
| 9 | 灰茶褐色シルト | 20 | 濃灰褐色シルト |
| 10 | 暗黄褐色細砂 | 21 | 黒褐色シルト |
| 11 | 灰褐色シルト | 22 | N S D - 14 埋土 |



第6圖 土層図 (Dライン)



第7図 土層図 (11・19ライン)

第 2 節 遺 構

1. 弥生時代の遺構

竪穴住居址NSH-1(第8・9図 図版第3・第51)

台地の末端にあたる北地区の西端中央付近で、溝(NSD-1)に切られて検出された円形の住居址で、黄褐色シルト上面で確認された。北壁際には壁溝を切って近世の墓塚が掘り込まれ、西端は調査区外となって検出できなかった。

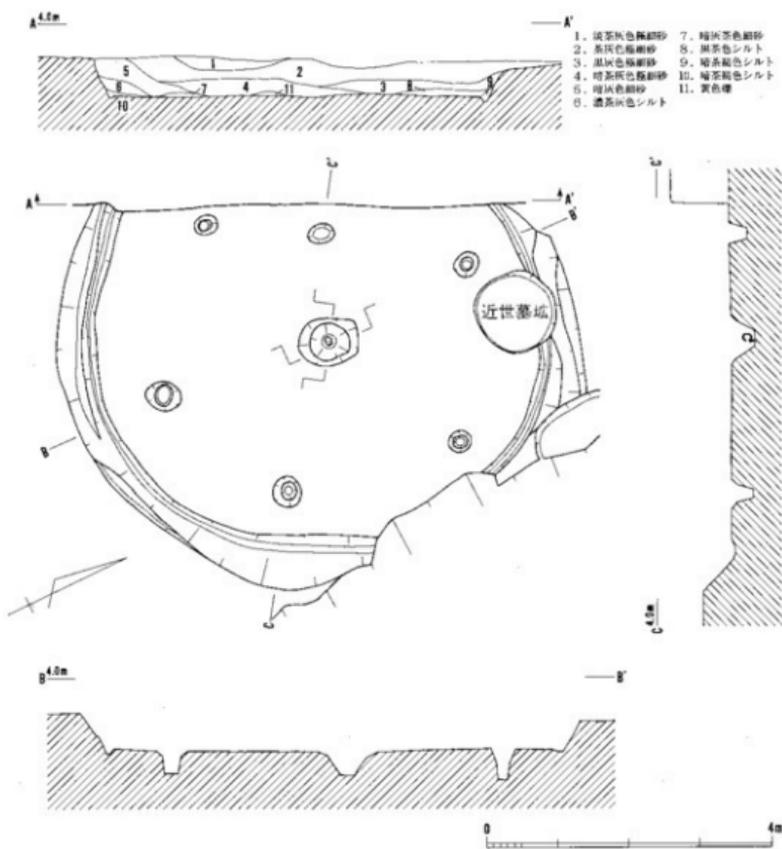
したがって住居址の全容を把握できていないが、検出できた部分での規模は南北約7.0m、東西約5.5mを測る。遺存していた壁から想定すれば、東西の規模もほぼ7.0mと考えられる。

壁は南西壁部分で最高約42cmまで確認できたが、住居址の南から南西側の壁は途中でテラス状になり、傾斜角が変化することから、壁上部が崩壊したことが考えられる。壁下には巾15~20cm、深さ約5~10cmの壁溝が設けられており、検出できた壁下の全てで認められることから、壁溝は壁下を一周して住居址全体に設けられていたものと思われる。

床面はほぼ平坦であるが、中央の土壌に向けて僅かに傾斜していた。床面上からは6本の柱穴が検出されたが、主柱穴と成り得るのは4本である。検出された主柱穴の配置からみて、調査区外となって検出できなかった部分に、さらに1本の主柱穴が配置されている可能性が高く、住居址本来の主柱穴は5本と想定される。主柱穴の規模は径約30~50cm、深さ32~45cmである。主柱穴の断面形は底から25cm前後の位置で上部が外に広がる形状を呈しており、この形状から、柱の抜取りが行われた可能性も考えられる。

床面中央には、深さ約32cmで、2段に掘られた中央土壌が設けられており、上段は平面形がほぼ楕円形で、規模は南北約88cm、東西約65cmを測る。この上段から約10cm下がったところで、土壌壁の傾斜がきつくなって、下段となる。下段は径約58cmのやや不整形な円形を呈し、深さは約22cmを測る。埴土は上層から暗灰褐色シルト・灰褐色シルト・黒灰褐色シルトの3層に分層でき、土壌底に堆積した黒灰褐色シルトには炭化物が多量に含まれていたものの、焼土は認められなかった。また土壌の底には、高杯の脚部を、頸部に枕をしたようにかませた小型の甕(1)が横倒しの状態で据えられていた。

以上が住居址の概略であるが、この住居址の調査途中、住居址埋土の第3~5層上で、多量の土器(3~77)が出土している。土器は住居址の南壁側に集中しており、時期的な差が見られないことから、住居址の南側から一括して投棄されたものであり、住居址の廃棄後、埋設途中の凹みのごみ捨て場として利用されたことが窺える。器種的には壺・甕・高杯・鉢があり、器台が欠けている。土器群の西半では壺類が多く、中央から東側では甕が多い傾向が見られた。時期的には弥生時代後期前半に属するものであろう。



第8図 竪穴住居址N SH-1



第9圖 竪穴住居址NSH-1遺物出土狀態

土壌NSK-1 (第10図 図版第4)

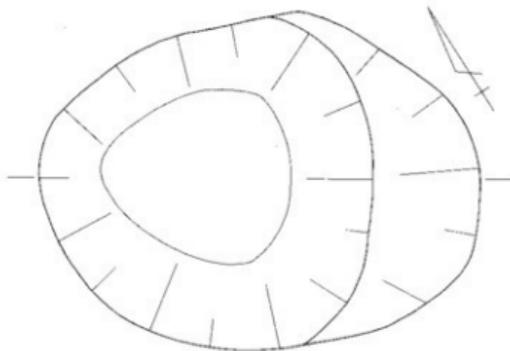
台地の末端にあたる調査区南西隅付近で検出された土壌である。平面形は北西-南東方向に長軸を置く楕円形で、長径約160cm、短径約125cm、深さ約70cmの規模である。土壌の壁は南東側で上面から深さ約25cmまではテラス状に緩やかな傾斜で掘られた後、急激に掘られている。壁が急な傾斜で構成された部分の土壌の規模は径約125cmで、平面形はほぼ円形を呈している。

埋土は細かくは12層に分層してきたが、大きくは上層(1・2層)、中層(3~5層)、下層(6~10層)、最下層(11・12層)の4層に分けられ、堆積状態、礫層が中層に含まれていることなどから、土壌は自然堆積によって埋没したものと思われる。

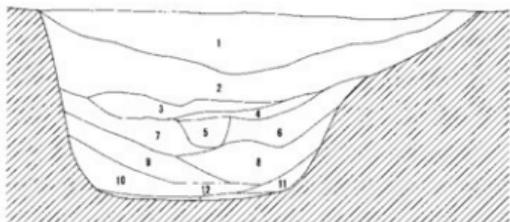
土壌の性格については不明であるが、最下層に砂の堆積が認められることから、水に関する遺構と考えられる。

溝NSD-6 (第5図)

巾約50cm、深さ約25cmで、断



1.5m



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色シルト | 8. 黒灰褐色シルト |
| 2. 黒褐色シルト (5cm大の礫含む) | 9. 黒灰褐色シルト |
| 3. 黄褐色砂礫 | 10. 黒灰色シルト (粗砂含む) |
| 4. 黒褐色シルト | 11. 灰褐色粗砂 |
| 5. 黄褐色礫 | 12. 灰色砂 (シルト含む) |
| 6. 黒褐色シルト | |
| 7. 黒灰褐色シルト (黄褐色礫含む) | |

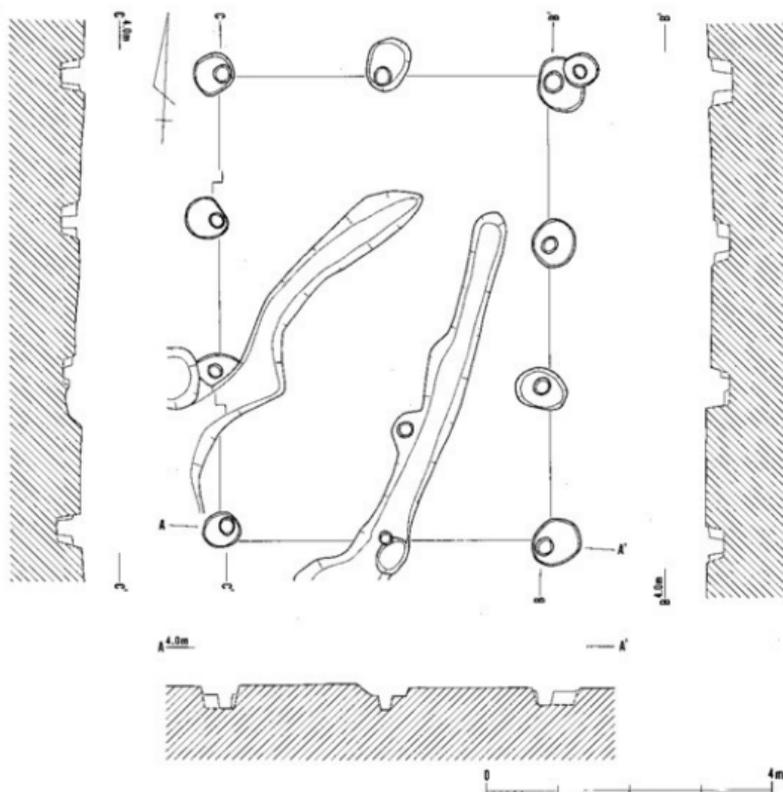


第10図 土壌NSK-1

面形状が逆梯形を呈する細い溝である。ほぼ南西-北東方向に伸びる溝であるが、南端は溝NSD-2に、北端は現在の溝に切られている。埋土は黒褐色シルト一層であった。

溝NSD-7 (第5図)

巾約40cm、深さ約20cmで、断面形状が箱形を呈する細い溝である。ほぼ南北走行し、北端は現在の溝に切られている。南端は調査区外に伸びているが、南地区で検出された溝の中には、この溝の延長と思われるものは見当たらない。埋土は黒褐色シルト一層であった。



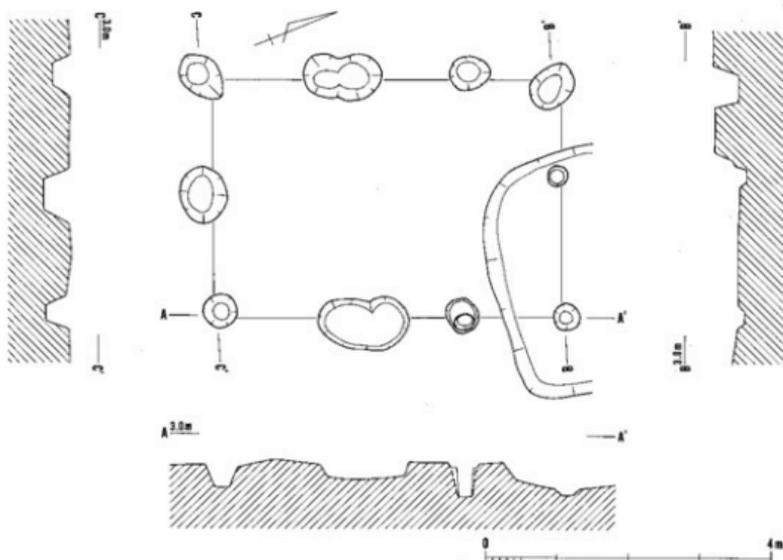
第11図 建物址NSB-1

溝NSD-9(第5図)

巾約120cm、深さ約70cmで、断面形状は箱形を呈する部分と逆梯形になる部分がある。溝NSD-1から分岐するようにして始まり、はじめはほぼ南北走行するが、中央付近から西に折れて、北西に走行し、北端は溝NSD-12に切られている。埋土は黒褐色シルト一層であった。

溝NSD-12(第5図)

巾約170cm、深さ約60cmで、断面形状が逆梯形を呈する溝である。ほぼ南東-北西方向の溝で、東端は現在の水路に切れ、西端は調査区外に向かって伸びている。埋土は黒褐色シルト一層であった。



第12図 建物址NSB-5

溝NSD-14(第5図)

巾約145cm、深さ約50cmで、断面形が箱形を呈する溝である。ほぼ南北走行し、南端は溝NSD-1に切れ、北端は調査区外に向かって伸びている。埋土は暗灰褐色シルト層であった。

2. 古墳時代～奈良時代の遺構

建物址NSB-1(第11図 図版第5)

竪穴住居址NSH-1の南側で検出された桁行3間(約6.6m)、梁行2間(約4.6m)の側柱建物で、棟方位を $N2^{\circ}W$ とする。桁行側の柱間は多少ばらつきが認められ、南から220cm・200cm・240cmとなっており、中央の柱間が短くなっている。梁行は230cmの等間である。柱穴は径約50~80cmの円形で、深さ約20~30cm遺存し、柱穴内には径約18~22cmの柱痕跡が確認された。

柱穴内から出土した遺物は僅かであるが、杯Bが出土している。またこの建物址の東側の溝NSD-1内からは多量の製塩土器が出土しており、関連する可能性もある。

建物址NSB-5 (第12図 図版第5)

溝群の東側、灰褐色シルト上で検出された桁行3間(約4.8m)、梁行2間(約3.4m)の側柱建物で、棟方位をN22°Eとする。柱穴は東桁行の北から2本目を除いては極めて不整形で、柱痕跡も検出できなかったことから、柱の抜き取りが行われたものと思われる。したがって柱間もはっきりしないが、桁行間が南から200cm・140cm・140cm、梁行間が西から140cm・200cm前後である。柱穴内からの出土遺物は無く、時期的には不明であるが、平安時代から鎌倉時代の遺構面下で検出されたことから、この時期の遺構として扱った。

またこの建物址の両桁行を南に約120cm延長した位置に柱穴が2個存在しており、この建物址に伴う可能性もある。

溝NSD-1 (第5・13図 図版第6)

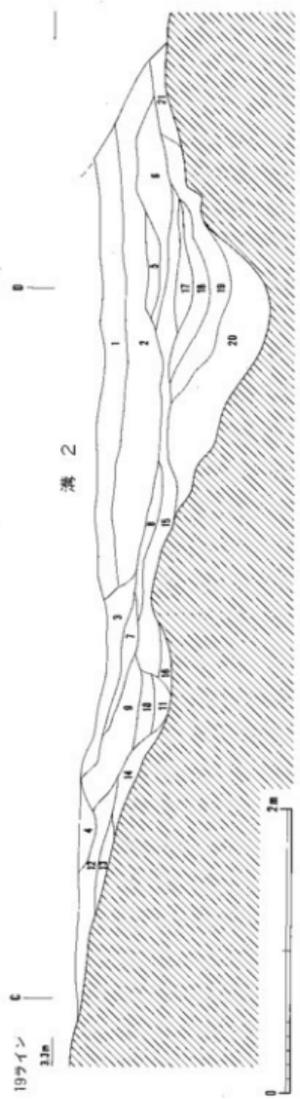
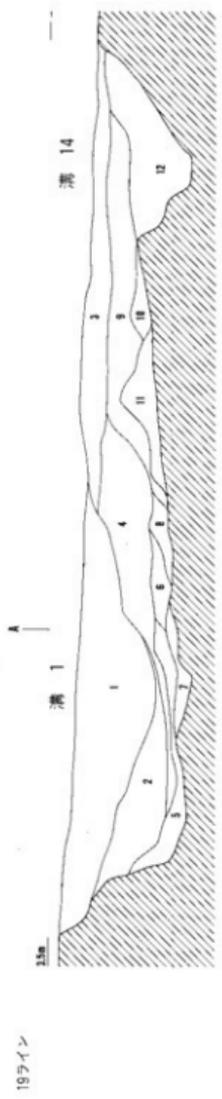
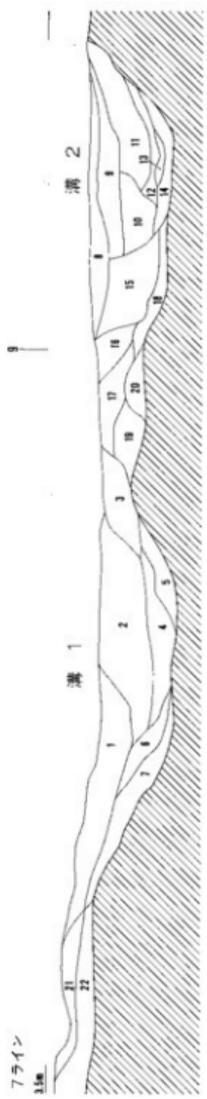
台地が沖積地に潜り込んで行く境付近を、わずかに蛇行しながらも、ほぼ溝NSD-2に並行して南北走行する、巾約2.5m～3m、深さは約0.5m～0.8mの溝で、基本的には黄褐色シルトを切り込んだ溝である。南・北端は調査区外に伸びていたが、南端は南地区東隅の落ち込みが続く可能性が高い。

埋土は一様ではなく、特に溝NSD-8・9を切った付近を境に、その北側と南側では大きく異なっていた。南側の堆積土は下層が暗灰茶褐色・灰白色のシルト(7ライン第6・7層)であり、中層が濃青灰色・灰褐色のシルトと灰褐色の砂礫(7ライン第2～5層)、上層が黒褐色のシルト(7ライン第1層)であった。それに対し、北側では下層に灰褐色砂礫・暗灰褐色シルト(19ライン第7・8層)、中層に4層の暗灰褐色シルトと黒灰褐色シルト(19ライン第3～6層)、上層は黒褐色シルト・暗褐色シルト(19ライン第1・2層)が堆積していた。上層には多量の製塩土器とともに、焼土・炭化物が含まれていた。また、中層の黒灰褐色シルトがほぼ水平に堆積していることから見て、中層が堆積段階に溝はほぼ埋没に近い状態になったことが窺え、その後再度掘削された可能性が考えられる。

出土遺物は弥生時代後期から奈良時代までの須恵器・土師器・製塩土器・硯・石器・鉄器があるが、弥生土器の多くは溝中央付近の14～17区下層からの出土であり、溝NSD-9に伴うものである可能性が高い。

また古墳時代以降の遺物の内、6世紀段階の遺物は17区付近の狭い範囲の、下層上・中層下から出土している。

7世紀以降の遺物は溝全体から出土し、溝の南半(溝NSD-8を切った部分より南側)では上層・中層から、北半(溝NSD-8を切った部分より北側)では上層から出土している。しかし南半と北半では出土遺物の量に大きな開きがあり、北半からの出土が圧倒的に多い。また時期的にも多少違いが見られ、南半から出土した遺物はほぼ6世紀から8世紀初頭までのものであるのに対し、北半では9世紀に入るようなものが認められる。こうした出土遺物の違い



第13図 溝NSD-1・2土層断面図

溝NSD-1・2土層名

溝NSD-1・2 (7ライン断面)

| | | | |
|----|----------------------|----|-------------------|
| 1 | 黒褐色シルト (細砂～3cm大の礫含) | 12 | 暗灰褐色シルト (中砂多量に含む) |
| 2 | 灰褐色砂礫 (シルト～粗砂含む) | 13 | 灰褐色砂礫 (シルト～粗砂含む) |
| 3 | 灰褐色シルト (粗砂多く含む) | 14 | 暗灰褐色砂質シルト |
| 4 | 灰褐色砂礫 (シルト～粗砂含む) | 15 | 灰褐色砂質シルト |
| 5 | 濃青灰色シルト | 16 | 灰褐色砂質シルト |
| 6 | 暗灰茶褐色シルト (3cm大までの礫含) | 17 | 灰褐色シルト |
| 7 | 灰白色シルト | 18 | 青灰色砂質シルト |
| 8 | 灰褐色砂質シルト | 19 | 灰褐色シルト |
| 9 | 灰褐色砂質シルト | 20 | 黒灰褐色シルト |
| 10 | 灰色砂質シルト | 21 | 暗灰褐色シルト |
| 11 | 青灰色シルト (粗砂含む) | 22 | 灰褐色シルト |

溝NSD-1 (19ライン断面)

| | | | |
|---|---------------------|----|------------------|
| 1 | 暗褐色シルト (細砂～3cm大の礫含) | 7 | 灰褐色砂礫 (5cm大までの礫) |
| 2 | 黒褐色シルト (細砂～3cm大の礫含) | 8 | 暗灰褐色シルト |
| 3 | 黒灰褐色シルト (細砂～5cm大の礫) | 9 | 暗灰褐色シルト |
| 4 | 暗灰褐色シルト (砂質) | 10 | 黒灰褐色シルト |
| 5 | 暗灰褐色シルト | 11 | 濃灰褐色シルト |
| 6 | 暗灰褐色シルト (3cm大の礫含) | 12 | 暗灰褐色シルト |

溝NSD-2 (19ライン断面)

| | | | |
|----|----------------------|----|------------------|
| 1 | 淡灰褐色シルト (細砂～3cm大の礫含) | 12 | 黒褐色シルト |
| 2 | 暗灰褐色シルト | 13 | 暗灰褐色シルト |
| 3 | 灰褐色シルト (粗砂含む) | 14 | 暗黄褐色シルト |
| 4 | 黒灰褐色シルト | 15 | 黒褐色シルト |
| 5 | 明灰褐色シルト | 16 | 濃灰褐色シルト |
| 6 | 暗灰褐色シルト (粗砂含む) | 17 | 黄褐色砂礫 (3cm大の風化礫) |
| 7 | 灰褐色砂礫 (シルト含む) | 18 | 黒褐色シルト |
| 8 | 灰褐色砂質シルト | 19 | 濃灰褐色シルト |
| 9 | 暗灰茶褐色砂質シルト | 20 | 濃青灰褐色シルト |
| 10 | 濃灰褐色シルト (黄・黒褐色シルト含) | 21 | 濃灰褐色シルト |
| 11 | 黒灰褐色シルト | | |

から溝は南半の埋没が早く、北半の埋没がやや遅れたことが推測される。

溝NSD-2 (第5・13図)

台地が沖積地に潜り込んで行く境付近を、ほぼ溝NSD-1に並行して南北走行し、調査区の中央付近で一段深くなって途切れる溝である。途中で2本に分かれ、また合流するなど流路は一定せず、巾・深さ・断面形状とも一様でないが、巾は約1.8m～3m、深さは約0.5m～0.7mを測る。7・11ラインに設けた断面の観察では掘り直し、溝さらえ等の2回以上の人為的な行為の痕跡(第13図7ラインの第15層等)が見られ、15・19ラインの断面観察でも1回前後行われた可能性がある(例19ライン第14～16層からなる溝)。また19ラインの断面観察では流路が東に移動したことが窺える。

埋土は断面位置によって異なるが、最も上流側の7ラインでは埋没段階の溝(第9～14層が堆積した溝)の最下層にシルトが堆積し(第14層)、下層に礫層が(第13層)、中層に比較的砂の多い層が(第10～12層)、上層にはシルト(第9層)が堆積していた。

出土遺物には弥生時代後期から奈良時代までの遺物が出土しているが、9ライン付近の溝底から比較的まとまって弥生土器が出土しており、7ラインの第16～18層、19ラインの第14～20層が堆積するまでの溝は弥生時代後期段階と考えられる。古墳時代以降の遺物は7ラインの第8～15層、19ラインの第1～13層から出土している。

溝NSD-3 (第5図)

調査区南端中央付近で検出された巾約1.2m、深さ約0.5mの溝で、断面形は逆台形を呈する。北端は溝NSD-1に切られて、南端は調査区外に伸びるが、南地区ではこれに接続するような溝は検出されていない。溝底に薄く砂層が認められたものの、埋土は暗灰茶褐色シルト一層であった。内部から弥生土器片(144～146)が多く出土したが、それに混じって古墳時代の土師器(148・149)も出土している。

溝NSD-8 (第5図)

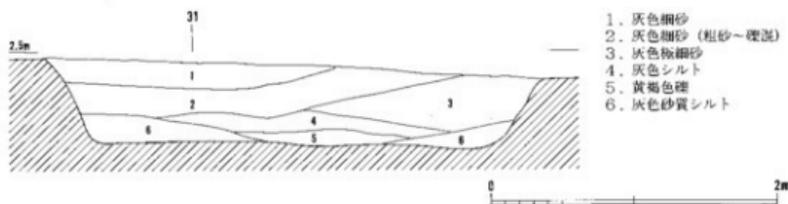
内約2m、深さ約0.7mで、黄褐色シルトを掘り込んだ、ほぼ東西走行の溝で、溝NSD-11に近い方向性を持つ。東端は溝NSD-2に合流する様な形で終わり、西端は平面形がU字状に終わる溝である。西端ではV字形に近い断面形を呈するが、東に流下するにしたがって徐々に底巾が広がり、断面形はU字形となる。

埋土は7～8層に分層できたが、大きく下層の砂礫層、中層の黒灰褐色シルト層、上層の黒褐色シルト層にまとめられる。

中層から須恵器(390)が出土している。

溝NSD-11 (第5・14図)

巾約3.5m、深さ約0.6mで、断面形状が逆梯形を呈する、ほぼ東西方向の溝である。沖積地に掘り込まれているため一様ではないが、基本的には切り込み面は暗灰褐色シルト上面である。



第14図 溝NSD-11 土層断面図

底面は黒褐色シルトまで達している。

埋土は6層に分層でき、最も下層の灰褐色砂質シルト(第6層)から古墳時代の須恵器(391~401)が出土している。

溝NSD-18(第5図)

調査区南西隅で検出された巾約2.2m以上、深さ約0.6mの溝で、西側は調査区外となって検出できなかった。また溝の北端は調査区西外に伸び、南端は南に伸び、南地区の溝SSD-1に連続すると思われる。埋土は上層から黒褐色シルト・黄褐色砂礫・暗灰茶褐色シルトであった。

3. 平安時代～鎌倉時代の遺構

建物址NSB-2(第15図 図版第8)

調査区の南西隅付近で、建物址NSB-3と並行して検出された、棟方位を $N75^{\circ}W$ とする、桁行3間(約8.4m)、梁行2間(約4.4m)の総柱建物址である。柱穴は径20~30cmの円形で、柱穴内には径15cm~20cmの柱痕跡が確認された。

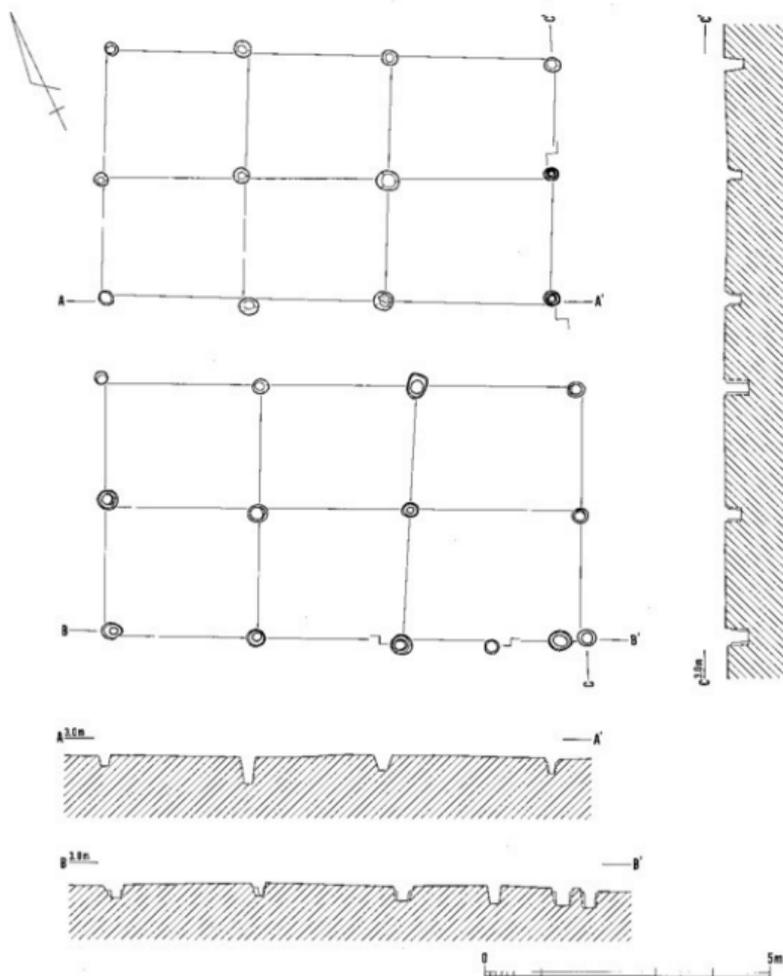
柱間は北桁行側が西から約270cm・270cm・290cmであったが、南桁行側は250cm・250cm・330cmとなっており、南桁行の東端の柱間が広く取られていた。その柱間には中央と隅柱に隣接する位置から2本の柱穴が検出されており、この建物址に伴う入口等の施設があったものと思われる。梁行側の柱間は約220cmの等間となっている。

柱穴内からは土師器(433~435)が出土している。

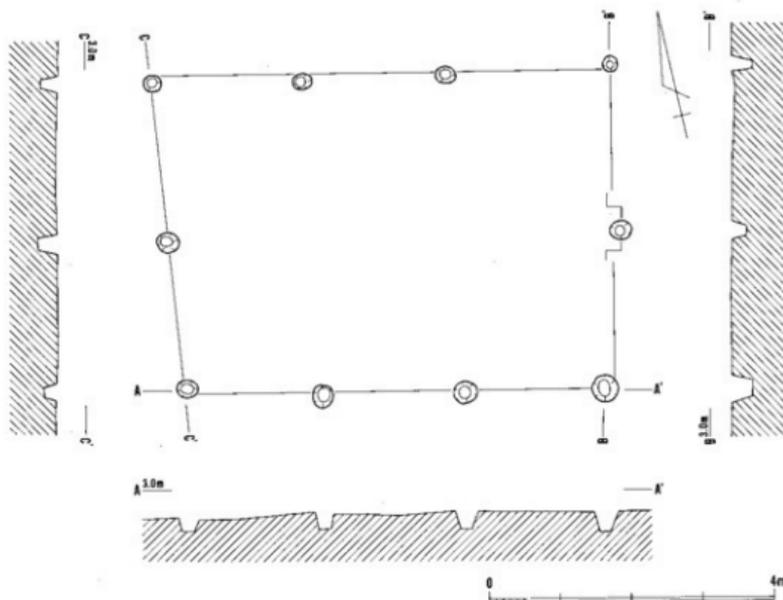
建物址NSB-3(第15図 図版第8)

調査区の南西隅付近で、建物址NSB-2の北側に並行して検出された、棟方位を $N75^{\circ}W$ とする、桁行3間(約7.9m)、梁行2間(約4.3m)の総柱建物址である。東妻側は僅かに北にずれているが、西妻側はNSB-2とほぼ揃っている。柱穴は径20~30cmの円形で、一部の柱穴内には径15~20cmの柱痕跡が確認された。

柱間は北桁行側が西から約250cm・250cm・290cmであり、南桁行側は250cm・250cm・290cmとなっている。西妻側の柱間は北から220cm・200cm、東妻側が北から200cm・220cmとなっている。



第15图 建物址NSB-2・3



第16図 建物址NSB-4

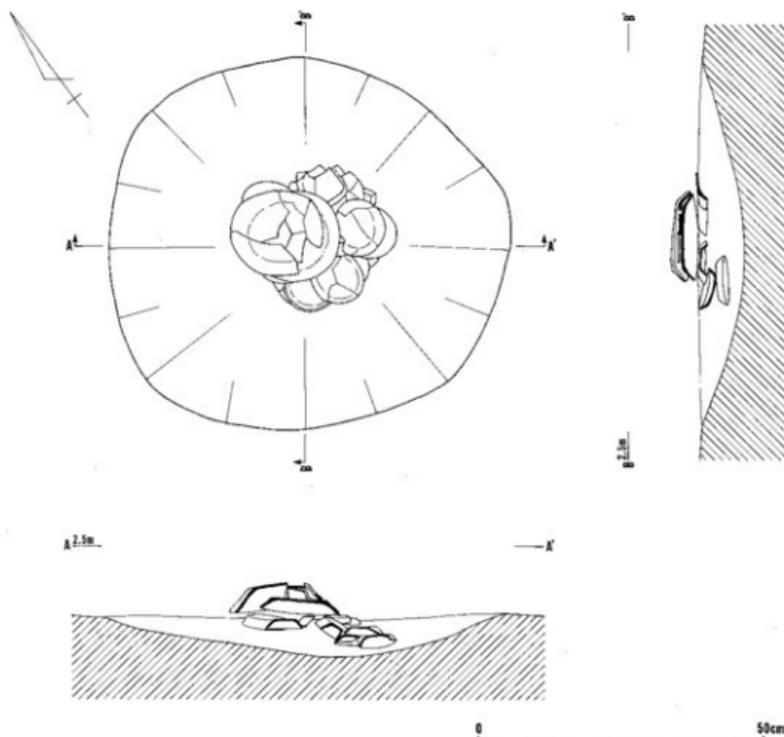
南桁行側の東から2本目の柱穴内から436の土師器甕が出土している。

建物址NSB-4 (第16図 図版第8)

棟方位を $N78^{\circ}W$ とする、桁行3間、梁行2間の側柱建物址である。桁行は北桁行長が約8.0m、南桁行長が約7.5m、梁行は約5.7mで、建物址の平面形は歪なものになっている。柱間は北桁行側が西から約260cm・260cm・280cmであったが、南桁行側は240cm・240cm・270cmとなっている。妻側の柱間は約285cmで等間となっている。柱穴は径25~40cmの円形で、深さは約20~30cmである。

柱穴内からの遺物の出土は無かったが、建物址内の西1間の中央付近には土師器の小片が集中している部分があり、念入りに精査をしたが廻り方等は確認できなかった。これらの集中した土器片はこの建物址に伴う可能性がある。

また建物址の南東隅で、建物址に並行する溝(NSD-16)が検出され、建物址内からその溝に接続する細い溝が検出されている。溝NSD-16はこの建物址に伴う可能性がある。またこの建物址と溝NSD-16はともに溝NSD-15に並行・直行している。



第17図 土壌NSK-3

土壌NSK-3 (第17図 図版第9)

調査区の北東隅付近で、検出された土壌で、埋土が検出面と極似していたため、明確に掘り方を検出することはできなかった。径約65~70cmのやや歪な円形の平面プランで、断面形が浅い皿状を呈する土壌である。深さは約8cmであったが、内部に埋納された土器が検出面の5cm上から確認されており、土壌本来の深さは13cm以上あったものと思われる。

内部の埋土は暗灰褐色シルト層であり、土壌の中央には土師器の皿類が、小皿14枚以上を下に、その上に皿3枚が重ねられて埋納されていた。小皿類は正位置のものは僅か1個体で、残りの13個体は逆転していた。その上に被せられた皿類は3個体とも逆転位であった。

溝NSD-4 (第5図)

調査区の南端中央付近から溝NSD-1・2・5に並行して北に伸びる溝であるが、NSD-

6を切った付近から北側では検出できなくなった溝である。巾約1m、深さ約0.3mで、埋土は灰褐色シルト一層であった。内部から土師器小皿・杯(453)、瓦器椀(454)が出土している。

溝NSD-5(第5図)

調査区の南端付近から溝NSD-1・2・4に並行して北に伸びる溝であるが、11ライン付近で下層の礫が高くなり、溝は検出できなかった。巾約1.7m、深さ約0.3mを測り、溝底には灰褐色の砂層が堆積し、その上に灰褐色シルトが堆積していた。内部からは土師器小皿(452)・瓦器椀(456)・須恵器甕底部(457)・白磁碗(458)が出土している。

溝NSD-10(第5図)

調査区の中央、B-16・17区で検出された巾約30cm、深さ約10cmの溝で、近世の墓塚に切られた状態で検出されている。埋土は灰褐色砂層で、土師器小皿が出土している。

溝NSD-15(第5図)

調査区北半の東端付近で検出された溝で、D-20区付近からF-22区までは、ほぼ東西に検出され、そこから北に向きを変え、溝NSD-11を切って、ほぼ直線的に伸びる溝である。巾約100cm、深さ約45cmを測り、溝底には薄く灰褐色砂層が堆積していたが、その上は灰褐色シルト層であった。内部より土師器小皿(450・451)が出土している。

溝NSD-16(第5図)

調査区中央の東端付近で、建物址NSB-4、溝NSD-15とほぼ並行して検出された溝である。巾約25cm、深さ約10cmで埋土は灰褐色シルト一層であった。内部より黒色土器椀(455)が出土している。

第3節 遺物

1. 概要

遺跡全体から出土した遺物には土器、土製品、石器、金属製品、玉類があるが、土器が最も多く、コンテナ数にして約300箱が出土している。また出土した土器は弥生時代～鎌倉時代までの長期に及ぶものである。

北地区から出土した遺物も土器が最も多く、特に居住址NSH-1、溝NSD-1からの出土量が多く、2者で地区全体から出土した土器の半数を越えている。ただ居住址NSH-1出土の土器を除けば、多くは溝内からの出土であり、遺構内から出土したものは少ない。こうした点から出土した遺物の内、土器については実測が可能な全ての遺物について実測は行っておらず、また紙数の都合上、実測した全ての土器を掲載したものでないことを予め断っておく。

なお土器については弥生時代から須恵器出現以前の段階を弥生時代～古墳時代前期とし、須恵器出現直後から須恵器杯Bの消滅する以前の段階を古墳時代後期～平安時代前半、瓦器を伴う段階を平安時代後半～鎌倉時代として記述していく。

2. 土器

A. 弥生時代～古墳時代前期の土器

a. 分類

器種構成は壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器・器台形土器からなり、この他に小型丸底壺、ミニチュア土器が加わる。

(1) 壺形土器

広口壺・二重口縁壺・長頸壺・細頸壺・直口壺・小型丸底壺等からなり、それぞれ口縁部の形態等から細分される。

壺A いわゆる広口壺の内、口縁部が頸部から外反して開くもので、畿内地方ではほぼ弥生時代の全期間を通じて見られるものである。口縁部の形態によって細分する。

- A1 口縁端部が僅かに肥厚し、面をもつもの。
- A2 口縁端部が下方に拡張され、巾広い面をもつもの。端部を加飾したものが多い。
- A3 口縁端部が僅かに内彎し、端部を下方に拡張したもの。端部を加飾したものが多い。
- A4 口縁端部を上下に拡張したもので、外観的には壺A₃と大差はないが、端部の上下拡張は粘土を貼りつけて行っている。

壺B 広口壺の範疇に含まれるものであるが、頸部から屈曲して口縁部が横上方に伸びるもの

で、四国系の土器と考えられるものである。口縁部の形態から以下の3種に分類できる。

- B₁ 口縁端部が僅かに肥厚し、面をもつもの。
- B₂ 口縁端部が上方につまみ上げられて、拡張した面をもつもの。
- B₃ 口縁端部が上下に拡張され、面をもつもの。

壺C 短い頸部から口縁部が直線的に開くもので、出土点数は少ない。口縁端部を僅かに下方に拡張したものと、上下に拡張したものが見られる。

壺D いわゆる長頸壺で、口頸部の長さが体部長をうわまわる点で、壺Fとは区別した。出土点数は多くないが、口縁部の形態から4種に細分できる。

- D₁ 口縁部は頸部から外反して開き、端部に面をもつもの。
- D₂ 口縁部は頸部から外反して開き、端部は下方に拡張され、面をもつもの。
- D₃ 口縁部は頸部から外反して開き、端部が僅かに内彎して、端部上端には僅かに内傾した面をもつもの。口縁部外面は擬凹線文が施される。
- D₄ 頸部は外上方に直線的に伸び、口縁部が内彎するもので、口縁部上端には僅かに内傾した面をもつもの。口縁部外面は擬凹線文等に加飾される。

壺E いわゆる細頸壺で、2個体のみの出土である。細く伸びた頸部から口縁部が外上方に開き、口縁部は僅かに内彎気味となる。口縁部外面と体部の中位付近に擬凹線文が施される。

壺F 太い頸部から単純に口頸部が開くもので、便宜上、短頸壺もこの類に含めた。口頸部長が体部長を越えない点で、壺Dとは区別でき、口縁部の形態から2種に細分できる。

- F₁ 口縁部が外皮して開き、端部は丸く納められたもの。
- F₂ 外上方に開く口縁部が僅かに内彎するもので、口縁端部を丸く納めるものと、僅かに内傾する面をもつものがある。口縁部外面には擬凹線文が施され、頸部と体部の境に凸帯が施されたものも見られる。法量に大小の3種がある。

壺G いわゆる二重口縁壺であるが、口縁部片のみが出土している。口縁部の形態によって細分できる。

- G₁ 頸部から横上方に開いた後、斜め上方に開く口縁部をもつもので、口縁部外面を擬凹線文、波状文、円形浮文で加飾する。
- G₂ 頸部から外上方に開いた後、屈曲して、外上方に開く口縁部をもつもの。口縁部外面は擬凹線文等で加飾される。
- G₃ 頸部から屈折して横上方に開いた後、ほぼ直立する口縁部をもつものである。口縁部外面は擬凹線文で加飾される。

(2) 甕形土器

量的には壺形土器とほぼ同量の出土であるが、器形的にも、成形・調整手法的にもバラエティに富み、地域性も看取することができる。ここでは体部・口縁部等の形態的な特徴とともに技

法的な特徴も考慮して分類した。

變A 体部の中位付近が強く張り、肩部が直線的に下がる器形で、底部は突出し、上底状になるもの。体部の外面を叩き後刷毛、内面をナデ調整するものである。口縁部の形態によって細分される。

- A1 口縁端部が単純に納まるもので、端部に小さな面をもつもの。
- A2 口縁端部が上下に拡張され、面をもつもので、そこに擬凹線文を施すものと、施さないものが見られる。
- A3 口縁端部を上方に拡張したもので、拡張した面が内傾するものと直立するものがあり、また面に擬凹線文を施すものと、施さないものが見られ、さらに細分することも可能である。体部外面を刷毛調整し、肩部内面に指押さえ痕を残すことからみて、四国系の土器と思われる。
- A4 口縁端部が下方に拡張され、外傾する面をもつもので、そこに施文されたもの。

變B 体部の中位やや上が張った器形で、口縁部の形態によって細分できる。

- B1 口縁部が横上方に伸び、端部が面をもつもの。
- B2 口縁部が外反し、端部を下方に拡張したもの。
- B3 口縁部が外反し、端部を上下に拡張したもの。
- B4 口縁部が外反し、端部を丸く納めたもの。

變C 中位付近が張った球形に近い体部をもつもので、口縁部は中程が肥厚し、端部に面をもつものである。体部外面を叩き後刷毛、内面を篋削りするもので、内面の篋削りが頸部にまで達するものと、頸部下で止まり、頸部を指押さえするものが見られる。口縁部内面を刷毛調整する特徴が見られ、四国系の土器と考えられる。色調から他の変類との区別は容易であり、口縁部の形態によって細分できる。

- C1 端部が厚くなり、面をもつもの。
- C2 端部を下方に拡張したもの。
- C3 端部を上下に拡張したもの。

變D 体部の中位よりやや上が強く張り、内彎する口縁部をもつものである。体部外面に叩き目を残したままのものと、叩き後刷毛調整を加えたものがある。口縁端部の形態から2種に細分した。

- D1 口縁端部が単純に面をもつもの。
- D2 口縁端部が上下に拡張されたもの。

變E 最大径が口縁部にあるもので、体部外面に叩き目を残すものがみられる (55)。

(3) 高杯形土器

出土量は少ないが、2種に分類できる。

高杯A 杯部から屈曲して口縁部が伸びるもので、杯部の形態によって細分できる。

A₁ 杯部が直線的に伸びるもの。

A₂ 杯部が内彎気味となるもの。

高杯B 杯部が単純に内彎するもので、口縁部と杯部の境は不明瞭である。

(4) 鉢形土器

出土量が少ない上、個体差が著しいが、ここでは口縁部と体部の特徴から3種に分類した。

鉢A 体部から屈曲して口縁部が開く器形で、2種に細分できる。

A₁ 体部から単純に口縁部が開くもの。

A₂ 屈曲する口縁部をもつもの。

鉢B 体部が伸びてそのまま口縁部となる器形で、体部と口縁部の区分は不明瞭である。

B₁ 体部が直線的に伸びるもの。

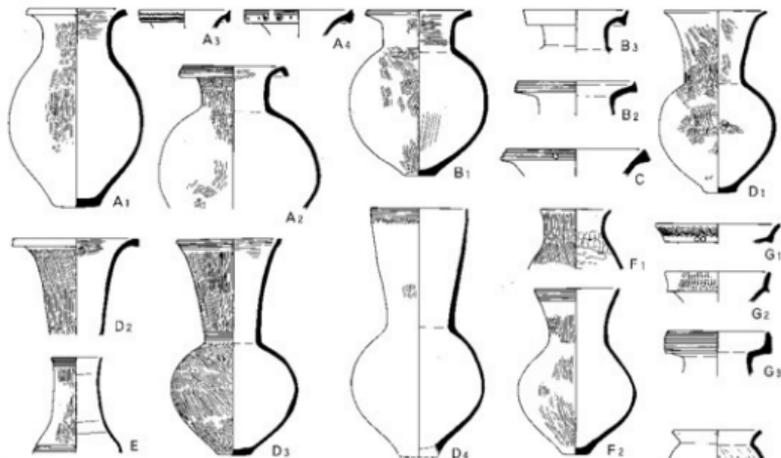
B₂ 体部が内彎するもの。

鉢C 体部外面に把手が着くもので、口縁部は体部から外反して開く。

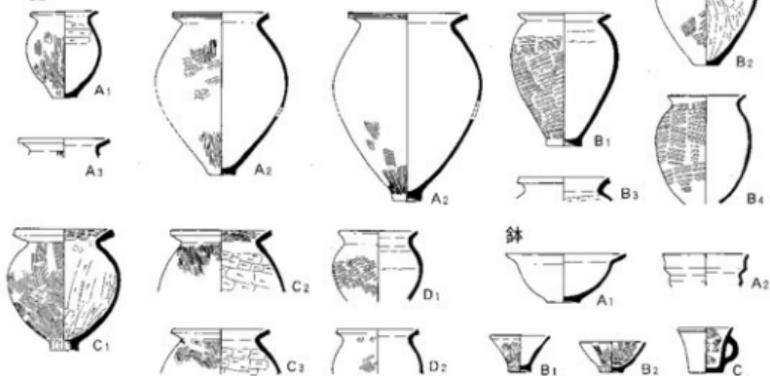
(5) 器台形土器

出土点数も少なく、しかも口縁部のみ出土であったため、分類することはさけたが、口縁端部を上下に拡張したものと、口縁端部を下方に拡張したものがあり、ともに端面に擬凹線文等の文様を施している。

壺



甕



高杯

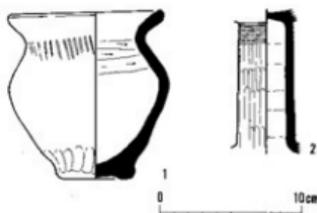


弥生土器分類表

b. 出土遺物

竪穴住居址NSH-1出土土器 (第18図 図版第20)

中央土壌より出土した2点を図示し得た。(1)は小型の甕A₁で、口縁部は体部から「く」の字状に外反し、端部は丸く納められている。体部外面には粗い刷毛後に板状工具によるナデが施され、内面は下半がナデ、上半が篋削りである。(2)は高杯脚柱部で、下端部は屈曲して外方に開く。外面は篋磨きされ、上端に沈線が施されている。内面に粘土紐の接合痕が認められる。



第18図 竪穴住居址NSH-1 出土土器

竪穴住居址NSH-1上層出土土器 (第19~25図 図版第17~21)

住居址の埋没過程に投棄された土器類で、壺・甕・高杯・鉢があり、器台は見当たらない。(3~10)は壺Aで、(3~9)は壺A₂に分類される。(3・5~9)の下方への拡張は端部下に粘土を貼りつけて行われ、(4)は下方に折り曲げられて拡張されている。(7~9)は頸部から屈曲気味に口縁部が開き、(3・6・7・9)の口縁端部内面はヨコナデによって窪み、僅かに内彎している。全て口頸部は内外面とも刷毛後に篋磨きされる。(5)の体部は中位が強く張り、叩き整形後に刷毛調整され、さらに篋磨きが施される。(4・8・9)の口縁部外面は無文であるが、(3)は擬凹線文と鋸歯文で、(5)は擬凹線文で、(6)は擬凹線文と竹管円形浮文で、(7)は擬凹線文と波状文が施されている。(10)は壺A₁で口縁端部は僅かに肥厚し、体部外面から頸部内面まで、刷毛後に篋磨きされる。

(11~12)は壺Bで、ともに口縁端部が肥厚したB₁に分類される。ともに口縁部の外面に擬凹線文が施されている。(11)は外面と体部内面が刷毛調整、肩部の内面には指押しえ痕が残る。(12)は体部外面から頸部内面まで、刷毛調整後に篋磨きされる。

(13~17)は壺Dで、(13)はD₂、(14)はD₃、(15~16)はD₁、(17)はD₄である。口頸部はいずれも刷毛調整後に篋磨きされ、(14~16)の体部も刷毛後に篋磨きされている。(14~17)の口縁部外面には擬凹線文が施され、(14)は頸部下端にも擬凹線文が施されている。また(14)の口縁部と体部の境、(17)の口縁部には篋状工具による列点文が施されている。

(22)は壺Eで、体部と頸部の境は不明瞭である。口縁部は僅かに内彎し、端部には小さな面をもつ。口縁部外面と体部の中位付近に擬凹線文が施されている。外面は刷毛後篋磨きである。内面には粘土紐の巻き上げ痕を残す。

(18~21・23・24)は壺Fで、(18~21・24)はF₂である。(18~20)は体部が強く張り、口縁端部に内傾した小さな面をもつ。口縁部外面には擬凹線文を施している。(18)は小型で口径約14.6cm・器高約29.0cmである。外面から口頸部内面まで刷毛後篋磨きする。(19~20)は同形同大とっていいほど、器形・量目が類似し、(19)が口径約21.4cm・器高41.4cm、(20)が口径

約20.4cm・器高約43.0cmである。外面は刷毛後磨き、口頸部内面は刷毛調整である。(21)は端部が丸く納められ、外面には2条の擬凹線文が施されている。(24)は中位が強く張った扁平な体部をもち、頸部と体部の境に1条の凸帯を巡らす。口縁端部は僅かに内傾した小さな面を持ち、口縁部外面には擬凹線文を巡らしている。体部上半から口頸部の外面は刷毛後に磨ききしているが、体部下半は刷毛調整のみである。

(23)は壺F₁で口縁端部は丸く納められる。外面は刷毛後に磨き、体部内面は磨削りしている。肩部内面には指押さえ痕を残す。

(25~27)は壺の体部である。(25)は小型の壺体部で、外面を刷毛後磨きし、体部の中央を焼成後に穿孔している。(26)も小型の壺の体部で、外面は磨ききしている。(27)は体部の中位付近に叩き目を残す。

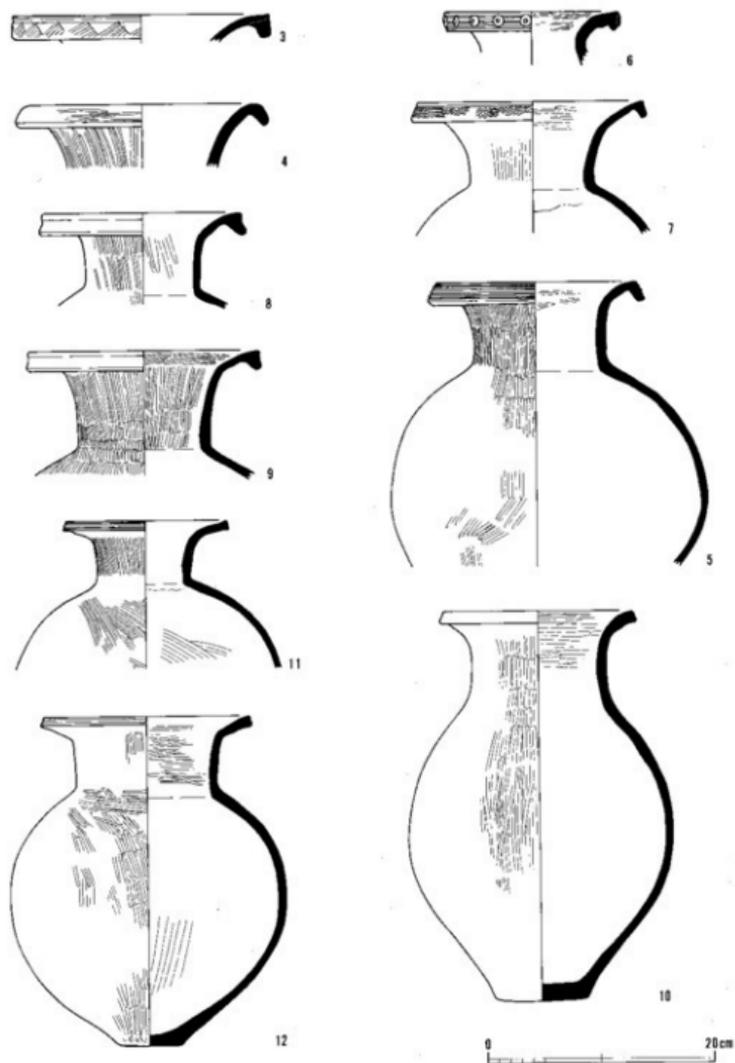
(28・49~53)は壺Cで、(28・50~53)はC₁である。いずれも体部内面の磨削りが顕著で、(52)は磨削りが頸部にまで達している。(28・50・51・53)は頸部下で磨削りが止まり、(28)の頸部内面には指押さえ痕が残っている。(28)は口径約16.6cm・器高約20.8cm。(49)はC₂で、口径16.8cm。

(29~31・34~36・38~43・60~62)は壺Aである。(34・35・38・40)は口縁端部が上下に拡張されたA₂で、(34・35・38)は端面に擬凹線文が施される。体部外面は刷毛調整で、(34)は整形時の叩き目が看取できる。内面の調整は不明なものが多いが、指頭圧痕を残すものがある。法量に大小があり、(34)は口径約16.6cm・器高約28.4cm、(35)は口径約20.6cm・器高約33cmである。(29~31・36・39)は壺A₁である。内面の調整は磨削りするものがほとんどであるが、(29)だけ刷毛調整をしている。(30)は外面に刷毛が残り、内面は磨削りである。口径約11.6cm・器高約15.1cm。(36)も外面刷毛、内面磨削りであり、口径約14.0cm。(31)は外面に刷毛が残る。口径約13.0cm・器高約22.2cm。(39)は口縁端部を上下に拡張している。外面には刷毛が残り、口径約15.6cmである。(60~62)はA₁で、(60)は外面に刷毛目、内面に磨削りが残る。全体に薄手の作りである。

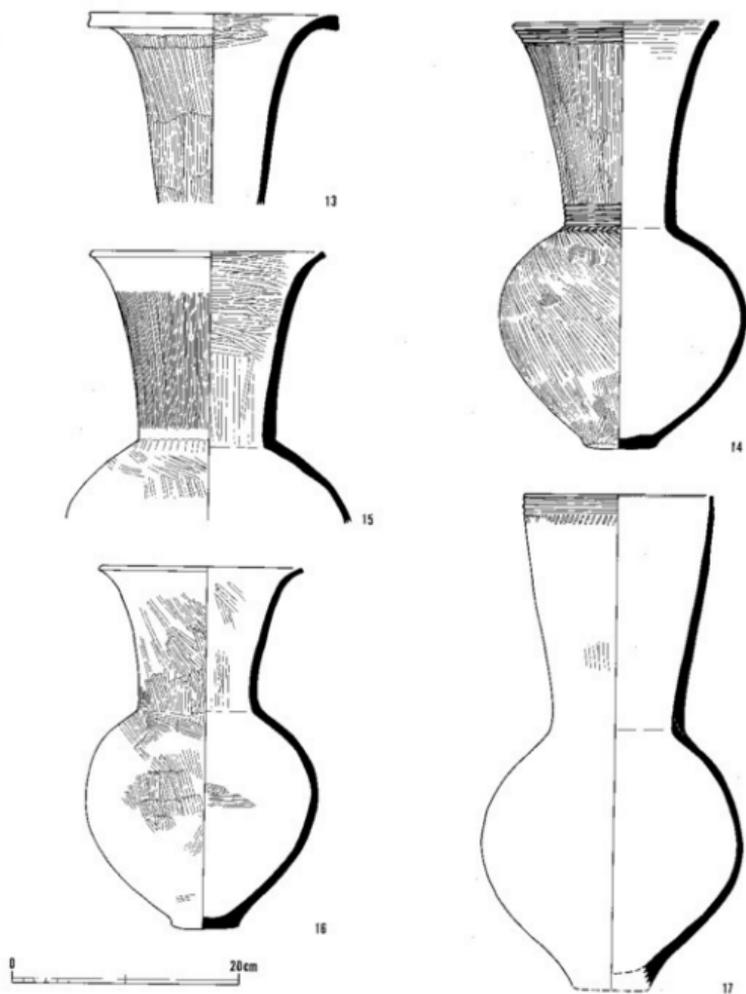
(32・33・44)は壺Bで、(32)は口縁部が屈曲して横上方に開き、端部に面を持つ壺B₁である。体部の外面には叩き目が残る。口径約15.4cm・器高約23.5cm。(33・44)は口縁部が斜め上方に外反して開き、端部が下方に拡張されたB₂である。外面には叩き目残り、(33)の内面は頸部まで磨削りされる。(33)は口径約15.2cm・器高約22.6cm、(44)は口径約16.4cmである。

(37~57~59)は壺Eで、(37)はE₂で体部外面は叩き後刷毛調整である。口径約14.0cm。(57・58)はE₁で、(58)は体部の外面に叩き目を残す。ともに口径約13.8cmである。(59)は壺になるかもしれない。口縁部が外反し、端部は丸く、外面は刷毛調整である。

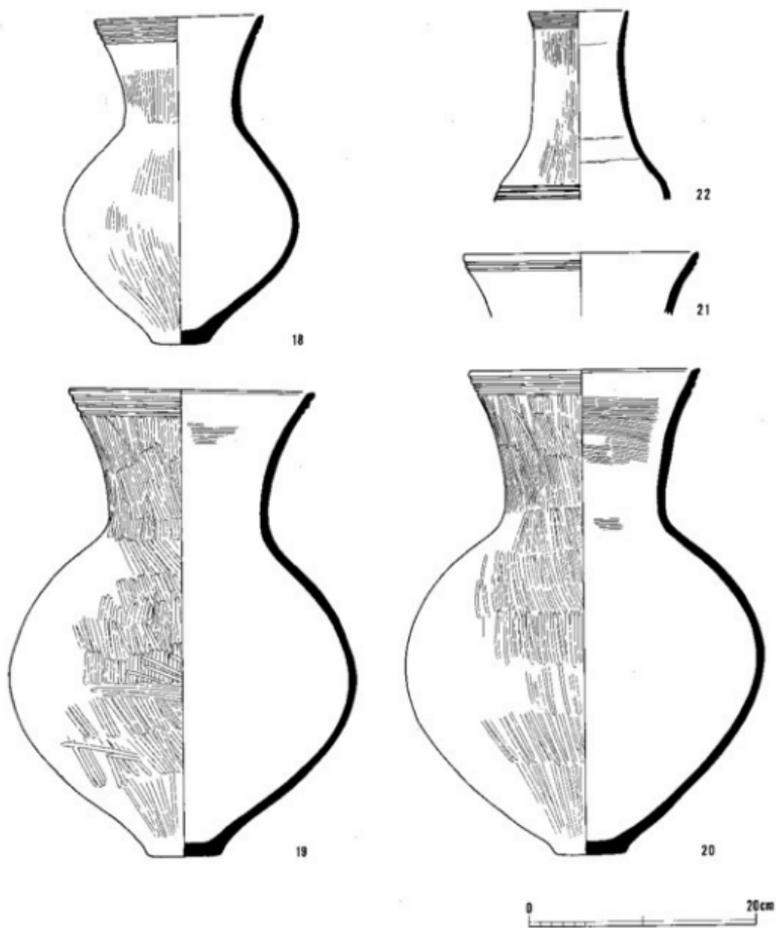
(55・56・73)は壺Fで、口縁端部には小さな面をもつ。(55)は外面に叩き目を残したまま、内面は刷毛調整する。口径約18.4cm。(73)は口径約17.9cm・器高約15.0cmである。



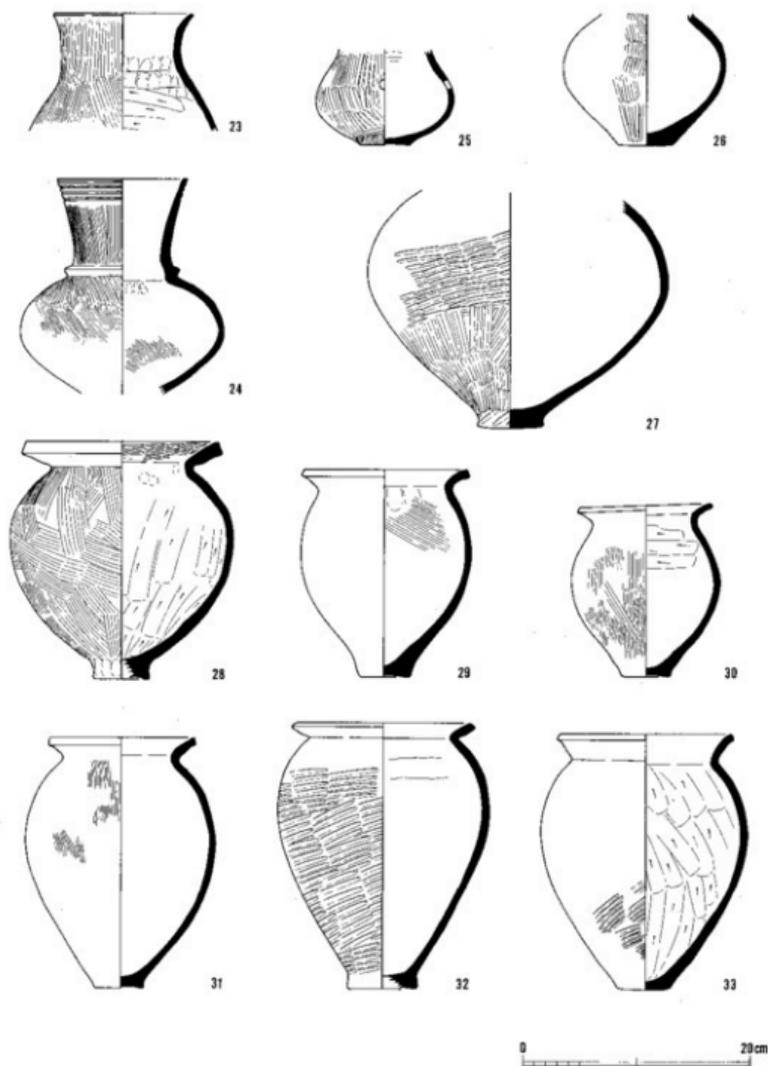
第19圖 豎穴住居址NSH-1上層出土土器(1)



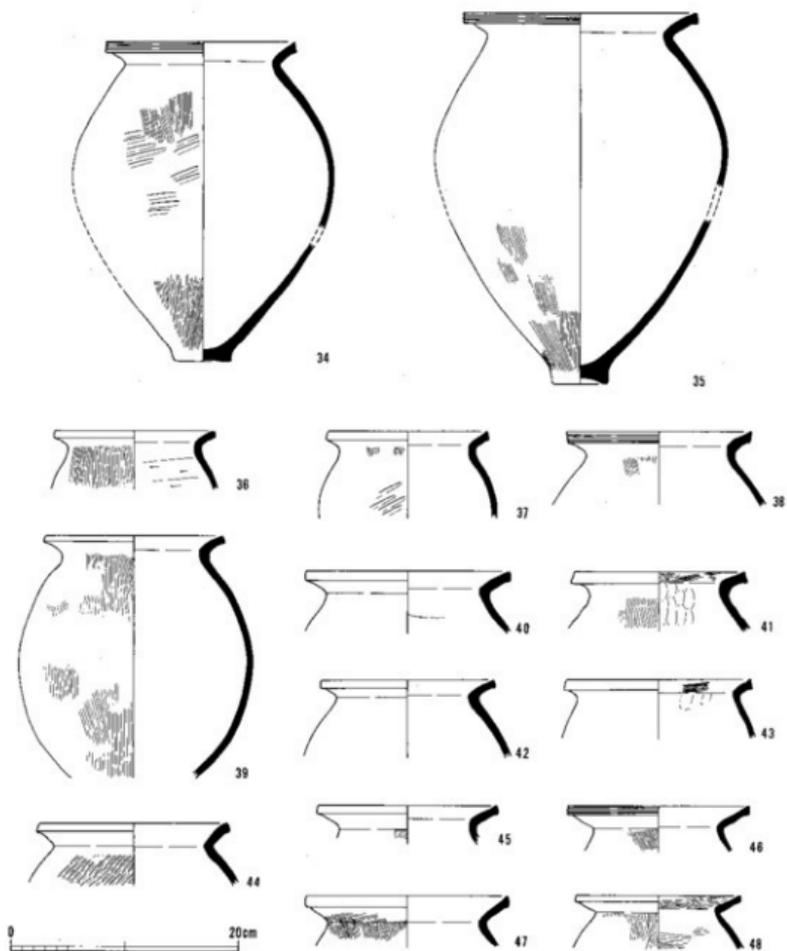
第20图 竖穴住居址N SH-1上層出土土器(2)



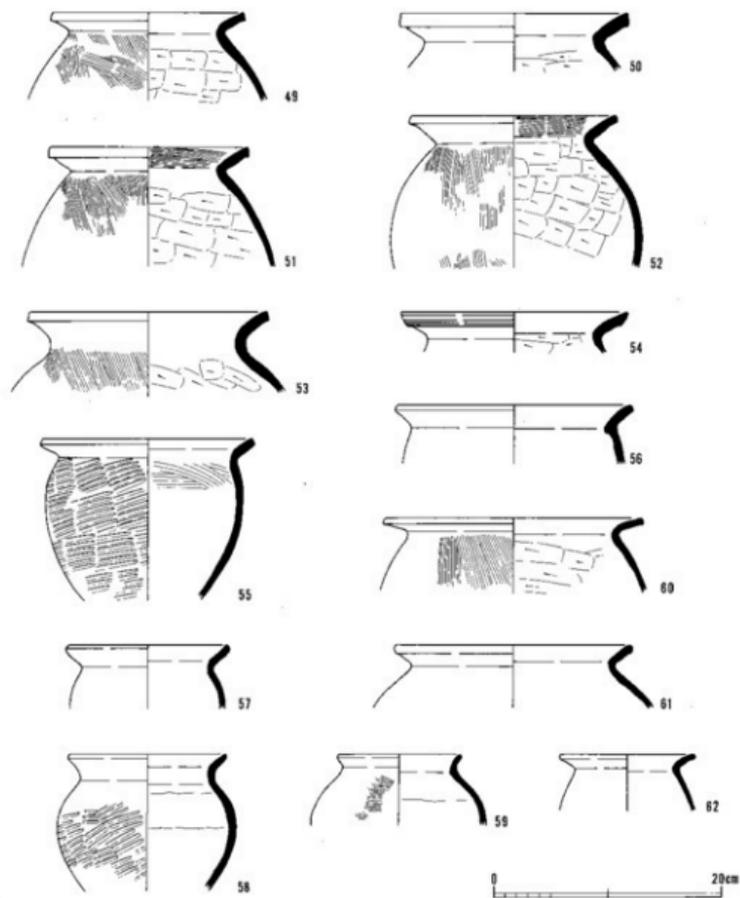
第21図 竪穴住居址N SH-1上層出土土器(3)



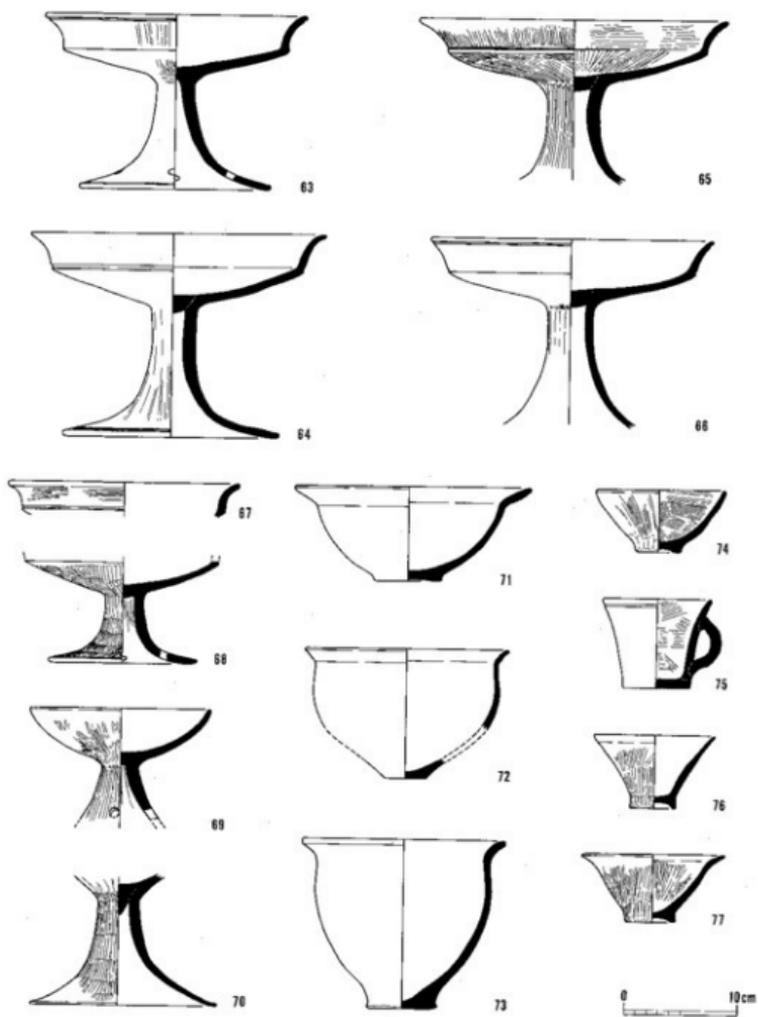
第22图 竖穴住居址N S H-1上層出土土器(4)



第23图 整穴住居址N SH-1上層出土土器(5)



第24图 竖穴住居址NSH-1上層出土土器(6)



第25图 竖穴住居址N SH-1上層出土土器(7)

(63~68)は高杯Aである。(63)は杯部が直線的に伸びるA₁で、口縁部は外反して、端部は丸く納められる。脚裾端部には小さな面をもつ。口縁部外面には縦方向の寛磨きが残る。口縁端部下と脚裾端部に擬凹線文が施される。口径約23.2cm・器高約15.5cmである。(64~67)は高杯A₂で、(64)の脚裾端部は面をもつ。(64)は杯部と口縁部の接合部と脚裾部に擬凹線文が、(66)は口縁端部下と、杯部と口縁部の接合部に擬凹線文が施されている。(64)は口径約26.0cm・器高約18.2cmである。(67)は口縁部の破片で、口径約20.4cm。杯部と口縁部の境に擬凹線文が施される。(68)は短い脚部で、口縁部は剥離している。外面は寛磨きである。脚裾端部に擬凹線文が施される。

(69)は高杯Bで、脚は外下方に「ハ」の字状に開く。外面は寛磨きされ、口縁端部は丸く納められる。口径約15.8cm。

(70)は高杯脚部で、外面を寛磨きしている。脚柱部が直立することからみて高杯Aの脚部と思われる。

(71-72-77)は鉢A₁である。(77)は内外面を寛磨きする。法量に大小があり、(71)は口径約20.8cm・器高約8.5cm、(72)は口径約18.0cmで、体部下半を欠くが、器高約11.4cm前後に復元できる。(77)は小型の器形で、口径約12.6cm・器高約6cmである。

(74-76)は鉢Bで、(74)は体部が内彎するB₂である。内外面刷毛調整で、口径約11.3cm・器高約5.4cmである。(76)は体部が直線的に伸びるB₁で、内外面寛磨きである。口径約10.5cm・器高約6.5cmである。

(75)は鉢B₁に把手がついた、鉢Cである。口縁部には擬凹線文が施され、内面には刷毛目が残る。口径約9.8cm・器高約7.8cmである。

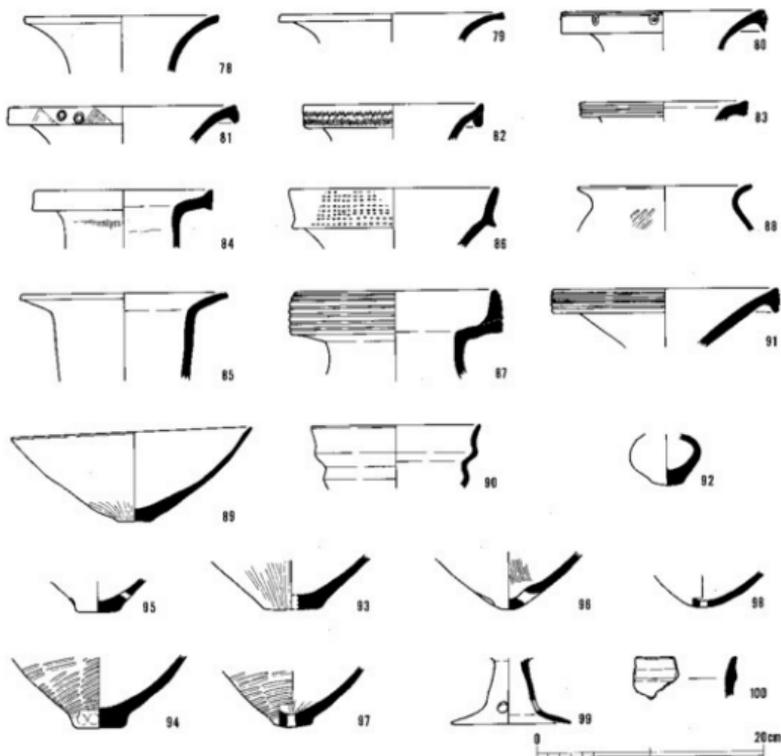
溝NSD-1 南半出土土器 (第26図)

溝NSD-1は溝NSD-8と切り合った部分の北側と南側で上層の遺物に大きな違いが見られた。そのため、上層の遺物を北半・南半に分けて扱った。下層の土器もそれにならって北半と南半に分けて、別個に扱うことにする。

(78~83)は壺Aで、(78-79-83)はA₁である。(79-83)は端部がやや肥厚して面をもつ。(78)は単純に口縁端部には小さな面をもつ。(80-81)はA₂で、(80)の口縁部には擬凹線文と竹管円形浮文が、(81)の口縁部には鋸歯文と鋸歯文間に竹管円形浮文が2個一対で貼り付けられている。(82)はA₃で、口縁部は波状文で加飾されている。

(84-85)は壺Bで、(84)はB₃である。頸部の外面には刷毛目が残る。(85)はB₁で、口縁端部には小さな面をもつ。

(86-87)は壺Gで、(86)はG₂で、屈曲部が外に突出する。口縁部はミシン目状の刺突文で飾られる。(87)はG₃で、頸部から口縁部への屈曲は鋭い。口縁部は屈曲した後、内彎気味に直立し、端面は擬凹線文で飾られる。



第26図 満NSD-1南半出土土器

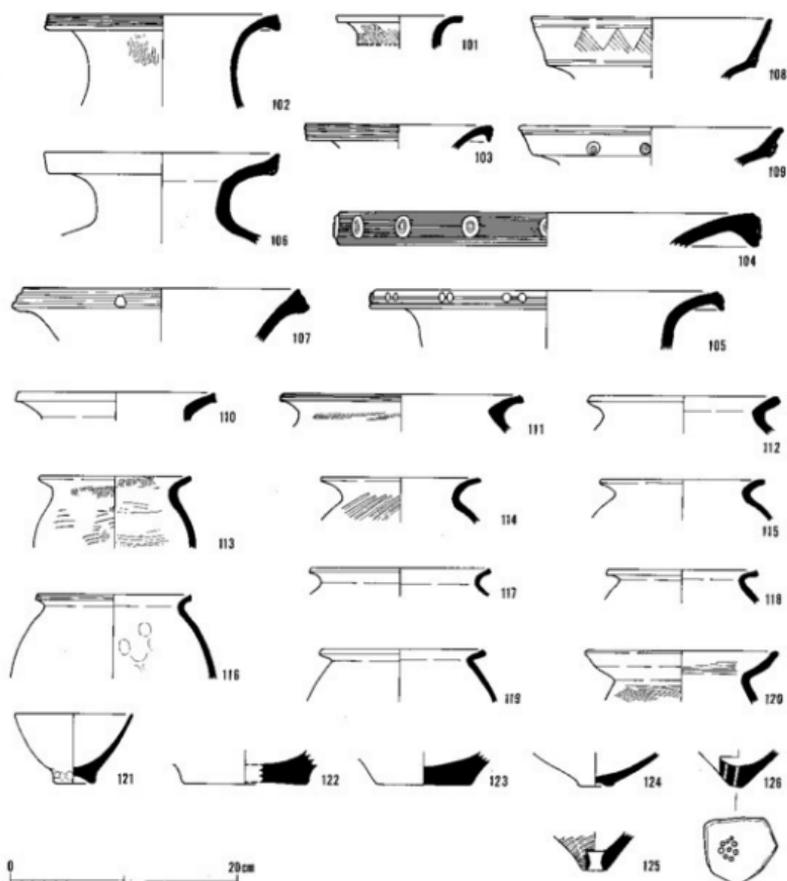
(88)は甕B₄で、口縁部は体部から屈曲して上方に開いた後、中央でさらに外反して開く。体部外面には叩き目が残る。

(89・90)は鉢で、(89)は鉢B₂である。口縁端部は丸く納まり、底部周辺に笕磨きが残る。口径約20.2cm・器高約7.9cmである。(90)は鉢A₂で、体部は肩が張り、口縁部は屈曲した後、外反する。口径約14.8cm。

(91)は器台で、受部は直線的に伸び、口縁端部は下方に拡張される。端部には擬凹線文が施される。

(92)は壺形土器のミニチュアである。内外面ともナデ調整である。

(94)は突出した甕の底部で、体部の外面には叩き目を残す。(93)は壺の底部で、外面には



第27図 溝NSD-1北半出土土器

窰磨きが看取できる。(95~98)は穿孔された底部片で、(95-96)は底部の側面から穿孔され、(96)は尖底ぎみの丸底の底部を側面から穿孔している。(97)は小さく突出した底部で、体部外面には叩き目が残り、内面は刷毛目が残る。底部中央には内面から孔が穿たれている。(98)は丸底の底部で中央に穿孔されている。

(99)は高杯の脚部で、脚柱部から屈曲して裾部が開く。

(100)は口縁部に一条の凸帯が施され、小片であるが、縄文土器と思われる。

溝NSD-1北半出土土器 (第27図)

溝の下層に堆積した砂礫層から出土した土器類である。(101)は壺A₁で、外面は篋磨きである。頸部下端には竹管文が施されている。(102~105)は壺A₂である。加飾性に富み、(102・103)は擬凹線文、(104・105)は擬凹線文と円形浮文を施す。(102・103)の頸部外面に篋磨きが残る。法量には大小がみられ、(103)は口径約16.4cm、(102)は約20.0cm、(105)は約30.0cm、(104)は大型で口径約36.4cmである。(106)は壺B₃である。口径約20.5cm。(107)は壺Cで、端部には擬凹線文が施される。口径24.1cm。(108・109)は壺Gである。(108)は屈曲後の口縁部の立ち上がりが大きく、端部の上端と下端には擬凹線文、その間には鋸歯文が施される。(109)は屈曲後の口縁部の立ち上がりは低く、端部上端には擬凹線文、下端付近には竹管円形浮文が施される。

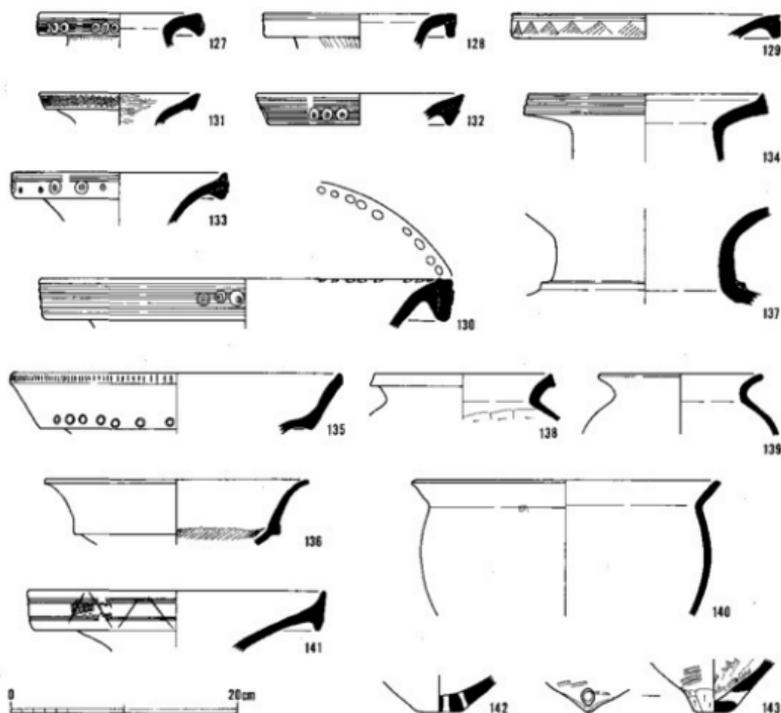
(110~112)は甕であるが、口縁部片であるため分類できない。(110・111)の口縁端部は上下に拡張され、(111)の端部には擬凹線文が施される。(113)は甕Eで、端部は丸く納められる。体部外面は叩き後刷毛、内面は刷毛調整である。(114・115)は甕B₁である。(114)は口縁部が大きく外反する。体部外面は叩き目を残し、内面はナデ調整。(116~119)は甕A₃である。(117)は頸部が伸び、(119)は頸部が屈折する。ともに磨滅しており、詳細は不明である。(120)は口縁部が屈曲する甕で、端部は内側に肥厚する。体部外面と口縁部内面に刷毛目が残る。口径約16.8cm。古墳時代のものと思われる。

(121)は鉢B₂で、底部は上げ底となる。口径約10.3cm。

(122・123)は甕か壺の底部である。ともに底部径が大きく、胎土も異なり、弥生時代中期のものか。(124)は鉢の底部である。(125・126)は底部を穿孔した鉢で、(125)の外面には叩き目が残る。(126)は9孔が穿たれている。

溝NSD-2出土土器 (第28図 図版第29)

NSD-2の溝底から出土した遺物を中心に掲載した。(127~133)は壺Aで、(137)も口縁部を欠くが、壺Aであろう。(127~130)は壺A₂である。加飾性に富み、(127)は端部を擬凹線文と3個1組の竹管円形浮文で加飾する。(128)は端部上端を擬凹線文のみで、(129)は擬凹線文と鋸歯文で、(130)は端部を擬凹線文と竹管円形浮文で、端部の内面を円形浮文で飾る。(127・128)の頸部外面には篋磨きが残る。(131・132)は壺A₃で、端部は外傾した面となる。加飾性に富み、(131)は端部外面を波状文で、(132)は擬凹線文と3個1組の竹管円形浮文で飾る。(131)の内面には篋磨きが残る。(137)は頸部の破片であるが、頸部が外反して口縁部に移行することから壺Aであろう。頸部と体部の境には凸帯が施されている。(133)は壺A₄で、擬凹線文、竹管円形浮文、竹管文で加飾している。(134)は壺B₂である。端部は上方に拡張され、そこに擬凹線文が施されている。(135)は壺G₁である。口唇部は刻み目で、屈曲部外面は円形浮文で飾られる。



第28図 溝NSD-2出土土器

(138)は甕B₃で、口縁部は上下に拡張される。体部内面は篋削りである。(139)は甕B₄である。口径約14.2cmである。

(136)は杯部を欠くが、高杯A₂であろう。口縁端部は面をもち、杯部の内面には篋磨きが残る。

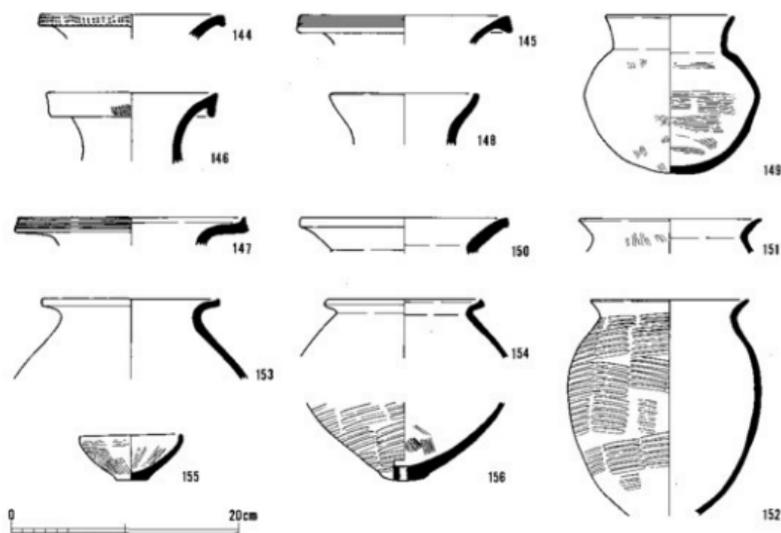
(140)は大型の鉢A₁である。口縁端部は外側に短く突出し、面をもつ。口径約26.2cm。

(141)は器台である。口縁端部を上下に拡張し、そこを擬凹線文・鋸歯文・波状文で飾る。

(142・143)は穿孔された底部片で、(143)は側面から一気に反付側まで貫通させて穿孔した後、底部周囲を篋削りしている。(143)の体部外面には叩き目、内面には刷毛目が残る。

溝NSD-3出土土器 (第29図 図版第29)

(144・145)は壺A₂である。(144)は端部を小さく拡張した後、櫛状のもので刺突する。(145)は端部に擬凹線文を施す。(146)は壺A₃である。端部に波状文が施されている。(148)は壺E



第29図 溝NSD-3・7出土土器

である。小型で口縁部は頸部から外反して開いた後内彎する。(149)は球形の体部から直立する口縁部を有する甕で、内外面に刷毛調整する。古墳時代中期の土器であろう。

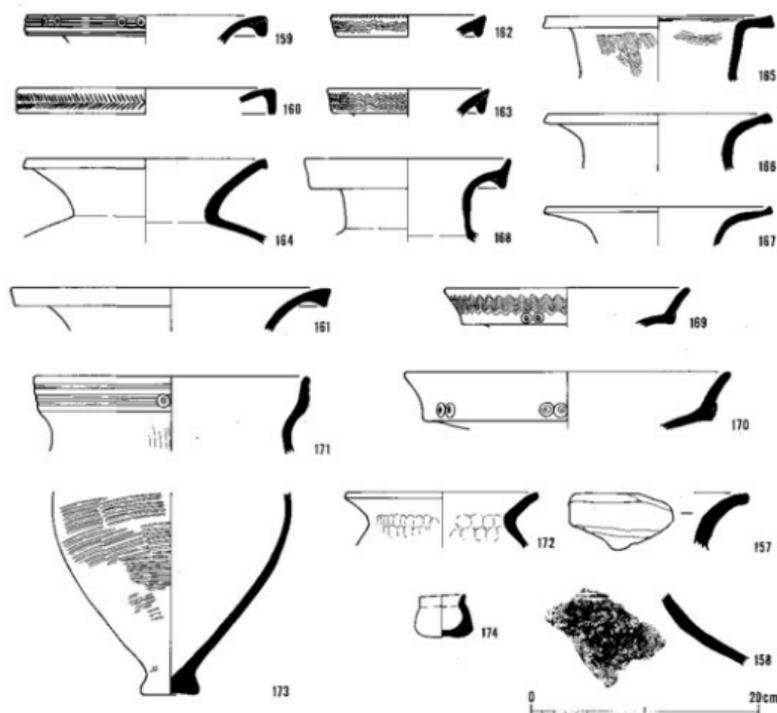
溝NSD-7出土土器 (第29図 図版第29)

(147)は壺B₂である。端部には擬凹線文が施される。(150)は甕で、口縁端部は下方に拡張され、面を持つ。(151・152)は甕B₄である。(152)の体部外面には叩き口が残る。(153・154)は甕A₃である。(153)は頸部が伸び、口縁端部は直立する。(154)は口縁端部に内傾した面をもつ。(155)は鉢B₂で、体部から内彎して口縁部に移行し、端部は丸く納められる。内外面に篋磨きが残る。(156)は穿孔された底部である。底部は突出し、体部外面には叩き目が、内面には刷毛が残る。

包含層出土土器 (第30図)

(157)は広口壺で、口縁部と頸部の境に削り出しの凸帯が施される。(158)は壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面には櫛指直線文が施される。

(159~163)は壺Aで、(159~161)は壺A₂である。(159)は端部を擬凹線文と2個一対の竹管円形浮文で加飾し、(160)の端部は櫛による菱杉文で飾られる。(161)は無文である。(162・163)は壺A₃である。(162)は口唇部に刻み目文、端部に波状文が、(163)は端部に波状文が施される。(164)は壺Cで、端部は下方に小さく拡張される。(165~168)は壺Bで、(165・166)



第30図 包含層出土土器

はB₁である。(165)の口縁部は頸部から横方向に屈曲し、内外面は鋭磨きされる。(167)は壺B₂である。口縁部は横方向に伸び、端部は短く上方に拡張される。(168)は壺B₃である。(169～171)は壺G₁である。(169)は端部を波状文、屈曲部外面を2個一対の竹管円形浮文で、(170)は屈曲部外面を2個一対の竹管円形浮文で飾る。(171)は太い頸部で、口縁部は短く外反して屈曲する。口縁部外面は擬凹線文と竹管円形浮文で飾られるが、浮文の個数は不明である。頸部外面に鋭磨きが残る。

(172)は壺で、口縁端部は面をもつ。頸部の内外面に指押さえ痕が残る。(173)は壺の体部から底部にかけての破片である。底部は台状に突出し、体部外面には叩き目が残る。

B. 古墳時代後期～平安時代前半の土器

a. 分類

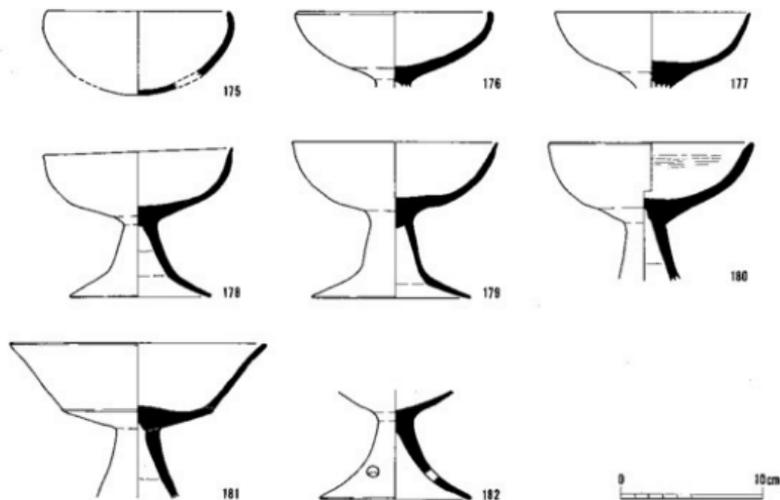
本遺跡に須恵器が導入されて以降から平安時代前半（9世紀代）までの土器をこの項で扱う。出土した土器には須恵器・土師器・製塩土器・施釉陶器等があり、量的には須恵器・製塩土器・土師器の順となっている。時期的には飛鳥時代後半から奈良時代前半のものが多く、飛鳥時代前半と奈良時代後半から平安時代前半のものは少なくなっている。

土器の器種名、手法は古墳時代のものを除き、奈良国立文化財研究所によるものになっている。ただ一部の器種については独自に設定したのものもある。なお各器種の細分については紙数の都合もあり、それぞれ出土遺跡の中で記している。

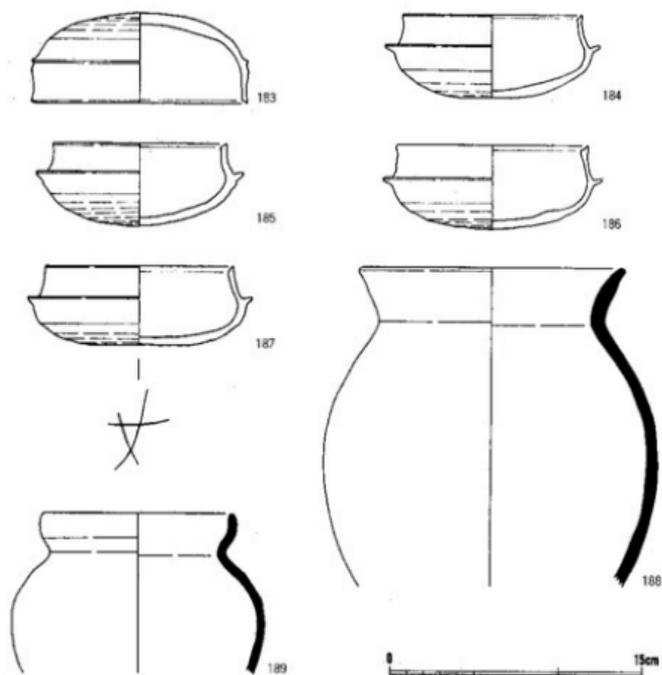
b. 出土遺物

土器群1の土器（第31図 図版第30）

C-20区で、溝NSD-2の北肩部からまとまって出土した土器である。土師器碗と高杯からなり、須恵器は含まれない。(175)は碗で、体部から内彎して口縁部に移行する。口径約12.7cm・器高約5.9cm。(176～181)は高杯で、(176)は体部が横上方に開き、口縁部が内彎する。碗部上端は水平な面となる。口径13.6cm。(177～179)は体部が横上方に開き、口縁端部が僅か



第31図 土器群1の土器



第32図 土器群2の土器

に外反する。端部は強いナデによって薄く仕上げられ、尖り気味となる。(178)の脚部は柱部が「ハ」の字状に開き、裾部は脚柱部から屈曲して開く。(179)の脚柱部は中央が影らむ。(180)は体部が横上方に開き、口縁端部は内側に鈍い稜を持つように内側から外側に丸く納められる。全体に厚い作りで、内面に甕磨きが残る。(181)は口縁部が体部から屈曲して開くもので、口縁部は端部付近で短く外反する。脚柱部は「ハ」の字状に開き、内面に粘土紐の巻き上げ痕を残す。

土器群2の土器 (第32図 図版第30)

E-16区の溝NSD-2の北肩部からまとまって出土した、須恵器と土師器である。須恵器は蓋杯のみで、杯H蓋(183)の天井部は高く、丸みをもつ。天井部と口縁部の境は稜をなし、

口縁端部は凹面となった内傾する面をもつ。天井部の斲削りは2/3に及ぶ。口径約12.7cm・器高約5.3cm。(184~187)は受部をもつ杯Hである。(185)は底部は丸く、外面の斲削りは丁寧である。口径に比して器高が高く、端部は面をもつ。口径約10.3cm・器高約4.8cm。(184・186)は底部がやや偏平になり、口径もやや大きくなる。ともに口縁端部に凹面となる面をもつ。(187)はさらに底部が偏平になり、口径も大きくなる。口縁端部は内傾した面をもつ。口径11.8cm・器高4.8cm。底部に斲削りが描かれている。

(188・189)は土師器の甕で、(188)は口縁部が「く」の字状に単純に外反するが、端部は僅かに突出ぎみとなる。体部は中位が張り、長胴形である。(189)は口縁部が屈曲する甕で、屈曲部の稜は鈍い。体部は強く張る。

満NSD-1北半出土遺物(第33~44図 図版第22~27)

古墳時代から平安時代に及ぶ、土器類・土製品・金属製品が出土しているが、金属製品は別項で扱った。出土した土器類には須恵器・土師器・製塩土器があり、量的には圧倒的に製塩土器が多く、全体の約半数を占める。須恵器・土師器については任意に抽出して実測したため、総個体数は明らかでなく、おおよその構成比率にすぎないが、須恵器が約57%、土師器が約43%で、須恵器・土師器がおおよそ半々となっている。ただ土師器は壺類が多く、食器類である杯・皿とそれに伴う蓋類でみれば、須恵器が約77%、土師器が約23%となっている。

須 恵 器

杯H蓋・杯B蓋・杯G蓋・杯H・杯A・杯B・杯I・椀E・高杯・鉢A・短頸壺・長頸壺・横瓶・甕・平瓶等が出土しているが、杯・蓋類が多く、出土した須恵器の約74%を占める。

杯H蓋 (190~194)は受部を持つ杯Hの蓋である。5点とも天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持つ。(190~193)は口縁端部が短く外反し、凹面となった面を持つ。(190)は口径約12.3cm・器高約4.3cm。(191~193)は口径約12.8cm。(194)は口径に大差はないものの、口縁端部が丸く納められる。口径約12.9cm。

杯H (195~197)は受部を持つ杯Hである。(195)は口縁端部に面を持ち、器高が高く深い器形であるが、底部は偏平となっている。口径約10.9cm・器高約4.6cm。(196)も口縁端部に面を持つが、口径約12.0cmと大きくなっている。(197)は口縁端部が丸く、口径も大きくなって、約12.9cmである。

杯A (218~232)は杯Aで、法量的によって杯AⅢ(口径14.0cm・器高4.3cm)・AⅣ(口径12.2~13.0cm・器高3.5~4.1cm)・AⅤ(口径11.4~11.7cm・器高3.2~3.7cm)・AⅥ(口径8.9cm・器高3.4cm)に区別できる。形態的には底部が丸みをもち、体部下半が内彎するa形態、底部が僅かに丸みを残し、体部から口縁部にかけて内彎するb形態、底部は平底で、体部下半が内彎するc形態、底部は平底で、体部から口縁部にかけて直線的に開くd形態に区別でき、a形態からc形態・d形態への変化が考えられる。

(218・232)は杯AⅢで、(218)はa形態である。口径約14.0cm・器高約4.3cmで、径高指数は約31である。(232)はd形態であるが、底部が小さく、口縁部の外傾度が大きくなり、新しい様相を示す。底部外面は篋切り不調整で、内面のナデは省略されている、口径約14.2cm・器高約4.0cm。

(219~227)は杯AⅣで、(219・220)はa形態、(221~223)はb形態、(224~226)はc形態、(227)はd形態である。a形態の(219・220)は口径に対し器高が深く、(219)が口径約13.0cm・器高約4.3cm、(220)が口径約12.7cm・器高約4.3cmで、径高指数は約34である。底部は篋切り後粗くナデられ、内面に仕上げナデが施される。b形態の(221~223)は径高指数にバラつきがあり、(221)は口径に対し、器高が深く、口径は約12.2cm・器高約4.1cmである。(222)は口径約12.7cm・器高約3.9cm、(223)は口径に対し器高が浅く、口径約12.8cm・器高約3.6cmである。(221・222)の底部は篋切り不調整、(223)は粗くナデられる。c形態の(224~226)は、底部と体部の境が屈曲して明瞭となり、口径に対し器高が浅くなっている。(224)は口径約12.6cm・器高約3.7cm、(225)は口径約12.9cm・器高約3.9cm、(226)は口径約12.6cm・器高約3.8cmで、径高指数は30前後となっている。(224)の底部外面は篋切り後に粗くナデられ、(225・226)は篋切り不調整である。d形態の(227)はさらに口径に対し器高が浅くなり、口径約12.8cm・器高約3.5cmで、径高指数は約27である。底部は篋切り不調整。

(228~230)は杯AⅤで、(228)はb形態、(229)はc形態、(230)はd形態である。(228)は口縁部が短く外反し、口径約11.4cm・器高約3.5cm。(229)は口径約11.6cm・器高約3.2cm、(230)は底部が小さく、口縁部の外傾度が大きくなって、d形態でも新しい様相を示す。口径約11.7cm・器高約3.7cm。

(231)は杯AⅥで、形態的にはb形態に分類できる。口径約8.9cm・器高約3.4cmである。

蓋 (200~211)は蓋類で、口縁部が天井部から彎曲する蓋B、口縁部の内面にカエリがつく蓋Cがあり、口縁部が屈曲するものは見られない。

杯G蓋 (200~202)は内面にカエリを持つ、小型の蓋Cである。杯Gの出土は見られないものの、その蓋であろう。(200)は内面のカエリが縁端より僅かに下方に突出し、頂部のつまみは宝珠形で、高い。口径約9.4cm・器高約3.4cm。(201)は内面のカエリが、縁端とほぼ同じ位置まで突出し、口径約8.9cm。(202)はカエリが縁端の内側で納まり、頂部のつまみは偏平となっている。口径約10.8cm。

杯B蓋 (203~211)は杯B蓋で、分量によって杯BⅠ蓋(211、口径17.8cm)、杯BⅡ蓋(207~210、口径16.2~16.5cm)、杯BⅢ蓋(203・205・206、口径14.7~15.3cm)、杯BⅣ蓋(204、口径13.5cm)に区別できる。

形態的には縁部内面にカエリがつく蓋Cと、頂部から彎曲して縁部にいたる蓋Bがある。また頂部やつまみの形態から、つまみが高く、内面にカエリがつくa形態(203・204)、頂部が高

く、つまみは偏平でわずかに中央が膨れるだけのb形態(205・206)、つまみは偏平であるが、頂部の高いc形態(207~209)、頂部が低く偏平な器形で、つまみも偏平なd形態(210・211)に区別できる。形式的にはa形態からb形態→c形態→d形態への変化が想定される。

(203・204)はa形態の蓋Cである。頂部は篋削りされ、宝珠形につまみがつく。カエリが縁端を越えるものはなく、縁端の内側で納まっている。(203)は口径約14.1cmで、杯BⅢの蓋、(204)は口径約12.9cmで、杯BⅣの蓋であろう。

(205~211)は蓋Bで、(205・206)はb形態で、頂部には、偏平だが、中央が膨れたつまみがつく。(205)は口径約14.9cm、(206)は口径約14.4cmで、ともに杯BⅢの蓋であろう。

(207~209)はc形態の蓋で、篋削りされた高い頂部に、(208・209)は偏平なつまみがつく。(207)はつまみを欠くが、同様のつまみがつくものと思われる。(207・209)は口径15.7cm、(208)は口径約15.4cmで、杯BⅡの蓋であろう。

(210・211)はd形態の蓋で、頂部が低く、縁部は長く伸びる。(210)は頂部に偏平なつまみがつく。(210)は口径約16.0cm、(211)は口径17.8cmで、法量的にみて、(210)は杯BⅡの、(211)は杯BⅠの蓋であろう。

杯B(233~243)は杯Bで、(244~247)はその底部である。法量的に杯BⅠ(242、口径17.0cm・器高約4.8cm)、杯BⅡ(240・241、口径15.0~15.2cm・器高3.9~4.1cm)、杯BⅢ(237~239、口径13.7~14.3cm・器高4.8~5.0cm)、杯BⅣ(233~236、口径12.2~13.2cm・器高3.8~4.7cm)、杯BⅤ(243、口径10.3cm・器高3.7cm)に区別できる。杯BⅠ・BⅡは口径に対し器高が浅く、径高指数は26~28となっている。また杯BⅣには口径に対し器高が高い(234)が存在している。

形態的には底部が丸みをもち、底部と体部の境が不明瞭なb形態(233・234・237)、底部は平底となるが、底部と体部の境が屈曲して不明瞭なc形態(235・236)、底部は平底となり、体部下半が丸みをもつが、底部と体部の境が比較的明瞭なd形態(238~240・242)、底部は平底となり、底部と体部の境は屈曲し、口縁部が直線的に伸びるe形態(241・243)に区別できる。

(233~236)は杯BⅣで、(233・234)はb形態、(235・236)はc形態である。b形態の(233・234)は口径に対し器高が高い器形である。高台は低いが外方にふんばり、底体部の境から内側に寄って貼り付けられている。(233)は底部から口縁部まで丸みをもち、b形態の中でも、特に底部と体部の境が不明瞭な器形である。口径約13.2cm・器高約4.4cm。(234)は杯部の形態はa形態(369)に類似するが、高台が低く、口縁部の外傾が大きくなっている。口径約12.3cm・器高約4.7cm。c形態の(235・236)は口径に対し器高が浅く、径高指数32前後の器形である。高台は低い、b形態同様、底体部の境から内側に寄って貼り付けられ、外方にふんばった形状である。(235)は口径約12.2cm・器高約3.7cm、(236)は口径約12.5cm・器高約4.1cmである。

(237~239)は杯BⅢで、口径に対し器高が高く、径高指数は35前後の器形である。形態的には(237)はb形態、(238・239)はd形態である。(237)は口径約14.3cm・器高約5.0cm、(238)

は口径約14.2cm・器高約4.9cm、(239)は口径約13.7cm・器高約4.8cmである。

(240・241)は杯BⅡで、口径に対し器高が低く、口径指数26前後の器形である。形態的には(240)がd形態、(241)がe形態である。(240)は口縁部が外反し、口径約15.0cm・器高約3.9cm。(241)は直線的に口縁部が伸び、端部が短く外反する。口径約15.3cm・器高約4.1cm。

(242)は杯BⅠで、形態的にはd形態である。体部から口縁部は内彎気味に伸び、高台は巾広く、底体部の境の内側につけられる。口径約17.0cm・器高4.8cm。

(243)は小型の杯BⅤである。形態的にはe形態で、口縁部は直線的に伸びる。口径約10.3cm・器高約3.7cm。

(244~247)は杯Bの底部片で、底径からみて、(244)は杯BⅤの、(245・247)は杯BⅣの、(246)は杯BⅠかⅡの底部であろう。形態的には(244・245・247)はb形態、(246)はd形態に属すると思われる。

杯Ⅰ (212~217)は杯Ⅰで、杯Hの蓋を逆転させたような形態の杯である。杯Hの蓋、あるいは椀Eと区別が困難な器形であることから、両者が混在している可能性もあるが、杯Hの蓋とは口縁部の形態から、椀Eとは法量的な関係から区別した。法量的には杯Ⅱ(口径12.1~13.1cm・器高3.6~3.8cm)、杯ⅠⅡ(口径10.0~10.6cm・器高3.0~3.7cm)に区別できる。口縁部が屈曲するものと、内彎するものがあり、形態的には口縁部が屈曲し、底部が丸みを持つa形態、口縁部は屈曲するが、底部が平底化するb形態、口縁部が内彎し、底部が丸みを持つc形態、口縁部が内彎し、底部が平らなd形態に区別できる。a形態は口径に対し器高が高く、口径指数が35前後の器形で、杯ⅠⅡのみである。b・c・d形態は口径に対し器高が低く、口径指数が27~32前後の器形で、杯ⅠⅠと杯ⅠⅡが存在する。

(212~214・216)は杯ⅠⅡで、(212・213)はa形態である。(212)は口径約10.6cm・器高約3.8cm、(213)は口径約10.0cm・器高約3.6cm、ともに底部は寛切り後粗くナデている。(214)はb形態で、口径約10.4cm・器高約3.0cmである。底部は寛切り後不調整で、内面に仕上げナデが施されている。(216)はd形態で、口径約10.2cm・器高約3.6cmである。底部外面は寛切り後粗くナデられている。

(215・217)は杯ⅠⅠで、形態的には(215)がb形態、(217)がd形態である。(215)は口径約13.1cm・器高約3.7cm、底部外面は寛切り後に粗いナデを施している。(217)は口径12.1cm・器高約3.8cmで底部外面は寛切り後ナデている。

椀E (248・249)は椀Eで、(248)は平らな底部に、体部は内彎し、口縁部が僅かに屈曲するb形態で、口径約11.4cm・器高約4.3cm。(249)は平らな底部から、体部は直線的に伸び、口縁部が屈曲して立ち上がるc形態で、口径約11.5cm・器高4.3cmである。

高杯 6個体がある。全体の形状を知り得るのは(250)のみで、(251・252)は杯部の、(253)は脚部の破片である。杯部の形状が知り得る(250~252)は無蓋高杯で、(250)は椀Eに、(251)

は杯Ⅰに、(252)は杯Aに脚部をつけたものである。(250)の脚は短脚で、無透かしてある。脚裾は単純にひろがり、端部は丸く納められる。土師器高杯の影響を受けたものと思われる。(253)は脚裾端部が屈曲して、面をもつ。

(198)は無蓋高杯の小片である。口縁部は外に屈曲して開き、端部は丸く納められている。口縁部下には2条の凸帯が見られる。(199)は高杯の脚部で、方形の透かし孔が見られる。

鉢A 口縁部が内彎し、端部に面をもつ、いわゆる鉄鉢形の鉢である。法量に大小2種が見られ、(255)は口径約16.1cm・器高約8.8cmである。(256)は底部を欠くが、口径約24.0cmの大型の器形である。(255)は底部を丁寧に斲削りしている。

壺C (254)は偏平な体部に、短く直立する口縁部がつく、いわゆる短頸壺である。肩部は強く屈曲するが稜はつかない。底部は斲削りする。

壺K (258~260)はいわゆる長頸壺の口頸部である。(258)は比較的太い頸部で、口頸部はラッパ状に開く。(259)は頸部が細く、口縁部は僅かに内彎気味となる。(258・259)とも口縁部と頸部の境には凹線状に強いナデが施されている。(260)は口縁部を欠くが、頸部が太く、口縁部は頸部から屈曲して立ち上がる。

平瓶 (261~263)の3個体が出土している。ともに口縁部を欠くが、体部が丸い形態と、体部が偏平な形態がある。(261)は平底で、偏平な体部であるが、体部の背面が盛り上がり、肩部の屈曲は鈍い。体部下半を斲削りしている。(262)は平底で、偏平な体部に口頸部を貼り付けているが、体部背面の盛り上がりは大きい。底部周囲を6分割に斲削りし、底部外面は不調整である。(263)は丸い体部に口頸部をつけたもので、体部下半を斲削りする。

横瓶 (257)は口縁端部を内上方に拡張し、外傾する端面を作った口縁部片である。体部を欠くが、口径からみて横瓶であろう。肩部に叩き目が残る。

甗 (267)は体部の中位上に1条の沈線を巡らした甗である。体部は径8.4cmと小さく、頸部から上を欠くが、剥離痕からみて、細い頸部がつくものと思われる。底部は手持ち斲削りである。

土 師 器

杯A・蓋・杯B・椀C・皿A・鉢・高杯・甗A・甗B・甗C・壺・鍋A・鍋Bが出土している。器種の構成比率は食器類である杯・皿類が約47%、甗・鍋類が約53%となって、須恵器に比べ、食器類が占める割合が低くなっている。

杯A 法量的には杯AⅠ(口径18.0~18.8cm・器高3.2~6.5cm)、杯AⅡ(口径16~17cm・器高3.2~3.5cm)、杯AⅢ(口径11.7~13.7cm・器高2.3~2.8cm)に区別できる。形態的には口縁部下半が内彎、上半が外反し、口縁端部が内側に丸く肥厚する、A形態のみであるが、口径に対し器高が高いa形態、口径に対し器高が低く、口縁部が外傾するb形態、口径に対し器高が低く、口縁部が大きく外傾するc形態がみられる。手法的には磨減している(282)を除いて、すべて底部外面を斲削りするb手法である。

(271~275) は杯AⅢであるが、(271・275) はやや口径が大きく、(271) が口径約13.0cm・器高約2.5cm、(275) が口径13.6cm・器高約2.8cmである。(272~274) の法量はほぼ等しく、(272) は口径約11.7cm・器高約2.5cm、(273) は底部外面を篋削りした後、篋磨きしており、口径約11.8cm・器高約2.4cm、(274) は口径約12cm・器高約2.3cmである。形態的にはa形態は含まれず、(271~273・275) がb形態、(274) がc形態である。(271・272) の内面には放射暗文が施されている。

(276・277) は杯AⅡで、2個体ともb形態である。ただ(277) は口縁部の外傾が大きく、b・c形態の中間的な器形である。(276) は口径約16.0cm・器高約3.2cm、(277) は口径約17.0cm・器高約3.5cmである。

(278・281・282) は杯AⅠで、(278) がc形態、(281・282) がa形態である。(282) は底部の中央が膨れ、全体に丸みをもつ。口径約18.0cm・器高6.5cm。(281) は平底で、底部を篋削りした後、底部から口縁部外面を篋磨きし、口縁部内面に放射暗文が施される。口径約18.8cm・器高約5.5cm。(278) は口径約18.4cm・器高約3.2cmである。

蓋 (269・270) は蓋で、平らな頂部からなだらかに彎曲して、縁部となる。縁端部は僅かに下方に折れる。(269) はつまみを欠くが、つまみを中心に五角形状に篋磨きし、縁部は縁と並行に篋磨きしている。内面にはラセン状の暗文の痕跡が残る。口径約18.0cm。(270) は頂部以上を欠くが、外面には縁部に並行した篋磨きと、頂部を中心とした篋磨きが施されている。内面にはラセン状の暗文が残る。口径約21.6cm。

杯B 3個体が出土しているが、底部のみの破片である。(283) は高台が低く、底体部の境は屈曲して、比較的明瞭である。(284・285) は高台が高く、底体部の境は不明瞭である。(283・284) の内面には暗文が施される。

皿A (286~291) は皿Aである。法量から皿AⅠ(口径24.6cm・器高3.1cm)、皿AⅡ(口径20.5~21.4cm・器高3.0~3.2cm)、皿AⅢ(口径16.2~17.0cm・器高約2.1~2.8cm)に区別できる。口縁部の下半が内彎し、上半が外反するa形態、口縁部が内彎するb形態があり、a形態は口縁端部の肥厚が明瞭であるが、b形態は口縁端部の肥厚が僅かか、肥厚しないものもみられる。

(286・287) は皿AⅢで、(286) がb形態、(287) がa形態である。(286) は底部外面を篋削りした後、底部外面から口縁部下半まで篋磨きするもので、口縁端部は単純に丸く納まる。口径約17.0cm・器高2.8cm。(287) は口径約16.2cm・器高約2.1cmである。

(288~290) は皿AⅡで、a形態であるが、(290) の口縁部は大きく外傾する。調整はともにb手法で、(288) は篋削りの後、底部外面に篋磨きを加えている。また(288) の口縁部内面には放射状の暗文が施されている。口径約20.5cm・器高約3.0cm。(289) は口径約21.6cm・器高約3.2cm、(290) は口径約21.4cm・器高約3.0cmである。

(291)は皿A Iで、b形態である。口縁端部は内側に肥厚するが、不明瞭である。口径約24.6cm・器高約3.1cmで、調整はb手法である。

椀C (279・280)は体部が内彎しながら開き、口縁部が屈曲して立ち上がる椀Cである。ともに口縁部下の外面は粗くナデるだけで、(279)の外面には粘土紐の接合痕を残している。(280)の内面には正放射の暗文が施されている。

(279)は平底で、口縁端部は短く外反する。口径約10.0cm・器高約2.9cm。(280)は丸みをもった平底で、口縁部の屈曲は弱く、端部の外反も僅かである。口径11.8cm・器高4.0cm。

鉢 (292・293)は口縁部が屈曲して内傾する鉢である。(292)は口縁端部に面を持ち、(293)の口縁端部は丸く納められる。ともに調整はナデのみの雑なもので、外面に粘土紐の継ぎ目を残す。(292)は口径約18.2cm・器高約5.9cm、(293)は口径約16.7cm。

高杯 (294)は高杯の杯部、(295)は高杯の脚部片である。(294)は口縁部をヨコナデし、体部は刷毛後ナデ調整している。杯部径約14.0cmで、古墳時代のものか。(295)は裾端部は欠損しているが、太く、短い脚柱部で、八角形に面取りしている。

甕A 口縁部片が多く全容のわかるものは少ないが、出土した土師器の中では最も多量にみられる。形態的には甕A・B・Cがあるが、(296~300・303~307・309~311・318)は甕Aである。口径が28~29cmの甕A I (311)、口径21~24cmの甕A II (309・310・318)、口径14~18cmの甕A III (297~300・303~307)、口径11cmの甕A IV (296)に区別できる。甕A IIIは口径のバラツキが大きく、二分できる可能性もある。

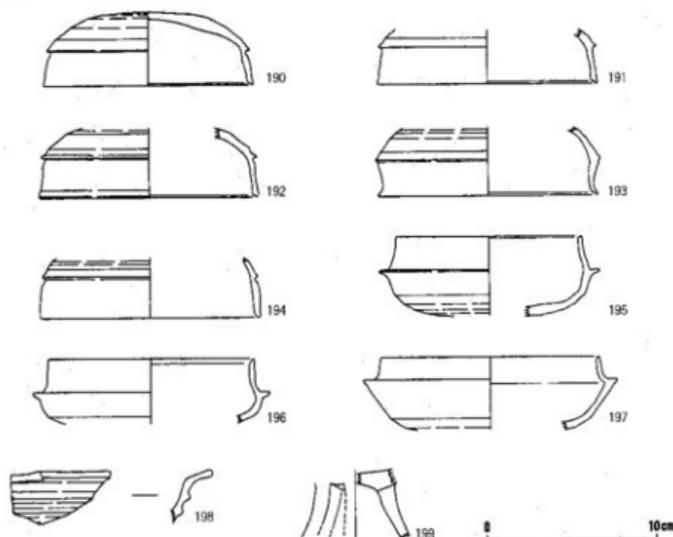
口縁部が単純に丸く納まる(297・298・300・311)、口縁部が外反する(296・299)、口縁部が内側につまみ上げられた(303~307・309・310・318)がある。

調整は体部外面を刷毛、内面をナデるものが多いが、(296)は体部外面の下半を篋削りしている。

甕B 球形の体部の両側に把手がつく甕で、(319)は口径は37.6cm。口縁端部は小さく内側に肥厚する。側面に貼り付けられた把手は二等辺三角形で薄く、一旦斜め上方に開いた後、屈曲する。調整は体部外面と口縁部内面が刷毛、体部内面はナデである。

甕C (301・302・308・312~316)は長胴の甕Cで、口径41cmの甕C I (316)、口径28cm前後の甕C II (312・313)、口径23~25cmの甕C III (308・314・315)、口径14~17cmの甕C IV (301・302)がある。口縁端部がつまみ上げられるもの(301・302・312~314・316)と、外反して上面に面をもつもの(315)がある。調整は体部外面が刷毛で、内面をナデ調整するものと、内面を篋削りしたもの(301・302・308・313)がみられる。

鍋A (322~326)は半球形の偏平な体部に、外傾する口縁部がつく鍋Aである。口径が36~37cmの鍋A I (325・326)、33~34cmの鍋A II (322~324)があり、A IIは、頸部下に段が付くa形態、A Iは段のみられないb形態である。a形態は口縁端部のつまみ上げが肥厚程度で僅か



第33図 溝NSD-1北半出土土器(1)

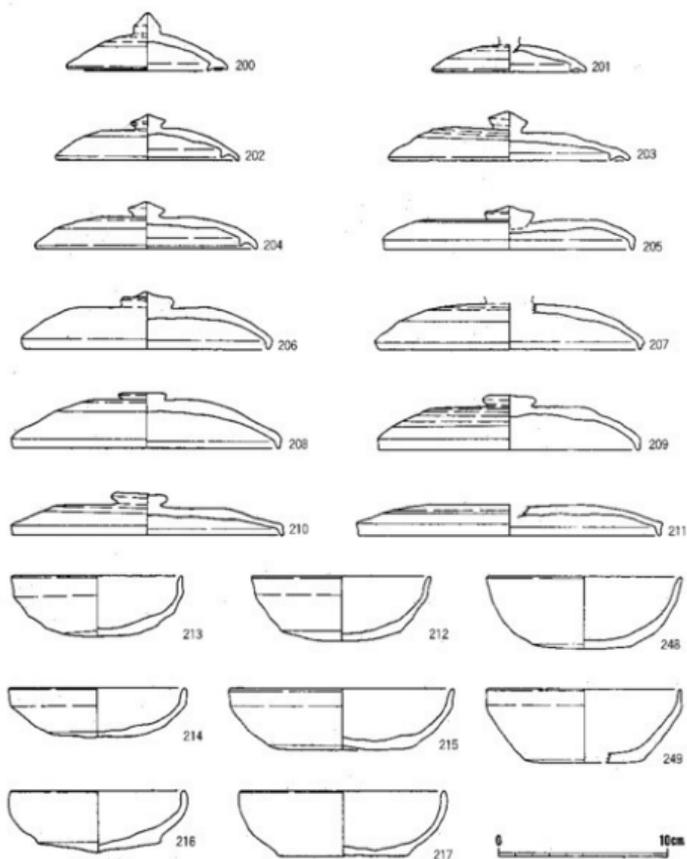
である。b形態は口縁端部のつまみ上げが顕著である。調整は体部外面を刷毛、内面をナデ調するものが多いが、(322)は内面を篋削り、(325)は体部と底部の境付近の外面を横に篋削りしている。

鍋B 鍋Aの体部の両側に把手がつく器形である。(321)はb形態の鍋に把手をつけたものであるが、口縁端部のつまみ上げはみられず、小さく外反する。側面に付けられた把手は薄く、一旦横方向に開いた後、屈曲している。調整は体部の内外面が刷毛、口縁部の内外面は刷毛後にナデを施している。

壺 (317・320)の2個体がある。(317)は中位が強く張った体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部はつまみ上げられる。体部の内外面と口縁部の内面を刷毛調整している。体部の形状を除けば壺Aと類似する。(320)は小型の壺で、丸底で球形の体部に短い口頸部をつけたものである。頸部は直立し、口縁部は内彎する。口径約6.8cm・器高約15.7cm。

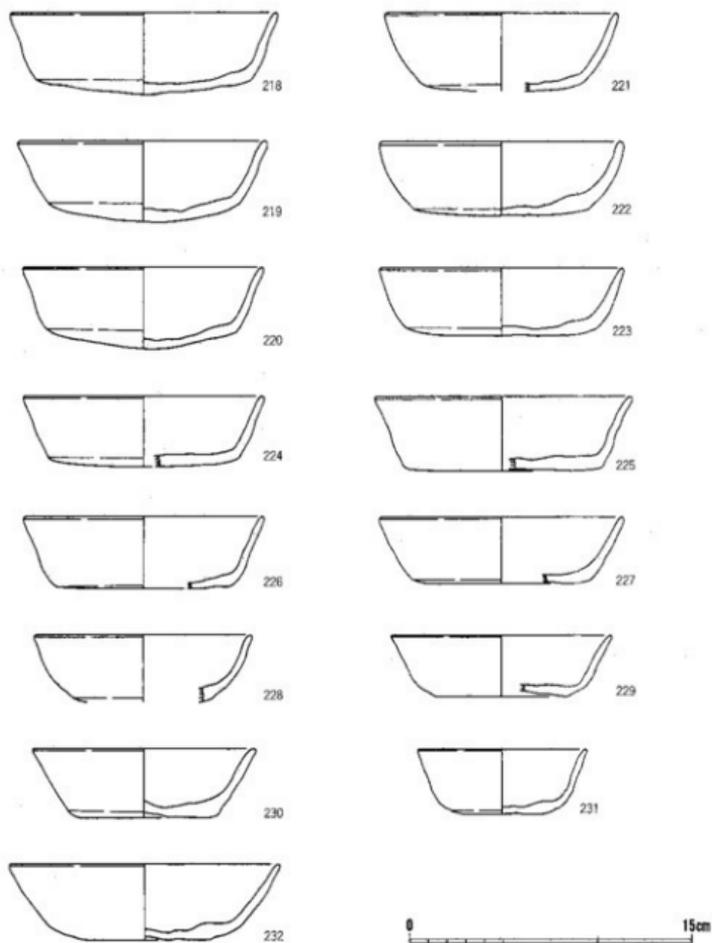
製塩土器

最も多量に出土しているが、小片が多く、全容のわかるものは少ない。器形的には椀・杯型

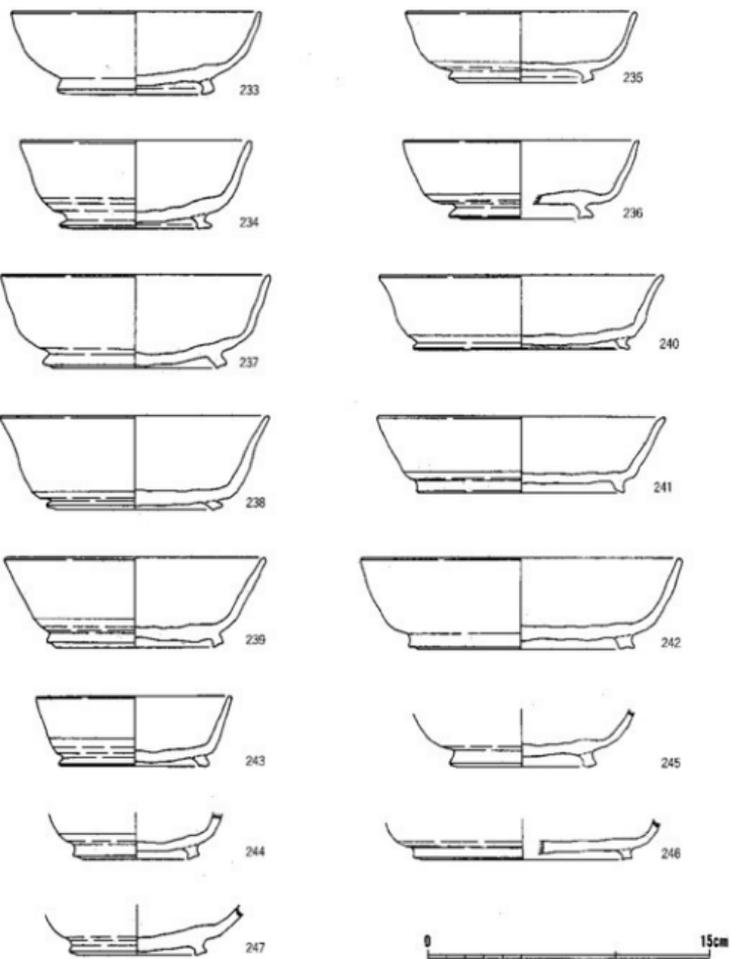


第34図 清NSD-1北半出土土器(2)

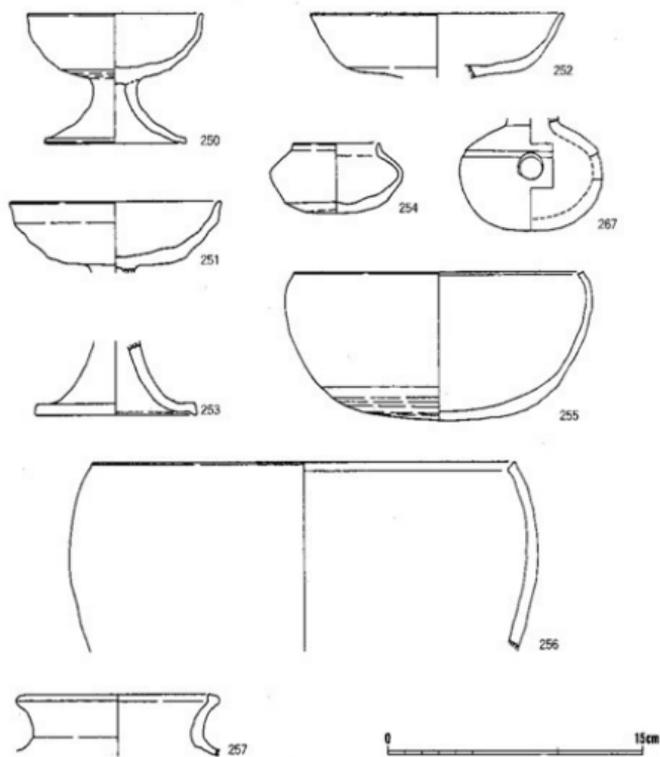
の製塩土器A、体部が直立する製塩土器B、鉢形の製塩土器C、口縁部が内彎して砲弾型となる製塩土器Dがある。器壁の薄いものだけで、厚手のものは見られない。調整は内面をナデ、外面は不調整のものと、口縁部だけをナデるものがあるが、不調整のものが多い。



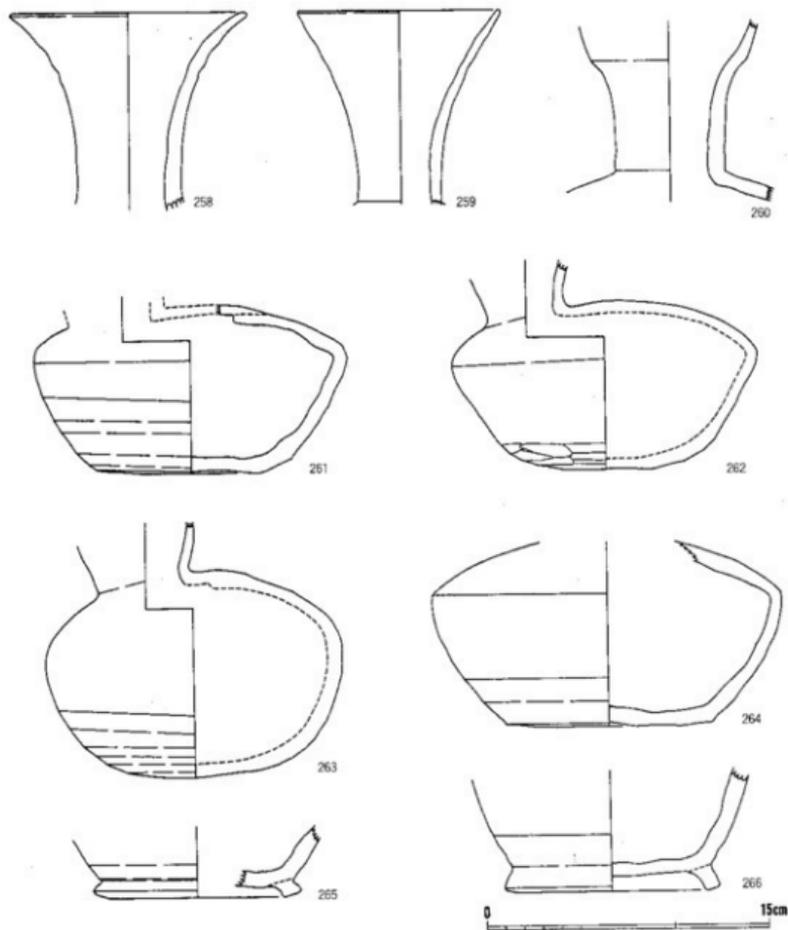
第35図 満NSD-1北半出土土器(3)



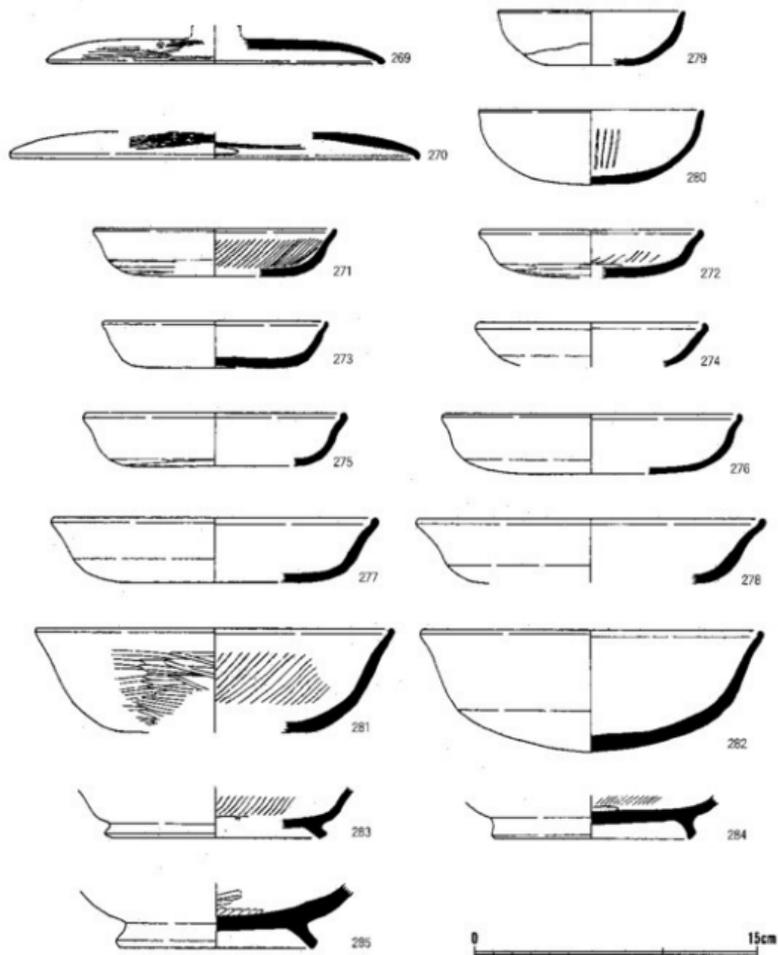
第36图 清NSD-1北半出土土器(4)



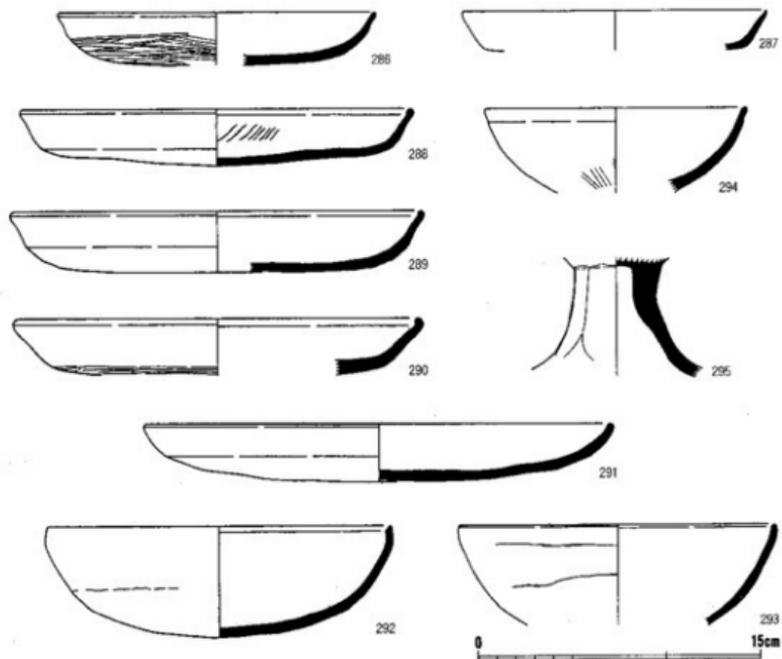
第37图 清NSD-1北半出土土器(5)



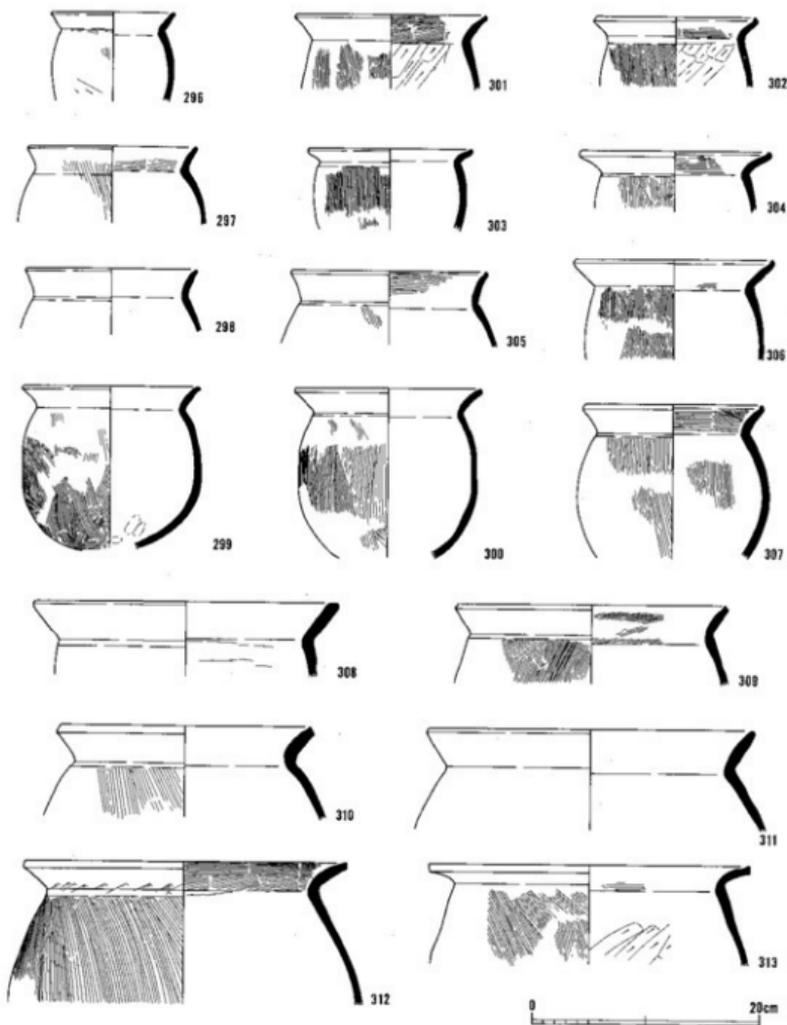
第38图 清NSD-1北半出土土器(6)



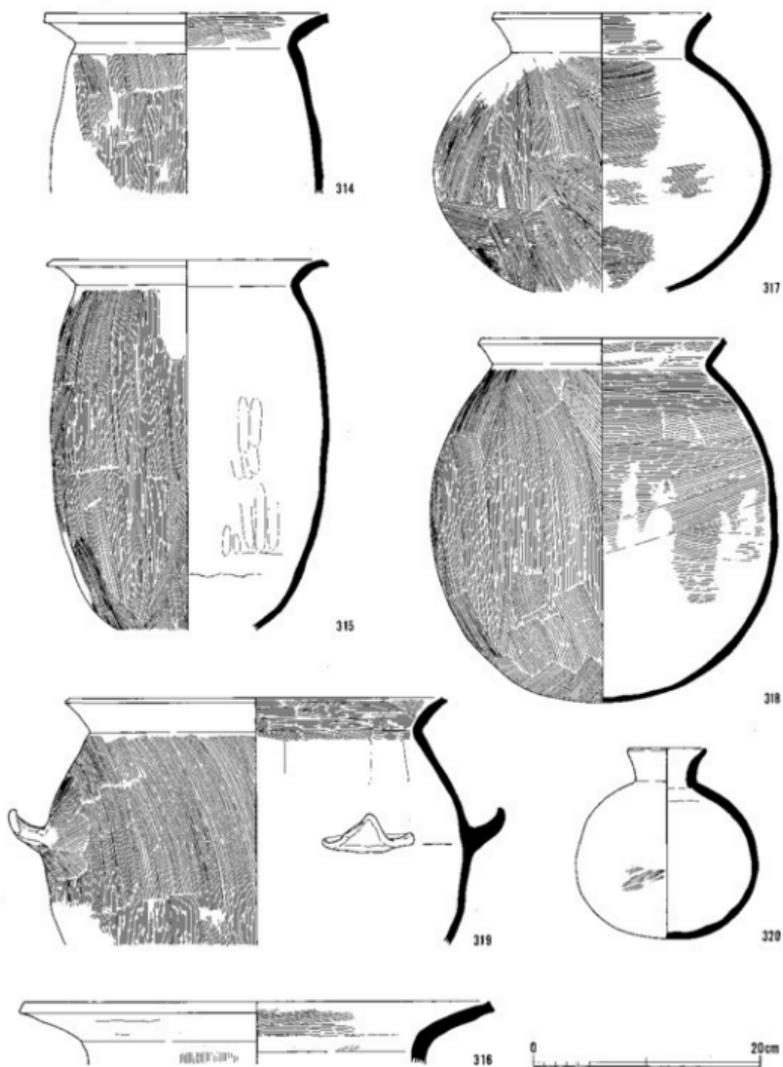
第39图 满NSD-1北半出土土器(7)



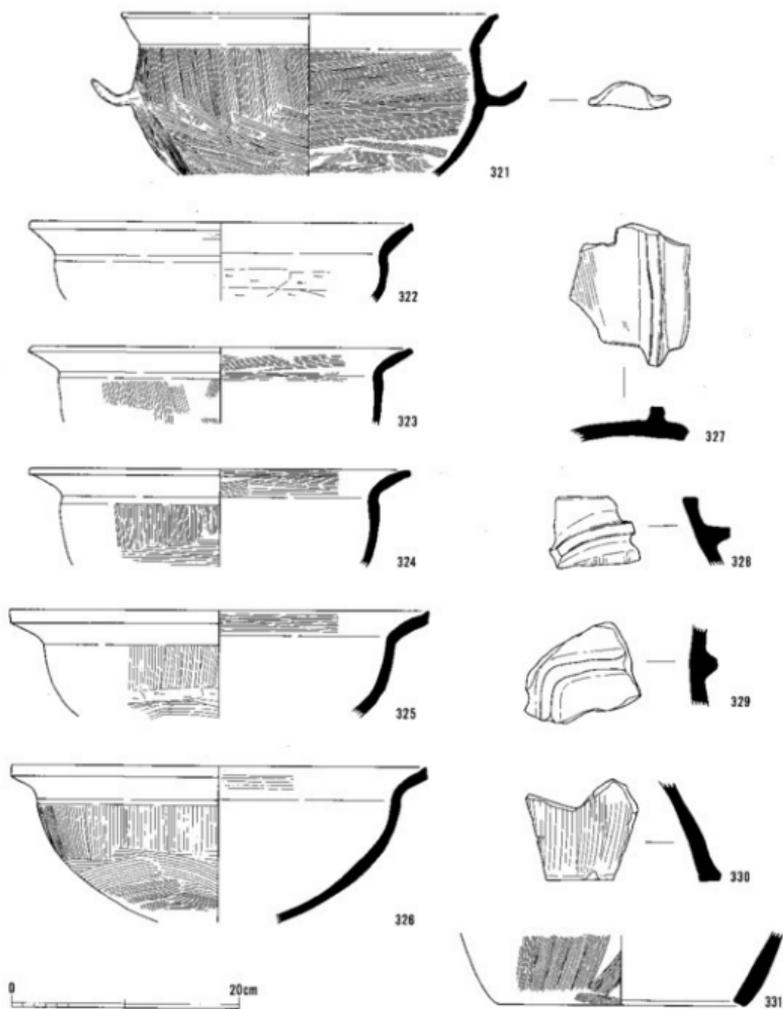
第40图 清NSD-1北半出土土器(6)



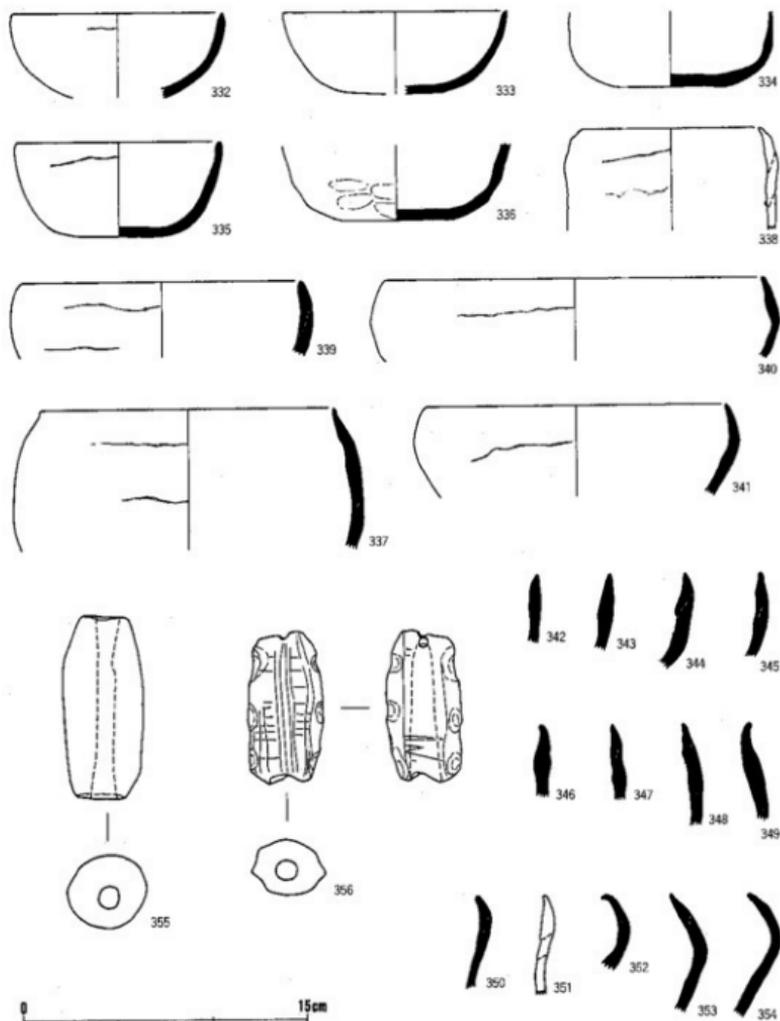
第41图 秦NSD-1北半出土土器(9)



第42图 溝NSD-1北半出土土器(9)



第43图 清NSD-1北半出土土器(1)



第44图 满NSD-1北半出土制埴土器·土製品

製塩土器 A (332~336) は平底の底部に、内彎しながら外上方に伸びる口縁部がつく、碗形の製塩土器である。口径10.5~11.3cm・器高4.4~5.0cm で、全体に丸みを持つもの(332・333)と、底部から屈曲して口縁部が立ち上がるもの(334~336)がある。口縁部のみであるが、(342~346)もこの種の製塩土器である。調整は内面に施すのみで、底部内面が乱ナデ、口縁部内面が横方向のナデである。外面は(332)のように口縁部を横方向にナデるものも見られるが、基本的には成形時のままで、粘土紐の接合痕や、指押さえの凹凸が残る。

製塩土器 B 体部から口縁部が直立する製塩土器で、口縁端部は内傾して、尖り気味になる。口縁部内面は横方向のナデ、体部内面は縦方向にナデており、体部内面のナデの方向によって、製塩土器Aとは区別できる。(338・347・348)があり、(338)は須恵質で、口径約9.3cmである。

製塩土器 C 口縁部のみで全体の形状は不明だが、比較的厚手で口縁部は内傾し、端部は尖り気味になる。(337)は口径約15.1cmで、内外面をナデており、体部内面も横方向にナデている。器高はそれほど高くはないものと思われることから、製塩土器Dとは区別した。(339)もこの種のものかもしれない。

製塩土器 D (340・341)は体部が斜め上方に広がり、口縁部下が屈曲し、口縁部が内傾する、いわゆる砲弾型の製塩土器である。口縁端部は尖り気味になる。口縁部片であるが、(349~354)もこの種の製塩土器と思われる。(340)は口径約20cm、(341)は口径約15.8cmで、屈曲部付近から上は横方向のナデ、以下は縦方向のナデである。

土 製 品

土錘(355)は長さ約9.6cm・径約4.2cmで、中央が膨れた円柱状の土錘である。完形で、孔は貫通している。(356)は長さ約8.0cm・巾約3.9cm・厚さ約2.9cmの土錘で、中央の孔は下端で開口し、そこから徐々に巾を減じ、上端の下で止まっている。孔の先端付近には表面から小孔が穿たれ、この小孔によって土錘の下端から、表面まで貫通した孔を完成させている。土錘上端には小さな円弧状の切り込みが認められる。両側端には、片側3カ所、計6カ所の指押さえが残り、土錘裏面には粗い布目状の圧痕が残る。

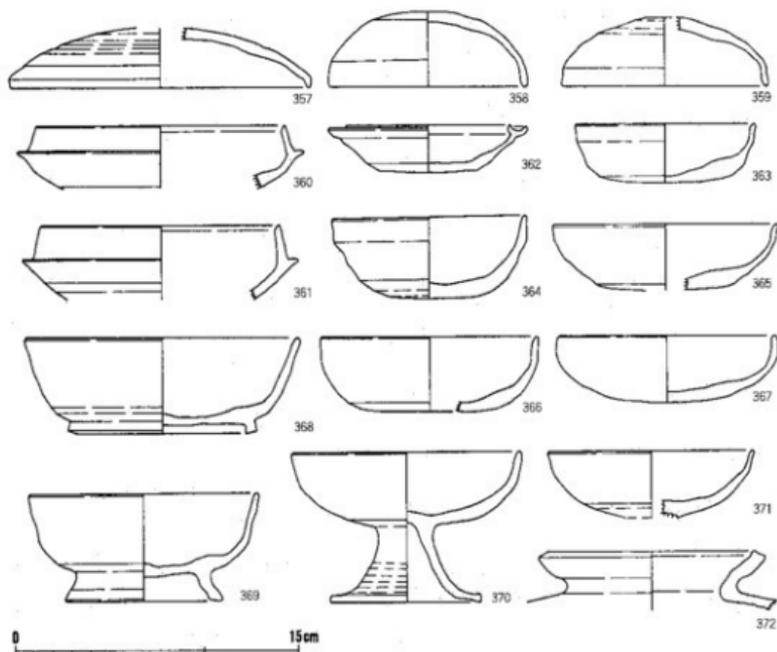
竈 (327~331)は竈と思われる小片である。(327)は正面左側底部、(328)は正面左隅部の庇コーナー部から口縁部まで、(329)は正面左隅部の庇コーナー部、(330)は裾部の破片である。外面は粗い刷毛調整、内面はナデ調整で、庇は貼り付けである。

溝NSD-1 南半出土土器 (第45・46図 図版第28)

須恵器杯H・杯H蓋・杯A・杯B・杯B蓋・杯G・杯I・高杯・横瓶、土師器杯C・高杯・鉢・甕・壺が出土している。北半の土器と比較すると量的に少なく、古い様相を持つものが多い。また器種では土師器類が少なく、土師器杯A・皿Aといった器種はみられない。

須 恵 器

(360・361・362)は杯Hである。(360・361)は口径が大きく、口縁端部に内傾する面をもち、



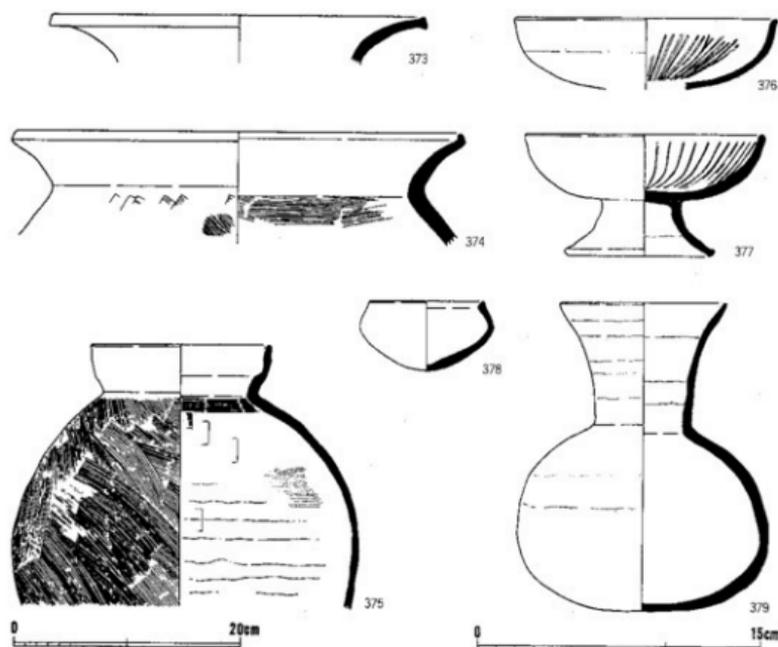
第45図 満NSD-1 南半出土土器(1)

底部外面を篋削りしている。(362)は口径が約8.7cmと縮小し、口縁部の立ち上がりも低く、短くなっている。底部外面は篋切り不調整である。(358・359)は杯Hの蓋で、小型化している。(359)は口径約10.9cmで、頂部は篋削りしている。(358)は口径約10.3cmで、頂部は篋切り不調整である。

(363)は杯Gで、口径約9.4cm・器高約3.1cm。(366)はb形態の杯Aで、口径約11.4cm・器高約3.9cm。

(368・369)は杯Bである。特徴的な(369)は高い高台が付くa形態で、底部が丸く、口縁部は中央付近で僅かに外反する。口径約12.0cm・器高約5.7cmで、高台は約1.7cmと高く、外下方に開いた後、内彎する形状となる。底部外面は篋削りである。(368)は口径約14.4cm・器高約5.0cmで、b形態の杯Bである。

(365・367)はb形態杯Iで、(365)は口径約11.6cm・器高約3.5cm、(367)は口径約11.4cm・器高約3.5cmである。ともに底部は篋切り不調整である。



第46図 満NSD-1 南半出土土器(2)

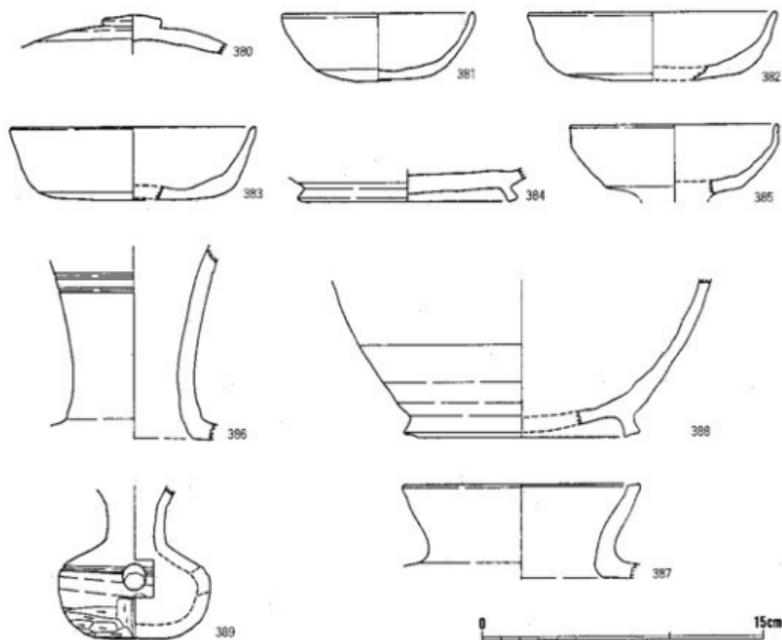
(370・371)は無蓋の高杯で、ともに杯Iに脚をつけたものである。(370)は太い脚柱部で、脚柱部下半から裾部にかけて粗く篋削りしている。口径約12.0cm・器高約7.9cm。(371)は脚柱部を欠失し、口径約10.8cm。

土 師 器

(376)は杯Cで、外面はナデ調整。内面に正放射の暗文が施されている。口径約14.0cm・器高約3.8cm。(377)は高杯で、杯Cに太い、中空の脚部をつけたものである。内面には正放射の暗文が施されている。口径約12.4cm・器高約5.4cm。

(378)は口径約6.0cm、器高3.6cmの小型の鉢で、口縁部は上方に肥厚し、内傾した面をもつ。

(373~375)は甕の口縁部片で、(373)の口縁端部は上下に肥厚して面をもち、(374)の口縁部は上方につまみ上げられる。(373)は口径約20.0cm、(374)は口径約24.0cm、(375)は体部の内外面を刷毛調整している。(375)は口縁部が屈曲する甕であるが、屈曲部の内面は強くナデられている。体部が強く張り、内外面とも刷毛調整するが、内面には粘土紐の接合痕が顕著



第47図 溝NSD-2出土土器

である。(379)は丸底で、球形の体部に長い口頸部がつく、いわゆる長頸壺で、頸部は太く、口縁部は僅かに内彎する。全体に磨滅しており調整は不明だが、内外面に粘土紐の接合痕が確認できる。口径約8.8cm・器高約16.3cm、須恵器の影響を受けたものと思われる。

溝NSD-2出土土器 (第47図 図版第29)

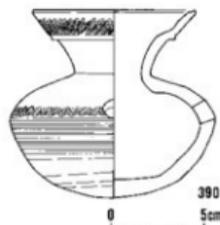
須恵器杯A・杯B・杯B蓋・椀I・壺K・横瓶・甕が出土している。土師器・製塩土器の出土もあったが、小片で固化できなかった。

(382・383)はb形態の杯Aで、(382)は口径約13.0cm・器高約3.6cm、(383)は口径12.8cm・器高約3.9cm。(384)は杯Bの底部、(380)はc形態の杯B蓋である。(381)はb形態の椀Iで、口径約10.0cm・器高約3.6cm。底部は鉋切り後、粗くナデている。(385)は杯Iに脚をつけた高杯であるが、脚部を欠く。口径約11.1cm。(386)は壺Kの頸部の破片で、上端に2条の凹線文が施されている。(387)は横瓶の破片で、口縁部は僅かに内彎して、端部は面をもつ。口径約12.4cm。(389)は体部径約8.0cmの、小型の甕で、口縁部を欠く。肩部に1条の凹線が巡らされ、

底部は手持ち甕削りである。(388)は高台がつく、壺の体部から底部の破片で、底部から体部へはなだらかに内彎して移行する。体部下半は甕削りである。

溝NSD-8出土土器 (第48図 図版第29)

(390)の甕が出土している。偏平で強く張った体部に、外上方に開く、短い頸部がつく。口縁部は頸部から屈曲して外上方に伸び、頸部と口縁部の境には1条の凸帯が巡る。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部と肩部の外面に櫛状波状文が施される。体部は上半がカキ目調整、下半が甕削りで、底部はナデである。口径約8.5cm・器高約10.0cm。



第48図 溝NSD-8出土土器

溝NSD-11出土土器 (第49図 図版第31)

須恵器杯H・杯H蓋・杯B蓋・杯I・椀A・椀I・高杯・平瓶・壺、土師器椀C・高杯・甕が出土している。

(394・395)は杯Hで、(391・393)は杯H蓋である。(391)は天井部と口縁部の境に鈍い稜をもつ。口径約15.2cm・器高約4.5cm。(393)は丸みを帯び、天井部と口縁部の境は僅かに屈曲する程度になっている。口径約14.3cm・器高約4.6cm。(394・395)は大型化し、体部は偏平で、口縁端部は丸くなっている。甕削り範囲も底部のみに止まる。(394)は口径約15.0cm・器高約4.2cm、(395)は口径約14.3cm・器高約4.5cm。(392)は平らな頂部に偏平な宝珠形のつまみがつくもので、杯Bの蓋である。(396・397)は杯Iである。(397)は杯I Iで、口径約11.4cm・器高約3.2cm、(396)は杯I IIで、口径約9.4cm・器高約3.4cm。

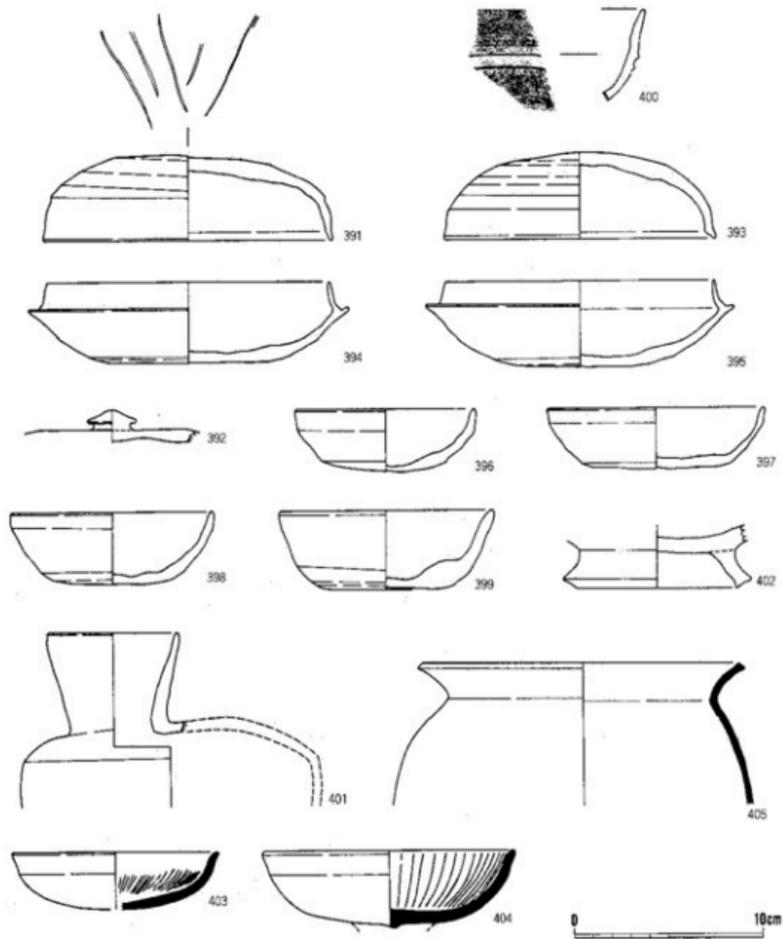
(398・399)は椀で、(398)はb形態の椀Iである。口径約10.6cm・器高約3.8cm。(399)は椀Aで、口径約11.1cm・器高約4.2cmである。(402)は高台がつく壺の底部片で、高台は高く、外にふんばる形態である。(401)は平瓶である。口頸部は外上方に直線的に開き、端部で僅かに内彎する。体部は屈曲し、稜は比較的明瞭である。(400)は無蓋高杯である。体部に2条の凸帯がつき、凸帯の上下は波状文で加飾されている。

(403~405)は土師器で、(403)は椀Cである。外面は口縁部のみをヨコナデし、以下はナデのみである。内面には放射暗文が施される。口径約11.0cm・器高約3.0cm。(404)は高杯で、椀Cに脚をつけたものであるが、脚部を欠く。内面には正放射暗文が施される。(405)は甕Bで、口縁部は端部をつまみ上げたb形態である。口径約22.5cm。

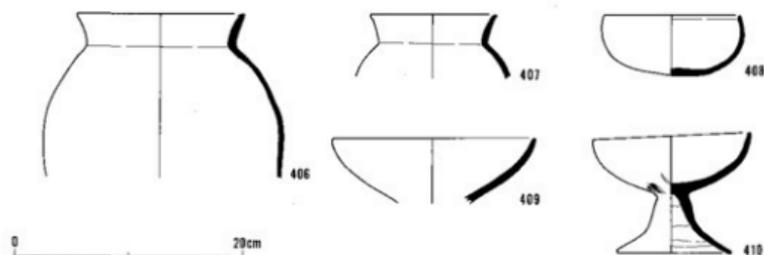
包含層出土土器 (第50・51図)

須恵器杯A・杯B・杯B蓋・杯G・杯G蓋・杯I・椀I・壺C・壺L・甕・横瓶、土師器椀C・高杯・甕が出土している。

(415)は杯Gで、(411・414)は杯G蓋である。(415)の底部外面は甕削りで、口縁部はほぼ直立する。口径約8.3cm・器高約3.4cm。(411・414)は内面にカエリがつく蓋Cで、(411)はカ



第49图 满NSD-11出土土器



第50図 包含層出土土器(1)

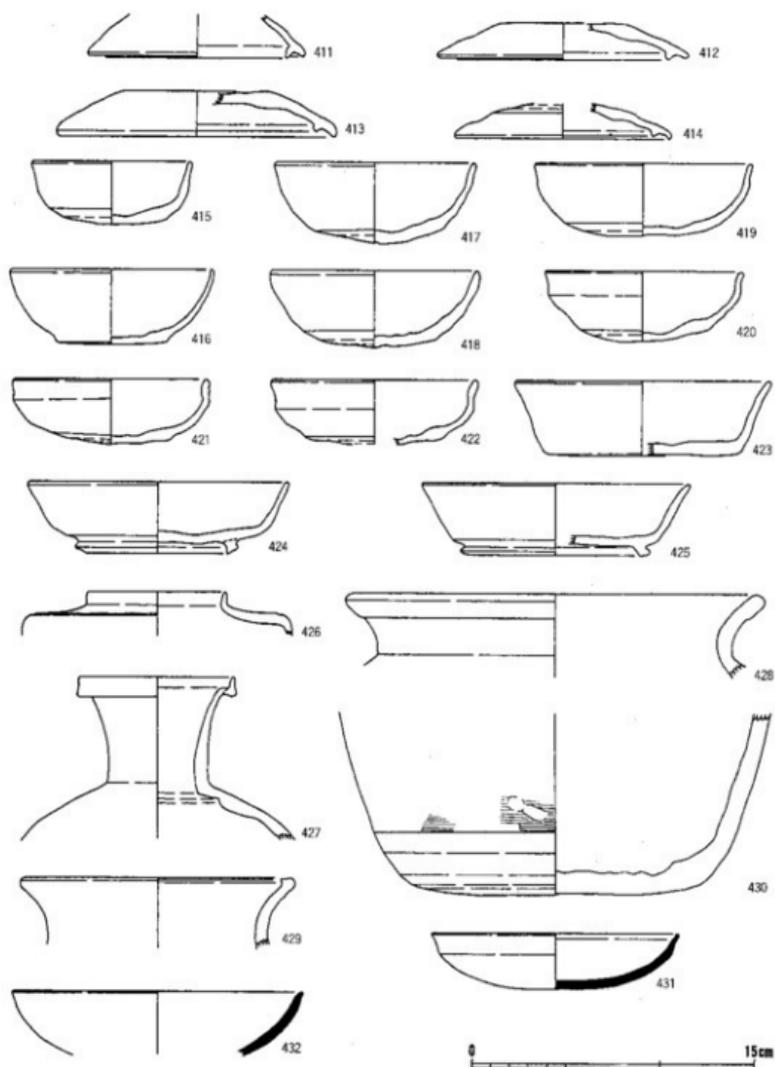
エリが縁部より僅かに下方に突出し、口径約9.5cm。(414)は全体に偏平な器形で、カエリも退化している。口径約11.4cm。(423)はc形態の杯AⅢで、口縁部は大きく外反する。口径約13.4cm・器高約3.9cm。(424・425)は杯BⅢで、(424)はb形態、(425)はd形態である。(424)は口径約13.8cm・器高約3.9cm、(425)は口径約14.2cm・器高約3.8cmである。(412・413)は杯B蓋で、内面にカエリがつく蓋Cである。(412)はカエリが縁部とほぼ同じ位置まで伸び、(413)のカエリは退化している。(412)は口径約13.0cmで杯BⅣ蓋、(413)は口径14.6cmで杯BⅢ蓋である。(420~422)は杯IⅡで、(420)はa形態、(421・422)はb形態である。(420)は口径約10.3cm・器高約3.7cm、(421)は口径約10.2cm・器高約3.5cm、(422)は口径約10.8cm・器高約3.5cmである。(416~419)は椀IⅡで、(417・418)はa形態、(419)はb形態、(416)はc形態である。(416)は口径約10.6cm・器高約4.0cm、(417)は口径約10.5cm・器高約4.8cm、(418)は口径約10.9cm・器高約4.2cm、(419)は口径11.4cm・器高約4.3cmである。

(426)は壺Cで、肩が強く張った体部に直立する短い口縁部がつく。肩部に1条の凹線文が施される。(427)は丸みをもつ肩部に、長い口頸部がつく壺Lで、口縁部は屈曲する。口径8.2cm。(428)は甕Bの口縁部片で、口縁部は肥厚して端部は丸く納められる。口径約21.4cm。(429)は横瓶と思われる口頸部の破片である。口縁端部は内側に肥厚する。口径約14.0cm。(430)は壺の底部片で、底部周囲を笕削りし、体部下半には刷毛目が認められる。

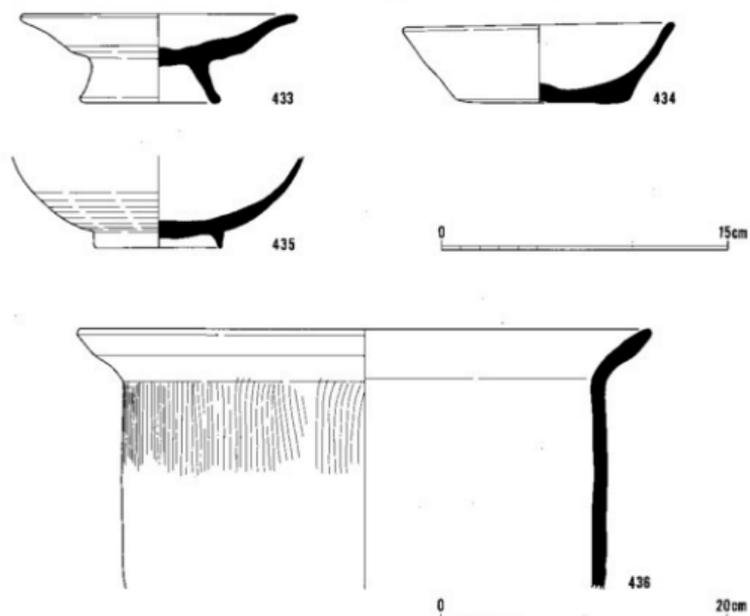
(431・432)は土師器碗Cである。(431)は小さく平らな底部で、口径に対し器高が浅い器形である。口縁端部は僅かに内側に肥厚する。口縁部外面がヨコナデで、以下は雑にナデのみである。口径約12.1cm・器高約3.0cm。(432)は口径15.3cm。

C. 平安時代後半～鎌倉時代の遺物

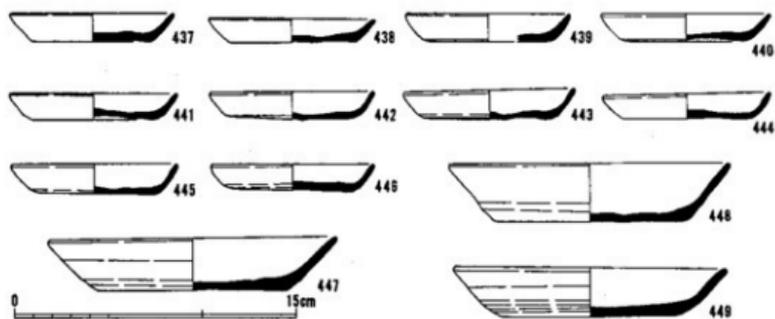
土師器・瓦器・陶器・磁器が出土している。掲載した以外には須恵器鉢等があるが、須恵器椀・皿は認められない。全体的な量が南地区と比較すると少ないことから、分類は南地区にしたがった。器種比率では土師器が圧倒的に多い。



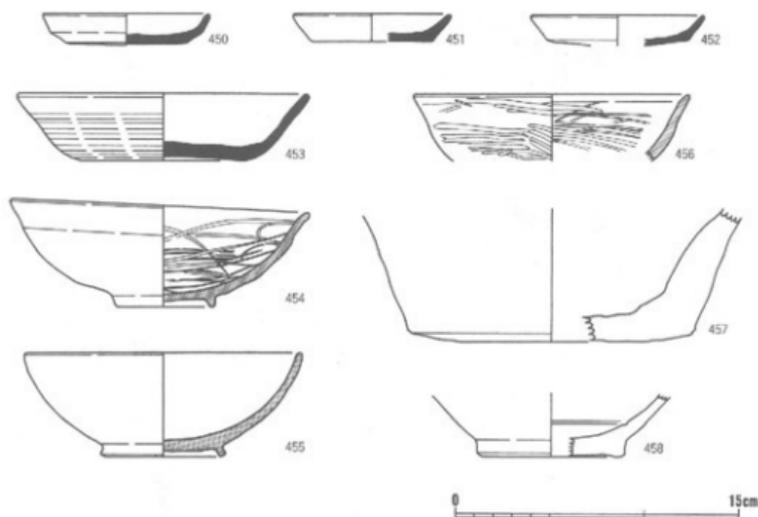
第51图 包含層出土土器(2)



第52図 建物址NSB-2・3出土土器



第53図 土壇NSK-3出土土器



第54図 溝NSD-4・5・15・16出土土器

建物址NSB-2出土土器 (第52図 図版第31)

(433~435) の土師器台付皿・杯・碗が出土している。(433) は底部が糸切りで、口縁部が外反した浅い皿に高い高台状の台をつけたもので、口径約14.6cm・器高約4.7cm。(434) は底部から屈曲して直線的に口縁部が伸びる杯で、底部は糸切りである。口径約14.0cm・器高約4.2cm。(435) は口縁部を欠く碗で、高台は輪状で、直立し、断面は三角形となる。

建物址NSB-3出土土器 (第52図)

(436) の土師器甕が出土している。体部下半から底部を欠くが、体部はほぼ直線的に下がり、口縁部は屈曲して外反する。端部は丸い。口縁部は内外面をヨコナデし、体部内面はナデ、体部外面は目の粗い刷毛調整である。口径約39.8cm。

土壇NSK-3出土土器 (第53図 図版第31)

土師器皿類が一括して出土している。(437~446) は口径8.6~9.0cm・器高1.3cm~1.6cmの小皿類で、口縁部が底部から屈曲し、厚さを徐々に減じていくもの(437~441)、底部と口縁部の境が丸みを持ち、口縁部が端部で肥厚するもの(442~446)がある。底部はいずれも糸切りである。(447~449) は口径14.4~15.0cmの皿類で、杯との区別が困難な器形である。底部から屈曲して口縁部が直線的に伸びる(447・448)、底部と口縁部の境が丸みをもつ(449)がある。底部は糸切りで、体部下半から底部周囲が強くナデられる。

溝NSD-4出土土器 (第54図)

(453・454)の土師器杯と瓦器椀が出土している。(453)は口径約15.1cm・器高約3.6cmで、底体部の境は丸みもち、口縁部は外反している。底部外面は糸切りで、口縁部は強い回転ナデで、凹凸がみられる。(454)は口径約15.9cm・器高約5.4cmの瓦器椀で、口縁部は外反し、高台は丸みもつが、断面台形状である。内面は暗文状に篋磨きされ、外面は口縁部がヨコナデ、体部はナデである。

溝NSD-5出土土器 (第54図)

(452)の土師器小皿は底部と口縁部の境が屈曲し、口縁部はやや内彎する。口径9.2cm・器高約1.6cmで、底部は糸切りである。(456)の瓦器椀は口径約14.4cmで、口縁部は直線的に伸びる。内外面とも篋磨きされる。(457)は須恵器甕の底部で、底部外面は不調整である。体部に指押さえ痕が残る。(458)は白磁椀の底部で、底部外面の扱りは浅く、露胎である。内面の見込み周辺に圈線を巡らしている。

溝NSD-15出土土器 (第54図)

(450・451)の土師器小皿が出土している。(450)は底体部の境がナデられ、口縁部が屈曲したような形状を呈する。口径約8.7cm・器高約1.7cm。(451)は口縁部が底部から屈曲して直線的に開くもので、口径約8.2cm・器高約1.5cm。

溝NSD-16出土土器 (第54図)

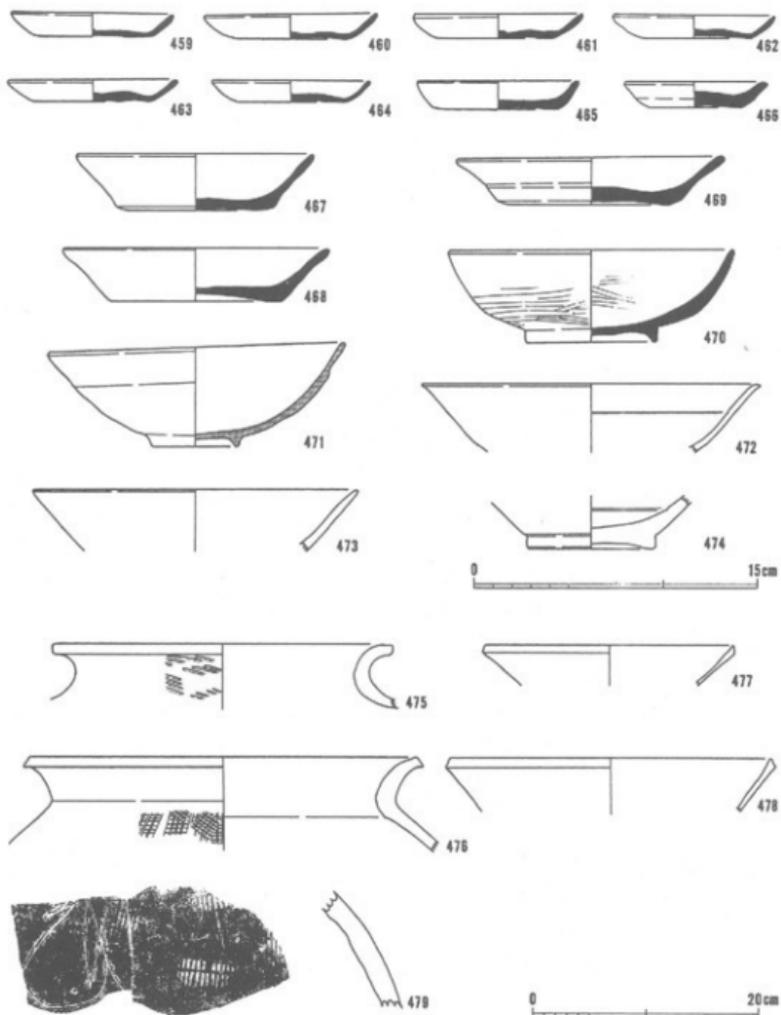
(455)は黒色土器椀で、底部から口縁部にかけて内彎し、全体に丸みをもつ。底部の高台は断面方形で、外下方に開く。内外面とも篋磨き。口径約14.5cm・器高約5.5cm。

包含層出土土器 (第55図)

土師器杯・皿・椀、須恵器鉢・甕、瓦器椀、白磁椀、青磁椀、常滑焼の甕が出土している。

(467)は土師器杯で、底部は篋切り、口径は約12.3cm・器高約3.0cmである。(459~466)は小皿類である。口径8.2~9.0cm・器高1.1~1.3cmで、器壁が薄い(459~464)、器壁が厚い(465・466)がある。(459~464)は口縁部が開き、底部の糸切り範囲も狭くなっている。近世の墓塚から出土したものに形態が類似している。器壁の厚い(465・466)の内、(465)は口径約8.4cm・器高約1.5cmで、底部は離し糸切りである。(466)は口径7.3cmと小型であるが、器高は約1.5cmである。底部は糸切り。(468・469)は土師器皿で、ともに底部は糸切りである。(468)は口径約13.8cm・器高約2.8cm、(469)は口径約14.0cm・器高約2.6cmである。(469)は口縁部の中に強いナデが残る。(470)は土師器椀で、底部に輪高台がつく。口径約15.0cm・器高約4.9cm。内外面に篋磨きが残る。

(477・478)は須恵器鉢である。(477)は口径約21.8cmで、口縁端部は僅かに上方につまみあげられる。(478)は口径約28.2cm、口縁端部は下方に拡張される。(475・476)は須恵器甕で、(475)は口径約30.0cm、口縁部は横方向に開き、端部は面を持つ。端部上面は強いナデによ



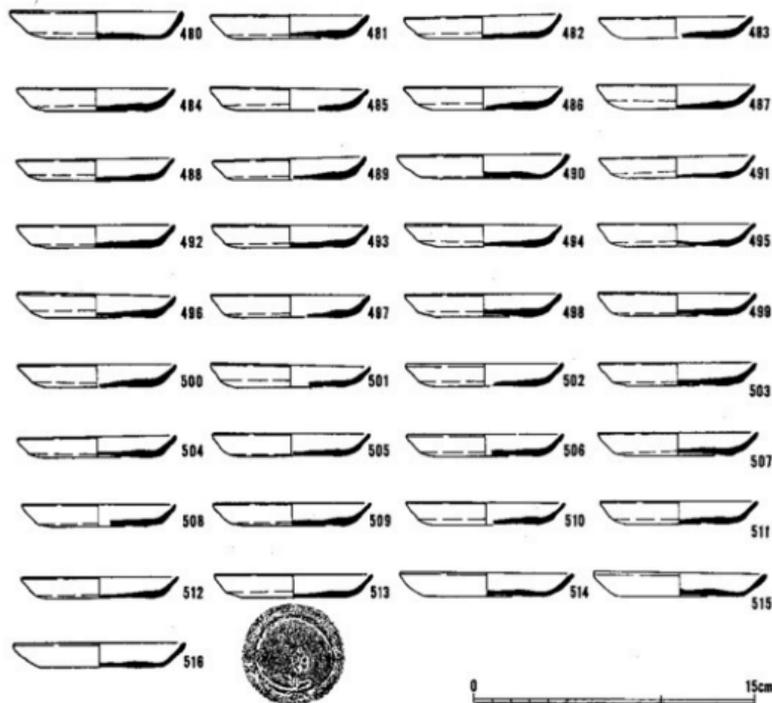
第55图 包含層出土土器

て凹線状に窪む。口縁部外面に右下がりの平行叩きが残る。(476)は口径約34.2cmで、口縁部は下方に拡張され、面を持つ。体部外面には格子叩きが残る。

(471)は瓦器碗で、口径約15.7cm・器高約5.3cmである。口縁部はヨコナデによって外面が窪むが、外反はしない。底部の高台は端部が丸くなった台形状である。内面は磨き、体部外面は指押さえである。

(472・474)は白磁の碗で、(472)は口縁部が短く外反した、端反り碗である。(474)は白磁碗の底部で、見込み部に圏線が施されている。底部の外面は露胎で、抉りは浅い。(473)は青磁碗である。口径約17.0cmで、外面に蓮弁文状のものが見られるが、不鮮明ではっきりしない。

(479)は甕の肩部片であるが、外面の一部に格子叩きが残ることから、常滑焼と思われる。また外面に窠で「武」が刻まれており、武石入りの甕と思われる。



第56図 近世墓出土土器

d. 近世の遺物（第56図）

墓塚、現代まで使用されていた水路等を中心に出土している。その内、溝NSD-18と切り合った墓塚から出土したのが、(480~516)の土師器小皿である。器壁は薄く、焼成は比較的堅緻である。底部はすべて糸切りであるが、その範囲が3.9cm前後と狭く、糸の目も比較的密である。口径が8.1~8.4cm・器高1.1~1.3cmの小型のものと、口径が9cmを越し、器高が1.3~1.4cmのものがある。形態的には(480)のように口縁部が立ち上るものもあるが、他は全て口縁部が斜め上方に開くものである。

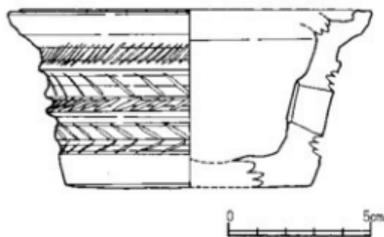
3. 陶 硯（第57図 図版第23）

硯類は1点のみの出土で、他に転用硯等も見られず、また墨書土器の出土もない。

把手付中空円面硯 (268) は把手付中空円面硯である。硯部の径約12.8cm・器高約6.3cmで、この種の陶硯としては大型である。把手を欠くが、硯側中央に径約1.6cmの孔が穿たれており、孔の周囲に巾約0.6cmの剥離痕がみられることから、把手がついていたことは確実である。硯側の孔は下向きに穿たれている。

硯側と外堤の屈曲部内面を粘土板で閉塞して硯面としたもので、硯面は径約11.4cm。陸部を欠くが、剥離面が外傾していることから、陸部は海部から斜め上方に立ち上がっていたと考えられ、硯面は山形か凸形であったと思われるが、海部の内側の立ち上がり方からみて、凸形硯面であった可能性が高い。

硯台は底部の中央を欠くが、底部は平らで、硯側は斜め上方に直線的に伸び、その上端を外側に屈曲させ、外堤としている。外堤の上端は中央が僅かに窪んだ凹面となっている。硯側には5条の凹線文が施され、そこに篋状工具による列点文が施されている。底部外面はナブ調整である。杯・椀に類似する器形がないことや、器壁の厚さ、側面の文様などから、当初から硯としての用途を意識して製作されたことは確実である。



第57図 溝NSD-1出土陶硯

4. 金属製品(第58・59図 図版第7・39)

出土した金属製品の点数は僅かであるが、青銅鏡、鉄斧、鉄鏃、用途不明鉄製品がある。

青銅鏡 D-11区の溝NSD-1の南肩部から出土したものである。埋納施設といったものではなく、鏡面を上にし、南が高く、北に低くなった斜めの状態で出土している。上層を被うのは平安時代前半の緑釉陶器を含む灰褐色シルトで、鏡の下層は弥生土器・土師器の小片を含む黒褐色砂層と黄褐色シルトが混じった層であった。

出土した青銅鏡は仿製内行花文鏡で、円座鈕形式の六花文鏡にあたる。小型で、面径約8.5cm、縁での厚さ約2.7mmをはかる。鏡面は凸面であるが、中央はほ

ぼ平らで、縁が反る形態である。鏡背は中央の鈕を中心に円形の鈕座、内区、櫛歯文帯が配されて縁となる、単純な形式であるが、錆上がりの悪さからか、鏡背全体に丸みを帯びる。

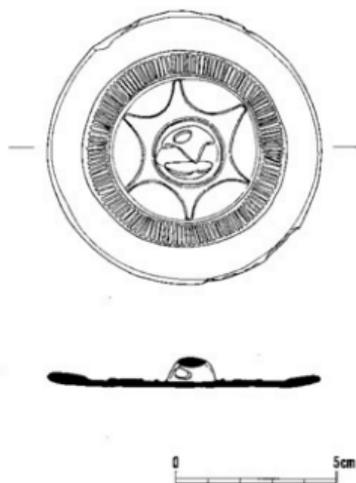
中央の鈕は径約1.55cm・高さ約0.8cmで、径約0.6cmの鈕孔が設けられている。ただ鈕孔は片側の壁が欠けおり、完成後に側面から径約0.5cmの孔を穿って、新たな鈕孔としている。この鈕孔の壁の欠けた状態を使用による磨滅と見られなくもないが、鈕孔の欠けた部分が鈕の頂部よりやや下がった側面となっていること、欠け方が左右均等で、残った側面が二等辺三角形状となっていること、鏡全体が丸みを帯びること、花卉文・櫛歯文にも文様の不明瞭な部分があること等から、鈕孔の欠けは錆上り状態の悪さから生じた結果によるものと思われる。

鈕座は円形で、内区とは円圏で区画される。内区は巾約1.15cmで、6個の花弁文が配されている。花弁文はそれぞれの大きさ・形が異なっていることから、手描きによるものであろう。

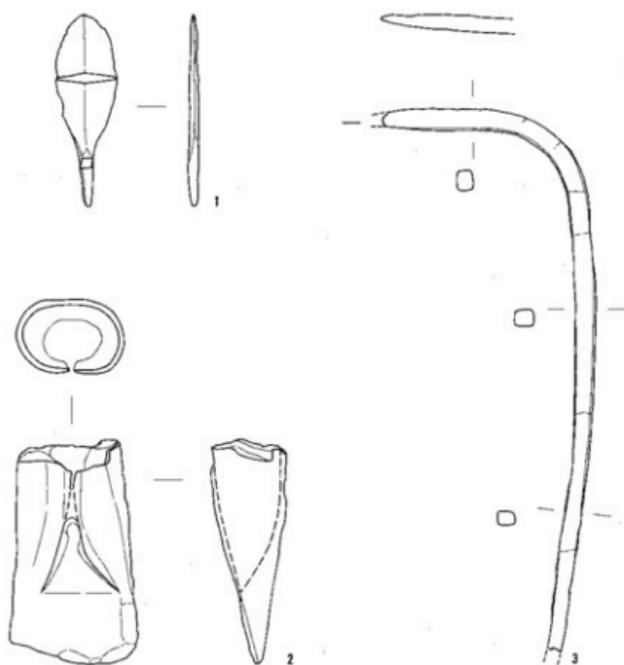
内区の外側には櫛歯文帯が配され、櫛歯文帯の巾は約0.9cmである。櫛歯文帯と内区は円圏で区画され、櫛歯文は円圏に直角方向に描かれている。また櫛歯文は4本を1単位とする。

縁は巾約0.9cmで、平坦な平縁で、縁端部は丸くなっている。

鉄斧 溝NSD-1から、飛鳥時代～平安時代の土器とともに出土したものである。基部と刃部の1/2を欠くが、長さ約8.0cmで、刃部巾約4.5cm、柄孔部分での厚さ約2.6cmである。1枚の



第58図 青銅鏡



第59図 金属製品

鉄板を折り曲げた鍛造品で、刃部は基部から僅かに広がる。広がり方は直線的である。柄孔部分には柄と思われる木片が残る。

用途不明品 溝NSD-1から、飛鳥時代～平安時代の土器・製塩土器とともに出土したものである。

長さ約27cmのL字形を呈する棒状の製品で、鍛造品である。断面は最も太い部分で、巾1.0cm・厚さ0.85cmの方形を呈する。両端を欠損しているが、短い部分の先端は表裏から薄くなり、巾も先端に向けて減じていることから、ここが刃部状になっていたものと思われる。

第4節 小 結

北地区は地形的には溝NSD-1付近を境にして、西側の台地上に当たる地区と、東側の沖積地に当たる地区に分かれ、その境にはNSD-1・2等の溝が南から北に流下している。遺構検出面は台地上にあたる地区では1層で、黄褐色シルト上面である。この層は南西隅が高く、そこから溝NSD-1に向けて徐々に低くなり、沖積地に当たる地区ではこの層上に数枚の土層が堆積している。沖積地に当たる地区での遺構検出面は黄褐色シルト上に堆積した灰褐色シルト上で、上面は南西から北東方向に傾斜をもっているが、見た目にはほとんど傾斜のないくらい、緩い傾斜である。ただ検出される遺構数は僅かで、密度も粗となっている。

検出された遺構は①弥生時代後期～古墳時代前期、②古墳時代中期、③古墳時代後期～平安時代前半、④平安時代末～鎌倉時代に属するものがある。

①・②の時期の遺構は台地上に当たる地区の黄褐色シルト上面で検出され、①の時期の遺構は竪穴住居址NSH-1、土壌NSK-1、溝NSD-3・6・7・9・12・17がある。NSH-1は出土遺物から弥生時代後期前半、NSK-1は弥生時代後期後半、NSD-7が弥生時代後期末、NSD-3が古墳時代前期（布留式段階）に属するものである。これ以外の溝は時期を明確にできる遺物は出土していない。また上記の遺構以外に溝NSD-1・2の下層から弥生時代後期前半から後半の遺物が出土している。

②の時期のNSD-18は北層は検出できなかったが、南地区のSSD-1から続くものであり、本遺跡に須恵器が導入される直前の時期の遺構と考えられる。

③の時期は、遺構が検出される範囲が前代の①・②の時期より広がり、台地上から下りた沖積地でも検出されるようになる。台地上での遺構検出面は前代と同様であり、沖積地での検出面は灰褐色シルト上面であった。検出された遺構には建物址2棟(NSB-1・5)、土器群1・2、溝4条(NSD-1・2・8・11)がある。この内、2棟の建物址は時期を明確にできる遺物が出土していないため、この時期に比定することには疑問も残るが、NSB-1から僅かではあるが、高台がつく杯Bが出土していることから、NSB-5は④の時期の遺構とは柱穴の埋立が異なること、建物の方向性が異なることから、この時期に含めている。

4条の溝の内、NSD-1・2は台地の縁を巡って、南から北に流れるものである。NSD-1はこの時期の全期間に及ぶ遺物を出土している。ただ古墳時代後期後半(6世紀後半)の遺物は見られない。またNSD-8を切った付近から北側と南側では遺物の出土状態に大きな違いが認められている。南側は中層に礫を含み、遺物も自然流入に近い形で出土しているのに対し、北側では炭化物・灰とともに、製塩土器・土師器・須恵器が多量に投棄されていた。また出土した遺物の時期も南半が奈良時代以前のもので、平安時代の遺物は見られないのに対し、北半では平安時代前半までに及ぶ遺物が出土している。これは溝の北半が南半より永く開口し

ていたためと思われる。

NSD-2もNSD-1と並行して台地の縁を流れる溝であるが、北端は現代の溝と重なって検出できなかった。途中で2本に分岐するなど、人工的というよりは自然の流路と捉えられる溝である。③の時期でも、飛鳥時代～奈良時代前半の遺物が出土しており、並行するNSD-1より短期の溝と考えられる。

この他の溝の内、NSD-8は古墳時代後期前半の短期間に廃絶する。NSD-11は他の溝とは方向性が異なり、ほぼ東西に流れる溝で、おそらく西から東に流れていた溝と思われる。溝底から古墳時代後期中半の遺物が出土し、上層から飛鳥時代前半（7世紀前半）頃の遺物が出土していることから、古墳時代後期に掘削され、飛鳥時代前半には廃絶したものであろう。

④の時期の遺構は調査区のほぼ全域に広がり、台地上での遺構検出面は黄褐色シルト上面であるが、埋没したNSD-1上でも遺構が検出されている。検出された遺構には建物社NSB-2～4、土壌NSK-3、溝NSD-4・5・15・16がある。この他、台地上に当たる地区からは柱穴が検出されているが、建物址あるいは構として捉え切れなかった。

NSB-2・3は南北に並立した建物で、2棟で1軒を構成していたものと思われる。NSB-2には南東隅に入口とおもわれる施設の柱穴も検出されている。2棟の時期は、出土した遺物が年代の決め手を欠くことから決定しがたいが、杯が窠切りであることから、10世紀代の後半を考えておきたい。NSK-3は南地区SSD-3出土の土師器に類似し、巾が広いが、一応11世紀後半～13世紀前半を考えておきたい。NSB-4は時期の決め手を欠くが、NSK-3と同時期としておく。溝の内、NSD-4・5は並行する溝であるが、NSD-5出土の瓦器は内外面を笥磨きするのに対し、NSD-4出土の瓦器は外面の磨きが省略されて新しい様相を持つ。またNSD-5出土の土師器は形態的にNSK-3より古く考えられる。SD-16は黒色土器の羅年観から11世紀が考えられよう。NSD-15は小皿のみの出土で、詳細な時期の決定はできない。

こうした遺構の他に、今回の調査では多量の遺物が出土している。遺物は①・②・③・④の時期のものを中心とし、それ以外にも、少量の縄文時代後期～弥生時代中期、今回の調査では特に取り扱わなかったが、安土桃山時代から江戸時代全般にわたる遺物も出土している。①～④の時期の遺物については後述する。

これら北地区で出土した遺物の内、特徴的なものは、溝NSD-1の肩部で出土した仿製内行花文鏡である。この種の鏡は古墳の副葬品としての出土例が多く、集落内からの出土は極めて少ない。観見する限りでは滋賀県下に2～3例ある程度である。

土器類は多量に出土しているが、一括遺物は少ない。その中で堅穴住居土NSH-1の上層から出土した遺物は弥生時代後期前半を特徴づけるもので、淡路地方において初めて、当該時期の一括資料を得た。また土壌NSK-3出土土器も、平安時代末～鎌倉時代の一括土器である。

第4章 南地区の調査

第1節 調査区の概要

遺跡は北西方向から弧状に張り出してくる台地の先端に当たり、南地区はその台地端の南半分である。調査区は平面直角三角形を呈し、南北方向約110m、東西方向約38mである。

調査前の土地は北端の三角形の部分が宅地、その他は水田として利用されていた。

発掘調査の結果、南地区では北端の隅部分が最も標高が高く、南方にかけて徐々に高度を減じているが、南北方向の傾斜よりも東西方向の傾斜の方が強く、調査区内では東隅部分が最も標高が低く、その比高差は約45mの距離で約2.3mの差がある。また、南北方向では約58mの距離で約1.7mの比高差となっている。

遺構は台地の等高線に沿うように古墳時代の溝、およびやや南東に下ったところには平安時代の溝が掘削されていた。

遺構は弥生時代後期～鎌倉時代のものを検出したが、大きく弥生時代後期、古墳時代中期～奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代に分けることができる。これらの遺構のうち、前2者は南地区の北半分に存在し、これらを下層遺構として第60図に示した。弥生時代後期の遺構としては堅穴住居址を合計3棟（円形2・方形1）検出し、土壌を2基検出した。すべて調査区北西端で検出し、遺構の大部分は西側に広がっている。また、弥生時代後期の遺構は溝SSD-1を越えては見つかっていない。溝の東側北部にピットが少量検出されているが、これらは古墳時代後期～奈良時代に属するものと考えられる。

古墳時代中期～奈良時代のものでは、掘立柱建物跡1棟（SSB-1）と南北方向に伸びる溝（SSD-1）および東西方向の溝（SSD-5）を検出している。構築順としてはSSD-1が最も古く、溝廃絶後SSB-1とSSD-5が構築・掘削されている。調査区東部に南西～北東方向の溝（SSD-8～10）が伸びており、本時期に属するものと思われるが、良好な遺物の出土を見ないため、時期決定には不安を残す。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構は最も多く、調査区全体に存在している。これらを上層遺構として第61図に掲げた。溝（SSD-3）が調査区南方にあり、その他の遺構は本溝よりも北側に存在している。それらには再利用された溝（SSD-5）、多数のピット、櫛列、土壌墓、壺棺墓、土壌等がある。それらの多くはほぼ同時に存在していたものと考えられる。

以上述べた遺構のうち、上層としたものは調査区北部では弥生時代と同じ遺構面（黄褐色シルト）上で検出され、その上層の黒褐色シルト（第62図上11層）が弥生時代～鎌倉時代までの遺物包含層となっている。南に下がるにつれ、黒褐色シルトが途切れ、その上層に灰褐色シルト

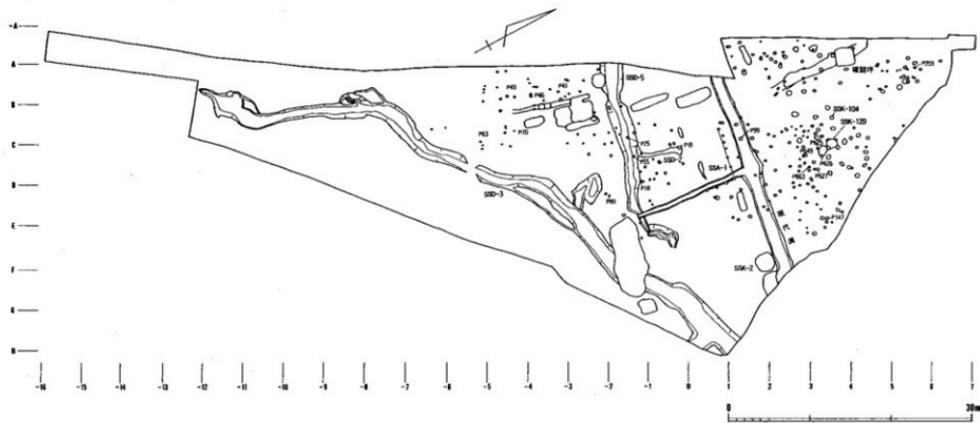
ト（第63図16層）や乳灰色シルト（第62図下11層，第63図10層）が堆積しており，それらが平安時代後期～鎌倉時代の遺物包含層となっている。調査区北部以外でのこの時代の遺構面は乳灰褐色シルト（第62図下14層，第63図38層）であった。

下層遺構の遺物包含層は，調査区北部以外では上層の遺構面である乳灰褐色シルトおよびその下層の灰褐色シルト（第62図下15層，第63図39層）とその下の暗黒褐色シルト（第62図下16層，第63図40層）であった。時代は弥生時代後期～奈良時代というかなりの時間幅があるにもかかわらず，遺物は各時代のものが各層で混在して出土しており，土層による時期別の把握はできなかった。

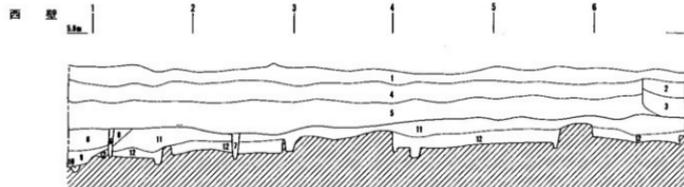
下層の遺構はほとんどが包含層の下の黄褐色シルトで検出した。あるいは，分層発掘を行えば時代ごとで遺構面をおさえることもできたかもしれないが，実施できなかった。したがって，下層の遺構面は調査区全面にわたって黄褐色シルトであった。調査区中央部西半では本層の中に黄色の礫を多く含む層（黄褐色砂礫層）が盛り上がっており，この上面が遺構面となっていた。



第60図 南地区下層遺構全体図

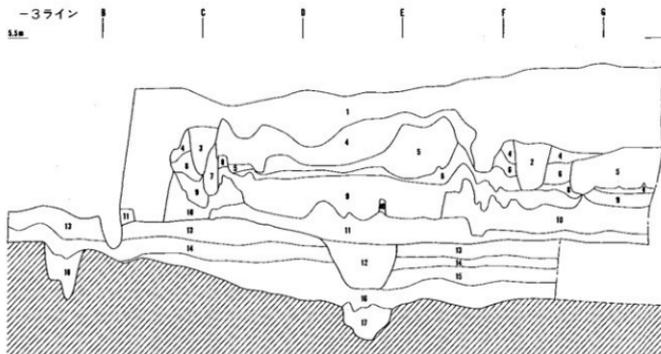


第61图 南地区上層遺構全体図



西壁土層断面図

1. 褐色土(粘土)
2. 淡灰色シルト
3. 灰色粘土
4. 黄灰色シルト
5. 灰黄色シルト(粘土)
6. 薄灰褐色土
7. 細灰褐色土
8. 黒褐色シルト(砂質)
9. 黒褐色シルト(やや砂質)
10. 淡灰褐色シルト
11. 黒褐色シルト(やや粘質)
12. 淡灰褐色シルト



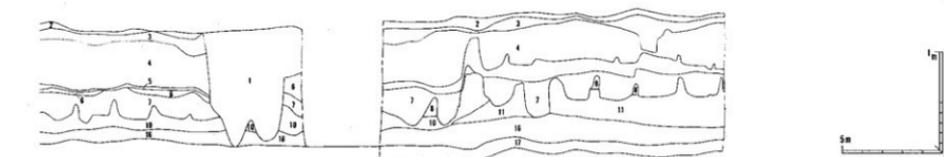
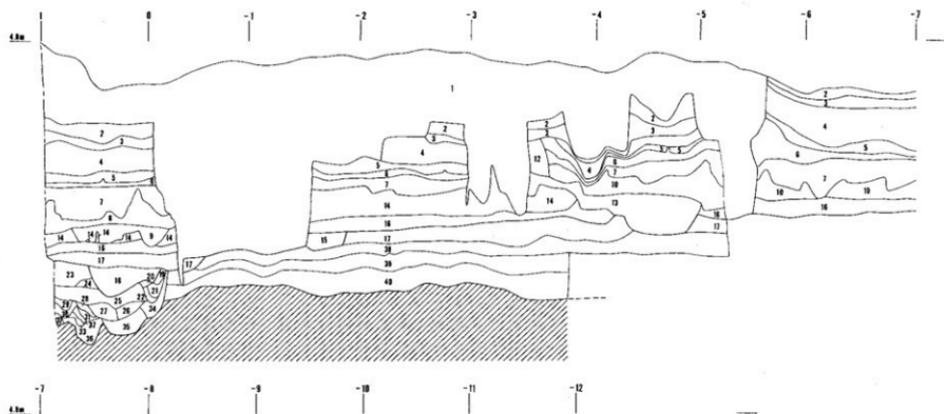
-3ライン土層断面図

第62図 南地区西壁・-3ライン土層断面図

1. 薄灰褐色土(埋瓦)
2. 灰-赤粘-黒褐色砂礫(大礫多く含む)
3. 灰黄色シルト(中粒砂-褐色小礫混り)
4. 黄褐色シルト(中粒混り)
5. 灰-赤褐色砂礫(礫少量)
6. 灰褐色シルト(砂質混り)
7. 灰-赤粘-黒褐色砂礫(大礫多く含む)
8. 乳灰色シルト
9. 灰-赤褐色砂礫(シルトブロックあり)

10. 乳灰色シルト
11. 乳灰色シルト(鉄分混入)
12. 乳灰色シルト
13. 黒褐色シルト
14. 乳灰色シルト
15. 灰褐色シルト
16. 黄褐色シルト
17. 黒褐色シルト
18. 灰褐色シルト





- | | | | |
|-----------------|---------------|-------------------|---------------|
| 1. 攪乱および客土 | 11. 黄灰色シルト | 21. 褐色粘砂礫 (褐色礫含む) | 31. 灰色砂 |
| 2. 粘土 | 12. 明黄褐色砂礫 | 22. 淡灰褐色砂 | 32. 黒灰褐色粘質シルト |
| 3. 粘土 (黄灰褐色シルト) | 13. 青灰-赤褐色砂礫 | 23. 褐色シルト | 33. 灰色砂 |
| 4. 褐色砂礫 | 14. 黄灰-黄褐色シルト | 24. 赤褐色シルト | 34. 黒乳灰色粘質シルト |
| 5. 黄褐色砂礫 | 15. 淡灰褐色シルト | 25. 乳灰褐色シルト (砂質) | 35. 明灰褐色砂礫 |
| 6. 灰青色シルト | 16. 灰褐色シルト | 26. 黒乳灰色粘質シルト | 36. 黒乳灰色粘質シルト |
| 7. 灰緑-黄褐色砂礫 | 17. 灰褐色シルト | 27. 灰褐色砂 | 37. 黄黄褐色シルト |
| 8. 灰色シルト | 18. 灰褐色粘質シルト | 28. 褐色粘砂礫 (炭多く含む) | 38. 黒灰褐色シルト |
| 9. 黄褐色砂礫 | 19. 明灰褐色粘質シルト | 29. 褐色シルト | 39. 灰褐色シルト |
| 10. 乳灰色シルト | 20. 明灰褐色粘質シルト | 30. 黄黄褐色砂礫 | 40. 黒黄褐色シルト |

第63図 南地区東麓土層断面図

第2節 遺構

1 弥生時代の遺構

竪穴住居址SSH-1 (第64図 図版第11)

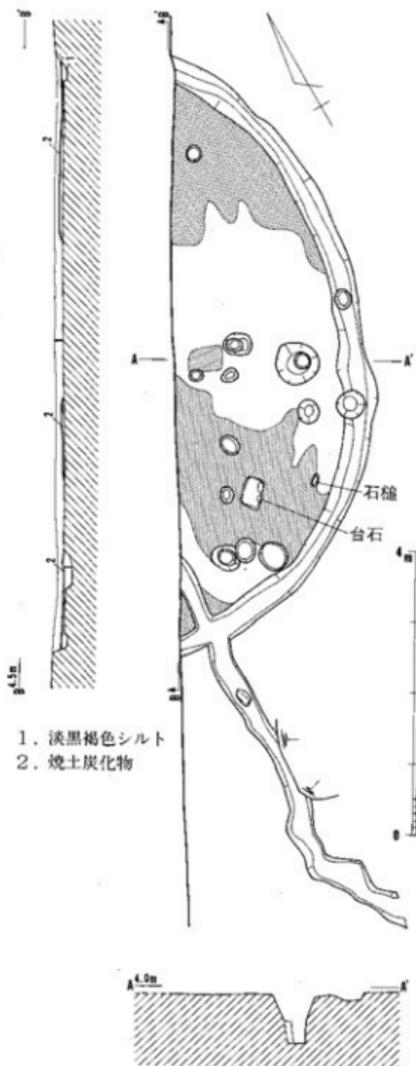
南地区北部西壁ぎわの最も高い位置では3基の竪穴住居址を検出できたが、その中央に存在する最も遺存状態の良い円形の住居址である。全体の3分の2程度が調査区外に広がっており、全容は不明である。

推定径9.4m、高さは約22cmで、埋土は他の住居址同様淡黒褐色シルトであった。周壁溝をもち、幅約40cm、床面からの深さ約10cmが遺存していた。床面の直上には焼土・灰・炭が混じった層が厚さ約6cm認められ、あるいは焼失家屋とも考えられる。

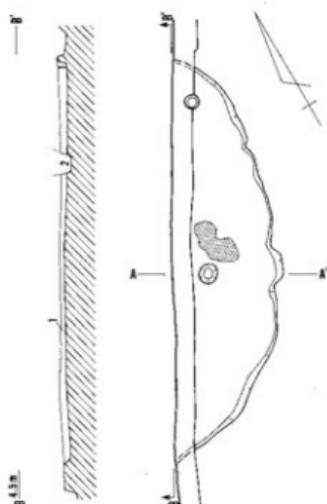
主柱穴は3本検出できたが、全体では7本であると推定できる。主柱穴の径は21~60cm、深さは60~68cmで、他に径16~40cmで、深さ8~25cmの小さな柱穴が検出できたが、時期等住居址に伴うものかは不明である。また、幅28cm、深さ6cmの屋内溝が長さ1m検出でき、その溝がそのまま屋外に伸びている。屋内中央穴は調査区外に当たるためか検出できなかった。

屋外溝は幅約24~34cm、深さ約8cmで、やや蛇行しながら斜面下方に約4.8m伸び、徐々に広く浅くなって自然消滅するようであるが、溝SSD-1に端を切られているため確実ではない。

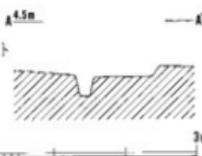
遺物は、床面に密着したかたちで台石・植石のセットと壺の口縁部を検出し、その他に、住居址埋土からも土器片が出土している。



第64図 竪穴住居址SSH-1



1. 淡黒褐色シルト
2. 暗灰褐色土



第65図 竪穴住居址SSH-2

らも残っていない状況であった。

埋土は他の住居址同様淡黒褐色シルトで、住居址の中央部分にはかろうじて焼土・炭の集中部分が認められた。その部分から甕の肩部以上の破片が出土した。

柱穴は6個検出したが、最大で深い1個が主柱穴と考えられ、径63cm、深さ28cmで、その位置から4本柱の住居址と考えられる。他の柱穴は径20-43cm、深さ10-30cmである。

出土土器から弥生時代後期末～古墳時代前期の住居址と考えられる。

竪穴住居址SSH-2 (第65図 図版第11)

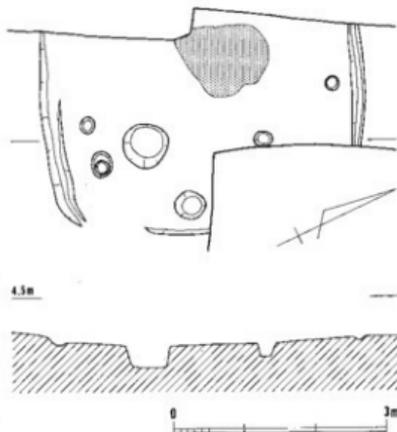
住居址SSH-1の南側で検出した円形の竪穴住居址である。これも大半が調査区の外であるため、全容はつかみ得ない。推定径は約7.6m、検出面から床面までの深さは約16cmで、埋土は淡黒褐色シルトで、土製紡錘車等が埋土から出土している。住居址のほぼ中央には90×62cmの焼土が床面から12cm上で検出されたが、床面からは遺物は出土しなかった。

柱穴は2本検出でき、径20・28cm、深さ9・29cmで、住居全体では主柱穴は7～8本あったと思われる。周壁溝は認められず、中央穴・屋内外の溝は発掘部分では検出できなかった。

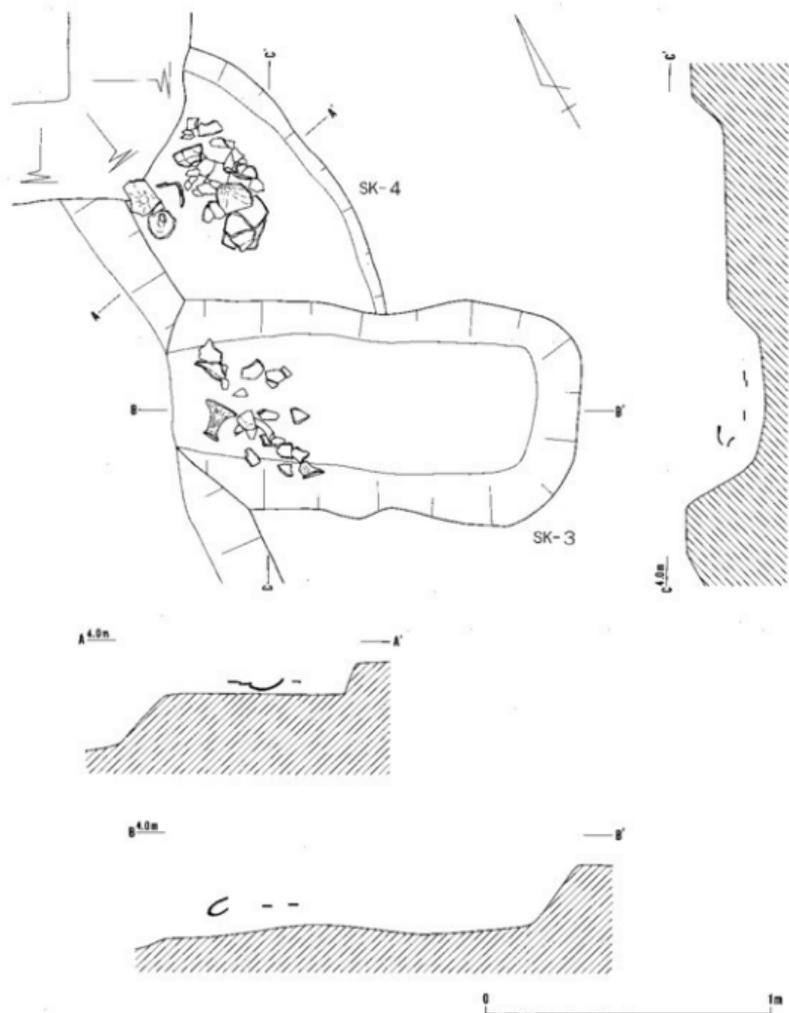
竪穴住居址SSH-3 (第66図 図版第11)

南地区の最北西端で検出した竪穴住居址で、南東隅部分が当初の調査区内で検出され、全容を知るため極力調査区を広げて調査を行った。その結果、南北4.5mの方形の住居址であることが判明した。

住居址は検出面からの深さ12cm、周壁溝は幅26cm、深さ4cmと遺存状況は非常に悪く、東側は周壁溝す



第66図 竪穴住居址SSH-3



第67図 土坑SK-3・4

土壌SSK-3 (第67図 図版第12)

SSH-1の南側約4mで重なりあって存在する土壌2基のうち南側の長方形のものがSSK-3である。西側は溝に削られており、残存長は1.45m、幅0.8m、深さ30cmである。底部は平らに近く、掘り込み角度は緩やかである。埋土は淡黒褐色シルトで、西側で土器が集中して、底から約7cm浮いた状態で検出された。それらには甕・高杯片がある。

土壌の平面形から墓の可能性が考えられるが、掘り込み角度が緩いため、断定し難い。

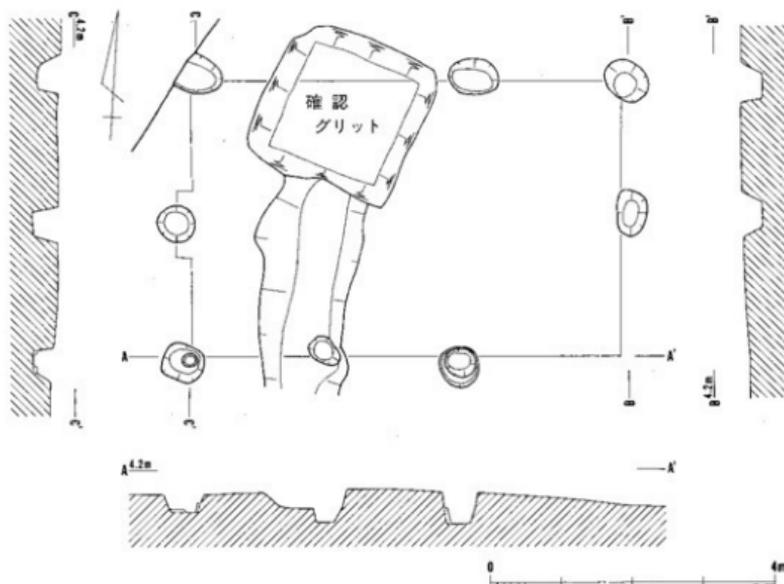
土壌SSK-4 (第67図 図版第12)

SSK-3の北側に存在する深さ13cmの浅い土壌である。西側は溝に削られ、また、SSK-3との前後関係は不明であるが、SSK-3の方が深く掘り込まれているため、全体の形状は窺えない。肩部が残存している東側では弧状を呈している。底部は平らで、掘り込みは急角度である。埋土は淡黒褐色シルトで、底付近には甕・鉢・壺類等の土器片が遺存していた。

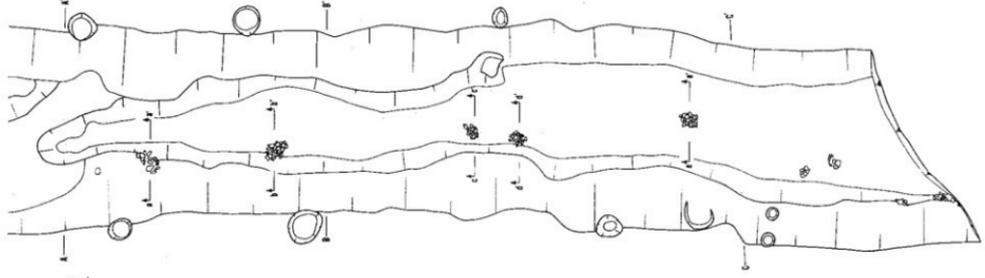
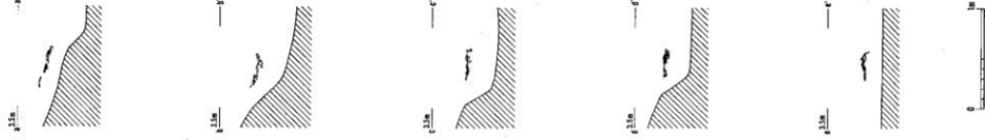
2 古墳時代～奈良時代の遺構

建物址SSB-1 (第68図 図版第12)

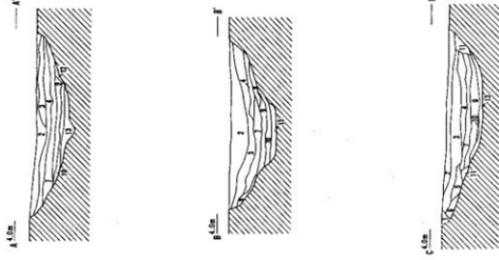
SSH-1の南側に存在する、2×3間と推定される掘立柱建物址である。北側桁行きでは



第68図 建物址SSB-1



第69回 漢SSD-1



1. 暗褐色土 (砂中砂質)
2. 暗褐色土 (砂中粘質)
3. 暗褐色シルト (砂中粘質)
4. 暗褐色シルト (粘中粘質)
5. 黄褐色シルト (砂中粘質)
6. 黄褐色シルト (粘中粘質)
7. 灰褐色シルト (砂中粘質)
8. 灰褐色シルト (粘中粘質)
9. 灰褐色シルト (粘中粘質)
10. 灰褐色シルト (粘中粘質)
11. 黄褐色シルト (粘中粘質)
12. 灰褐色シルト (粘中粘質)
13. 灰褐色シルト (粘中粘質)

確認調査のため、南東隅の柱穴は溝SSD-1の影響で検出できなかった。両側梁行き中央の柱は外側にずれており、棟持柱と考えられる。桁行きの柱間は182~212cm、梁行きでは180~206cmである。棟持柱の規模は径55・64cm、深さ27・28cmで、それ以外の柱穴では径56~66cm、深さ32~44cmを測る。柱穴内埋土は黒褐色・暗灰褐色土で、須恵器・土師器の小片が出土している。時期としては古墳時代後期~奈良時代のいずれかに属すると思われる。

溝SSD-1 (第60・69図 図版第13)

南地区の西部を南西から北東方向に直線的に流れる大きな溝である。全長約58mにわたって検出、調査した。北東部が最も巾が広く深く、巾4.2m、深さ0.98mで、南西部へゆくにつれ徐々に幅、深さとも減じ、南西端では巾0.9mとなり、自然消滅している。溝の断面形状は北東部では2段になっている所もあるが、全体的には半円形に近い「U」字状を呈している。

埋土は最下層は灰色の砂礫層で、その上には灰色細粒砂や灰白色シルトが堆積し、灰褐色のシルトを挟んで、黒褐色系の土で埋まっている。第69図の7層以下は溝底に溜水したまま徐々に堆積したようであり、6層以上は溜水することなく埋まっていったことが埋土の色調や質から類推できる。溝底は黄色~黄白色シルトが大部分を占めるが、B0~B1区間では黄灰色の円礫層となっている。

遺物は、杭B3付近で碧玉製管玉片が出土した以外は殆どが7層中や7層上面から出土している。B0~B1地区では底面ほぼ全体に破片が出土したが、それより北側では完形品がくずれた状態で出土し、しかも、西側に寄って出土したものが殆どである。溝の西側から放り込まれたと考えられ、居住地は溝の西側に存在しているものと類推することができ、溝がその機能を果たさなくなった時点で土器が溝内に存在するようになっている。

出土した土器には須恵器は全く存在せず、甕が大半を占め、若干の壺と高杯が存在する。古墳時代中期末に属する土器であり、その時期に溝が廃絶している。

溝SSD-5 (第60図)

-2ライン付近に存在する東西方向の溝であり、古墳時代後期に掘削され、奈良時代頃に一度廃絶し、平安時代~鎌倉時代に最利用された溝である。

西端は調査区外に伸び、東端は徐々に巾狭く浅くなり自然消滅している。全長21m、西端での幅は2.8m、深さ0.8m、東端では巾35cmになっている。溝の掘り込み角度は急で、2段に掘り込まれているが、上段の方は中世の再掘削のものかもしれない。底部の幅は西端で1.2m、東端では16cmで、いずれも平らである。

埋土は中位から下は灰色系の砂礫層とシルト層の互層になっており、そこから古墳時代後期~奈良時代の須恵器杯・甕片、土師器甕・高杯片等が出土している。上半部は溝中央部で灰褐色系のシルトが堆積しており、西部では灰色の細粒砂~中粒砂・黄褐色礫が堆積している。溝上半部からは土師器甕・小皿・杯等が出土している。

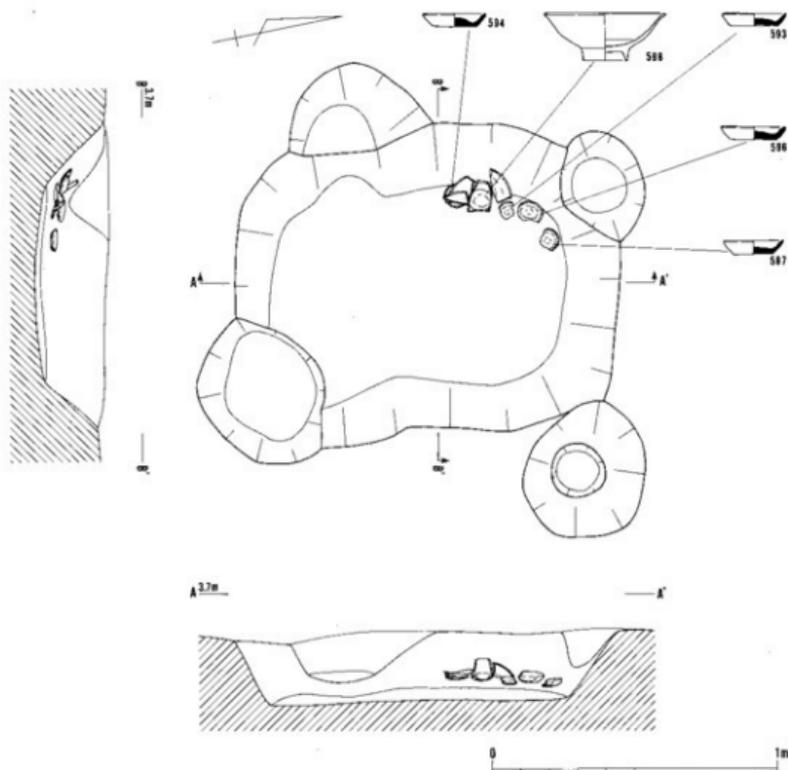
3 平安時代～鎌倉時代の遺構

土壙墓SSK-120 (第70図 図版第15)

C3区SSD-1の東側で検出した隅丸方形の土壙である。他の柱穴と重なりあっているが、南北の長辺が約134cm、短辺約109cm、深さ26cm、掘削角度は急傾斜で、底部は長辺約103cm、短辺約70cmを測り、平坦である。

北西隅部分に、底から約5cm浮いた状態で、白磁碗完形品と土師器小皿4枚と一緒に出土した。それらは一列に並んだ状態で検出され、白磁碗は南から2番目の位置に存在していた。

土壙埋土は暗灰褐色シルトで、土壙の形状・規模、遺物の構成・出土状態より墓と考えられるが、埋土断面・平面の観察では木棺の痕跡は認められなかった。



第70図 土壙墓SSK-120

出土遺物により時期は平安時代後期～鎌倉時代と考えられる。

甕墓SSK-104 (第71図 図版第15)

C3区SSD-1の埋土上面で検出した、須恵器の甕を正位置に入れた平面円形の土壌である。

甕形の規模は長径52cm、短径48cmで、2段に掘り込まれているところもある。底部断面は「U」字形を呈し、検出面からの深さは35cmを測る。底に平らな石を置いているが、甕の底部より11cm下になっている。

甕は堀形のはほぼ中央に正位置に掘えられ、堀形との間隙は暗灰褐色シルトで充填されていた。甕の下半部のみ土中に遺存しており、上半部は割れて甕の中に落ち込んでいるものが多かったが、ほぼ完形に復原できた。もし、完形品を埋設したのであれば、本米の遺構面が約22cm上であったことが窺える。甕の中からは遺物は全く出土していない。

甕は形態・調整技法から香川県十瓶山ないし西村遺跡の製品と考えられ、時期は平安時代後期～鎌倉時代であろう。

土壌SSK-2 (第61図)

調査区東部杭F2ぎわに存在する円形の土壌で、上部は近～現代の攪乱を受けていた。長径約2.3m、短径約2.2m、深さ46cmで、底部は平坦である。底部は長径約1.65m、短径約1.5mである。埋土は灰褐色土で、土壌内より白磁小皿の完形品、土師器の椀・杯片が出土している。土壌の機能は不明である。

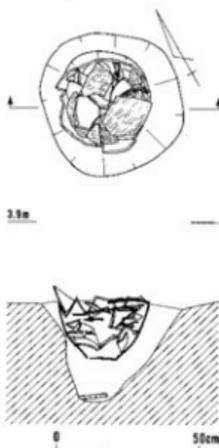
溝SSD-2 (第61図)

調査区中央部C(-1)付近からC0にかけてほぼ南北方向に伸びる、長さ6.2mの短い溝状遺構である。南端で、西へ向かって「L」字状に折れ曲がり、北端では2条に分かれている。溝中央部での幅は22cm、深さ9cm、最も深い北部でも12cmと浅いものである。埋土は灰褐色土で、建物の雨落ち溝のようであるが、周りに柱穴はいくつか検出したものの、建物址として組みあうものは認められなかった。

溝内から須恵器片口鉢の下半部が出土しており、平安後期～鎌倉時代の所産と考えられる。

溝SSD-3 (第61・72図 図版第16)

調査区南端から東隅まで続く最も長い溝であり、全長77mにわたって検出、掘削できた。溝の南西端は幅約3m、深さ38cmの浅い溜まり状になって自然消滅しているが、北東へゆくにつれ幅を広げており、北東端では幅3.5mを測る。深さはB(-8)～E(-3)区付近で最も深く、約55cmで、B(-10)区付近では36cm、G O区付近では25cmを測る。E(-2)～F(-2)間では大きな



第71図 甕墓SSK-104

近世以降の土壌により攪乱を受けている。なお、本溝より東側では遺構は全く認められなかった。

溝の埋土は基本的に上下2層に分かれ、下層は明灰色粘土と淡黄白色極細粒砂で、上層は灰色の極細粒砂混じりシルトである。遺物は殆どが(-5)ライン以北で検出され、特に(-5)~(-3)ライン間で集中して認められた。上下両層から出土しているが、特に多いのは下層である。

溝は3~4回蛇行しており、全体的には北西に張り出す弧状を呈している。B(-8)付近のカーブには西側に長さ5.8m、巾1.8m、深さ35cmの半円形の浅い部分を設けている。その箇所には20~30cm大の礫が20数個溝肩に集積されていた。その機能は不明である。(-7)~(-5)ライン間では溝の断面は「U」字形を呈している。

(-5)~(-3)ライン間では、東側に長さ9.4m、巾1.5m、深さ30cmの浅い部分を設けており、その中央部から南西にかけて長さ5.8m、巾1.4mの範囲に厚さ20cmにわたって貝殻の集積が見られた。貝はすべて汽水性のヤマトシジミ(*Corbicula japonica* Prime, 1864¹⁾)である。なお、数点であるが馬骨や歯、鹿角も出土している。また、この付近は土器が特に多く出土しているが、第72図に示すようにやや疎らに存在していることが特徴である。器種としては、瓦器碗・小皿、土師器碗・杯・小皿・器台、須恵器片口鉢、青白磁等がある。

(-3)ライン以北は断面「一」形を呈し、遺物は徐々に少なくなっている。北東端では2方向に分流している。

全体としては、北東部の方が溝底が41cm低く、南西から北東への流れをもっていたようである。なお、本溝は北地区の溝NSD-4・5につながる可能性もある。

溝SSD-5 (第60図)

本溝については前述した。平安時代~鎌倉時代の溝巾は掘削時と同一と考えられるが、深さについては約半分の20~45cm程度と思われる。また、本溝が埋まった後に柱穴が掘り込まれており、7個程度認められる。

欄列SSA-1 (第73図)

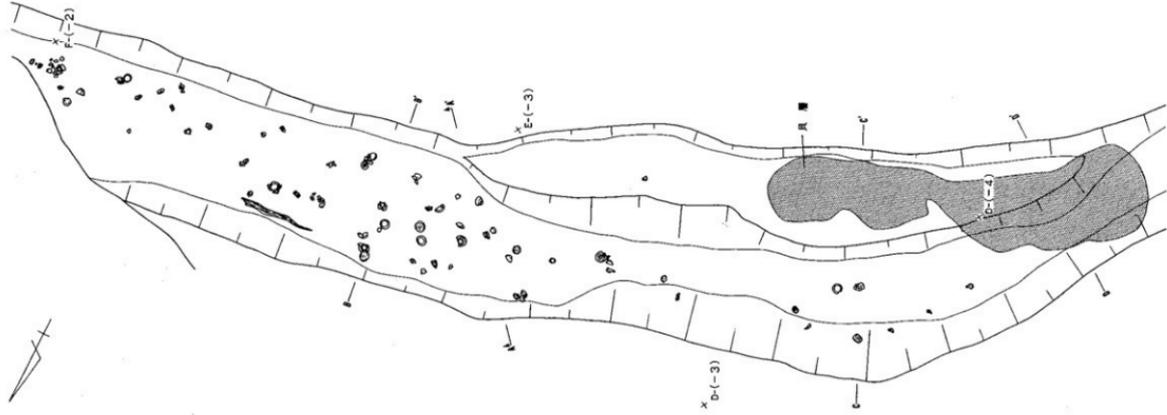
調査区中央部北寄りの部分に存在する、「L」字形の欄列である。列間の角度は直角ではなく、若干開いており、約93.5°である。

長い方は東西方向に近く、全長6.4m、4間で、柱間は1.3~1.9m、柱穴は径22~32cm、深さ10~28cmである。

短い方はほぼ南北方向で、3間、3.7mである。柱間は1.04~1.4m、柱穴は径26~32cm、深さ14~25cmである。柱穴埋土は暗灰褐色土で、柱穴内からは遺物は全く出土しなかったが、柱穴の規模や位置、周囲の状況から平安時代後期~鎌倉時代の所産と考えられる。

他にも欄列となりそうな柱穴の並びが北側や南側で数ヶ所認められているが、断定は避けたい。本欄列ほど長いものは他には認められない。

本欄列に合う建物址は未検出である。



1. 凝砂層より灰色レリト (線分含む)
2. 所沢色粘土・凝質白色凝砂層



その他の柱穴

南地区では約300個という数多くの柱穴が検出されたが、そのうち約30個が古墳時代後期～奈良時代に属するものであり、その他ほとんどが平安時代後期～鎌倉時代に比定されるものである。

古墳時代後期～奈良時代に属するものは、調査区北部にのみ認められ、前述のように建物址としては1棟分が確認できた。

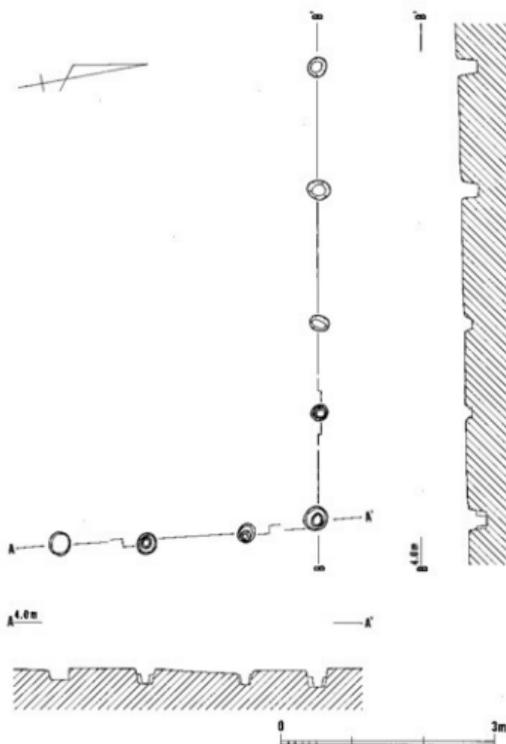
平安時代後期～鎌倉時代と考えられるものも同様に北部に集中して存在しているが、調査区中央部にもやや疎らであるが、存在している。しかし、中央部の柱穴は西半分に偏っており、特にSSD-3より東側では全く存在していない。

柵列が1基の他は建物として組み合うものは確認できなかったが、北部では数棟建っていたものと考えられる。

柱穴の埋土は灰褐色土や暗灰褐色土、黒褐色土、黒灰色土、暗茶褐色土、暗黒褐色土があるが、柱穴出土遺物を見るかぎりにおいては、埋土による時期差は認められない。

図化可能な遺物を出土した柱穴は、北から203、147、625～627、649、663、99、8、18、55、25、80、41、46、49、70、63である。203では黒色土器の完形品、626では土師器椀と杯、663では瓦器椀、土師器小皿、8では瓦器椀、土師器杯・小皿を出土しており、特筆できるものである。

柱穴より出土した遺物の器種としては、瓦器椀、土師器椀・杯・小皿等がある。



第73図 柵列SSA-1

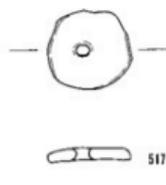
第3節 遺物

1 弥生時代の遺物

竪穴住居址SSH-1出土遺物(第75図518 図版第32)

SSH-1から出土した遺物のうち図示したのは、床面で検出した壺口縁部1点と埋土中出土の底部である。他に床面から台石・植石が、埋土中より広口壺口縁端部・甕口縁部・高杯脚部・底部の破片と鉄鏃が1点出土している。

壺口縁部(518)は、下方に拡張した口縁端面に縦凹線文を施したのち、竹管円形浮文を約0.8cmの間隔で全周するように貼り付けている。頸部口縁部とも内外面は磨きを施している。弥生時代後期の範疇に捉えられるものである。鉄鏃は柳葉式の鏃で、全長約6.8cm、刃部の長さ約4.8cm、茎部約2.0cmの鍛造品である。茎部の断面は約0.3cmの方形で、先端は尖る。刃部は両刃で、鑊を有し、断面は菱形である。刃部巾2.1cm、厚さ0.3cm。



竪穴住居址SSH-2出土遺物(第74図517)

図示した土製紡錘車は直径3.0cmで、厚さ約0.4cm、重さ約4グラムで、土器から転用したことを示すように全体が彎曲している。ほぼ中央には径約0.45cmの小孔が両側から穿たれている。

他に埋土中より平底片・高杯の杯部片が出土している。全体としては遺物量は多くない。

第74図 SSH-2
出土紡錘車

竪穴住居址SSH-3出土遺物(第75図519・520)

焼土層から出土した甕口縁部と埋土出土の有孔の底部を図示した。

甕(519)は短い口縁部を丸く外反させ、端部を上下に少し拡張している。肩部は丸くなるものと思われる。体部内面は指頭圧痕、外面は刷毛目が若干残っており、薄手のものである。調整および形態から四国系の土器と考えられ、弥生時代後期後半～古墳時代初頭と考えられる。

底部(520)は小さな平底で、内側から6孔を穿っている。外面は叩き調整である。

土壙SK-3出土遺物(第76図521~527)

図示し得たのは甕5点と高杯2点である。

甕はいずれも口縁部が体部から大きく屈曲し、端部に面を持つもので、口縁部が厚い(521)



第75図 竪穴住居址SSH-1・3出土土器(SSH-1:518, SSH-3:519・520)

は端面が凹面を呈する。他は端部を若干上部につまみあげるもの(523・524)や、下部にのぼすもの(525)が認められる。体部外面の調整は(525)が叩きの後縦方向のナデ、(524)は板ナデのようであり、他は磨滅が著しく不明である。内面は(521・525)がナデ、(524)は横方向の斲削りを施している。

高杯の杯部(526)は口縁部がほぼ直立する深いもので、台付鉢になるかもしれない。端部外面に1条の凹線文を施している。調整は内外面とも不明。脚部(527)はやや高く、単純に開いただけのもので、4方向に透孔を穿っている。外面は斲磨き、内面はナデ調整である。

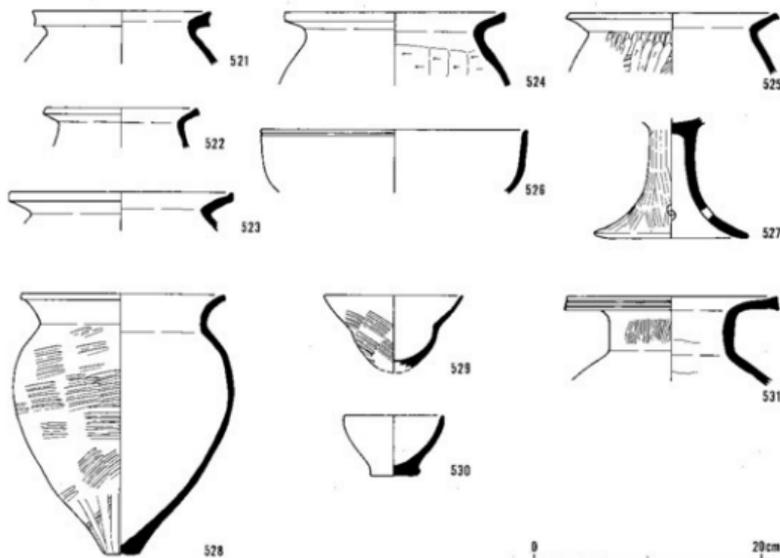
土壌SSK-4出土遺物(第76図528~531 図版第32)

甕(528)、小型丸底壺(529)、鉢(530)、広口壺(531)が図示できた。

甕は胴部最大径を上部に持ち、底部の小さなものである。口縁部は外反し、端部を下方に若干肥厚させている。体部は太筋の叩き目で、底部付近を縦方向にナデあげている。底面は木葉痕を残している。体部内面はナデ調整のようである。

小型丸底壺は外面に叩き目を残すもので、底部が欠損している。体部から口縁部への屈曲は小さく、口縁部はやや内彎する。内面はナデ調整のようである。

鉢は大きな平底の小型のもので、外面に粘土紐のつぎ目や隙間が目立つ。内面は板ナデ調



第76図 土壌SSK-3・4出土土器(SSK-3:521~527, SSK-4:528~531)

整。広口壺は口径18.6cmの大型のもので、体部～頸部～口縁部は大きく屈曲している。口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施している。全体に刷毛の後部分的にヨコナデを施している。形態から四国系の土器と考えられる。色調は5YR5/6 明赤褐色を呈する。

包含層出土遺物 (第77・78図 図版第33)

包含層出土土器のうちA1区調査区隅で集中出土した一群を第77図、他は第78図に示した。A1区調査区隅出土の一群では壺3点と底部を図示できた。

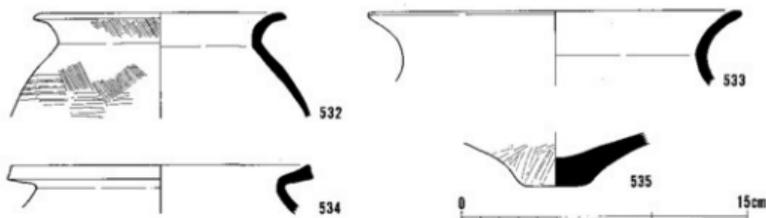
壺には口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部に面を持つ(534)と、緩やかに外反して端部が丸く納まる(532・533)がある。肩部が残る(532)は外面を叩き調整の後疎らに縦刷毛を施している。内面は板ナデのようである。底部(535)はやや突出する平底で、外面は叩き調整である。壺の底部と考えられる。

端部に面を持つ(534)が型的には古いが、全体としては弥生時代後期後半で捉えてよいものであろう。

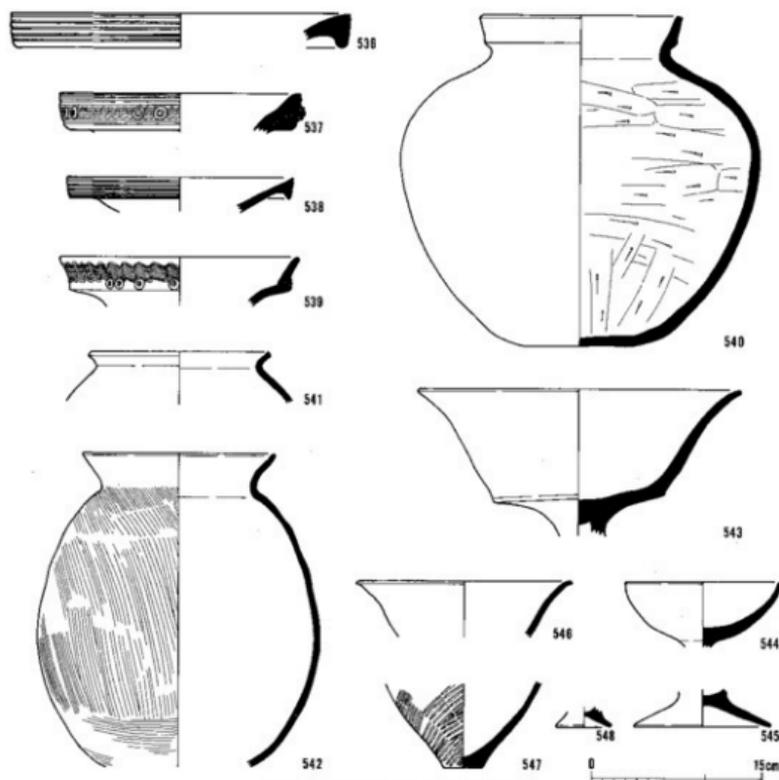
第78図に示した包含層出土土器には壺、甕、高杯と壺底部がある。

壺には広口の壺(536～538)と複合口縁の壺(539・540)がある。広口壺は口縁端部を上方あるいは下方に拡張し、端面に縦凹線文を施している。(537)では端面中央に波状文と2個一対の竹管円形浮文を加飾している。(538)は内彎ぎみの口縁部のため、器台の可能性が高い。また、(536)は色調などから河内産のものである可能性が高い。複合口縁壺の(539)はやや薄手のつくりで、外面は波状文と竹管円形浮文で飾っている。(540)は全体が窺えるが、頸部が短く口縁部は無文である。体部は肩が張り、平底風になっている。外面はナデ、内面は下半が縦方向、上半が横方向の篋削りである。(540)のみ時期が降り、古墳時代前～中期と思われる、後述のSSD-1出土土器と同一時期の可能性が高い。

甕は口縁部が短く、端部を上方へつまみ上げる(541)と、口縁部は長く、端部が内面に肥厚する(542)がある。(541)は前述のSSH-3出土甕と類似している。(542)は後述のSSD-1出土の甕A類に相当し、やや長い胴部をもち、外面は刷毛で仕上げている。



第77図 南地区包含層出土土器(1)



第78図 南地区包含層出土土器(2)

高杯には杯部が屈曲するタイプの(543)と、碗形の(544)とがあり、碗形の脚部も出土している。他に製塩土器と考えられる脚台(548)も出土している。

2 古墳時代～奈良時代の遺物

溝SSD-1出土遺物(第79～81図 図版第32・33)

SSD-1出土の遺物には、図で示した土器の他に埴土上面で出土した碧玉製管玉の破片があるが、脆弱で図示できなかった。土器は殆どが1ライン以北の西岸で検出できたものである。出土した土器はすべて土師器で、須恵器は全く認められなかった。また、甕が大半を占め、壺・高杯等は1～2点程度しかなく、器種のパラエティイーは全く不明である。

甕は20点図示できた。すべて長胴形で、底部は丸く、薄いつくりである。口径は11cm程度から20cm程度までであるが、1)11~12cmのもの、2)14~15cm程度のもの、3)16cm程度から18cmまでのもの、4)20cm程度のもの4種に分かれる。1)は2点、2)は5点、3)は最も多く12点あるが、器高が25~26cm程度のもの、28~30cm程度の両者がある。4)は1点のみ存在している。

口縁部は刷毛の後ヨコナデ調整を施し、体部外面は縦方向の刷毛目、底部付近は横方向の刷毛目となるものが多い。内面はナデ調整のもの最も多く、次いで刷毛目、最も少ないのは篋削りである。内面の刷毛目は小型のもの以外、下半は縦方向、上半は横方向に施している。

口縁部は「く」の字状に外皮するものがほとんどで、口縁部上半が内彎するものが数点認められる(A類)。A類(549~552)は口縁端部をヨコナデすることにより内側に肥厚させるもので、端面は内傾している。口縁部全体が内彎するもの(550)と、下半が外反、上半が内彎するもの(549・551)がある。布留形甕の口縁部の伝統を残すものである。

口縁部が外反するもの(B類)では、A類の端部を水平にし、外方に少し引きのばすB1類(553~555・564~566)、端部に水平面を持つが、内側へは肥厚させないB2類(556・567)、B2類の端面が外傾し、口縁部外面中央がやや膨らむB3類(557~559・562)、単純に丸くおさめるB4類(560・561・563)と、端部が外傾する面となるB5類(568)の5種類が認められる。

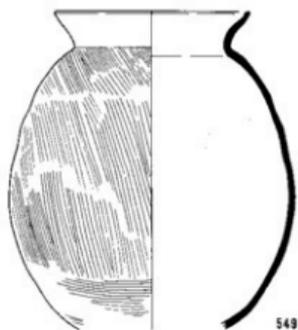
その他に複合口縁の甕あるいは壺と思われる破片が出土している(569)。頸部は肩部からカーブを描いて外反した後屈曲し、上半は直立する。屈曲部外面の稜線は鈍い。体部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目を施している。

壺は2点(570・571)が図示できた。(570)は扁球形の体部から屈曲して短く直立ぎみの口縁部を持つもので、口縁端部は丸みのある面をもつ。口縁部外面中央はやや外側に張り出す。(571)も同様の口縁部を持つものと考えられる。内外面が磨滅しているため調整は不明であるが、つくりは丁寧である。

碗(572)は扁球形の体部から一度すばまったのち、外反して短く立つ口縁部をもち、底部は平らになっている。表面が磨滅しているため、調整痕は残っていないが、体部内面には粘土紐の継ぎ目が残っている。

器台(573)は口縁端部を下方に大きく拡張したもので、端面の上下に擬凹線文を施し、中央に半截竹管文を全周させている。また、口縁部上端にも半截竹管文を施している。この器台は淡路の弥生時代後期後半によくみられる器形であり、この時期までこのような土器があるとすよりも、古いものの混入と考える方が妥当であろう。

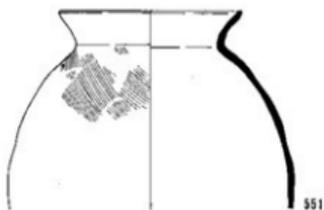
高杯は杯部(574)と脚部(575)が1点ずつ図示できた。杯部は明確な稜をもって「ハ」の字状に外上方に広がるもので、口縁端部は外側につまみだしている。杯部はやや内彎ぎみである。脚部は大きく外反しながら開くもので、屈曲はしていない。端部は尖らず、丸みをもって終わっている。3箇所に通し孔を穿っている。外面は篋磨き、裾部内面はナデ調整である。



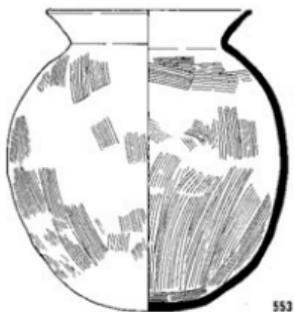
543



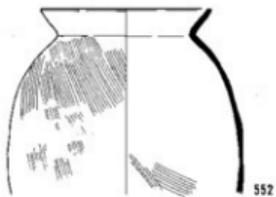
550



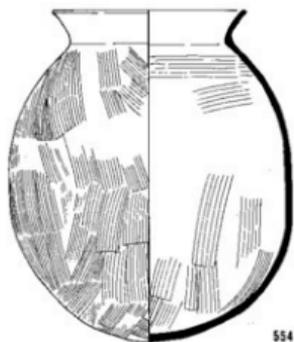
551



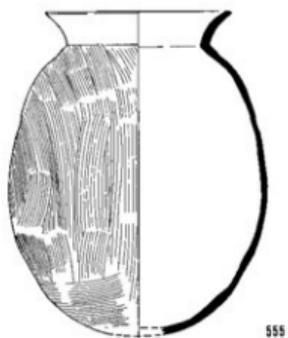
552



553



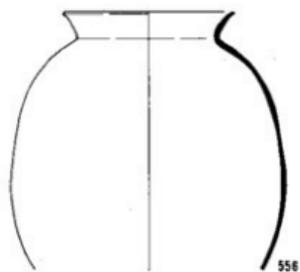
554



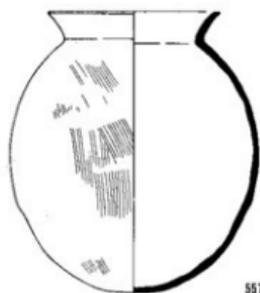
555

0 20 cm

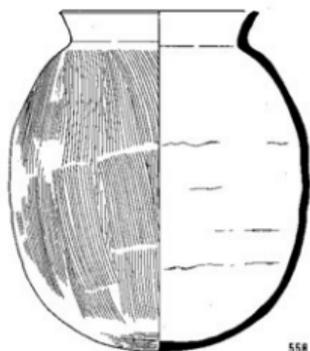
第79图 清S S D-1出土土器(1)



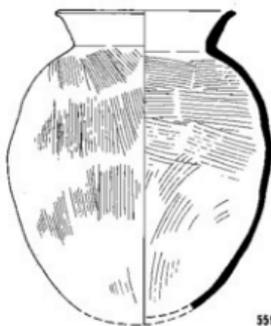
556



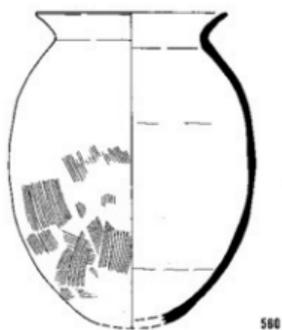
557



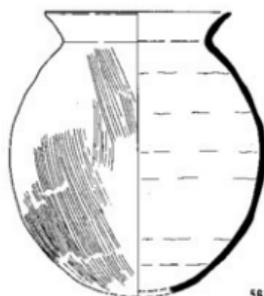
558



559



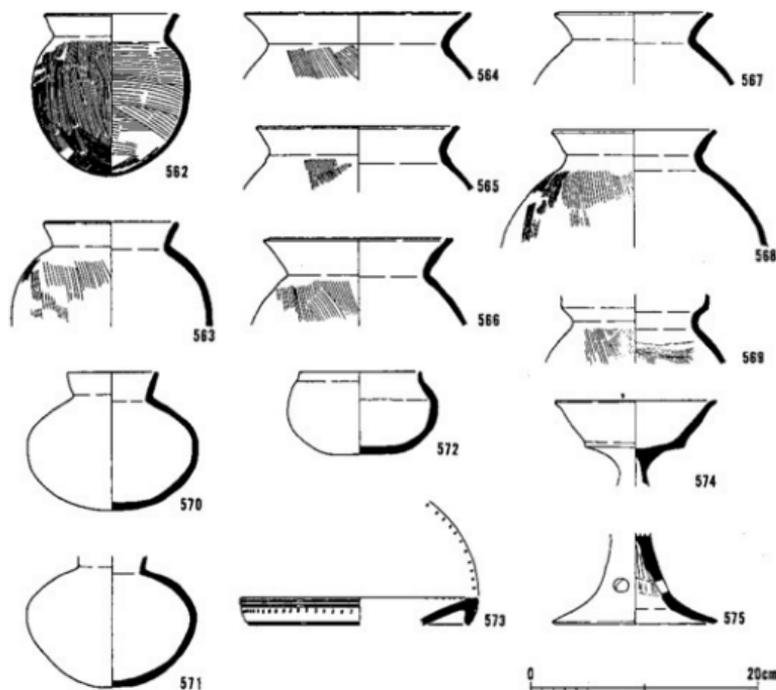
560



561



第80图 满SSD-1出土土器(2)



第81図 溝SSD-1出土土器(3)

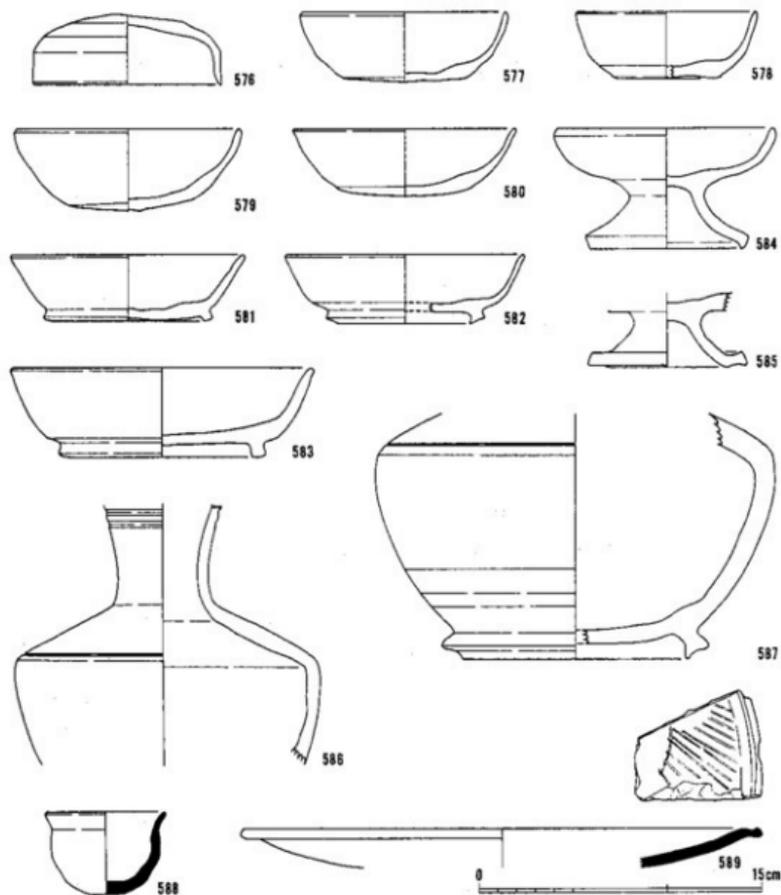
溝SSD-1出土土器は後述のように、甕の特徴が布留形甕の直後型式のものと考えられること、須恵器が相伴していないこと、他の類例から、古墳時代中期末頃の所産と考えられる。

包含層出土土器 (第82・83図)

南地区では前述のように黒褐色シルト、灰褐色シルト、暗黒褐色シルトから遺物が出土しているが、土層により時期的に分かれず、弥生時代後期～鎌倉時代までの土器が混在して出土している。しかし、F0地区では黄褐色砂礫層に含まれている土器は古墳時代後期～奈良時代の土器のみであり、古い様相を示し、特筆できる。

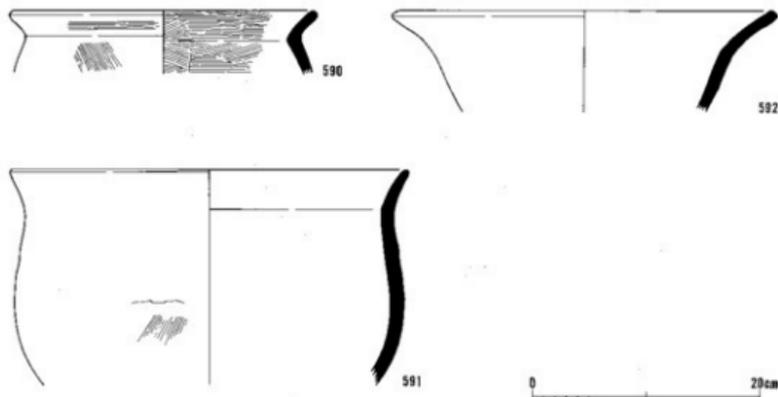
須恵器は杯H蓋(576)・杯B(581～583)・椀A(578)・杯1(577・579・580)のほか高杯(584・585)・長頸壺(586・587)があり、土師器では高杯(589)・甕(590・591)・鉢(592)・小壺(588)がある。

杯1(577・579・580)の3個体がある。すべてb形態であるが、(579)は口径に対して器高



第82図 南地区包層出土土器(3)

が深く、径高指数はa形態のものとはほぼ同様である。3個体とも底部はヘラ切り後、ナデを施している。杯A(578)は、体部下端をヘラ削り後ナデを施し、底部はヘラ切り後ナデしている。杯Gに分類できるものかもしれない。杯Bは小型の(581・582)と大型の(583)の3点が図示できた。(581)はc形態で、高台は底部の外端に踏んばって貼り付けられている。(582・583)はc形態で、底部と体部の境が丸く、高台もやや内側に付けられている。口縁端部はやや外折



第83図 南地区包層出土土器(4)

する。

高杯(584)は杯部が稜をもたず、口縁部は外上方に伸びている。脚部(585)はいずれも端部を下方にひき伸ばしている。

長頸壺は2点(586・587)を図示した。口縁下に2条、肩部に1条の沈線を施し、輪高台を貼り付けている。肩部の屈曲は(586)の方が鋭く、(587)では丸い。

土師器高杯(589)は杯部破片しか認められなかった。口縁端部は外折した後、端を内側に折り返したように肥厚している。杯部は内彎し、内面に斜め方向の暗文を施している。

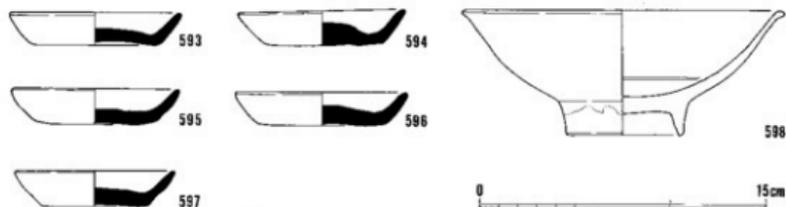
甕は口縁部があまり開かず小型の(591)と、「く」の字状に外反し大型の(590)の2点を図示した。(591)は内面ヨコナデ、外面は縦方向の刷毛の後ナデ仕上げである。口縁端部は丸い。(590)は口縁部と体部内面が横刷毛調整、体部外面が縦刷毛である。端部はやや面をもち、口径26.4cmの大型品である。

鉢(592)は体部と口縁部の境がはっきりせず、外反しながら漸移している。端部は丸みのある面をもち、口縁部内面の調整はヨコナデ、その他は不明であるが、刷毛かもしれない。

小壺(588)は口径6cm、高さ4.3cmの手握ねで、口縁部を外反させている。体部に指頭圧痕が認められる。

以上述べた包層出土土器のうち、特に(576・584・585・588)については調査区東隅の灰褐色系シルト層から、(577~580・583)はF0地区の黄褐色砂礫層から出土している。

包層出土土器のうち古墳時代後期~平安時代のものは、主として飛鳥・藤原期~奈良時代前半のものが多く認められる。



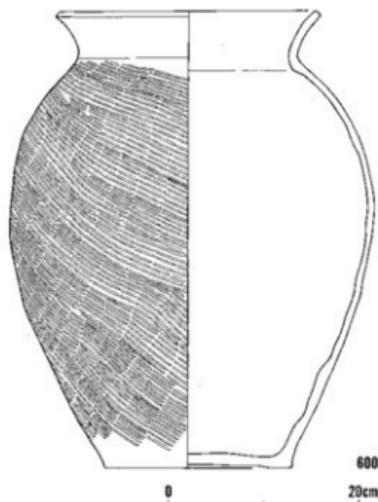
第84図 土墳墓 S S K-120出土土器

3 平安時代～鎌倉時代の遺物

主墳墓 S S K-120出土土器 (第84図 図版第38)

本遺構から出土した土器には、土師器小皿5点、白磁碗1点がある。前述のように土壇底にこれらを並べ置いた状況で出土したものである。

土師器小皿 (593～597) は径8.8～9.0cmで、高さ1.7～1.9cmの4点 (593～596) と、径8.4cm、高さ1.9cmの小型の1点 (597) がある。形態上では2者の差はなく、やや厚く平らな底部から屈曲して斜め上方に伸びる口縁部をもち、端部はやや尖り気味に丸く仕上げている。底部は回転糸切り、他はナデ仕上げである。7.5YR 8/2灰白色を呈し、S S D-3出土の小皿と同質・同形態のものである。



第85図 妻棺墓 S S K-104出土土器

白磁碗 (598) は端反りタイプで、ほぼ完形に接合できた。横田・森田分類の白磁碗V類に当たる。体部から口縁部にかけて徐々に薄くなり、口縁端部はやや厚く外反する。高台は断面三角形に近く、高い。体部内面に1条の沈線がめぐる。釉は内面の全体と、外面高台上部までかかり、内面見込み部分は表面の光沢がなく、使用による磨耗と考えられる。口径16.4cm、器高6.6cm、体部の深さ4.5cm、高台径6.15cmである。

妻棺墓 S S K-104出土土器 (第85図 図版第38)

土師器皿1点と須恵器甕1点が図示できた。皿は甕の上方から出土している。

皿は口径10.1cm、器高1.5cmの偏平中型のも

のである。底部はほとんど作り出さない平高台で、回転糸切りを行っている。糸目は細かい。口縁部は体部から彎曲しながら外上方に伸び、端部は丸く仕上げている。底部以外はナデ調整である。本遺跡ではこの種の皿は他に出土しておらず、SSD-3でも7.5Y R8/2灰白色のもので、径8cm程度の小皿ばかりであり、5Y R8/3淡橙色を呈する本例は認められない。

甕は口径22.4cm、器高40cm、体部径31.7cmで、底径16.4cmの大きな平底のものである。体部は長胴で最大径は中位上方にあり、肩は張らない。口縁部はやや外反し、端部は肥厚せず、平坦面をもつ。体部外面は右下がりの平行叩きを螺旋状に丁寧に施しているが、下端はナデ調整を行っている。底部外面はナデ調整のようで、周囲がやや高い上げ底風になっている。体部内面は当て具の痕跡をナデ消している。

この甕は香川県十瓶山北麓窯跡出土甕とプロポーション・調整ともに酷似しており、地理的にも本遺跡と近接していることから、産地を十瓶山北麓窯に求められる。

十瓶山北麓窯出土土器は、渡部明夫氏によれば11世紀末頃に比定されている⁽¹⁾。



第86図 土壙墓SSK-2出土土器

土壙SSK-2出土土器（第86図）

上層攪乱からは近世の燻し瓦が出土したが、図示したのは土師器碗と杯、白磁小皿である。

碗はSSD-3出土のものと同形態であるが、口縁部を欠失している。外面は丁寧な篋削りまたは篋磨きを行っている。高台は端部が丸いが、断面長方形で高い。

杯もSSD-3出土のものと同形態で、体部外面底部付近を篋削りしている。底部は回転糸切りである。体部内面はゆるいカーブを描いている。

白磁小皿はロク口削りした底部から内彎しながら外上方に立ち上がる口縁部を持つ。体部内面には1条の沈線を施す。軸は外面底部の少し上までかかる。横田・森田分類のⅢ類にあたる。

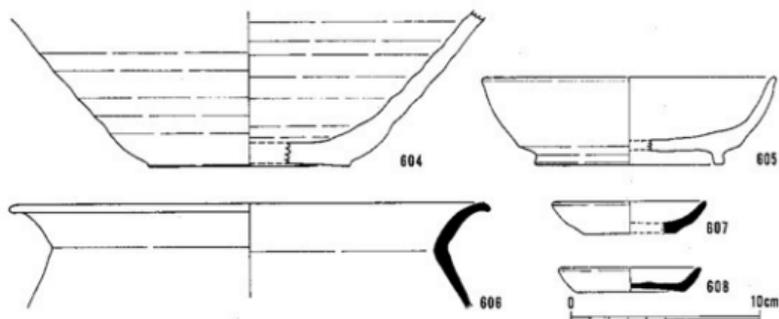
溝SSD-2出土土器（第87図604）

須恵器片口鉢の下半が出土している。底部は回転糸切りの後ナデ、体部はナデ調整である。内面は磨滅し、平滑になっている。使用によるものと考えられる。

溝SSD-5出土土器（第87図605～608）

須恵器杯と土師器甕・小皿を図示した。

杯（605）は輪高台を有するもので、底部のやや内側に貼り付けている。口縁部は少し内彎する。口径は15.2cm、器高4.7cmである。奈良時代後半と考えられ、SSD-5の時期とは合わず



第87図 溝SSD-2・5出土土器 (SSD-2:604, SSD-5:605~608)

混入と考えられる。

土師器壺 (606) は「く」の字状に外反した口縁部の端を下外方へひき伸ばしている。時期は不明であるが、平安時代後期の可能性が高い。

土師器小皿 (607・608) は2点図示したが、(607) は底部から口縁部への移行が緩やかで、(608) は屈折している。ともにSSD-3出土の小皿と同形態で、2種類認められる。

溝SSD-3出土土器 (第88~101図 図版第34~38)

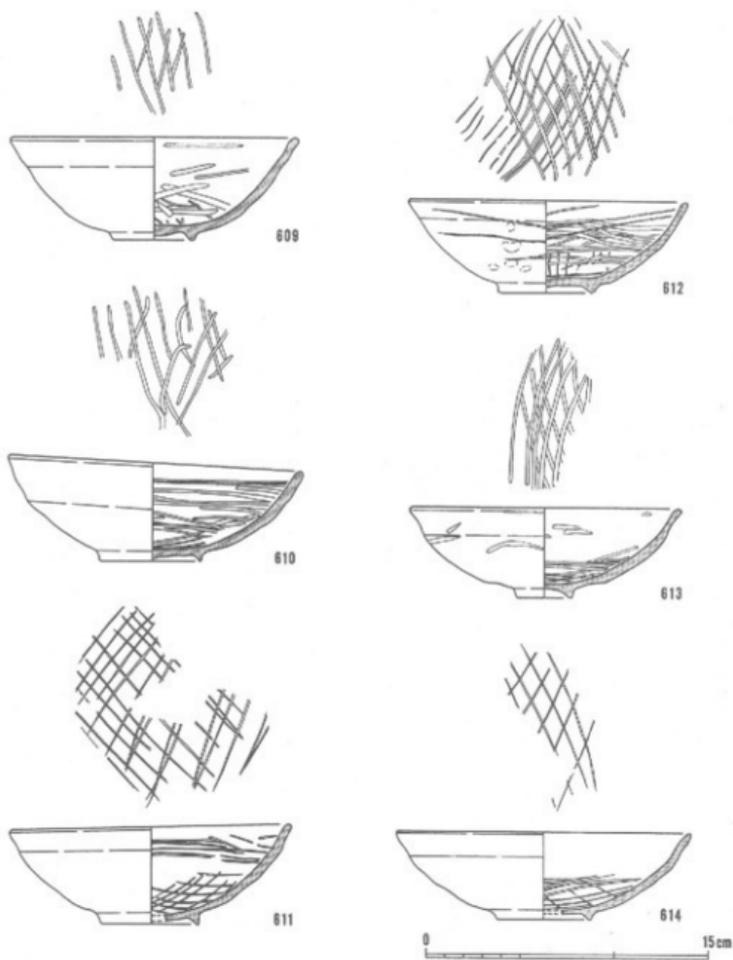
南地区の中では最も多くの土器を出土しており、瓦器碗・小皿、土師器碗・杯・小皿・小壺・甕・鍋・瓶・甕、須恵器碗・片口鉢・甕、白磁碗、青磁皿がある。

瓦器碗は図上完形のもののみ31点図示した。口縁端部に沈線は施さず、外面上部はヨコナデ調整、下半は指頭圧痕が目立ち、高台は断面三角形と台形があり、「和泉型」瓦器碗である。体部外面に暗文を施すものとうそでないものがあるが、施すものの方が圧倒的に多いが、殆どが疎らである。内面見込みの暗文には斜格子・平行・螺旋・ジグザグその他があり、斜格子が最も多く、次いで平行が多い。ジグザグは1点である。

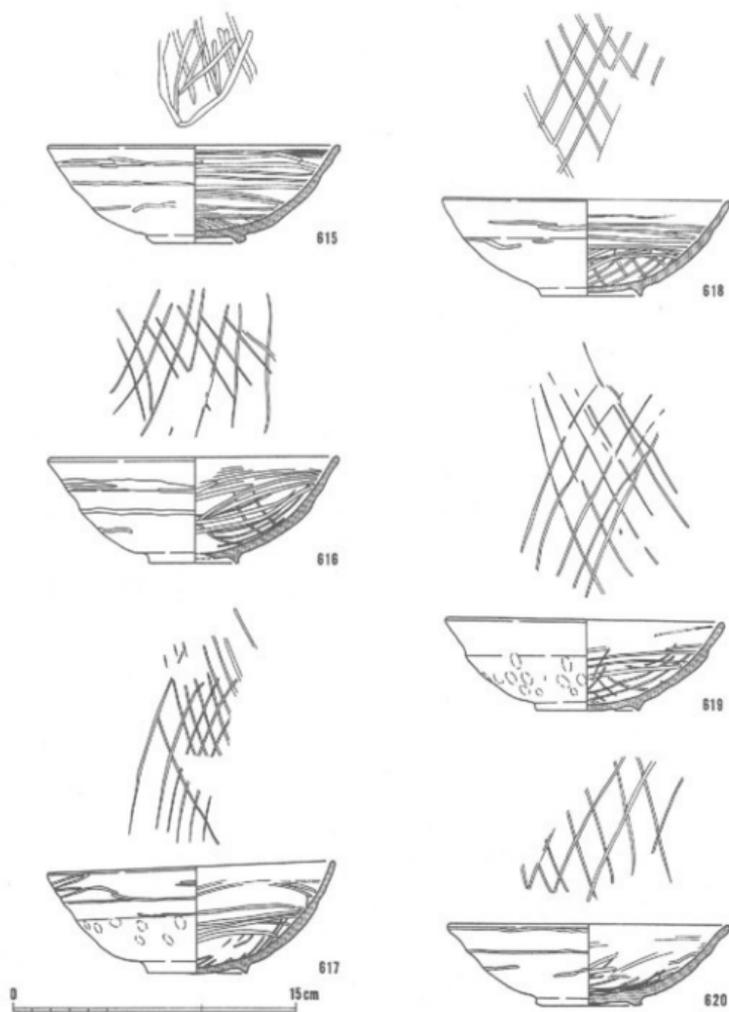
以下見込み暗文の種類別に特徴を述べる。

斜格子のもの (609~620) は径高指数 (器高÷口径×100) の大きいものから、並べた。(609~612) までは口縁部は内彎気味に外上方へ伸び、外面のつくりは丁寧で、指頭圧痕は目立たない。(613~620) は外面のラインが体部中央で一度凹んだ後外反するものである。2度屈曲するもの (615~620) と一度しか屈曲しないもの (613・614) がある。外面の暗文は (619) のみ認められないが、表面が脆弱なため消えているのかも知れない。

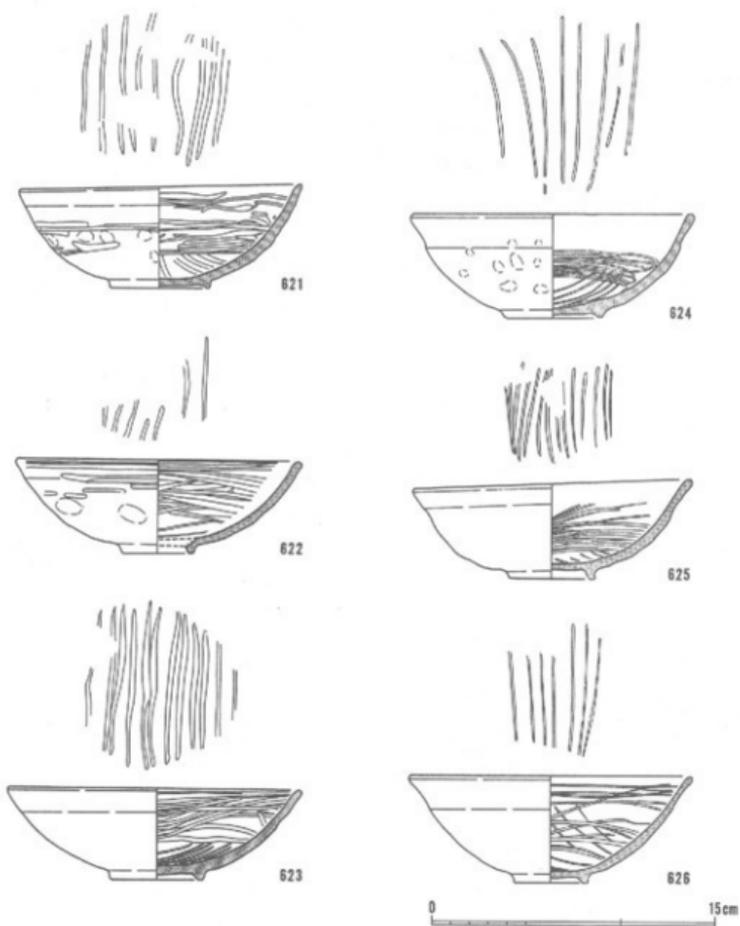
平行線の暗文を描くもの (621~629) の口縁部も同様に、内彎気味に外上方へ伸びるもの (621~623) と外反するもの (624~629) がある。2度屈曲するのは (627) のみである。外面は (626・628・629) に暗文が認められない。(623・625) については不明である。



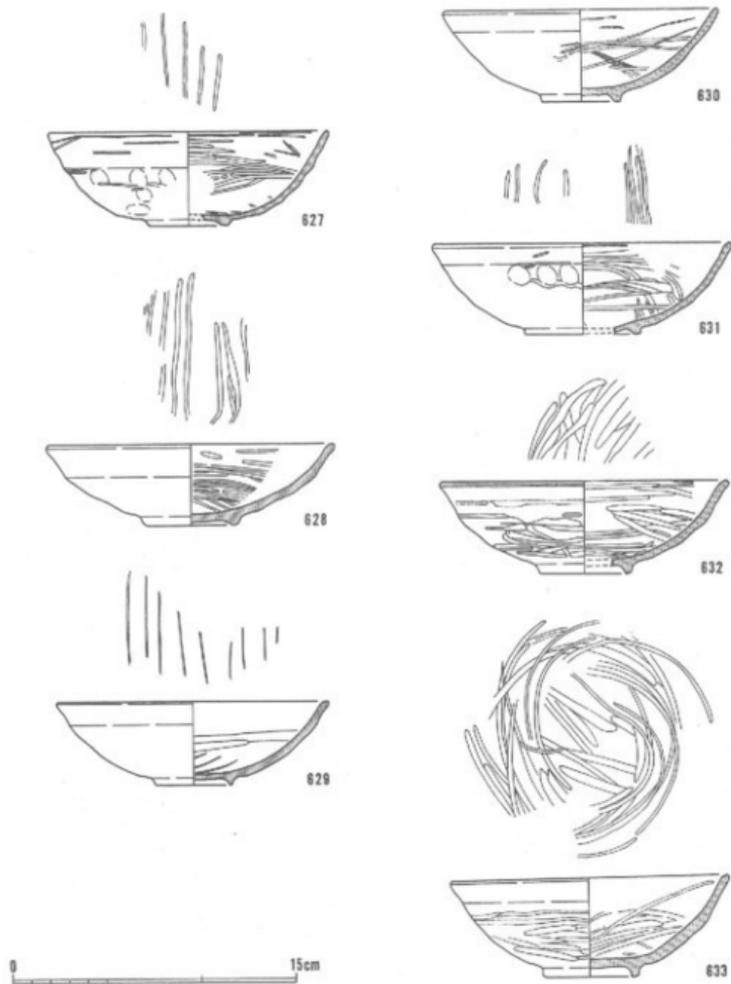
第88图 清SSD-3出土土器(1)



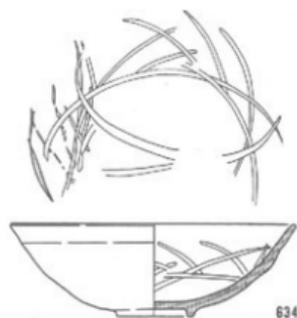
第89图 清S S D-3出土土器(2)



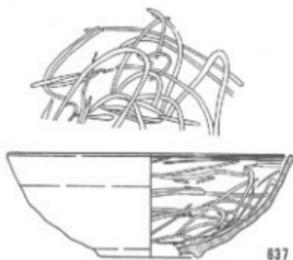
第90图 满SSD-3出土土器(3)



第91图 清SSD-3出土土器(4)



634



637



635



638



636



640



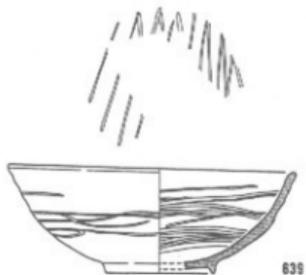
641



642



643



639



第92图 满SSD-3出土土器(5)

(630~636) は見込みの暗文が斜格子・平行・螺旋・ジグザグのいずれにも属さないもので、7点図示した。いずれも高台は断面台形である。(630・631) は口縁部が外反せず、(632~635) は外反し、(636) は一度外反したのち内彎する。外面の暗文は(636)のみ認められない。

螺旋状に施すものは(637・638)であるが、(637)はやや違っている。外面に暗文を施し、高台は断面台形で、口縁部は内彎気味である。(638)は外面に暗文は施さず、高台断面は三角であり、口縁部は外反する。

瓦器皿も図上完形に近いもの4点を図示した。

何れも暗文は内面のみを施し、外面には施さない。口縁部付近はヨコナデ調整で、底部は指押さえの後ナデを施している。(640)の見込みの暗文は斜格子状で、外面は強いナデにより稜を作り、底部との境としている。(641・642)は強い稜は作らないが、底部は平らである。(641)の見込みの暗文は平行線のようなものであるが定かでない。(643)の底部は丸く、口縁部も外反しない。暗文は不明瞭である。

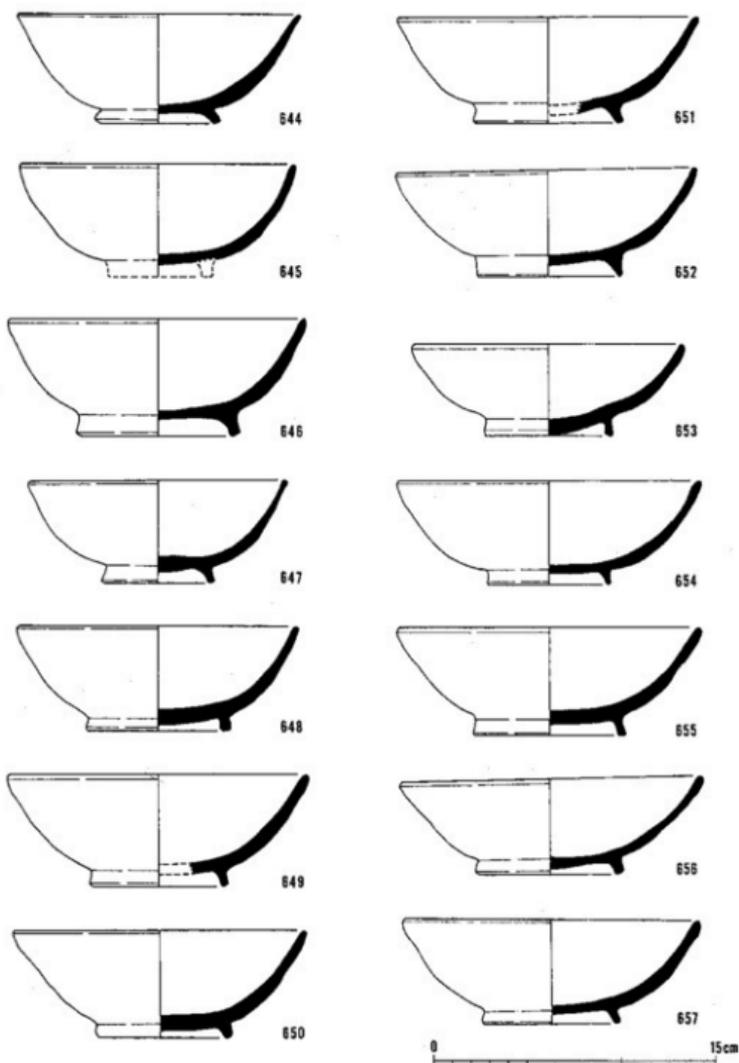
土師器碗は輪高台付のもので、図上でほぼ完形になるもの44点を図示した。灰白色を呈するものが多く、高台はすべて底部を回転糸切りした後ケガキ線を入れ、そこに貼り付けている。外面上半はヨコナデ、下半は丁寧な削りを施すものが多く、磨きを加えているものも見受けられる。内面はすべて丁寧なナデを施した後全面に磨きを加え平滑にしている。磨きの幅は不明である。高台は若干斜め外にふんばるものが多く、断面は四角形が最も多く、端部が丸いものや三角形のものも見受けられる。底径は5.8~8cmで、6~7.4cmが最も多い。口径は14~16cm程度が最も多く、深さは3.1~4.8cmである。口径・深さでは共に漸移的で分割できない。また、深さを口径で割った指数を見ても、23.5~28が最も多く、23.5より小さいものは5点、28より大きなものは8点である。形態的には外面下半に稜線があり、そこから下の調整が荒いものが15点認められる。

外面に稜を持たないものは26点あり、深いものから順に図示した。(644)の高台は最も外にふんばるもので、他のものとは違っている。また、内外の表面は黒っぽくなっている。(644~669)の外面は丁寧なナデや篋削りを施しており、(648・649・652・655・656・657・662・665・668)はその上から磨きを加えている。

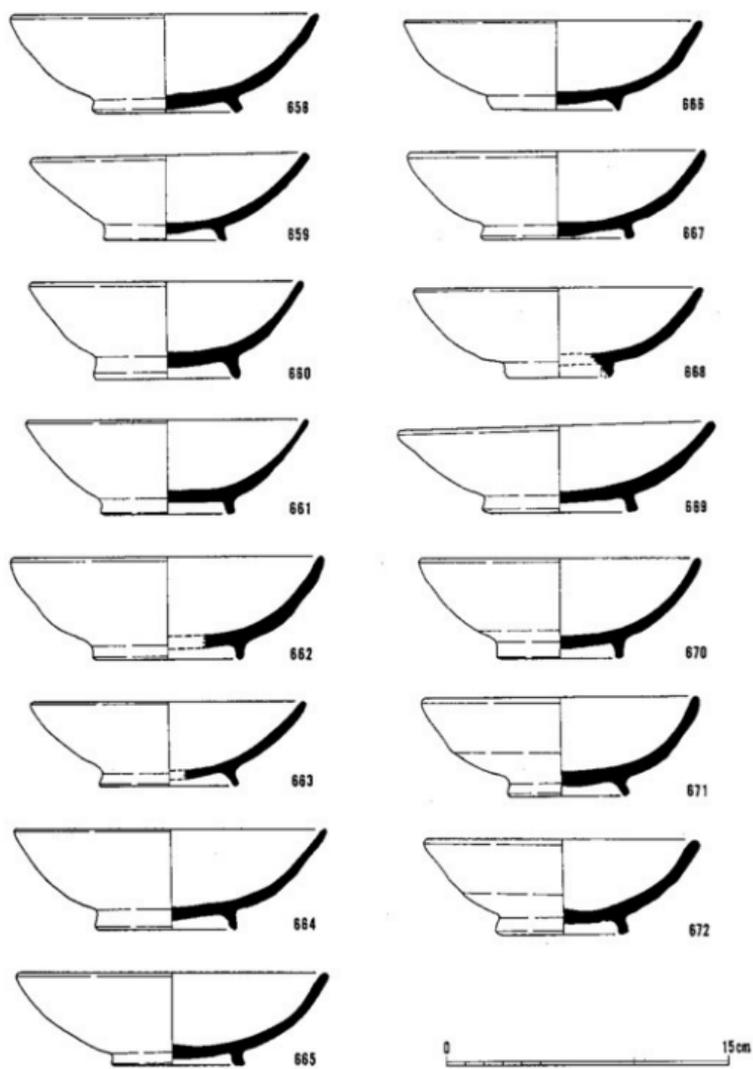
(670~685)は、外面に稜を持つもので、稜線以下は不調整か粗いナデとなっている。この種のもは比較的浅いものが多く、深いものより浅いほうが稜線が目立つ傾向にある。(682)の稜線は特に目立ち、杯に高台を付けたものようである。

以上述べた以外に(686)に示したように、口縁部が一度直立したのち外反し、高台の断面が三角形のものがあり、同様の高台を持つものがもう1点(687)ある。

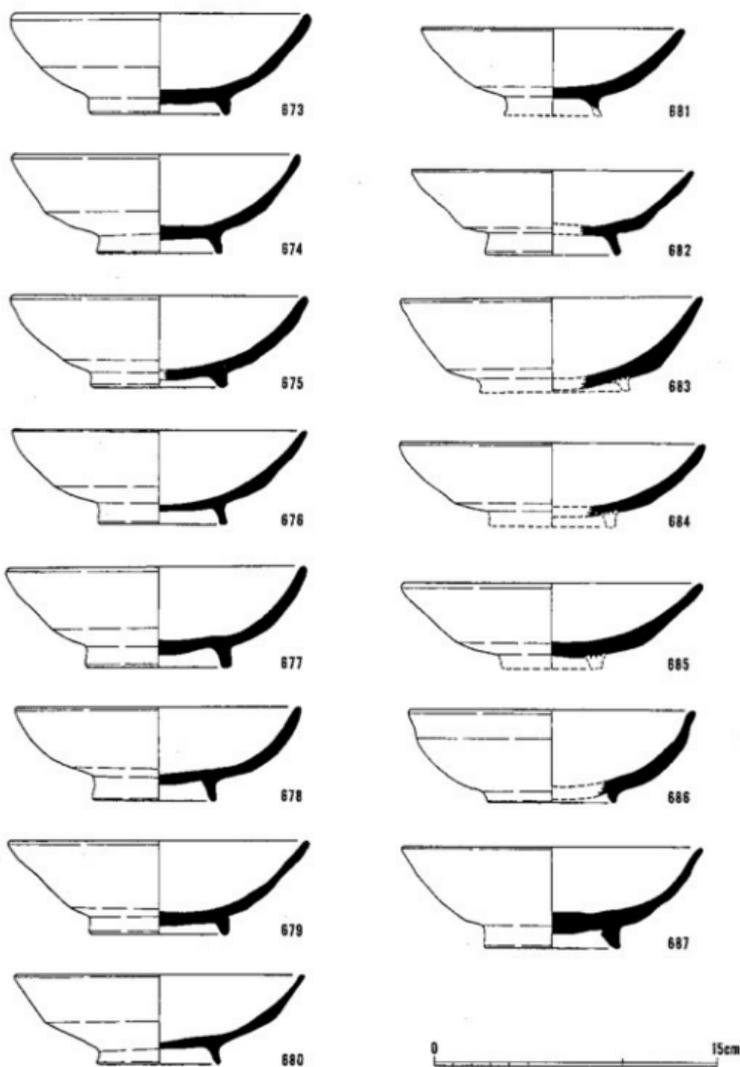
土師器杯は高台を持たず、回転糸切りの平らな底部から斜め上方に直線的に伸びる口縁部を持つもので、端部は徐々に細くなり、丸く納めるものが多い。外面下半にロクロ目が顕著に認



第93图 清SSD-3出土土器(6)



第94图 清S S D-3出土土器(7)



第95图 清SSD-3出土土器(9)

められるものがある。胎土・色調共に椀や小皿と同一である。(688~728)までは底部が平らなものを深い順に並べたが、形態その他の特徴で分類することはできない。口径は13.1~15.6cm、器高は2.7~4cmである。口径・器高共にこれらの中でのまともは認められない。底部は(688)は静止糸切り、他はすべて回転糸切りである。

(729・730)は底部が丸いものである。(729)は他と同様回転糸切り、(730)は篋切りのようであるが、底部と体部の境がはっきりしないものである。胎土・色調は他と同様である。

土師器小皿は第98図に示した。図示したものは図上完形のものであり、62点ある。胎土・色調ともに椀・杯と同様であり、同一場所で製作されたものであることが窺える。

底部は2点を除いてすべて回転糸切り調整で、底部の厚みに対し口縁部が薄いものも多く、口縁部は丸く納めている。口径は7.6~9.3cm、平均は8.3cmで、器高は1.1cm~2.2cm、平均は1.5cmである。底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、底径に対し口径が大きいものと、屈曲して稜を持つものがある。前者は(731~773)に示した43点で、後者は(774~790)に示した17点で、共に口径の大きい順に並べた。(791・792)は底部篋切りのものであるが、胎土・色調は他と同じで、底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がる。

土師器のその他の器種には無高台椀・有脚皿・壺・甕等があるが、それらは第99図以降に示した。

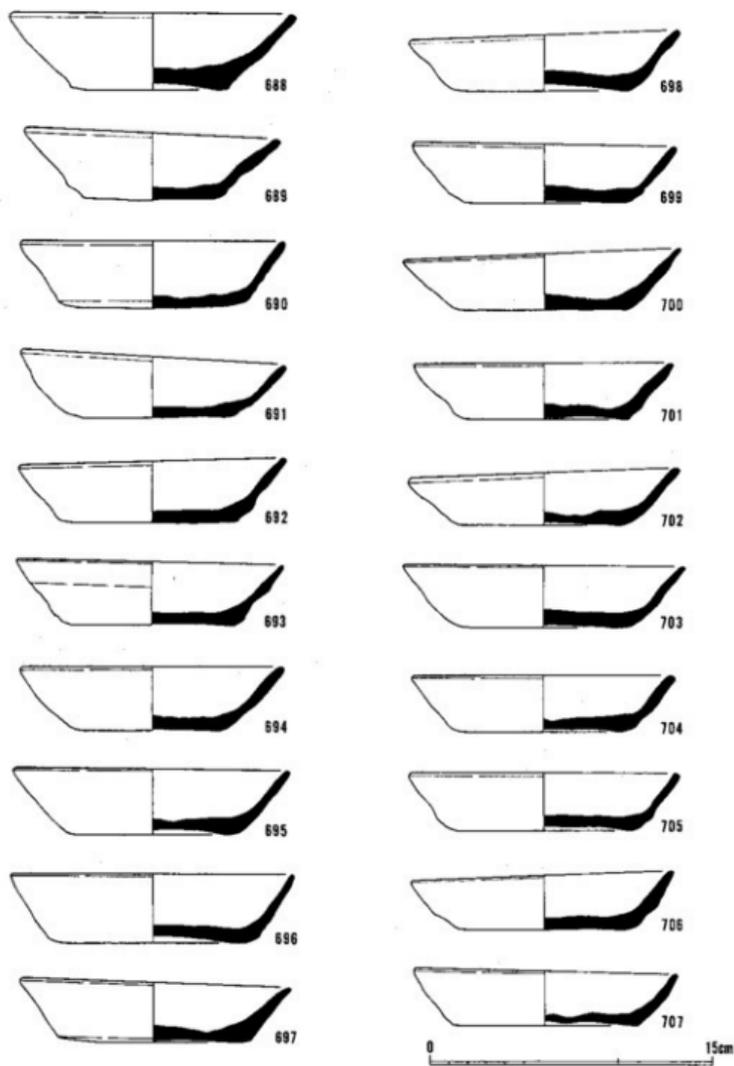
無高台椀は2点図示した(793・794)。共に他の土師器の胎土・色調と同様である。ヨコナデは内面全体と外面上半部に限られ、外面下半は粗いナデもしくは未調整となっている。(793)は片口を有している。

有脚杯は1点(795)あり、器高2.3cmの浅い杯に高さ約2cmの高い輪高台を貼り付けている。杯部は無高台の杯に比べて口縁部の傾きが大きいため、非常に浅いものとなっている。

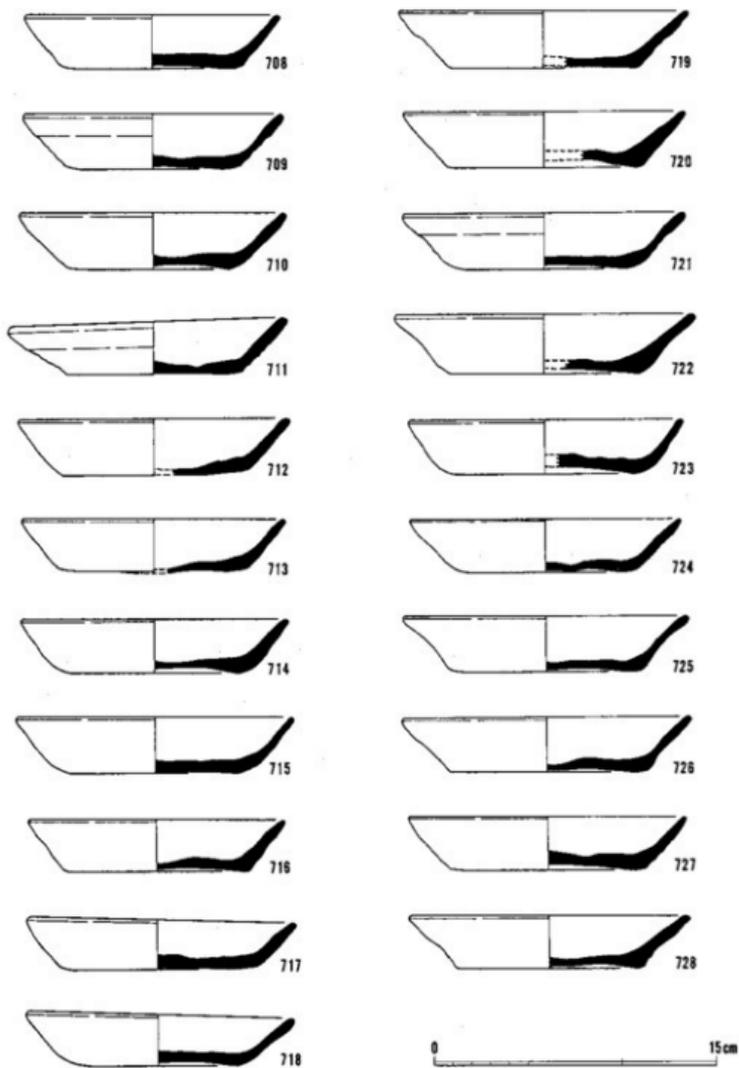
大型椀の脚部と考えられるものが1点(796)ある。高台は厚く大きく、残存部分での調整はすべてヨコナデである。

有脚皿は口縁部で6点を図示した。脚部は中空のものが殆どを占める(797~801)が、中実のもの(802)が1点認められる。口縁部の形態では、外側に段を持ち厚みを減じるもの(797)、ゆるやかに外上方に伸び、そのまま丸くおさめるもの(798・799・802)、外上方に伸びた後外反するもの(800)、ほぼ横外方にまっすぐ伸びるもの(801)が認められる。口径は7.7~8.8cmであるが、8.4cmのものが多い(797・798・802)。脚部は3点図示した(803~805)。(803・804)については、径や内面上端の形状、厚み、外反度からほぼ確実と思われるが、(805)は有脚杯の可能性が高い。(805)の体部底面は回転糸切りである。

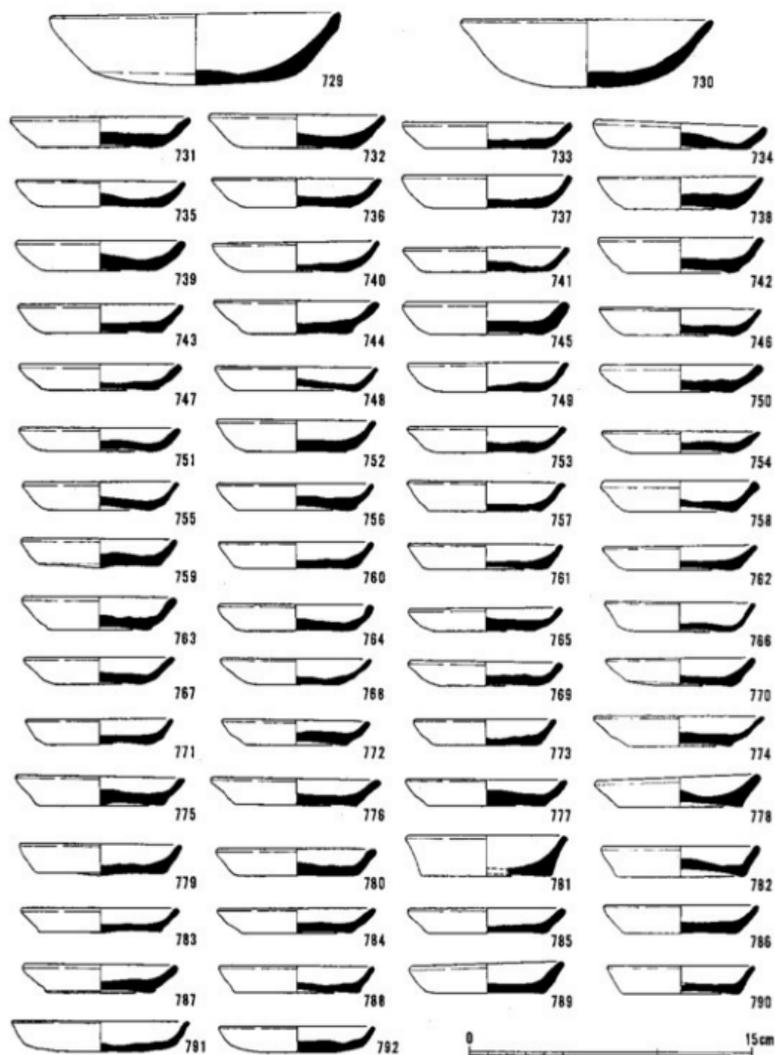
小型の瓶は1点(806)出土している。回転糸切りの平らな底部を持ち、体部上半部は徐々に細くなってゆく。口縁部は欠失している。体部下半は横方向の磨き、上半は縦方向の粗い磨きを施している。胎土・色調ともに椀・杯類と同じである。



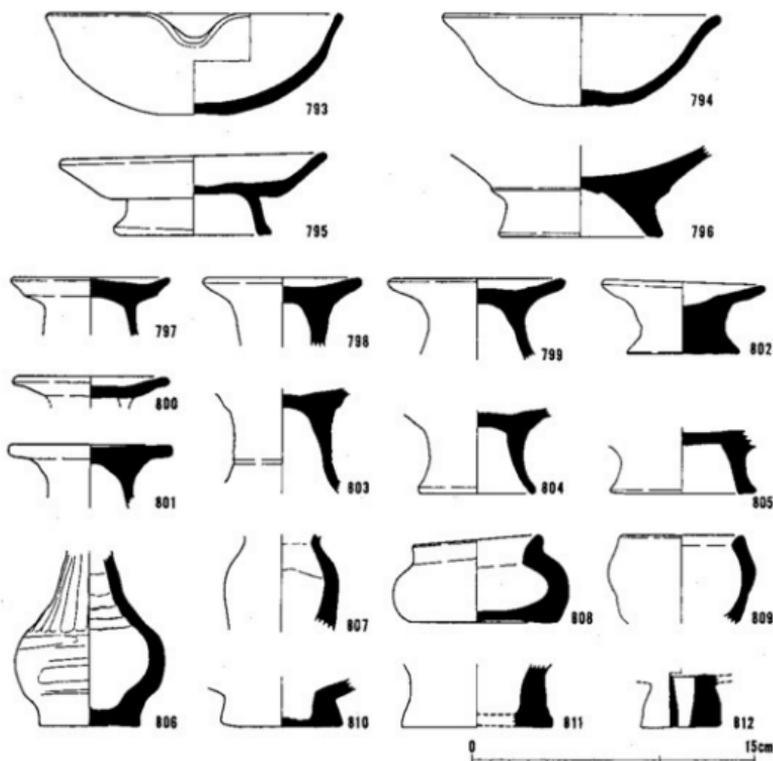
第96图 清SSD-3出土土器(9)



第97圖 清SSD-3出土土器(10)



第98图 满SSD-3出土土器(II)



第99図 溝SSD-3出土土器(12)

(807)は破片のため形態は不明であるが、細長い瓶のようになるものと思われる。内外面ともにヨコナデ調整である。

(808)は偏平な小壺で、完形品である。胴部最大径は9.3cmで、器高は4.6cmであるが、体部の高さが違う部分があり、口縁部が傾いている。底部が回転糸切り調整のほかはすべてヨコナデ調整である。外面のほぼ全体と口縁部内面の一部に煤状の黒い付着物が認められる。

(809)は小型の鉢のような形をしている。口縁部は内傾し、端部は面を持っている。体部は内彎し、底部は欠失しており、不明である。すべてヨコナデ調整であるが、外面下半はロクロ目が認められる。

その他に底部を3点(810~812)図示した。(810)は托と思われ、底面は回転糸切り、体部

見込みは大きく凹んでいる。(811)も突出した底部であり、回転糸切り調整で、側面にはロクロ目が認められる。胎土には赤色粒を多く含み、他とは様相を異にしている。(812)は突出した中実の底部で、ほぼ中央に孔を穿っている。体部は欠失しているが、横外方に伸びる薄いものである。底面は回転糸切り調整、他はヨコナデである。

以上述べたうち、(811)以外は碗・杯・小皿と胎土・色調が同様のものである。

甕や鍋釜類は第100図(813~824)に示した。「く」の字状に外反する口縁部のものは(813~819)の7点で、口径17~22cm程度の小型のもの(813~815)と、26~32cm程度の大型のもの(816~819)が認められる。

小型のものの口縁端部は面を持ち、体部はあまり張らないものと思われる。調整のわかるものでは内外面とも刷毛調整もしくはヨコナデである。大型のものでは(816・819)が小型と同形態であるが、(817)は口縁部が短く、端部は丸い。(818)は口縁端部を横外方に引き伸ばしている。調整は内外面とも刷毛で、小型と同様である。

(820~822)はいずれも口縁部が外反する形態のもので、外面の調整は粗い刷毛目あるいは叩き目である。器種は甕・鍋・甑いずれとも決し難いが、(822)については鍋の可能性が高い。

(823)は口縁部が内傾するもので、甑と思われる。口径は27.4cmである。

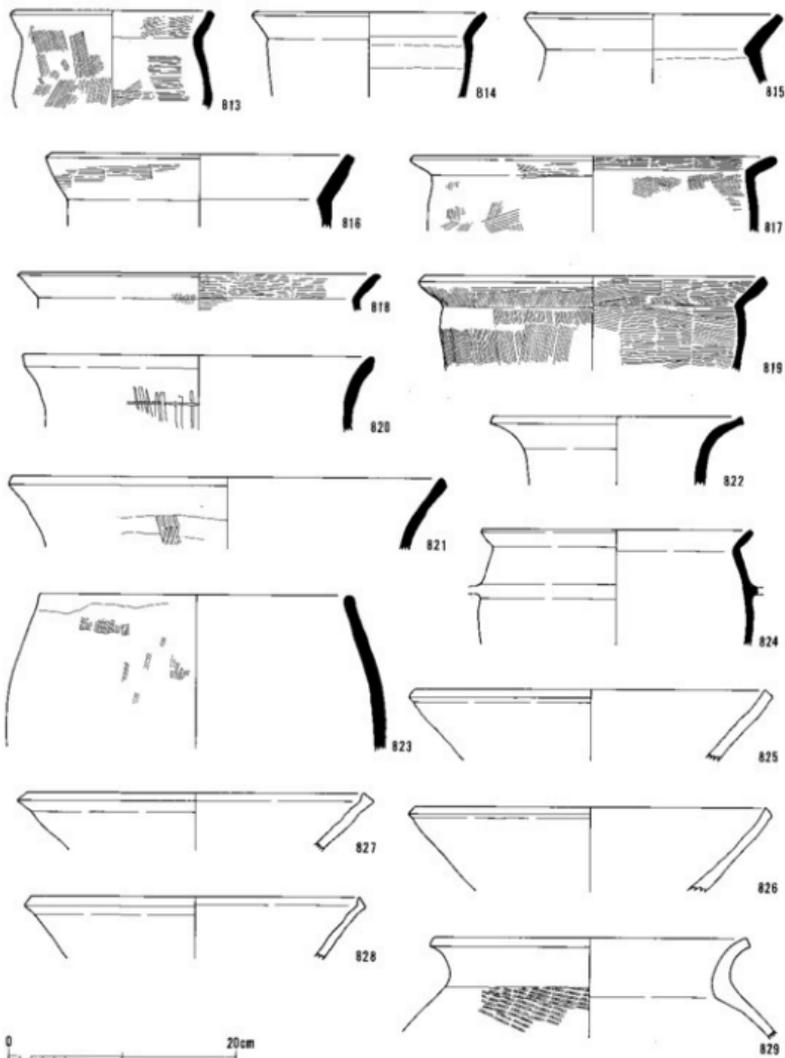
(824)は口縁部が「く」の字状に外反する羽釜で、口径は23.6cmである。内外面の調整はヨコナデで、外面の鈔以下は篋削りである。胎土には赤色粒を多く含み、金雲母も含んでいる。同形態のものは河内地方で多く見受けられる。

鉢は4点出土している。(825・826)は瓦質のもので、端部は下方にのみ若干ひき伸ばしている。(827・828)は須恵質のもので、主として上方に拡張しており、東播系須恵器の編年では12世紀後半に属する形態である(丹治・森田編年⁵¹)。

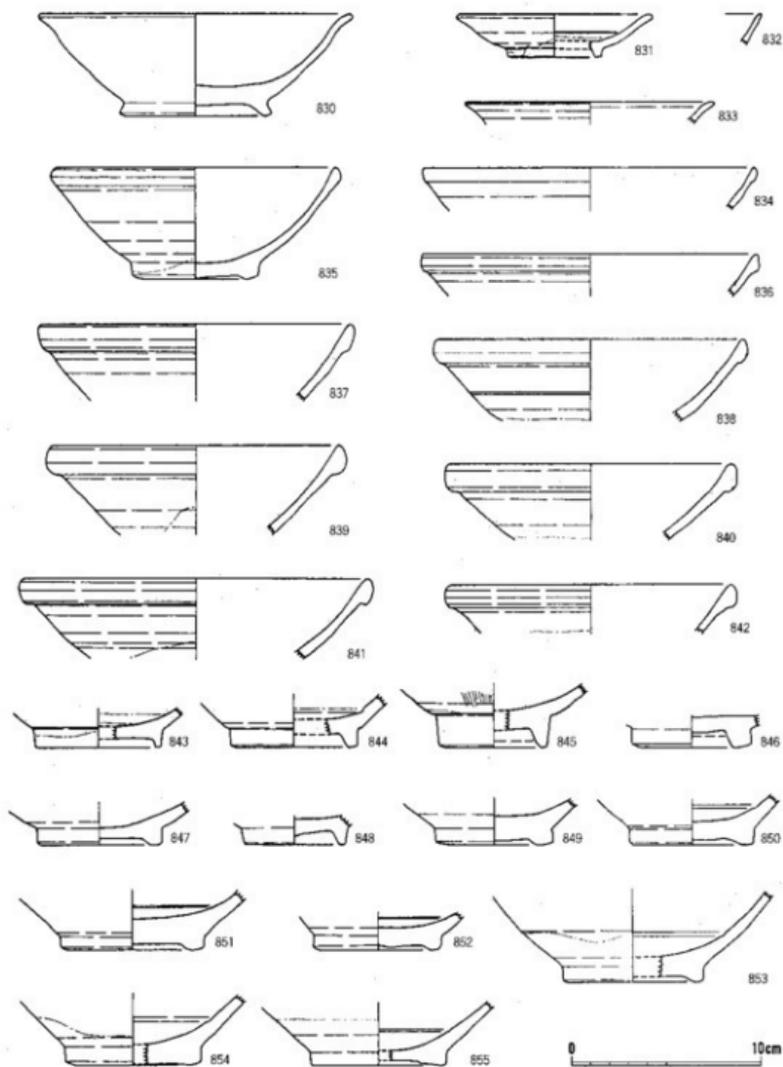
(829)は須恵器の甕で、口縁部は外反し、体部には殆ど平行叩きにみえる格子目叩きを施している。形態・調整の特徴から香川県陶窯跡群のものと思われる。

東海系無袖碗(830)は1点出土した。体部の下半にやや丸みを持ち、口縁部が外反するもので、底部は厚く、体部から口縁部は薄くなっている。高台は四角く、外に踏ん張っている。胎土は粒子が細かく精良である。藤澤氏の編年¹⁰では第1段階(11世紀中・後葉)に属するものと考えられるが、高台の形状が四角い点が違っている。第1段階でも後半にあたるのであろうか。

白磁は第101図に25点を示した。皿(831)は1点出土している。高台は高く、見込みの部分の軸を輪状にかきとっている。外面高台部分には軸は施されない。横田・森田分類の白磁皿Ⅲ類にあたる。(832)の口縁端部は一度内傾した後若干外反する。端反りの口縁部は(833)で、1点を図示した。Ⅵ類あるいはⅧ類に属するものと思われる。玉縁状の口縁部は(834~842)の9点を図示した。(834)は玉縁が特に小さいもので、Ⅱ類と思われる。(835・836)も玉縁が小さいものである。Ⅲ~Ⅳ類に属するものであろう。(835)の体部内面は模様状に削っている。



第100图 清SSD-3出土土器(3)



第101图 清SSD-3出土土器(14)

高台は幅広く低い。(837~842)は玉縁の大きいもので、Ⅳ類にあたる。(838~840)の3点は比較的白い色を呈する。時期的には(834~836)が古く、(837~842)が新しいものである。

底部は合計13点図示した(843~855)。(843)は内面の釉を輪状にかきとっており、高台や体部は薄く皿と思われる。(844)も見込み部の釉を同様にかきとり、皿の可能性のある碗である。(845)は外面に櫛目文を繪す高台の高いものであり、(846)は乳白色を呈し、内面と高台部に目跡が4箇所に残っている。高台は幅広くやや高いもので、他の白磁とは窯が違うものであろう。(847)も高台部がやや高く釉の色が黄色味を帯びているが、二次的焼成の疑いもある。(848)は高台部が幅の狭いもので、Ⅲ類にあたると思われる。(849~855)が高台が低く幅広いもので、Ⅳ類であろう。(849)以外は内面見込み付近に圈線をめぐらしている。(851・855)は比較的白い色の釉である。

ピット出土土器 (第102・103図 図版第38)

南地区の柱穴等から出土した土器をピット出土土器として第102・103図に図示した。

Pit203出土土器

(856)に示した黒色土器碗が1点出土している。内外面とも燻したB類で、断面方形の高台を持ち、底部は丸く、口縁部外面直下に強いヨコナデを施し、和泉型瓦器碗に類似するものである。内面の磨ききは5ないし6方向に施し、外面はヨコナデから下に施している。淡路地方の黒色土器は類例が少なく詳細は不明であるが、河内地方⁽⁷⁾あるいは讃岐地方⁽⁸⁾の平安時代末期のものに類例が認められる。

Pit663出土土器

(857)の瓦器碗1点と(871・872)の土師器小皿2点が出土している。瓦器碗は内外面に暗文を施した、丸みのある器形で、底部を欠失する5分の1程度の破片である。外面のヨコナデはあまり強くない。小皿はいずれも完形品で、回転糸切りの平らな底部から稜を持って立ち上がる形態で、溝SSD-3出土小皿と同形態である。口径は(871)が9.3cmで、最も大きい部類である。

Pit 8 出土土器

(858)に示した瓦器碗の約3分の1の破片と(867)の土師器杯の破片、(874)の土師器小皿の破片が出土している。瓦器碗は口縁部外面以外は乳灰色を呈し、外面の強いヨコナデにより、外反する口縁部を持つ。暗文は内面は密に、外面はヨコナデから下に疎らに施している。見込み部は平行線あるいはジグザグ文である。高台は断面三角形で、径は小さい。土師器杯は外面下半にロクロ目が認められ、底部は回転糸切りのようである。小皿も底部回転糸切りで、体部は稜を持って立ち上がる。土師器杯・小皿はいずれもSSD-3出土土器と同形態である。

Pit46出土土器

瓦器碗が2点(859・860)出土した。(859)は約4分の1の破片で、口縁部外面はヨコナデ



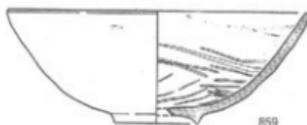
856



857



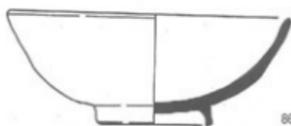
858



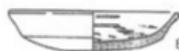
859



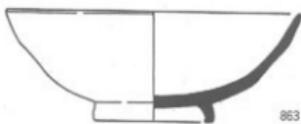
860



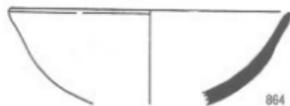
862



861



863



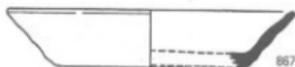
864



866



865



867

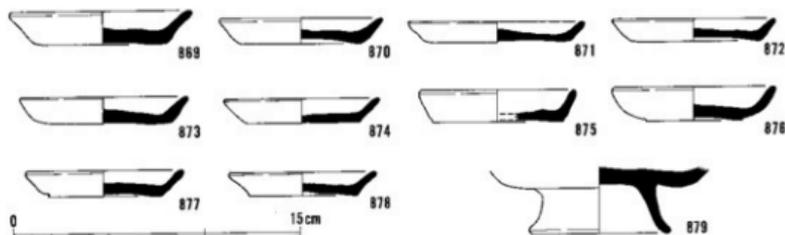


868



15 cm

第102図 南地区ビット出土土器(1)



第103図 南地区ピット出土土器(2)

を施しているが、外反はしない。内面はやや疎らな暗文で、見込み部分は平行線文である。外面口縁部付近にも暗文が若干認められる。高台は断面三角形のものをやや雑にナデつけている。(860)は口縁部を強いヨコナデにより外反させている。見込み部分は斜格子文で、外面に暗文は認められない。(859)に較べて薄手である。

Pit63出土土器

(861)に示した瓦器皿完形品が1点出土している。底部に較べて口縁部が薄く、外反するもので、溝SSD-3出土の皿に類似している。内面の暗文はやや疎らで、見込み部分は平行線文である。外面に暗文は施さない。

Pit626出土土器

土師器碗1点(862)と土師器杯(866)が各1点出土している。いずれも完形品である。

碗は径高指数が30と大きく、外面の稜は目立たない。内面は丁寧に磨いているようである。杯は底部回転糸切りで、端を少し削っている。内外面ともロクロナデ、見込み部は仕上げナデを施している。碗・杯ともに溝SSD-3出土土器と同一の特徴を示すものである。

Pit625出土土器

(863)に示した土師器碗が1点出土している。底部から口縁部にかけての破片で、外面下方に鈍い稜を持ち、口縁部は外側に開くものである。内面は丁寧に磨いているようであるが、外面は口縁部をヨコナデする以外は丁寧に調整は認められない。高台は断面長方形のしっかりしたものである。

Pit649出土土器

(864)に示した土師器碗の3分の1弱の破片が1点出土している。外面口縁部はヨコナデにより若干外反させている。底部高台以下は欠損している。

Pit18出土土器

土師器の浅い碗の小片が1点(865)出土している。碗部は浅く口縁部が外に開くもので、高い高台が付き、外面は稜をもち、内面は直線的である。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は丁寧に磨いているようである。溝SSD-3でも同様のものが出土している。

Pit41出土土器

土師器杯の約2分の1の破片(868)が1点出土している。焼成は良好で非常に堅緻であるが、底部に焼き歪みが見られる。杯部中央でやや屈曲し、外面は強いナデにより凹んでいる。底部は回転糸切りである。

Pit147出土土器

土師器小皿の完形品(869)が1点出土している。底部は厚く口縁部が薄いもので、口縁部は外反する。内外面とも回転ナデで、底部は糸切り、外面底部の周囲に若干クロロ目が認められる。本遺跡出土例中、口径が大きく器高も高いものである。

Pit627出土土器

(870)に示した土師器小皿の約2分の1の破片が出土している。口縁部外面中央でやや外側に張り出すもので、内面は回転ナデ調整を行っている。外面は器表剥離により調整不明である。

Pit99出土土器

(873)に示した土師器小皿完形品である。口縁部先端に向かって急に薄くなり、口縁部は若干外反する。底部は回転糸切り、その他は回転ナデである。口縁部は稜をもって立ち上がる。

Pit55出土土器

平らな底部から稜をもって斜め上方に立ち上がる口縁部の深い小皿(875)が出土した。約2分の1の破片で、器表剥離のため調整は不明である。

Pit25出土土器

(876)に示した土師器小皿が1点出土した。ほぼ完形品である。口縁部は底部から外彎しながら上方に伸び、回転糸切りの底部は若干突出する。

Pit49出土土器

土師器小皿の完形品(877)が1点出土している。口縁部は若干外反し、端部で厚みを増している。回転糸切りの底部から屈曲して伸びる口縁部である。調整は回転ナデである。

Pit70出土土器

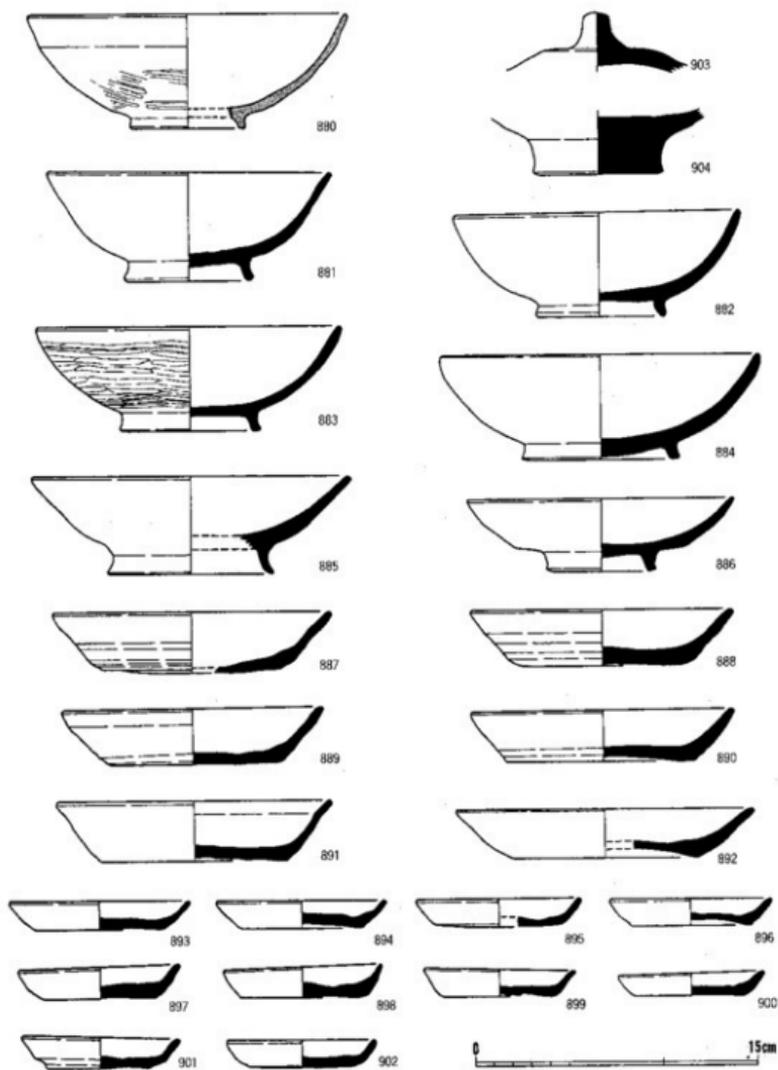
外反する口縁部はやや薄いつくりで、底部は回転糸切りのようである。(878)に示した。口縁部は底部から稜をもって立ち上がっている。

Pit80出土土器

(879)に示した有脚杯の下半部が1点出土している。脚端部が丸いことを除けば、溝SSD-3出土の(795)と同形態と思われる。器表剥離のため調整は不明である。

包含層出土土器(第104~106図)

包含層出土の平安~鎌倉時代の遺物は主として灰褐色砂質土、暗灰褐色土、黒褐色シルト上面より出土しており、大半は溝SSD-3よりも北西側で出土している。また、杭C2付近で浅い落ち込みから土師器杯と小皿が各2点まとまって出土している。



第104图 南地区包含層出土土器(5)

出土器種としては瓦器碗、土師器碗・杯・小皿・羽釜・鍋、須恵器鉢、青磁、白磁がある。瓦器碗(880)は断面台形の高台をもち、口縁部が若干外反するもので、約5分の1の破片である。外面下半にやや密に暗文を施している。内面は器表剥離のためよく観察できない。

土師器碗は4点(881~884)を図示した。

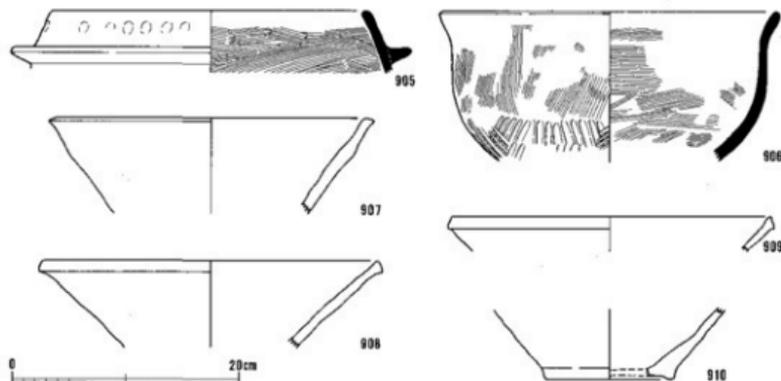
すべて底部回転糸切りの後、ケガキ線を入れ、輪高台を貼り付けているものと思われる。

(882)以外は内面を丁寧に磨いており、外面下半を丁寧な笥割りをを行い、(883・884)の2点はさらに笥磨きを加えている。

(881)は口縁下で若干屈曲し、口縁は外上方に直線的に伸びている。(882)は器表剥離のため外面上部のヨコナデ以外の調整は不明である。内彎しつつ外上方に伸びる口縁部である。(883)の外面の磨きは顕著で、数回に分けて横方向に施している。口径はやや大きいものである。(884)は底径が大きく、器壁も厚い。(883)同様口径が大きく、器高が低いものである。

有脚杯は2点図示した。(885)は若干歪みも認められるが、口径・器高とも大きく、高台も高い。杯部の屈曲は顕著ではない。屈曲部より上はヨコナデ調整のようである。(886)の外面の屈曲部は顕著で、杯に高台を貼り付けただけのような形態を示す。屈曲部以下は回転糸切りのようなものである。

土師器杯は6点(887~892)を図示した。底部はすべて回転糸切りで、(887・888)の杯部下半にはロクロ目が顕著に認められ、(890)にも薄く認められる。(891・892)は口縁部の外反度が強く、その他は若干外反あるいは内彎しつつ外上方に伸びるものである。内外面の調整はすべてヨコナデで、(889・890)の見込み部分には仕上げナデが認められる。図では(892)の口径が大きいが、歪みによるものである。



第105図 南地区包含層出土土器(6)

土師器小皿は10点(893~902)を図示した。すべて底部は回転糸切りで、(893・896~902)が完形品もしくは完形品に近いものである。第104図では口径の大きいものから順に並べた。溝SSD-3でも見たように、底部と体部の境が屈曲して稜をもつもの(893~900)と丸みをもって立ち上がるもの(901・902)とがある。前者では(899)、後者では(901)の口縁部が外反し、他は内彎または直線的に伸びるものである。

(903)はつまみがあることにより蓋と考えられるが、類例は知らない。内面はヨコナデで、外面の調整は不明である。あるいは組み合わせの皿になるかもしれない。

(904)は鉢あるいは大型の椀の底部と考えられる。底部は糸切りと思われるが確認できない。径6.9cmの大きな平底であるが、全体の器形を窺うことはできない。

土師器は羽釜・鍋・壺・甕等が出土しているが、図示したのは羽釜(905)と鍋(906)が各1点である。羽釜は口縁端部がやや丸く、鈎は約2cmの幅で斜め上方に伸びているものである。鈎より下の体部は欠損している。外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛調整である。鍋は口縁部が緩やかに外反し、丸みのある体部を持つものである。成形・調整は外面が太筋の平行叩きの後上半を縦刷毛調整、内面は横刷毛、口縁部はヨコナデである。外面のほぼ全面に煤が付着している。

瓦質土器は鉢(907)が出土している。外面と口縁部内面が燻され、内面は乳灰色を呈する。底部は遺存せず、体部は直線的で、口縁端部付近で緩やかに屈曲し、口縁端部は若干外方に引き伸ばしている。外面はヨコナデ、内面の屈曲以下は左上がりの強めのナデを施している。内面は平滑になっており、使用の痕跡と考えられる。本例については他の類例を知らない。

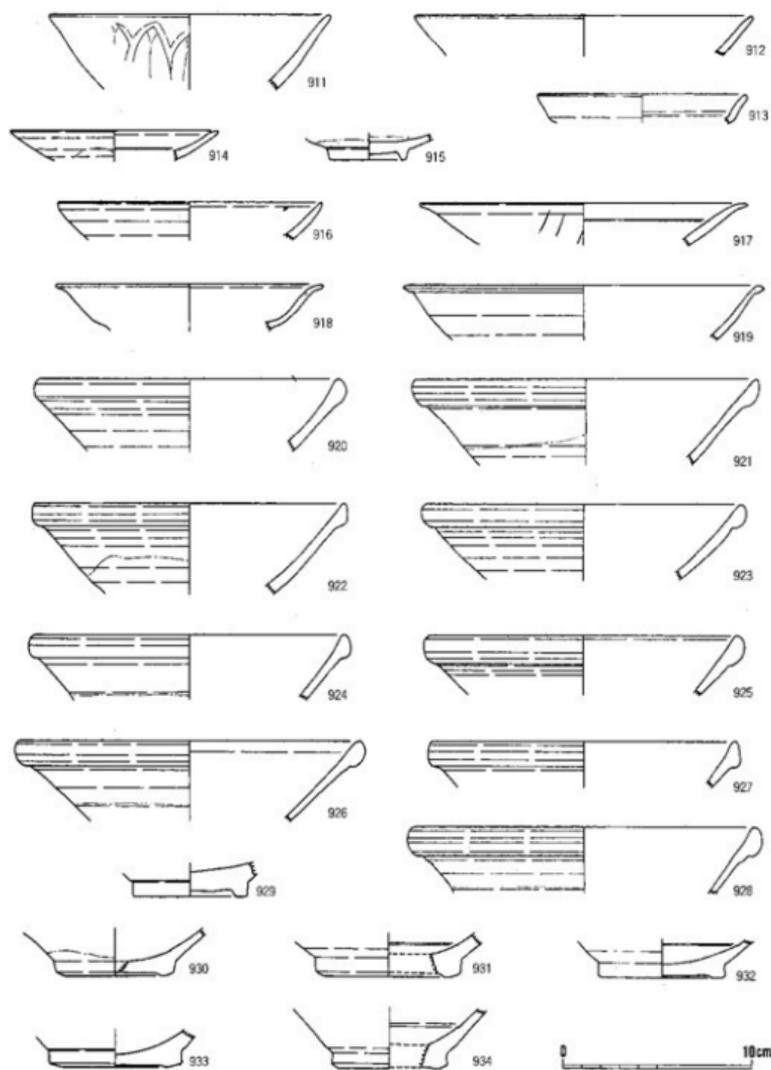
須恵器は鉢を3点図示した(908~910)。いずれも小片であるが、東播系のもと考えられる。(908)の口縁部は端部をやや下方向に引き伸ばし、体部は若干外反する。(909)は端部の断面が三角形を呈し、下方に少し拡張する。底部(910)は輪高台を貼り付けており、大型の鉢と考えられる。内面は平滑になっており、使用の痕跡であろう。いずれも12世紀中頃と考えられる。

輸入磁器は第106図に示した。青磁3点と白磁21点を図示した。

青磁は龍泉窯系の鎊連弁文碗(911)、無文碗(912)と同安窯系の皿(913)が各1点である。龍泉窯系碗は横田・森田分類ではI-5類に分類されるもので、同安窯系皿はやや黄色味の強い釉色で、外面体部下半は無釉であることから、皿I-1類に分類されるものである。

白磁は皿と碗が出土しており、(914)の口縁部は白磁皿ⅢあるいはⅣ類に分類されるもので、(915)の様に輪状に釉をかきとった底部の形状を呈するものと思われる。(916・917)も皿と思われるが、胎土や釉の色調が他の白磁と異なっており、(917)は形態的にはⅣ類に似ているが、産地が違うものと思われる。

白磁碗では(918)が小片のため傾きがやや不正確であるが、口縁端部が外反し内面に沈線、外面に楯目文を描くもので、V-2類に属するものと考えられる。(919)は端部を大きく外反



第106图 南地区包含層出土土器(7)

させるもので、V類に属するものと思われる。(920~928)はいずれもIV類に属する碗の口縁部で、端部は玉縁状を呈し、外面の端部下半には施釉されない。(920)のみ玉縁下端が沈線状に凹んでいない。また、他の胎土が灰色を帯びた白色であるのに対し、本例は乳白色で、釉色も白いものであり、産地が異なっていることが窺える。体部はやや内彎するもの(920・922・923)と直線的なもの(921・926・927)があるが、玉縁の形状との関連性は窺えない。

底部は6点図示した。高台の高いものから順に番号を付したが、すべてIV類であろう。内面に沈線が認められるもの(931・932・934)とそうでないもの(930)があり、(929・933)は沈線部分まで遺存していないため不明である。(929)の高台は幅が狭く高いもので、IV-2類に分類される。(930~934)の高台は殆ど突出しない。(934)の内面の施釉は雑で、施されない部分が多く、(933)も同様である。外面の釉は(930・933)の2点が底部付近まで施されている。(931)の体部外面の削りは模様状になっている。

〔註〕

- (1) 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山先生古稀記念古文化論叢』1980年
- (2) 真野 修氏の御教示による。
- (3) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集 4』1978年
- (4) 橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』1980年
- (5) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』1985年
森田 勉「東播系中世須恵器の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要 3』1986年
- (6) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 Ⅰ』1982年
- (7) 尾上 実「南河内の瓦器塚」『古文化論叢』1983年
- (8) 香川県文化財保護協会「下川津遺跡Ⅰ~Ⅲ」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅵ~Ⅹ)』1986~1988年
- (9) 兵庫県教育委員会 水口富夫氏の御教示による。

なお、平安時代~鎌倉時代の土器については、橋本久和、前川要、福田正權、森田勉の各氏のほか、中世土器研究会の諸氏の御教示を得た。

第4節 小 結

南地区は調査区の平面形が直角三角形を呈し、調査地区の旧地形は北端の隅部分が最も高く、南・東方向に徐々に下がる緩い傾斜面である。

南地区で検出した遺構には、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代に属するものが検出できた。

それらのうち前三者は調査区内の北半分のみ存在し、下層面で検出できた。下層面は、遺構面が黄褐色シルトで、その上層には下から暗黒褐色シルト、灰褐色シルト、乳灰褐色シルトが堆積しており、これらに下層の遺物が包含されていた。調査区内北部では旧地形の関係から、包含層は黒褐色シルトのみで、その上層には包含層は存在しなかった。また、北部でのこの層の中には上層の遺物も包含されていた。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構は上層遺構面で検出できた。上層遺構は調査区のほぼ全体で検出され、遺構数は最も多かった。遺構面は前述の下層遺物包含層である、乳灰褐色シルトで、調査区内北部では下層遺構と同じ黄褐色シルトが遺構面となっている。上層遺構の遺物包含層は遺構面直上の灰褐色シルトとその上層の乳灰色シルトであった。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は竪穴住居址が3棟で、円形2・方形1であった。出土遺物からSSH-1は弥生時代後期後半、SSH-3は弥生時代後期末～古墳時代初頭で、SSH-2からは土製紡錘車が1点出土したのみで、時期を明確にできる遺物は出土しなかった。また、SSH-1では白石・槌石がセットで床面から出土している。この時期の遺構には他に土壇が2基あり、そのうち、SSK-3は土壇墓とも考えられるもので、後期後半頃と思われる。SSK-4は出土遺物からSSK-3よりも時期は下るものと思われる。弥生時代後期末～古墳時代初頭のものであろう。

古墳時代中期の遺構には溝(SSD-1)が1条あり、最大幅4.2m、深さ約1mと、規模の大きなものである。北に向かって流れていたもので、1～5ラインで西側から投棄した状態で土器が集中して認められた。出土した土器は甕が大半であるが、布留形甕の直後の型式を示すと同時に、須恵器が共伴しておらず、須恵器が使用される直前の土器型式として良好な資料を提供した。

古墳時代後期～奈良時代の遺構には、時期の決め手を欠くが、2×3間の掘立柱建物址を1棟(SSB-1)検出している。SSD-1が廃絶・埋没した後に建てられたもので、SSD-1とは方向を異にしている。また、本遺構の南方約23mには溝(SSD-5)が存在し、建物址と方向が似通っている。この溝は古墳時代後期に掘削され、奈良時代頃に廃絶したもので、西から東方向に流れていたものである。最大幅2.8m、深さ0.8mで、平安時代後期～鎌倉時代に再掘削・再利用されている。

平安時代後期～鎌倉時代の主な遺構には土壇墓（SSK-120）・甕棺墓（SSK-104）・溝（SSD-3）・櫛列（SSA-1）および多数の柱穴が存在しており、それらは、調査区はほぼ全体に検出することができた。

土壇墓（SSK-120）は一辺1m強の隅丸方形土壇で、深さは26cmであった。土壇底部の北西部でV類の端反りの白磁碗完形品1点と土師器小皿4点が並べられた状態で出土した。土壇の形状、木棺痕跡のないことから土壇墓と判断した。

甕棺墓（SSK-104）は十瓶山北麓窯産と考えられる甕を、円形の土壇内に正位置に埋納したもので、甕の上半部がすべて内部に落ち込んだ状態であった。遺物は全く出土せず、骨も出土していないことから、墓と断定するには躊躇するが、他に本遺構の性格を明らかにできる資料は持ち合わせていない。甕は11世紀末頃と比定されるものである。

溝（SSD-3）はそれより南には遺構が全く存在せず、遺跡の南端を限るかのような存在のしかたをしている遺構である。最大幅3m、深さは最深約50cmとあまり深くはない。全長70mにわたって検出した。遺物は（-5）～（-3）ライン間で特に集中して認められた。それらには多数の瓦器椀、土師器の椀・杯・皿、白磁碗のほか須恵器鉢、土師器甕・鍋・甕等がある。本遺構出土の土師器椀・杯・皿については淡路でもこれまで出土例がなく、僅かに南隣の谷町筋遺跡で数例認められるのみである。瓦器の編年にあてはめてみれば、12～13世紀にあたると思われる、須恵器鉢の編年観でも同様の年代と思われる。したがって、土師器類についても同様の年代でよいと思われるが、香川県・岡山県・和歌山県等近隣の類例を調査したうえで土師器の年代観を提示してみる必要がある。本溝出土物については第5章で後述する。

櫛列（SSA-1）は1か所でのみL字形のものを確認した。柱間は4間と3間であるが、長さはそろっていない。

第5章 ま と め

第1節 遺 構

1. 遺跡の変遷

今回の調査では遺物類が多量に出土し、時期も弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期、飛鳥時代から平安時代前半、平安時代後半から鎌倉時代を中心として、弥生時代前期から江戸時代の長期にわたるものが出土している。遺物からは遺跡の存続期間が非常に長かったことが窺えるが、検出された遺構は少なく、各時期あわせても堅穴住居址4棟・建物址6棟・土塋5基・土塋墓1基・甕棺墓1基・溝21条である。遺構の中では溝類が多く、特に台地の縁に沿って流下する溝が多く検出されている。これは今回の調査区が遺跡の端に当たったことを物語るものであり、それを裏付けるように堅穴住居址は全て調査区の西壁にかかっており、柱穴も調査区の西半で多くなっている。したがって必ずしも遺跡の実態に迫ったわけではないが、ここでは各時期の遺構を概観し、南に隣接する谷町筋遺跡とも重ねて、調査区での遺跡の変遷を見てみることにする。

A. 弥生時代後期～古墳時代前期

堅穴住居址4棟・土塋2基・溝類があるが、出土土器は第1段階（弥生時代後期前半）、第2段階（弥生時代後期後半）、第3段階（弥生時代末～古墳時代前期）に分けることが可能であることから、遺構もこの3段階に分けてその変遷を見てみることにする。

第1段階の遺構は北地区の台地縁にあたる地区から検出された円形の堅穴住居址NSH-1のみで、他の遺構は見られない。また出土遺物量も少ない。

第2段階の遺構には南地区で検出された円形の堅穴住居址SSH-1・3、SSK-3・4、北地区の土塋SSK-1、溝SSD-7があり、他に南地区の堅穴住居址SSH-2、北地区NSD-2・3・12・17もこの段階に属する可能性がある。したがってこの段階に初めて、北地区に台地の縁を巡る溝が形成され、住居址はこの溝を出ることなく、台地上の地区に営まれている。ただ南地区ではそうした溝群が存在した形跡はなく、意図的に集落を画する溝が営まれたものではなさそうである。南地区SSH-1は中央土塋から屋外に溝を持つ形式の住居址で、西日本の山地沿いの地方や、段丘上・丘陵上の遺跡に多く見られる住居形態である。淡路地方では段丘上の寺中遺跡で中期後半から見られ、谷町筋遺跡では布留式段階まで存続している。淡路においても台地上に営まれた住居址には一般的に見られる住居形態である可能性が高い。

第3段階の遺構には、南地区の堅穴住居址SSH-3、SSK-4があり、布留式の土器が

出土している。この段階でも最も新しい時期のものである。第2段階と基本的な遺構の配置に変化はなく、集落がそのまま継続して来たと考えられる。住居址SSH-3は前代の円形から方形に変化し、谷町筋遺跡でもほぼこの段階に方形に変化している。まだ資料は少ないが、淡路ではこの段階に方形住居が普遍的になるのかもしれない。

B. 古墳時代

須恵器が導入されてから須恵器杯類が消滅する時期までをこの時期とした。時間的には非常に長期にわたり、出土遺物の量も多いが、検出された遺構数は少ない。

第1段階は本遺跡において須恵器が出現する以前の段階で、検出された遺構は、調査区西端で検出された、南地区SSD-1、北地区NSD-17と呼称した1本の溝だけである。この溝が存続するのは、出土する土器からみて、極めて短期間であったようである。遺物もこの溝内から出土する以外ほとんど見られず、遺跡は縮小する傾向にある。

第2段階は古墳時代後期前半(TK-47~MT-15形式並行期)に当たり、明確な遺構は検出されないものの、北地区NSD-1・2、土器群1・2と南地区SSD-5がある。北地区のNSD-1・2は南地区では明瞭な形で検出されていないが、南地区の東隅で検出された灰褐色シルトを埋土とする落ち込みに続く可能性がある。土器群1・2はNSD-2肩部にそれぞれ土師器・須恵器が固まって投棄されており、おそらく祭祀関係に使用された土器であろう。調査区内で竪穴住居址等の居住に関係する遺構は検出されていないものの、調査区の近辺にそうした遺構が存在している可能性が高い。

第3段階は古墳時代後期中半(TK-10形式並行期)に当たり、遺構としては北地区NSD-11があるのみである。NSD-11は前段階の溝群と方向が異なり、東西方向に伸び、調査区を横断して、さらに東に伸びる。調査区北側に存在する浅い谷部から水を引く水路で、農業に関係する溝である可能性が高い。この段階の居住に関する遺構は存在せず、居住空間の場は調査区から他に移ったものと思われる。

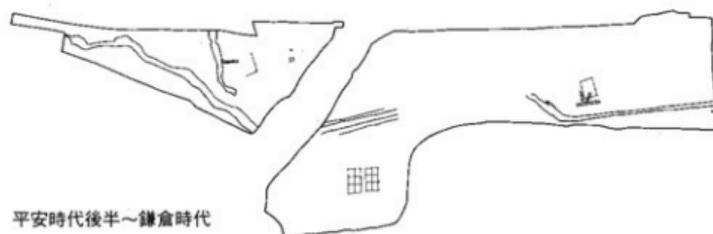
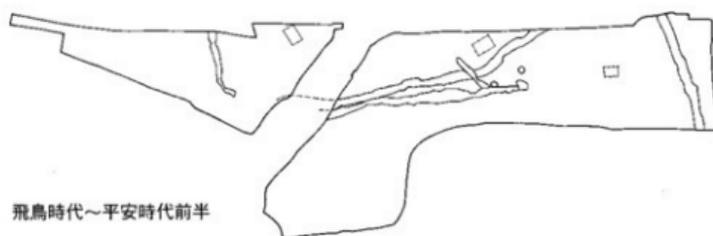
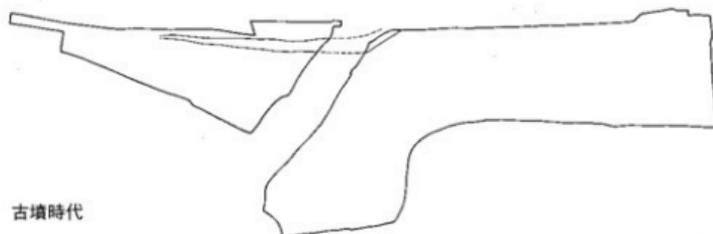
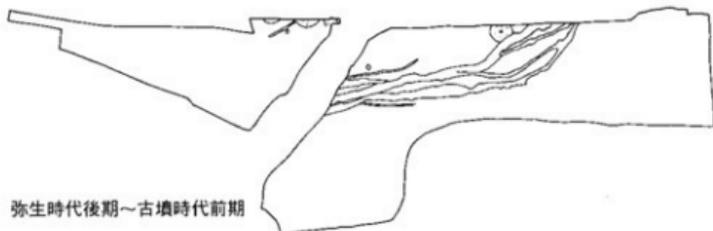
C. 飛鳥時代~平安時代前半

第1段階は飛鳥時代前半で、前時期とは時間的には隔絶する。居住の場を示す遺構は検出されていないが、前時期の北地区NSD-1・2、南地区SSD-5が再度利用されるようになる。

第2段階は飛鳥時代後半で、前代の北地区NSD-1・2、南地区SSD-5が引き続き存続し、新たに第2段階に掘削された北地区のNSD-11が再度利用されはじめる。

第3段階は奈良時代前半にあたる段階で、北地区のNSD-1・2・11、南地区SSD-5が引き続き利用され、北地区ではNSB-1・5が建てられる。南地区SSB-1も建物の持つ方向性から見てこの段階のものであろう。溝類は北地区のNSD-1を残し、この段階で埋没している。

第4段階は奈良時代後半から平安時代前半で、遺構としては北地区のNSD-1が前段階か



遺跡の変遷図

ら存続するが、この時期に埋没し始め、特に溝の南半は早く埋没したようである。この段階で新たに掘削された遺構もなく、飛鳥時代以降存続してきた遺構はすべてNSD-1を残して埋没する。

第5段階には北地区NSD-1のみとなり、他にこの段階の遺物を出土する遺構はみられない。またNSD-1も南半部は溝を被う土層から、この段階の遺物が出土していることからみて、この段階以前に埋没していたと考えられる。したがってNSD-1も溝として機能していなかったものと思われる。

D. 平安時代後半～鎌倉時代

前代で一旦断絶した本遺跡が、再度生活空間として利用される段階で、須恵器杯が消滅し、遺跡が最終的に終焉する時期までとした。そうとう長期にわたる期間を設定したため、検出された遺構は少なからずあり、北地区で建物址3棟(NSB-2~4)、土壇(NSK-3)、溝4条(NSD-4・5・15・16)、南地区で棚列(SSA-1)、土壇2基(SSK-120・104)、溝1条(SSD-3)の他、北地区のNSD-1西側や、南地区北西隅では多数の柱穴が検出されている。しかしこれらの遺構はそれぞれ出土遺物に形式的な差が認められ、時間的な差があるものと思われる。まず北地区のNSB-2・3は1軒の建物址として捉えられる2棟の建物址であるが、時期的には10世紀後半から11世紀前半、南地区の甕棺墓SSK-104は11世紀末、南地区の土壇墓SSK-120は12世紀前半、北地区のNSK-3はほぼ12世紀末～13世紀前半頃に想定でき、同時期に存続した遺構は少ない。

また南地区北隅の柱穴は建物址として復元できないものの、多数が密集しており、継続的な居住空間として利用されていたようである。それに対し北地区の3棟の建物は建て替えもなく、極めて短期間の建物であったものと思われる。白磁等の輸入陶磁器の出土遺構が南地区北隅にあり、島外産の須恵器・土師器・瓦器の出土量等から、おそらくこの時期の中心的な居住域は南地区北隅から調査区の外側に広がっているものと思われる。

2. 遺跡の広がり

以上大きく4時期に分け、遺構の変遷を見てきた。今回の調査で、遺跡の東・南・北の範囲はほぼおさえることができた。しかし西端は、検出された遺構の状況からみても、調査区のさらに西方に広がることは確実である。ただ調査区の西約40mで、台地は傾斜を変え、崖状となって急激に高くなる。この一段高くなった台地は山裾から舌状に伸びており、台地上には古墳時代後期にハバ古墳が築かれていることからみて、台地上は未開発地であった可能性が高い。したがって本遺跡の西端はこの一段高い台地上まで広がることはなく、この台地の裾に張りつくように広がる一段低い台地状の地形部分に限られる可能性が高い。とすれば遺跡は南北約120m・東西約120mで、一段高い台地に沿って弧状に広がっているものと思われる。

第 2 節 遺 物

今回の調査において出土した遺物は、土器・土製品・金属製品・石器があり、量的にはコンテナ約300箱に上る多量の遺物が出土している。中でも、土器類が圧倒的に多く、北地区NSH-1、NSD-1、南地区SSD-3から多量に出土している。土器類の器種では弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・陶硯・土錘等があるが、時期的には弥生時代から鎌倉時代の長期にまたがるものである。そこで大きく、弥生時代～古墳時代前期、古墳時代、飛鳥時代～平安時代前半、平安時代後半～鎌倉時代の4時期に分け、それぞれの土器の変化・変遷を見ていくことにする。ただ古墳時代中期～平安時代前半の時期は設定期間が長く、土器型式の上でも古墳時代後期末のものが空白となることから、この時期を古墳時代中期～後期、飛鳥時代～平安時代前半にわけることもできるが、遺構が古墳時代後期～平安時代前半まで継続することから、一期間としてまとめることにした。

1. 概 要

A. 弥生時代～古墳時代前期の土器

第I様式の弥生土器から須恵器を伴わない土師器までをこの時期に含めた。ただ第I様式から第IV様式までの弥生土器は僅かで、実態に迫れるものではないため、ここでは割愛し、量的に多くなる、第V様式から布留式土器までの段階を2段階に区別した。

第 1 段階

北地区NSH-1の上層から一括して出土した土器群を指標とする。器種には壺・甕・高杯・鉢があり、器台は欠いている。

壺には壺A₁・A₂、壺B₁、壺D₁・D₂・D₃・D₄、壺E、壺F₁・F₂があり、二重口縁壺である壺Gと壺C、さらに口縁端部下方を拡張した壺A₄は出現していないが、小型壺は存在する。体部は中位付近が強く張り、球形に近くなるものが多い。技法的には大部分が分割成形技法で、口縁部は貼りつけ成形する。外面の調整は体部から口縁部まで、刷毛調整後に丁寧に磨きするものが大部分である。口頸部内面の調整は壺A・Dが磨き、壺F₂が刷毛調整である。体部内面はナデ調整のものが多いが、刷毛調整のものが3個体、艶削りのものが1個体ある。

口縁部が無文のものと有文のものがあり、有文のものが約2/3を占める。文様は擬凹線文を基本とし、擬凹線文のみのもの、擬凹線文と波状文、擬凹線文と鋸歯文、擬凹線文と竹管円形浮文、擬凹線文と列点文を組み合わせたものがある。また頸部に擬凹線文と列点文、凸帯文を施したもの、体部の中位付近に擬凹線文を施したものも見られる。

甕には甕A₁・甕A₂、甕B₁・甕B₂、甕C₁・甕C₂、甕D₁・甕D₂、甕E₁・甕E₂、甕Fがあり、口縁端部に面を持つが、やや丸みを帯びたものが少量見られる。底部は突出するものと平底の

ものが両者混在する。成形には叩き技法が盛行し、叩きを刷毛調整、ナデ調整で消すものが多いが、叩き目をそのまま残したのもも出現している。内面はナデ調整、篋削り、刷毛調整のものがあるが、外面に叩き目を残したままの甕B₂・甕E₁・甕E₂、甕Fはナデか刷毛調整で、甕Aはナデ調整、甕C₁、甕Dは篋削りである。森遺跡出土の第Ⅳ様式甕には篋削りするものはなく、高杯の脚部に篋削りが見られる程度である。内面篋削り手法は西方から新しく導入された手法と思われる。

高杯には高杯Aと高杯Bが存在しているが、高杯Aは口縁部の外反が大きくなっている。口縁端部は丸いものが多く、脚部は柱部が中空で、裾端部に面をもつものが多い。口縁端部下、屈曲部、裾端部に擬凹線文を施すものも多く、出土した破片の中には、脚部の上端に施すものも見られる。

鉢は鉢A₁、鉢B₁・鉢B₂、鉢Cが存在し、鉢A₁には器高が高く甕との区別が困難なものと、器高が低いものが存在する。鉢B₂・鉢Cは内面刷毛調整で、鉢A₁・鉢B₁は不明なものが多いが磨きする。

第2段階

第1段階の指標とした住居址出土土器の中に見られない弥生土器を、この段階にまとめた。弥生土器から布留式段階の土器まであり、形式的にはさらに細分することが可能であるが、一括した土器は出土していないことから、細分については今後委ねることにする。

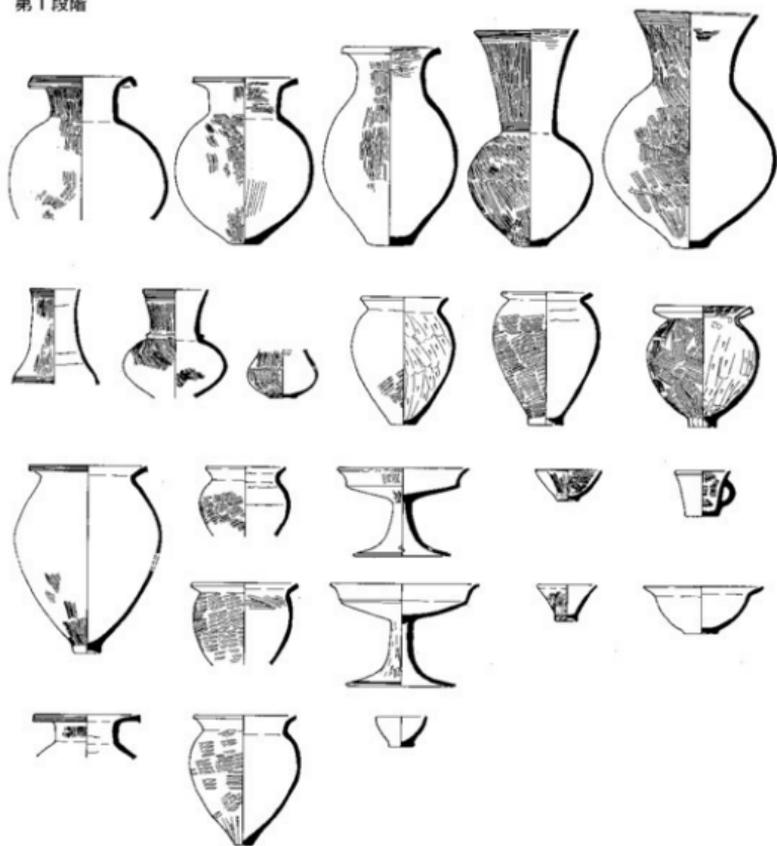
溝NSD-1~3・7からこの段階のものが出土し、器種には壺・甕・高杯・鉢・器台がある。

壺には壺A₃・A₄、壺B₁・B₂・B₃、壺E、壺G₁・G₂・G₃がある。壺A₃はすでに壺A₂の中にその萌芽が認められ、壺A₂の後続型式と考えられるものである。壺A₂同様口縁端部を加飾することが多い。壺B類は口頸部の屈曲が強くなり、口縁部を加飾するものは見られない。壺G類はこの段階に新しく登場する器形で、口縁部外面を円形浮文、円形浮文と波状文、竹管文、列点文で加飾する他、口唇部に刻み目文を施すものも見られる。調整については不明なものも多く、論じ得ない。

甕には甕A₃、甕B₄、甕Eがあり、甕A₃、甕B₄が主流となる。甕A₃は四国系の土器である。甕B₄・Eは口縁端部が丸く納められ、体部外面には叩き目を残す。内面の調整はナデ調整が多く、刷毛調整のものも少量認められる。第1段階にあった内面篋削り手法はこの段階には見られなくなる。

高杯・器台は出土点数が僅かで、実体は不明であるが、高杯は口径が縮小して、杯部が深くなり、口縁部は外反する。

第1段階



第2段階



第108図 弥生時代～古墳時代前期の土器

B. 古墳時代の土器

本遺跡に須恵器が導入される直前から、須恵器杯類が消滅するまでを含め、3段階に区別した。ただ第3段階以降第7段階までに伴うと見られる土師器甕・鍋類が多量に出土しているが、型式変化が乏しい器種であり、ここでは除外している。

第1段階

南地区の溝SSD-1、北地区NSD-17出土土器を指標とする。詳細な検討は後述するが、須恵器は存在せず时期的には古墳時代中期後半から末、田辺編年のTK216~208段階のものと考えられる。器種には壺・甕・碗・高杯があるが、煮沸形態の甕が多く、貯蔵形態の壺が著しく減少し、高杯が占める割合も減少している。壺類は小型化し、球形の体部に短い直立する口縁部がつくものである。甕は口縁部に布留式甕の伝統を残すものと、そうしたものを払拭したものがある。体部は長胴化が進み、底部は丸く納められる。高杯は杯部が屈曲するものであるが、小型化している。このほか南地区包含層出土の杯部が屈曲する大型の高杯もこの段階に含まれる他、杯部が内彎する高杯の存在も予想される。

第2段階

本遺跡に須恵器が導入される段階で、田辺編年のTK-47からMT-15の古い段階に相当する時期である。北地区土器群1・2が比較的まとまった資料であり、溝NSD-1・8出土のものの中にも見られる。器種には須恵器杯H・杯H蓋・高杯・甕、土師器甕・碗・高杯がある。

須恵器杯H蓋は頂部と口縁部との境に稜を持ち、口縁端部に面を持つ。頂部の寛削りは2/3以上の広範囲に及ぶ。口径はまだ小さく、頂部は高く丸みを持つ。杯Hは口径がやや小さく、底部が丸く、深い器形のもの、口径がやや大きく、底部が偏平なものがある。高杯は小片のため詳細は不明であるが、無蓋のものである。

土師器甕は口縁部が単純に「く」の字状に開くものと、口縁部が屈曲するものがある。前段階に見られた、布留式甕の伝統を残したものは完全に払拭される。碗は内彎するものだけで、口径に大小がある。高杯は杯部が内彎するものと、屈曲するものがある。脚部は裾部が屈曲して開き、脚柱部は中空である。

第3段階

田辺編年のMT-15の新しい段階からTK-10段階に相当する時期で、北地区溝NSD-1出土須恵器の一部と、NSD-11出土の須恵器が該当する。須恵器杯H・杯H蓋が存在し、杯H蓋は頂部と口縁部の境の稜は鈍くなり、屈曲するだけで、不明瞭なものも出現する。杯Hは口径が大きくなって全体に偏平になり、口縁端部は丸く納められるようになる。体部の寛削り範囲が狭くなり、底部のみに止まるものもある。

C. 飛鳥時代～平安時代前半の土器

第1段階

北地区溝NSD-1・2・11出土須恵器の一部が該当する。須恵器杯H・杯H蓋・杯G・杯G蓋・杯B・杯B蓋・杯I・椀E・高杯・甌・平瓶・横瓶、土師器椀E・高杯・壺がある。

須恵器杯H・杯H蓋は小型化が著しく、杯Hはb形態で、口縁部の立ち上がりも受け部とはほとんど同じ高さとなっている。底部も寛切り不調整となっている。杯H蓋は頂部を寛削りするものと、寛切り不調整のものがある。杯Gは口縁部が屈曲して直立する。杯G蓋は丸みをもって高い頂部に宝珠形のツマミがつき、縁部内面のカエリが縁部よりやや出るものと、頂部が偏平となり、内面のカエリが縁部より内側となるものがある。杯B(369)はa形態で、底部を寛削りした後ナデ消し、高さ約1.7cmの高い高台がつく。高台は脚状に下半が内彎する。杯B初現の形態とされる7世紀前半の陶邑TK-217の杯Bと比較すると、口径が小さく、器高も低くなっているが、飛鳥Ⅲ期の杯Bと比較すると器高が高く、初現的な杯Bの形態を残している。杯B蓋は内面にカエリがつく蓋Cで、杯G蓋を一回り大きくしたものである。頂部は偏平で、内面のカエリは縁部内側で止まる。杯Iもa形態で、口径に対し器高が高く、法量は口径10cm前後の1種である。椀Eもa形態で口径に対し器高が高く、杯Iを深くした形態で、全体に丸みを持つ。高杯は杯Iと椀Eに脚部を接合したもので、脚は短脚である。甌は小型化が著しく、頸部が細くなり、肩部がやや屈曲して偏平な体部になるものと、頸部は細いが、体部が球形で、前者と比較すると大きいものがある。型的には後者が古く、第3段階との間に位置するものと思われる。平瓶は体部がまだ球形で、体部下半を寛削りするものである。

土師器は杯E・高杯・壺がある。杯Eは半球形で、内面に正放射暗文を施す。調整はナデ調整で、外面に粘土紐の経目を残すものがあり、古墳時代以来の伝統を残す器種である。高杯は杯Eに脚部を接合したもので、脚は短脚である。杯E同様ナデ調整で、内面に正放射暗文を施す。器形的には須恵器と類似し、須恵器と土師器間の交流を示す。壺は球形の体部に短く細い口頸部をつけたものと、球形の体部に長い口頸部をつけたもので、須恵器の長頸壺と似る。

第2段階

北地区溝NSD-1・2・11出土須恵器の一部が該当する。須恵器杯A・杯B・杯B蓋・杯I・椀E・高杯・壺C、土師器杯A・椀E・高杯・壺がある。

須恵器杯Aは底部が丸みをもつb形態で、AⅢ・AⅣがある。杯Bはb形態のもの他、底部が平らになったc形態のもの存在する。b形態のものは口径に対し器高の高いもの、c形態は口径に対し器高が低くなっている。杯B蓋は内面にカエリがつくa形態と、内面のカエリを消失したb形態がある。a形態の蓋は、さらにカエリは退化したものである。杯Iは底部が偏平化して、丸みを持つ程度になり、口径に対し器高が低くなる。杯IⅠ・IⅡの区別が生じており、杯Aの影響を受けたものと思われる。椀Eも杯Iと同様に底部が丸みを帯びる程度に

なる。高杯は杯A・Iに脚部をつけたもので、杯部が浅くなる。杯A・Iに脚部をつけたものであるが、脚部の形状は不明である。

土師器杯Aは杯A Iのみが存在する。底部が丸みを持ち、口縁部の肥厚は明瞭である。椀Eは平底になり、器高を減じる。小口径のものと大口径のものが存在するが、後者は高杯になる可能性もある。高杯は短脚で、脚部は面取りをするものである。

第3段階

北地区溝NSD-1・2・11、南地区SSD-5出土須恵器の一部が該当する。須恵器杯A・杯B・杯B蓋・杯I・椀A・椀E・鉢A・壺C・壺L・壺N、土師器杯A・杯B・杯B蓋・皿A・椀E・鉢・高杯がある。

須恵器杯Aは底部の平底化が進み、b・c形態となる。杯AⅣのみであるが、杯Bが分量分化しており、当然杯Aにも他の器種が存在していることが類推される。杯BはBⅠ・Ⅲがあり、口径に対し器高の高いものと、口径に対し器高の低いものが存在する。形態的にはd形態で、底部が平底となり、高台は底部周囲の内側につく。底部は篋切り未調整で、内面は仕上げナデを施す。杯B蓋はc形態で、頂部は高いが、ツマミは偏平になる。頂部は篋削りし、内面は仕上げナデを施す。杯Iも底部の平底化が進み、それに呼応して器高を減じる。杯IⅠ、IⅡの分化が見られ、杯Aの影響と思われる。椀Aは杯Aを深くした形態で、口縁部下端を篋削りしている。椀Eは底部が平底となり、口縁部は内彎して、端部の屈曲は見られなくなる。底部は篋切り未調整である。

土師器杯AはAⅠ・AⅡ・AⅢ・AⅣがあり、形態は底部が丸みをもつb形態で、口縁端部の内面への肥厚は明瞭である。手法はb手法である。AⅠは口径に対し器高が高いが、内面の暗文は一段である。AⅡ・AⅢ・AⅣは口径に対し器高が浅く、径高指数が20前後の器形である。内面に暗文を施すものがある。皿AはAⅠで、形態的にはb形態であり、口縁端部の肥厚は明瞭である。手法はb手法であるが、底部中央は不調整である。内面に暗文が施される。椀Eは口径に対し器高が浅くなり、器形は杯Cと似るが、手法はナデ調整で、篋磨きが施されない点異なる。端部が外反するものと、肥厚するものがある。内面に暗文が施される。

第4段階

北地区溝NSD-1・2・11、南地区SSD-5出土須恵器の一部が該当するが、量的には減少して、器種も須恵器杯A・杯B・杯B蓋、土師器杯A・皿Aとなる。

須恵器杯Aはb・c形態であり、前段階より、口径に対し器高が低くなる。杯BはBⅡ・BⅢ・BⅣがあり、口径に対し器高の高いものと、低いものが存在している。形態はd・e形態で、高台は底部周囲につく。杯B蓋は低い器形になる。頂部は平らで、つまみは偏平、縁部は直線的に伸びる。

土師器杯はAⅠ・AⅡ・AⅢ・AⅣがあり、杯AⅠは口径に対し器高が減じる。口縁部の外

傾が大きくなる。杯AⅣは口縁部が直線的に伸びる。内面の暗文は失われるが、手法はb手法である。皿AはAⅠ・AⅡがあり、口縁部上半が外反するA形態と、口縁部全体が内彎するB形態があり、A形態は口縁端部の肥厚が明瞭であるが、b形態は肥厚しない。手法は口縁部下半から底部を篋削りするb手法である。

第5段階

出土量が激減し、北地区溝NSD-1から出土した土器の一部と南地区包含層出土の中にみられる。器種には須恵器杯A・杯B、土師器杯A・皿A、緑釉陶器がある。

須恵器杯AはAⅢ・AⅤがあり、形態はc形態で口径が縮小したものと、底部から内彎して口縁部が直線的に伸びるものがある。底部は篋切り不調整である。杯BはBⅢで、形態はe形態である。高台は底部周囲につけられ、口縁部の外傾が大きくなる。

土師器杯AはAⅣで、口縁部が大きく外傾し、端部の肥厚は小さく屈曲して立ち上がるようになる。皿Aも口縁部の外傾が大きくなるが、口縁端部の肥厚はまだ明瞭である。

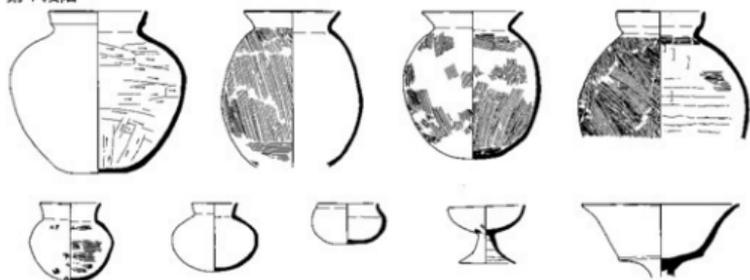
D. 平安時代後半～鎌倉時代の土器

須恵器杯類が消滅し、居住空間としての本遺跡が消滅するまでの時期である。北地区NSB-2・3、NSK-3、南地区SSD-3、SSK-120・104等からの出土遺物が該当する。出土土器には須恵器・土師器・瓦器・陶器・磁器があるが、須恵器は激減し、瓦器・土師器が主流となって、土師器が約69%を、瓦器が12%を占める。

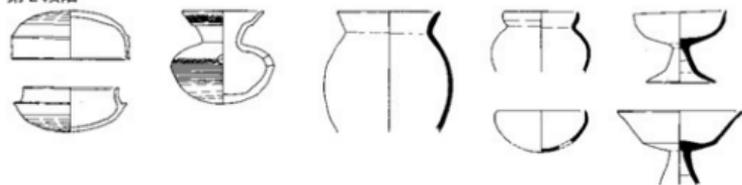
須恵器は碗類はほとんど見られず、瀬戸・美濃系の碗、四国・東播磨系の鉢類と甕類のみが少量ある程度となる。南西約500mには12世紀末とされる佐札尾窯址があるが、そこからの製品は出土していない。

土師器は杯・碗・皿・甕・鍋・瓶等がある。杯は平底で、口縁部は直線的に開く。底部は篋切り不調整のものと、糸切りのものがある。篋切りのものは内面に仕上げナデを施すなど、古い様相を示す。

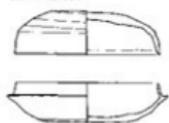
第1段階



第2段階

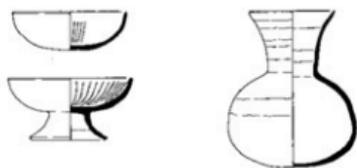


第3段階

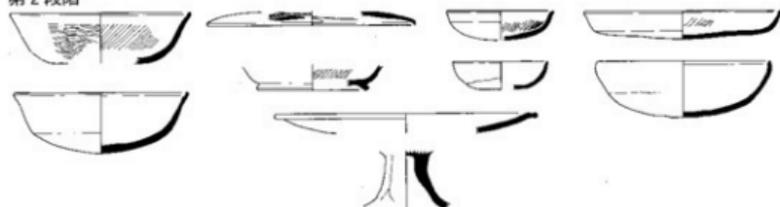


第109図 古墳時代の土器

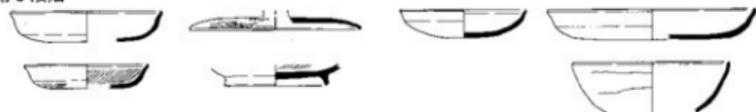
第1段階



第2段階



第3段階



第4段階



第5段階



第110図 飛鳥時代～平安時代前半の土師器

2. 検 討

A. 弥生時代後期～古墳時代前期の土器

北地区壑穴住居址NSH-1上層出土土器

この土器群の壺類は広口壺A・長頸壺D・細頸壺E・壺Fからなり、二重口縁壺は見られないことから、畿内第V様式の西の辻E式(D)ないし、安満遺跡周溝墓A5-2土器群に併行する時期を考えている。任意に実測したため、必ずしも土器群の器種構成を明確には示していないが、器種構成は、壺約32%、甕約49%、高杯約11%、鉢約8%となっており、器台が欠け、壺の占める割合が高くなっている。

壺類は、器形的には壺B₁等、四国地方の影響を受けたものが存在するが、壺A・D・F等、畿内色の強い器形が多く存在している。しかし、この段階では畿内地方は無文化の傾向を強めることは周知の事実である。たしかに、この土器群の中にも無文化を指向するものも認められるが、擬凹線文等で施文したものがまだ残り、約64%を占める。また文様は口縁部のみでなく、頸部に施されたものも存在している。文様構成は①擬凹線、②擬凹線+竹管円形浮文、③擬凹線+鋸齒文、④擬凹線+波状文、⑤擬凹線+列点文といった組み合わせが見られ、①・②は畿内地方から、③は瀬戸内地方の影響を受けたものであろう。こうした擬凹線文を中心とする口縁部の加飾は、以後第2段階まで続き、布留式併行期には衰退するようである。手法的には外面を刷毛後に丁寧に磨きをし、内面は刷毛・篋削りが各1個体認められるものの、ナデ調整のものがほとんどである。

甕は口縁端部が僅かに拡張され面を持つものが多いが、端部が丸みを持つものも少量存在している。器形的には甕Aのように中期以来の伝統を残すものと、甕B・C・D・Eのように後期に新しく登場するものがあり、後者の方が多くなっている。甕A₃・甕Cは四国地方の影響を受けたものであろう。

成形は叩き成形によるものばかりで、外面の叩きを残したままのものと、刷毛・ナデで消したのがある。内面の調整は篋削り、ナデ、刷毛が見られ、①外面刷毛・内面篋削り、②外面刷毛・内面ナデ、③外面ナデ・内面刷毛、④外面叩き・内面ナデ、⑤外面叩き・内面刷毛といった調整の組み合わせが見られる。篋削りは頸部まで及ぶものがある。①の調整は甕Cにおいて見られ、頸部を指押さえするものもあることからみて、①の調整手法は四国・瀬戸内地方の影響によるものであろう。

高杯Aは口縁部下、杯屈曲部、脚裾端部に擬凹線文が施され、脚部は裾部が大きく広がり、柱部は中空で、中実のものは存在しない。高杯A₁は畿内的な特徴を持ち、高杯A₂は瀬戸内・四国地方の特徴を示す。

このように、本段階は四国地方、瀬戸内地方からの影響と畿内地方の影響が錯綜した段階ではあるが、より畿内的影響の強い段階と言えるだろう。

B. 古墳時代～平安時代前半の土器

第1段階の土器（南地区溝SSD-1出土土器）

本遺跡南地区の溝（SSD-1）出土の土器については、多数の布留式直後型式の土師器が出土したが、須恵器は全く出土しなかった。この時期の土師器についてはまだ編年が確立しておらず、特に淡路地方では初見と思われ、詳細な所属時期や地域色が不明となっている。しかし近年の調査の結果、本遺跡に近い三原郡西淡町の雨流遺跡で当該時期の土師器が須恵器を伴って流路から多量に出土している。また、紀伊や和泉地域などでも初期の須恵器を伴って土師器が出土している例が認められる。したがって、以下ではそれらの出土土器と比較してSSD-1出土土器の時期や地域的な特徴を探って行きたい。

雨流遺跡では流路SD102から木器・石器・石製品とともに多量の土器が出土している。それらは5世紀末～7・8世紀まではほぼ連続しており、出土層位から大きく3時期に分けられるという。上層は7・8世紀代の須恵器が出土し、中層は6世紀前半～末を中心とする土師器・須恵器、下層は5世紀末～6世紀初頭にかけての土師器・須恵器等が出土している。ここで取り上げるのは下層出土土器である。雨流遺跡SD102からは鈿田遺跡と同形態の甕が数多く出土している。鈿田遺跡SSD-1出土甕のA類は雨流遺跡出土甕の分類ではIA類にあたり、同様にB1類はII B・II C類に、B2類はII C類、B3類はII C・III C類、B4類はID・IID・III D類に相当する。また、B3類はIII C類よりもII C類の出土量が多く、B4類ではII D類の出土量が最も多い。これらについては、B3類はII D類に、B4類でもII D類に代表させ、その他の類型はバラエティーとして捉えることも可能であろう。その前提に立てば、雨流遺跡ではI期初頭に属するものとして、上にあげたIA・II C・II D類があり、やや遅れてII B類が出現しているということであり、I期には須恵器は伴っていない。この点についてはSSD-1と同じ様相である。また、雨流遺跡SD102では最も古い須恵器はTK208型式の新しい部分で、中村編年ではI型式の3～4段階である。したがって、鈿田遺跡のSSD-1出土の土師器についてはTK208型式の新しい部分直前、I型式の3段階直前のものとして捉えることができるであろう。

淡路地域では以上の状況であるが、周辺地域の同様の土器はどうであろうか。以下、淡路周辺で初期須恵器を伴って出土した土師器について見てみることにする。

岡山県鍛冶屋遺跡では凹地・河道状遺構SA03下層から多量の土師器が出土している⁽¹²⁾。口縁端部が外反する高杯や、外反ぎみの口縁部で、端部は平坦面を持つ甕が出土しており、鈿田遺跡と類似した土器が出土している。また、布留型甕口縁部が退化したような口縁部も出土している。SA03下層には須恵器は含んでいないが、鍛冶屋遺跡第Ⅲ期にあたり、5世紀代でも初期須恵器に近い時期のものと考えられている。土器の類似性から、本遺跡SSD-1もほぼこれに近い時期と思われる。

和歌山県鳴神遺跡J地区では土壌SK-271からTK47型式の須恵器と共に多量の土師器が出土している⁽³⁾。高杯は杯部の上端を外側へ引き出す部分が類似しているが、脚部が途中で屈折するものである点が異なっている。甕では大型のものでは長胴であり、口縁端部に面を持ち、外側へ少し引き出すものがある点は類似しているが、口縁端部の大半は尖り気味に丸く納めており、SSD-1とは異なっている。鈿田遺跡よりも口縁部の作りが単純で、長胴化が著しいため、時期的に下がるものと考えられる。

鳴神遺跡L-1地区溝SD-401では非常に類似した土師器碗が認められる⁽⁴⁾。この遺構では初期須恵器の把手付碗が伴出している。

鳴神遺跡M地区溝SD-117では陶質土器とともに土師器が多く出土している⁽⁵⁾。高杯の口縁端部が外反している点は類似しているが、脚部が屈折している点が違っている。碗は肩部の屈曲がSSD-1よりも緩やかである。やや長胴の甕は口縁部が外反し、端部を外側にひきだす点は類似しているが、口縁端部内面を肥厚させるものは認められない。SSD-1とは類似した時期と思われるが、土器の特徴での類似点はあまり多くない。SD-117は出土土器の特徴から時期幅があるように思われる。

大阪府和泉市府中遺跡(中央線)SK-53出土土器のうち甕には口縁端部内面が肥厚し、胴部が球形の布留型甕のほか、鈿田遺跡A類とB類の中間形態のものも出土している⁽⁶⁾。これらの土器は鈿田遺跡と同時期ないしは若干遅るものと考えられる。SK-53からはTK216型式の須恵器が伴出している。

大阪府堺市陵西遺跡(RYS-4)井戸SE01から土師器が出土しており⁽⁷⁾、端部内面肥厚の名残や面を持つといった、口縁部の形態が類似した大型の甕が認められる。SE01出土土器は深田式Ⅱ～Ⅲ段階に位置づけられ、5世紀後半～6世紀初頭の年代が与えられている。

大阪府藤井寺市津堂遺跡86-1調査区大土壌A・Bからは多量の須恵器・土師器が出土しており、それらのうち土師器の甕は口縁端部を丸く納めるものが殆どで、大型では長胴化が著しい。鈿田遺跡SSD-1の方が若干遅るかもしれない。須恵器はTK216～TK208型式が出土している。

大阪府八尾市八尾南遺跡では昭和59年度調査区の土壌SK-1出土土師器甕のなかに、端部に面をもつものや端部を外方に少し引き出すものがある⁽⁸⁾。これまでのべてきた資料に比べ、鈿田遺跡との類似点はより少ないが、大まかな点で類似しているため取り上げた。伴出した初期須恵器は第I型式第1～2段階のものようである。

以上、SSD-1出土土器の時期を検討するためにいくつかの類例をあげてきたが、鳴神遺跡SK-271よりも古く、鍛冶屋遺跡SA03・鳴神遺跡SD-401・府中遺跡SK-53・陵西遺跡SE01・津堂遺跡大土壌A・Bが示す年代にはほぼ合致すると考えられる。但し、細かい点では津堂遺跡・府中遺跡の出土土器の示す特徴とはやや異なっている。いずれにせよ、TK216型式

の須恵器が示す年代を中心とした時期として捉えられるであろう。

[註]

- (1) 雨流遺跡
- (2) 岡田 博他「鍛冶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 山陽自動車道建設に伴う発掘調査4 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (3) 武内雅人・富加見泰彦他「鳴神地区遺跡発掘調査報告書」一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査 和歌山県教育委員会 1984年
- (4) 註(3)文献
- (5) 註(3)文献
- (6) 松村隆文・高島 徹「府中遺跡発掘調査概要」府道と泉中央線並行工事に伴う発掘調査 大阪府教育委員会 1985年
- (7) 横伸一郎「陵西遺跡(RYS-4)発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第38集 堺市教育委員会 1988年
- (8) 一瀬和夫他「津堂遺跡の調査」『南河内遺跡群発掘調査概要』I 大阪府教育委員会 1988年
- (9) 原田昌則「八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和59年度 八尾市文化財調査研究会報告6 八尾市文化財調査研究会 1985年

C. 飛鳥時代～平安時代前半の土器

この時期の土器としては、須恵器・土師器・緑釉陶器が出土しているが、緑釉陶器は2個体が出土しているにすぎない。土器の実測作業にあたっては遺存状況の良くなかった土師器についてはかなり小片まで取り上げたため、出土土器の器種構成をそのまま反映したものでない可能性があるが、出土した土器における土師器・須恵器の占める割合は土師器約35%・須恵器65%で、ほぼ1:2で須恵器が多くなっている。南に隣接し、時期的にも重複する谷町筋遺跡では土師器21%・須恵器79%となっており、土師器の占める割合は、鉦田遺跡が高くなっている。ただ鉦田遺跡では土師器は煮炊具が約6割をも占め、煮炊具の多くが製塩土器とともに出土しているという特徴があり、その点を考慮しなければならないだろう。

また兵庫県下の遺跡における土師器と須恵器の割合は、丹波や播磨では須恵器の割合が高いようで、丹波地方の春日町七日市遺跡⁽²⁾では1:9、山垣遺跡⁽³⁾では1:2、播磨地方の布施駅家とされる龍野市小犬丸遺跡⁽⁴⁾ではほぼ1:1、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡⁽⁵⁾では1:4の割合で須恵器が高くなっている。小犬丸遺跡は土師器の煮炊具が圧倒的に多く、その多さが土師器の割合を高めており、食器類では須恵器が優勢のようである。ただ平安時代以降には土師器が優勢になるようである。一方但馬地方では土師器の割合が高いようで、但馬国府関連の深田遺跡や称布ヶ森西遺跡⁽⁷⁾では土師器が1:2の割合で多くなっており、播磨・丹波とは違った傾向をみせている。ただ但馬地方の遺跡は平安時代以降であり、奈良時代以前の实体は明らかではない。こうした土師器の多い傾向はこの時期的なところに起因している可能性も考えられる。

限られた遺跡数であり、遺跡の性格、土器の算出方法等の問題はありますが、こうした県下の遺跡と比較すると、鉦田遺跡や谷町筋遺跡は土師器と須恵器の構成比率は、丹波や播磨地方の遺跡における構成比率に近いことが窺え、須恵器が優勢に推移する。この傾向は単に鉦田遺跡や谷町筋遺跡に止まらず、古代の淡路地方全体に及ぶものであろう。

次に、土器を用途別にみると、土師器では杯・皿といった食器類が約38%、煮炊具が62%で、須恵器では食器類が約81%・貯蔵具が19%となっており、土師器の内では煮炊具の占める割合が極めて高い特徴を持つ。煮炊具の多い遺跡は、播磨地方の布施駅とされる龍野市小犬丸遺跡や、春部里の里家とされる山垣遺跡等がある。小犬丸遺跡では計数方法に問題があるとされているが、煮炊具が土師器の84%を占めて極めて高い数値を示しているが、調査の実施された場所が駅舎から離れた、駅家の外側と考えられる地点で、古代の山陽道とともに井戸が検出され、土器類の多くは井戸周囲の包含層からの出土である。山垣遺跡は里家の濠の部分と里家の一部とされる建物址の調査がされ、土器類は濠の内部から出土し、煮炊具は約40%を占めている。このように小犬丸遺跡・山垣遺跡とも土器類は投棄されたものであり、土師器に占める煮炊具の多さは、それらの土器が本来使用されていた「場」の性格によることが考えられる。本遺跡でも煮炊具の多くは溝内に、多量の製塩土器とともに投棄されたものであり、付近に煮炊具・製塩土器を多く使用する「場」の存在があったのであろう。

食器類に占める土師器と須恵器の割合は、土師器が20%、須恵器が80%となっており、土器全体における比率より、土師器が15%減り、須恵器が15%増えて、ほぼ1：4の割合になっている。丹波・播磨地方でも、こうした傾向にあるようで、さきの七日市遺跡では1：9、山垣遺跡では3：7、丁・柳ヶ瀬遺跡では1：4、小犬丸遺跡ではほぼ1：4になっている。ただ土器総量に占める土師器の割合が高い但馬地方だけは、食器類に占める土師器の割合も高いようである。本遺跡の示す割合は丹波・播磨地方と近似したものとされている。ただ隣接する谷町筋遺跡はほぼ1：2の割合で、やや土師器が多い傾向があるが、須恵器が優勢であることは間違いない。こうした食器類に占める土師器と須恵器の割合は単に鉦田遺跡・谷町筋遺跡のみに見られる傾向ではなく、土器の総量に占める割合同様、淡路全体における傾向であろう。

土師器における食器類には杯A・杯B・杯C・皿A・碗C・鉢があるが、杯A・皿Aが主流で、杯B・杯Cは極めて少ない。ただ杯AにはAⅠ・AⅡ・AⅢがあるが、AⅠを除いて、器高が低く、皿Aとの区別が付きにくい器形となっている。皿Aは口径が25cm前後と大型のAⅠが含まれている。口径が20cmを越すAⅡも3個体が出土している。

須恵器の食器類は杯A・杯B・杯G・杯I・碗E・鉢Aがあるが、杯類が主流で、食器類の約70%を占めている。大型の器種はほとんど見られず、鉢Aは僅かに2個体が出土しているに過ぎない。なお皿類は図化したものの中には見られず、仮に出土していたとしても僅かであるか、極めて小片が出土しているに過ぎないようである。

杯類の内、杯Bの蓋を除けば、高台を伴わない杯A・杯G・杯I・碗E類が約67%、杯B類が33%となっており、高台を伴わない器種の占める割合が高くなっている。これは本遺跡においては、杯A・杯G・杯I・碗Eといった高台を伴わない器種が食器の主流であった第3段階までの土器量が多く、杯Bが食器類の主流となってくる第4段階以降、土器量が減少していることに起因するものと思われる。

第1段階はほぼ7世紀前半～後半を想定しているが、須恵器では杯G・杯Iが食器の主流であり、古墳時代以来の伝統的な器種である杯Hが残り、杯Bが新しく出現している。第2段階はほぼ7世紀後半～8世紀初頭を想定しているが、須恵器・土師器の杯A・杯Cが出現し、須恵器の食器類は杯A・杯Iが主流となり、杯Bも量的には増大し、ほぼ食器類は律令期の構成となっている。第3段階は8世紀前半を想定しているが、食器類では須恵器の杯Iが減少し、変わって杯Bが中心的な食器類の一器種となり、食器類は杯A・杯Bを中心に構成される。第4段階は8世紀後半、第5段階は9世紀代を想定しているが、土器の出土量が激減し、食器類の器種構成を述べるまでには至らない。

- (1) 吉識雅仁 西口圭介 川崎 保『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会 1990年
- (2) 井守徳男『七日市遺跡Ⅰ—第3分冊』兵庫県教育委員会 1990年
- (3) 加古千恵子 平田博幸『山畑遺跡』兵庫県教育委員会 1989年
- (4) 森内秀造他『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 1987年
山下史朗他『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会 1989年
- (5) 岡崎正雄 菱田淳子『丁・柳ヶ瀬遺跡』兵庫県教育委員会 1985年
- (6) 兵庫県教育委員会1985・1986年調査
- (7) 榎本誠一他『称布ヶ森西遺跡』日高町教育委員会 1976年

D. 平安時代～鎌倉時代の土器（南地区溝SSD-3出土土器）

南地区の溝（SSD-3）から出土した多量の土器のなかには、瓦器・土師器・白磁が多量の割合を占めていた。それらのうち、瓦器碗についてはその特徴からみて和泉型であることから、ほぼ年代が明らかとなっているが、土師器の碗・杯はこれまで淡路では出土例が殆ど認められないものである。瓦器・土師器の出土状況をもみても両者が混在した状況であるため、ほぼ同時期と捉える方がよいと思われるが、土器自身の編年が不明な状態であることから、やや不安を残す。ところが、土師器碗・杯類については様相が若干異なるが、周辺地域、特に岡山県や四国地方等に存在しており、編年も確立しつつある状況となっている。したがって、これら周辺地域との比較を行い、本遺跡出土の土器様相を探ってゆきたい。

まず、瓦器碗について述べてゆく。

本遺跡SSD-3出土の瓦器は前述したように、和泉型瓦器碗の特徴を示し、口縁部内側に沈線は施さず、外面の指頭圧痕が多く、暗文は太く、無造作に施されている。口縁部外面のヨコナダが強調され、口縁部は外反気味で、口縁部を二段ナデするものがある。

瀬戸内海沿岸地域では和泉型瓦器碗が大勢を占めており、本遺跡でも同様である。他に洲本市森遺跡⁽⁵²⁾で出土した瓦器碗も和泉型であるが、洲本市武山遺跡例⁽⁵³⁾のみが違っている。

和泉型瓦器碗については白石太一郎氏や尾上実氏が編年案を示している。

尾上編年によれば、本遺跡出土の瓦器碗はⅡ-2期～Ⅲ-2期にわたり、Ⅱ-2期が12世紀後半、Ⅲ-2期が13世紀中葉とされている。一方、径高指数でみると、本遺跡例では39～30まであり、白石氏の瓦器編年にあてはめてみるとⅡ段階4型式～Ⅲ段階7型式に納まり、12世紀初頭～13世紀中頃の時期が与えられている。

土師器（碗・杯・皿）

土師器については前述のように淡路では類例が認められないものである。しかし、周辺地域では類例が存在している。また、これらの土師器については瓦器碗・須恵器・白磁の示す時期により11世紀後半～13世紀前半と考えてよいものと思われる。なお、碗・杯・皿が粘土・焼成・色調から同一産地のものと考えてよいものである。

以上のことを念頭に置いたうえで、碗を中心に土師器の類例にあたり、他地域との違いや同一性と時期を探ってみることにする。

現在、碗を中心とした土師器は瀬戸内海沿岸地域を中心に分布しているが、北部九州・広島では類似形態の碗は出土していないようである。

岡山県では「早鳥式土器」⁽⁵⁴⁾として数多く出土しているが、その中でも百間川当麻遺跡右岸用水路2次調査区溝30出土の碗が形態的には最も類似している。しかし、調整の点では体部上半の粘土接合痕や押さえ痕が鉦田遺跡では認められない。また、大小の皿はすべて底部へラオコシである点も違っている。なお、溝30出土土器は1,200年を中心とした時期と考えられている。⁽⁵⁷⁾

和歌山県では当該時期の土師器碗は認められない。しかし、鳴神地区遺跡において10世紀中頃～11世紀前半に編年される土師器碗や皿（杯）⁽⁵⁸⁾があり、本遺跡と類似したものが認められる。口径がほぼ同じものの碗では、外面が「多段ナデ技法」により凹凸が大きい。皿（杯）も形態的には類似するが底部が糸切りではない。以上、技法は異なるが、形態的には類似のものが認められる。ただし、本遺跡とは時期が合わない。

四国地方のうち、愛媛県では古照遺跡SE01出土の杯⁽⁵⁹⁾が形態的に非常に類似しており、底部が糸切りである点も同一である。この遺物は13世紀前半に位置づけられている。ただし、土師器碗については高台や口縁部のつくりが違っており、類似したものは存在していない。

香川県では西村遺跡で数多くの土師器⁽⁶⁰⁾が出土しているが、瓦質土器や黒色土器⁽⁶¹⁾がかなりの比率で存在している。類似形態の碗も黒色土器ではあるが、3～7期のものなかに存在してい

る。また、杯では4期に編年されるS31-S T01出土の皿に類似点が多く認められる。西村遺跡では3期は11世紀末頃、4期は12世紀中頃、6期は12世紀末～13世紀初頭と考えられており、11世紀後半～13世紀前半の時期として捉えることができるであろう。

徳島県では当該時期の資料が無く、不明な点が多いが、中島田・南島田遺跡で13・14世紀の土師器が出土している⁽¹²⁾。碗は体部中位で屈曲しており、本遺跡出土碗のうち新しい傾向を示す可能性を指摘した一群の、さらに新しい形態のものと理解できなくもないが、口径がかなり縮小していることより、時期的に変化したものと捉えるには無理があり、杯が存在しないことから本遺跡と同一土師器群としては考えにくいものである。しかし、本遺跡所在地に最も近い地域であるため、今後の類例が待たれるところである。

以上、周辺各地域の類例を求めた。碗では岡山県・和歌山県に類例が存在するのであるが、岡山例とは技法の上で、和歌山例では時期的に違っている。杯では岡山県・和歌山県・愛媛県・香川県に類例があるが、岡山・和歌山例は底部が糸切りでない。愛媛では底部糸切りでもあることから本遺跡に最も近いと思われるが、愛媛・香川ともに碗の類例が存在せず、本遺跡例が碗・杯・皿共に同一産地と考えられることから、現在のところ、産地は周辺のどの地域でもなく、淡路独自のものと考えられる。特に碗では底部糸切りの後、輪高台を貼り付ける部分に「ケガキ線」を施しているところに特徴があり、杯では底部糸切りで底面が平らであり、体部が屈曲して立ち上がるところに特徴があろう。ただし、分布地域は現在のところ本遺跡と隣の谷町筋遺跡に限られている。また、時期的には和歌山例のみが特に古く位置づけられているため迷うが、ほぼ瓦器その他の土器が示す年代すなわち11世紀後半～13世紀前半と捉えてよいものと思われる。ただし、この全期間に土師器が存在していたものか、期間内の限定された時期であるのかは、単一の遺構出土で、層位的に新旧を分けられない状況で出土していること、他に類例が存在しないことなどから不明といわざるを得ないが、碗の形態を見ればある程度の時期幅を考えてもよいものと思われる。今後の資料の増加を待って検討してゆきたい。

〔註〕

- (1) 橋本久和「瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980年
- (2) 吉織雅仁・岸本一宏他「森遺跡」淡路級貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 兵庫県教育委員会 1988年
- (3) 岡本 稔・丹羽祐一他「武山遺跡発掘調査報告」洲本市教育委員会 1975年
- (4) 尾上 実「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年
尾上 実「大坂南部の中世土器—和泉型瓦器碗—」『中世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- (5) 白石太一郎「『瓦器』の生産に関する二、三の覚え書」『古代文化』第27巻第1号 1975年
白石太一郎「越智氏館跡出土の瓦器—瓦器の終末年代に関連して—」『古代学研究』85 1977年

- (6) 岡田 博他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅳ 岡山県教育委員会 1982年
- (7) 福田正継「瀬戸内海中部北岸域の土師質焼について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- (8) 武内雅人・富加見泰彦他『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査和歌山県教育委員会 1984年
- (9) 中野良一「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会 1988年
- (10) 『西村遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』香川県教育委員会 1980～1982年
- (11) 大山真充「香川県西村遺跡の中世土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- (12) 福家清司他『中島田遺跡・南島田遺跡』県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書徳島県教育委員会 1989年
- (13) 吉識雅仁・西口圭介他『谷町筋遺跡』淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 兵庫県教育委員会 1990年

圖 版

図版第1
遺跡航空写真





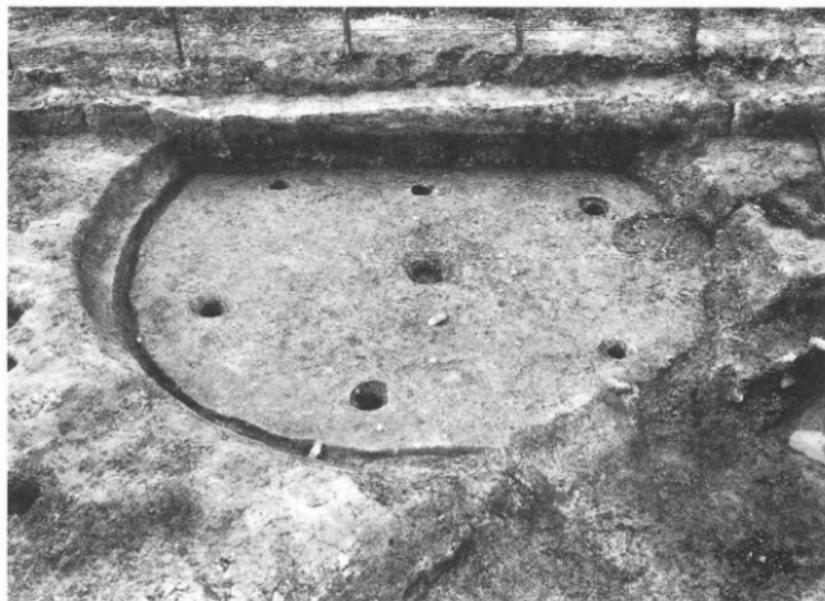
上) 調査区全景 (北より)



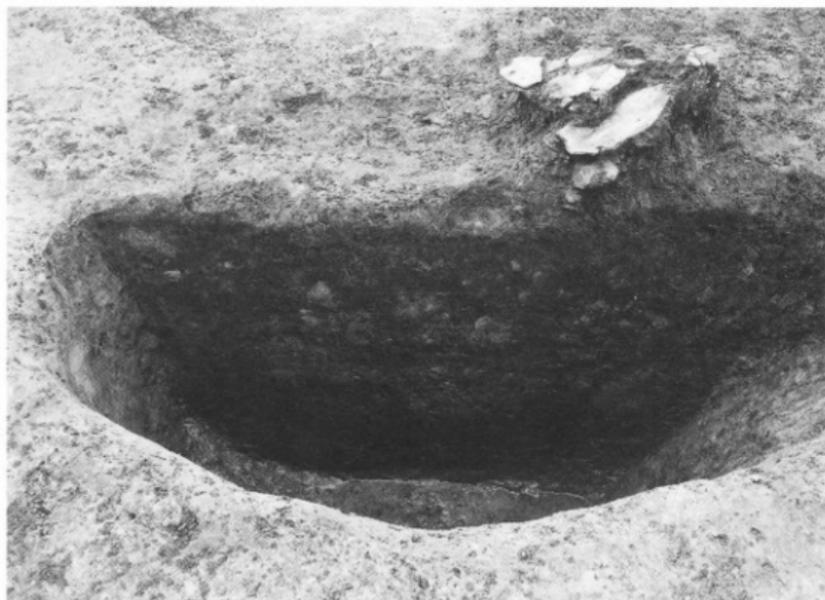
下) 調査区西半全景 (北より)



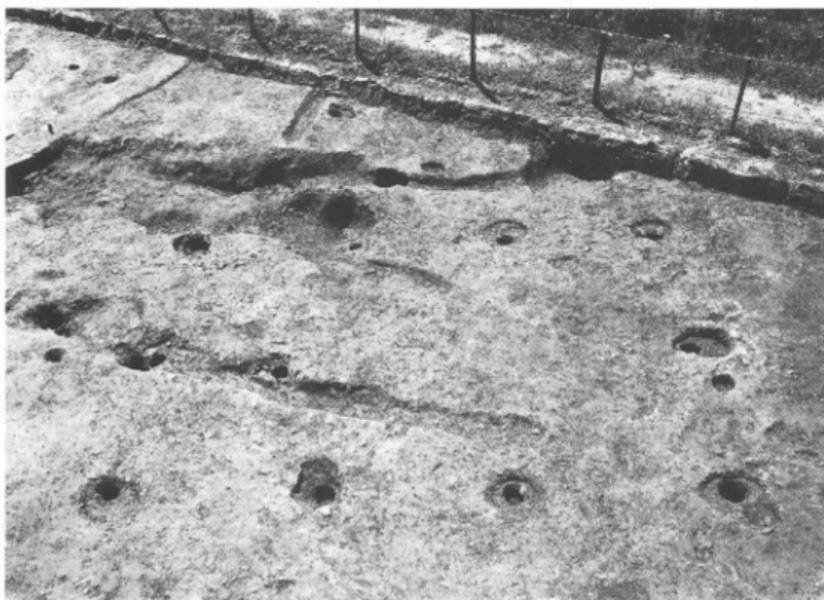
上) 竪穴住居址NSH-1土層 中) 竪穴住居址NSH-1埋土中土器群 下) 竪穴住居址NSH-1土器群細部



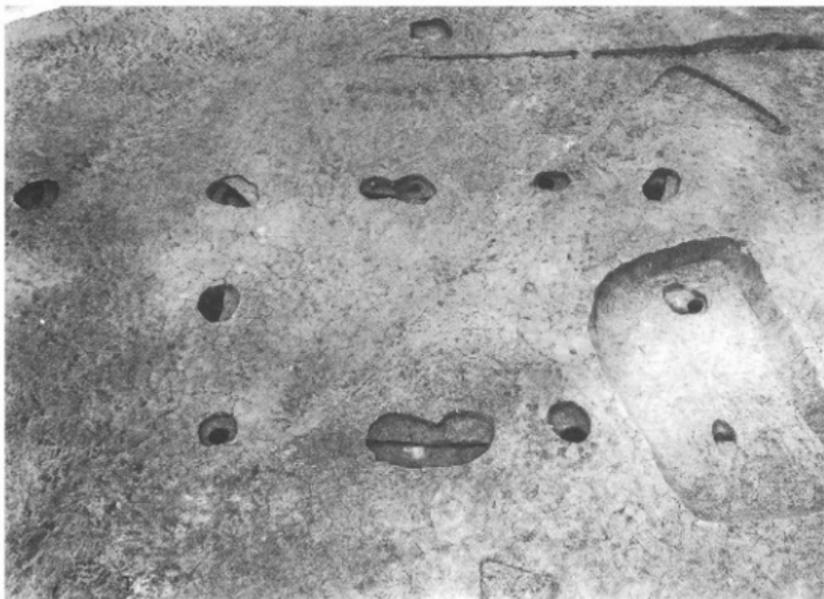
上) 竪穴住居址NSH-1



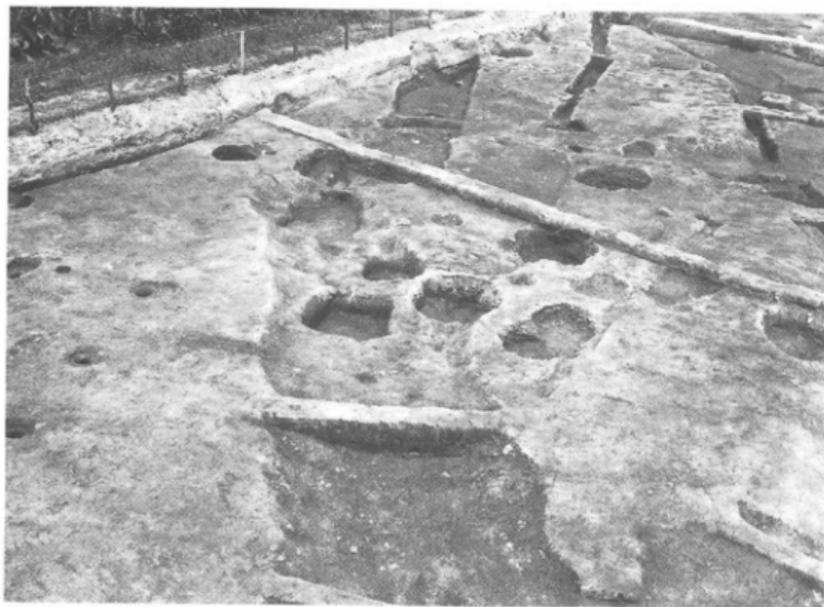
下) 土坑NSK-1



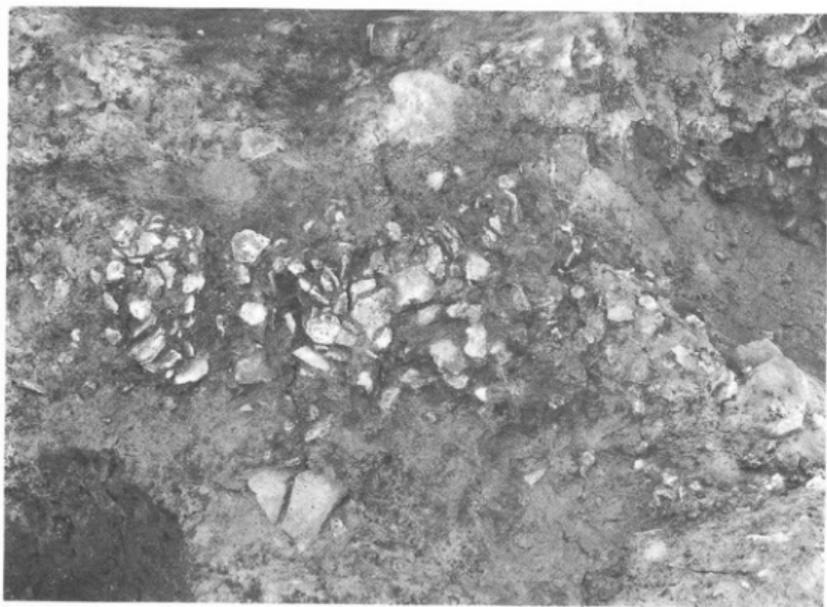
上) 建物址NSB-1



下) 建物址NSB-5



上) 溝NSD-1 北半



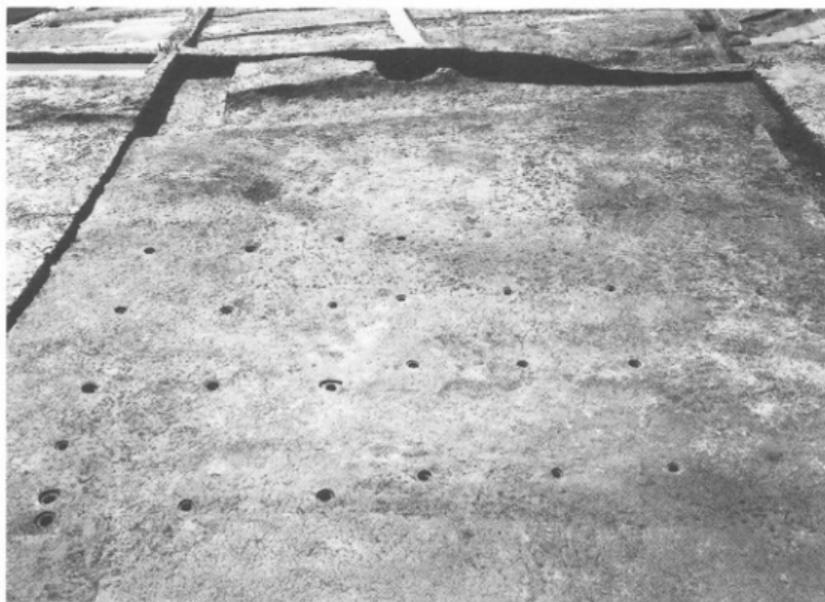
下) 溝NSD-1 内製塩土器出土状態



上) 溝NSD-1 肩部鏡出土状態



下) 溝NSD-1 肩部鏡出土状態細部



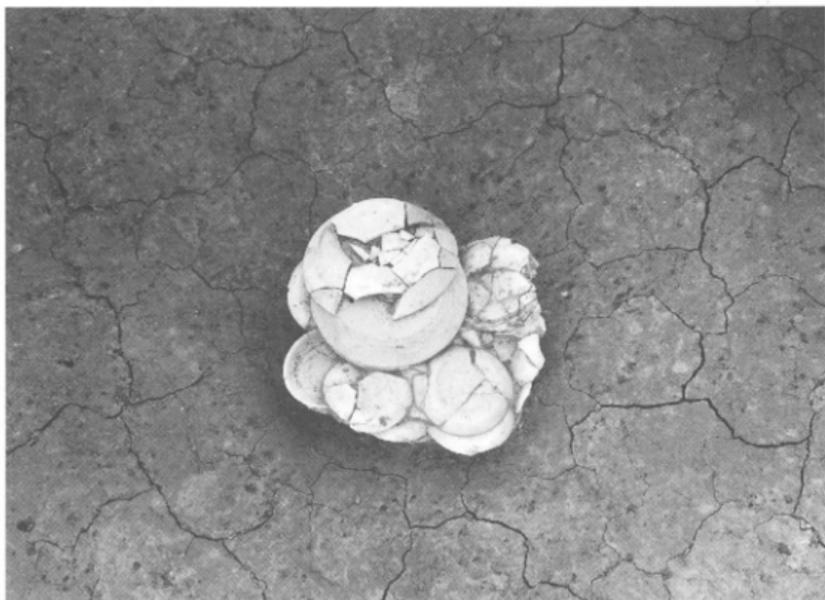
上) 建物址NSB-2・3



下) 建物址NSB-4



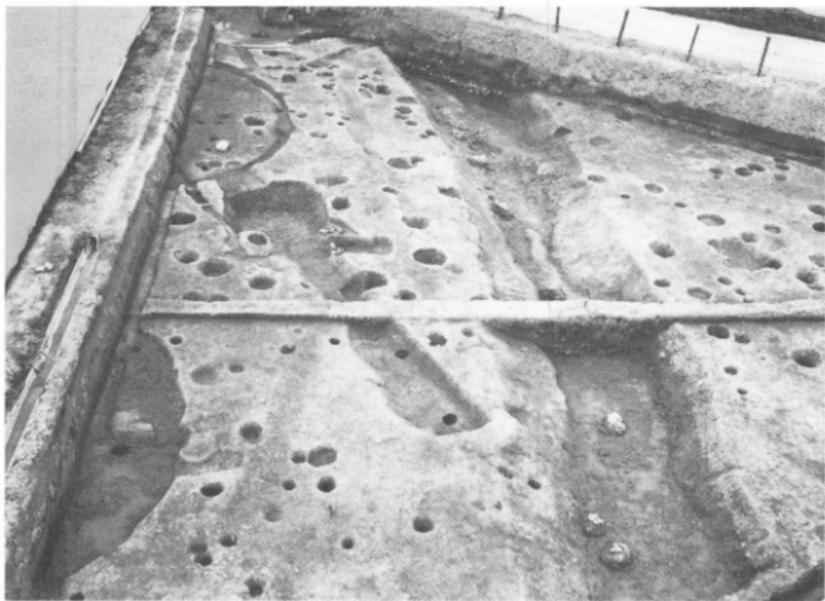
上) 溝NSD-1 上面柱穴群



下) 土城NSK-3



上) 調査区全景



下) 調査区北東隅下層遺構



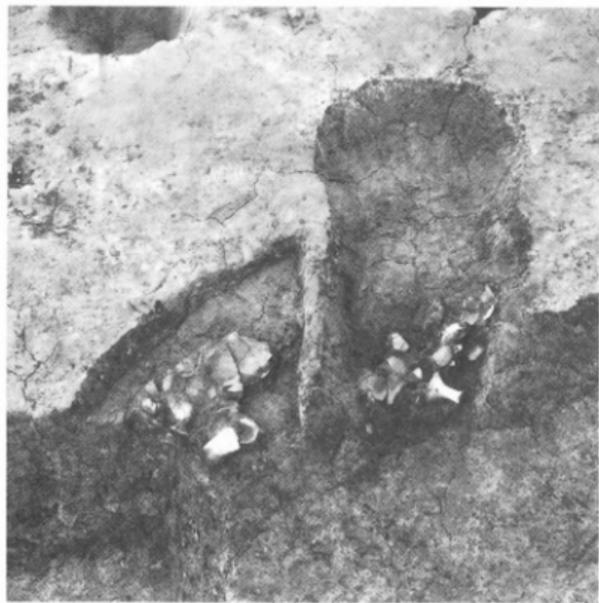
上左) 竪穴住居址SSH-1



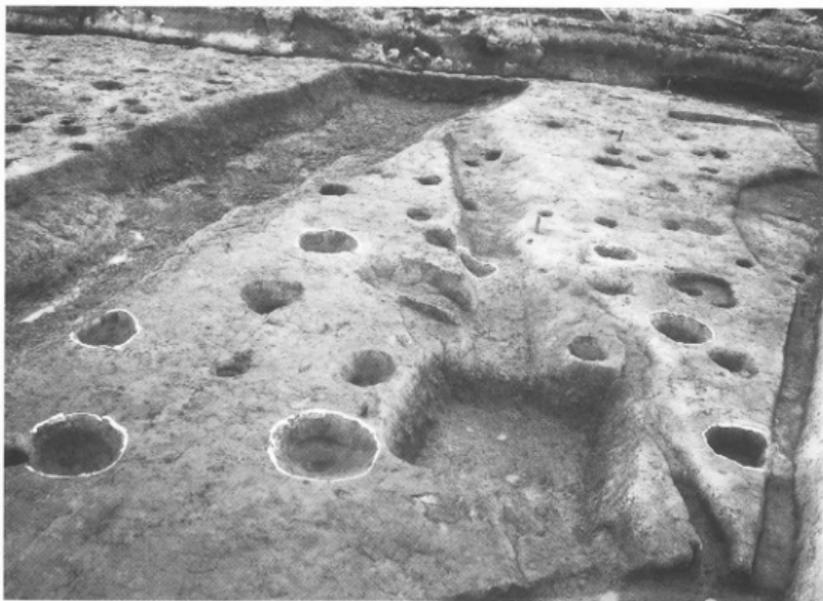
上右) 竪穴住居址SSH-2



下) 竪穴住居址SSH-3



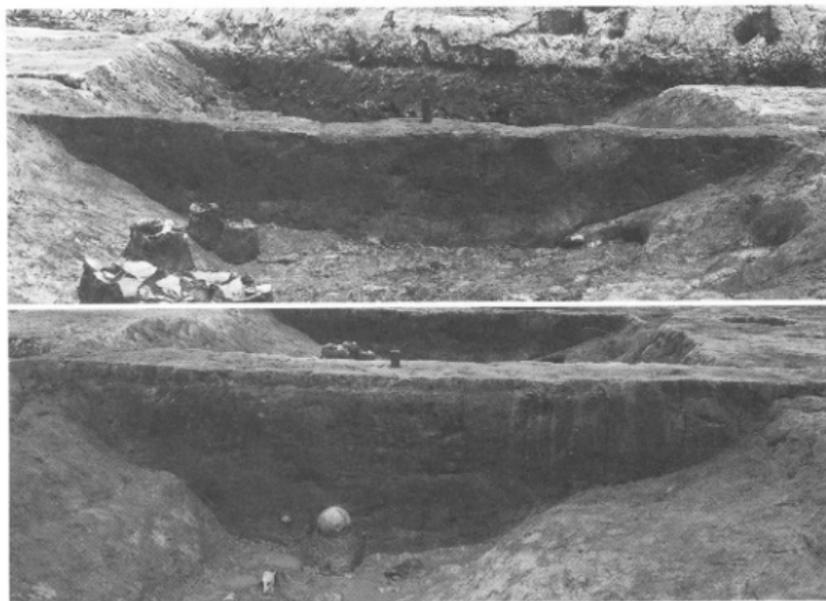
上) 土坑SSK-3・4



下) 建物址SSB-1



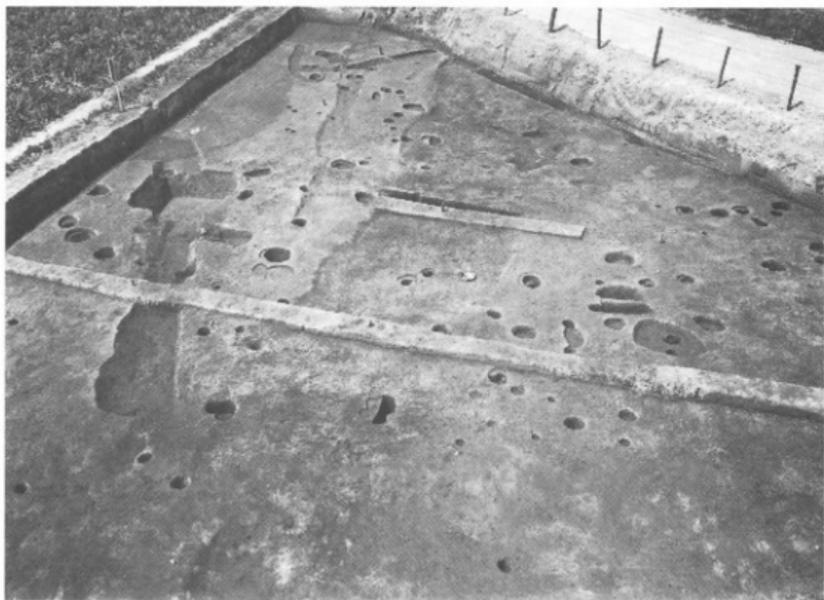
上) 溝SSD-1



中) 溝SSD-1 断面 下) 溝SSD-1 断面



上) 調査区南半上層遺構



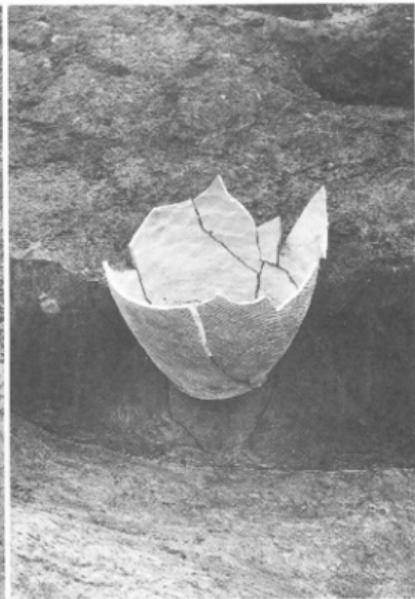
上) 調査区北半上層遺構



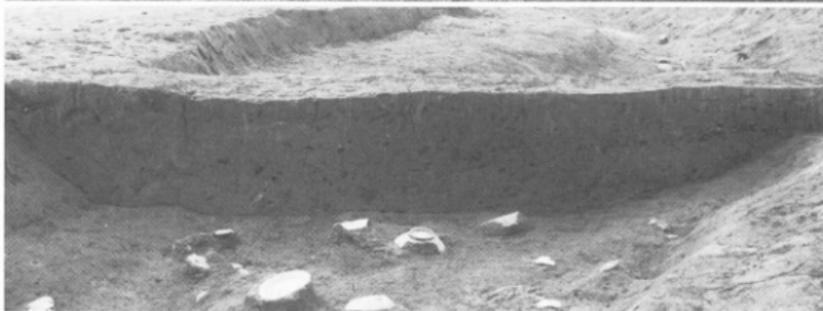
上) 土壙SSK-120



下左) 土壙SSK-104



下右) 土壙SSK-104 断面



上) 清SSD-3土器出土状态 中) 溝SSD-3只出土状态 下) 清SSD-3土层断面



6



7



5



11



10



16

竖穴住居址NSH-1出土遗物(1)



14



17



19



20

竪穴住居址NSH-1出土遺物(2)



18



22



24



30



29



31



39



竪穴住居址NSH-1出土遺物(4)





溝NSD-1北半出土遺物(須恵器)



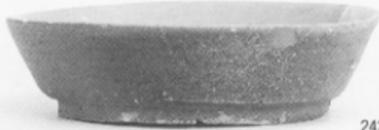
234



238



241



242



243



254



250



255

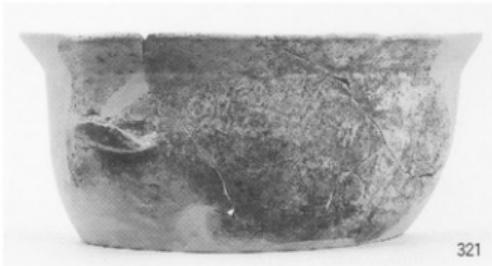


262



268

溝NSD-1北半出土遺物（須惠器）



溝NSD-1北半出土遺物（土師器）



317



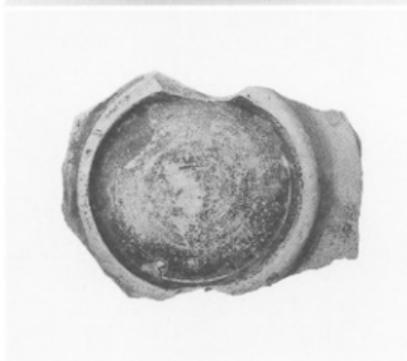
299



318

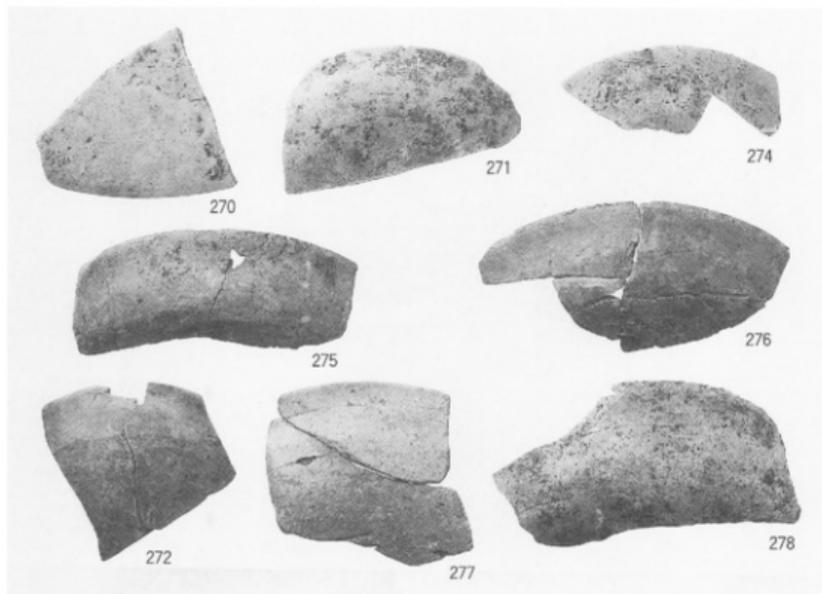


315

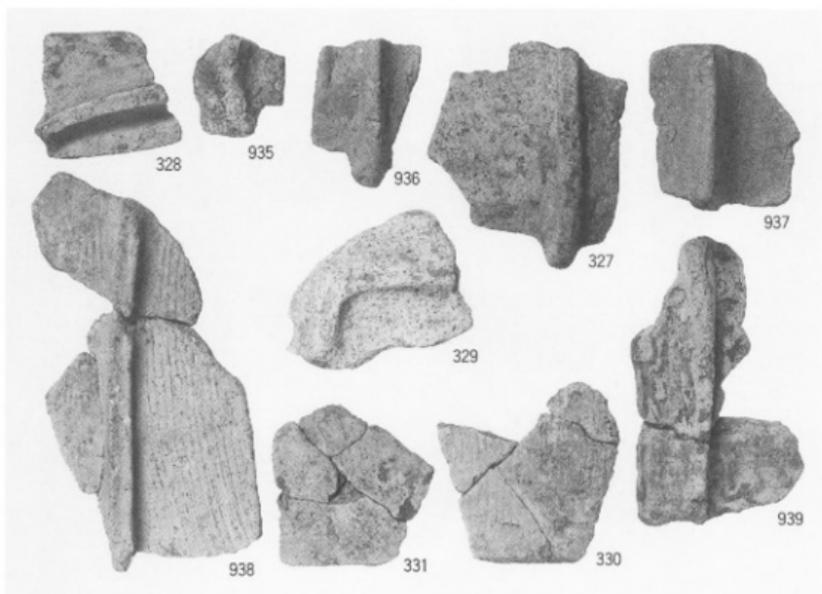


355

356



上) 溝NSD-1北半出土遺物(土師器)



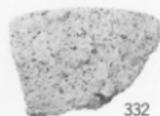
下) 溝NSD-1北半出土遺物(甕)



334



333



332



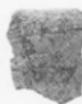
336



335



342



338



344



348



350



351



349



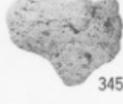
347



343



346



345



352



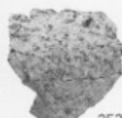
341



340



339



353



354



337

溝NSD-1北半出土遺物（裂壊土器）





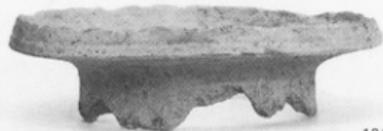
152



155



149



134



381



390



382



389



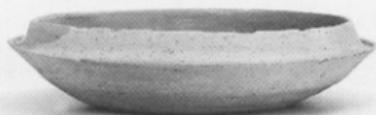
溝NSD-2層部土器群の遺物



391



393



394



395



399



437



441



442



443



445



446



447



449



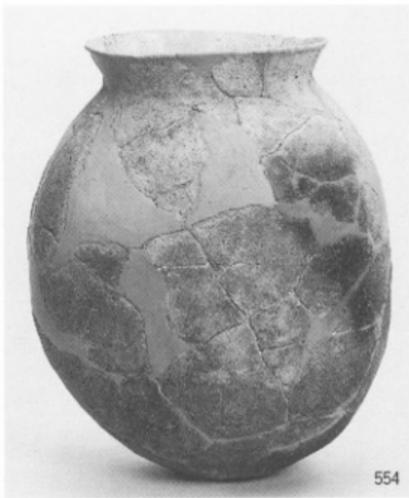
433



434



竖穴住居址SSH-1、土坑SSK-4、溝SSD-1出土遺物



溝SSD-1、包含層出土遺物



漢SSD-3出土遺物(瓦器)



644



650



656



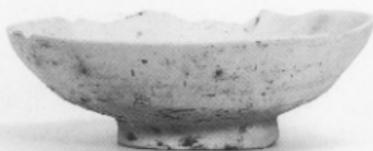
671



672



673



676



677



678

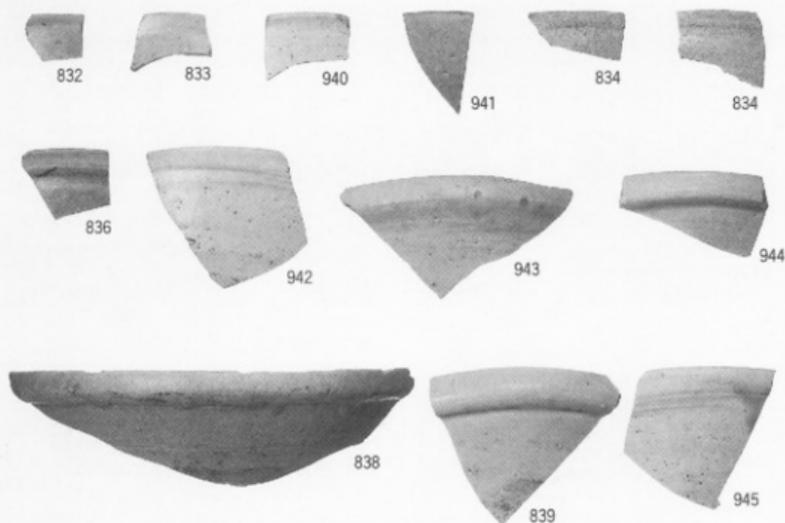


679

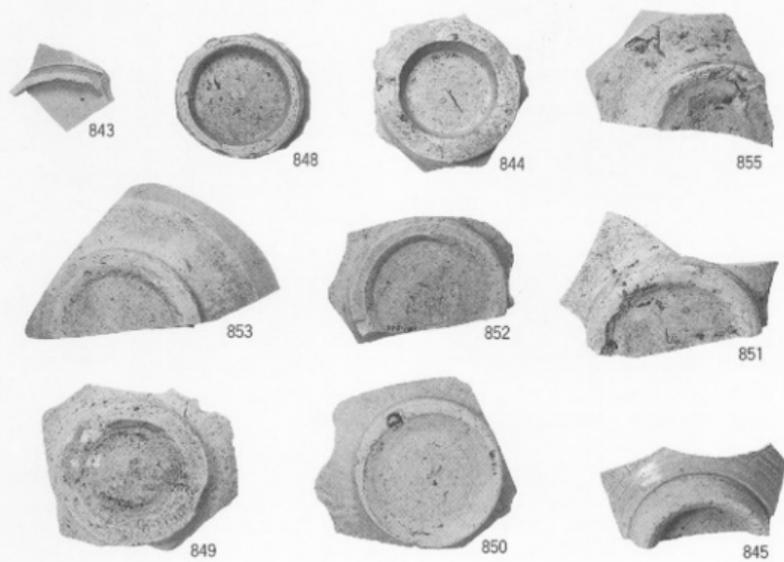
溝SSD-3出土遺物（土師器碗）



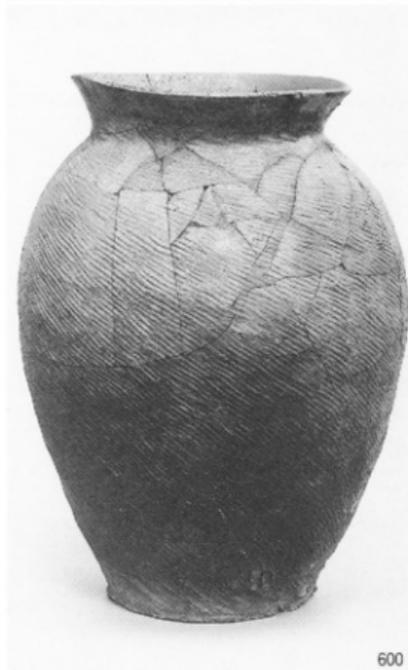
溝SSD-3出土遺物（土師器皿・小皿）



上) 溝 S S D - 3 出土遺物 (磁器口縁)



下) 溝 S S D - 3 出土遺物 (磁器底部)



溝SSD-3、土壙SSK-104・120、柱穴内出土遺物

圖版第39 金屬製品（鏡、鉄斧、鉄鎌・用途不明品）



1



2



3

兵庫県文化財調査報告 第78冊

鉦田遺跡

浜路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成2年3月31日

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社
〒670 姫路市定元町4の2
TEL (0792)96-3535
